

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第22集1

池田市・豊中市所在

宮の前遺跡・蛍池東遺跡
麻田藩陣屋跡・蛍池遺跡
蛍池南地区・蛍池西遺跡

1993-1996年度発掘調査報告書

— 大阪モノレール蛍池東線・西線建設に伴う発掘調査 —

1997年11月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第22集 1

池田市・豊中市所在

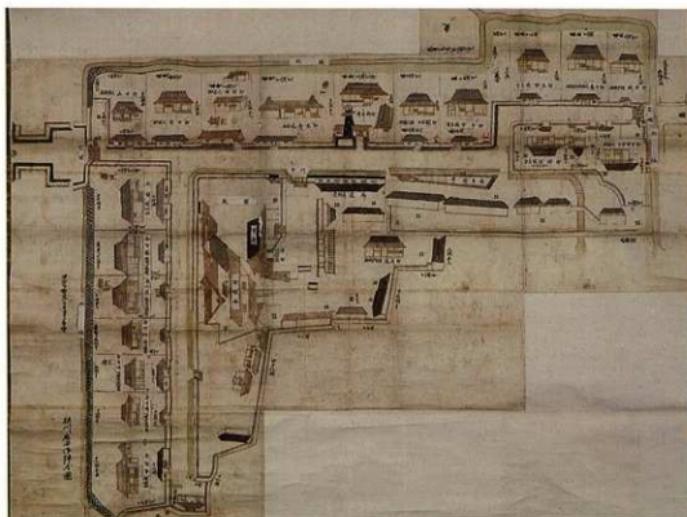
宮の前遺跡・蛍池東遺跡 麻田藩陣屋跡・蛍池遺跡 蛍池南地区・蛍池西遺跡

1993-1996年度発掘調査報告書

— 大阪モノレール蛍池東線・西線建設に伴う発掘調査 —

1997年11月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



麻田藩陣屋跡絵図（豊中市教育委員会蔵）



麻田藩陣屋跡出土遺物

序 文

豊中市螢池周辺は、西国街道と能勢街道が交差する古くからの交通の要衝の地であります。現在も中国自動車道・大阪中央環状線と阪神高速道路が交わる池田ジャンクションがあり、その重要性は変わっていないと言えます。

今回、この地に新たに大阪モノレールの建設が計画され、その路線上の遺跡の調査が、平成4年度より行われました。

平成4年度と5年度の一部の調査報告書は既に刊行され、本書は平成5年度の一部とその後8年度までの調査成果をまとめた、2冊目の報告書となります。

モノレールの路線上には、池田市から豊中市にかけて、宮の前遺跡・螢池東遺跡・麻田藩陣屋跡・螢池遺跡・螢池西遺跡などが並び、今回の調査で新たに遺跡の存在が確認された螢池南地区も存在します。

1冊目の報告書で報告された古墳時代中期以前の大形掘立柱建物群だけでなく、低位段丘上から沖積平野にわたる調査がなされた結果、古墳時代から奈良時代にかけての集落・墓域・水田などの生産域が関連性をもって理解できるような成果があがり、また考古学的な面においては実態が不明確であった麻田藩陣屋跡が、遺構も遺物も共にまとった資料を提供できた事も大きな成果と言う事が出来るでしょう。

その他、旧石器時代や弥生時代に関しての成果もあがり、各遺跡や遺跡の範囲を越えた地域の性格や動向がかなり明らかになってきたと言えます。

最後に調査に当たっては、大阪府教育委員会文化財保護課、大阪府土木部モノレール建設事務所、池田市・豊中市教育委員会、及び地元関係者各位に多大なご指導とご協力をいただきました。記して感謝すると共に、今後とも当センターの事業に一層のご支援を賜れるようお願い申し上げます。

平成9年11月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井清足

例　　言

1. 本書は、大阪モノレール螢池東・西線建設に伴う、大阪府池田市石橋・豊中市螢池北町に所在する宮の前遺跡、豊中市螢池中町に所在する螢池東遺跡・麻田藩陣屋跡・螢池遺跡、豊中市螢池南町に所在する螢池南地区（試掘）・螢池西遺跡の1993～1996年度（平成5～8年度）調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府土木部モノレール建設事務所より財大阪文化財センター（1993（平成5）年度～1994（平成6）年度）、財大阪府文化財調査研究センター（1995（平成7）年度以降）が委託を受け、調査課長中西靖人、北部調査事務所長玉井功の指導のもと、係長小野久隆、主任技師平井貞子・同片山彰一・同金光正裕、技師江浦　洋・同岡本圭司・同三宮昌弘・同合田幸美、専門調査員松宮昌樹を担当者として実施した。
3. 調査年度・区分・担当者は、下記のとおりである。

調　　査　年　度	調　　査　区　分	調査担当	遺物整理担当
1993（平成5）年度	宮の前遺跡（3）	合田	合田
1993（平成5）年度	麻田藩陣屋跡（1）	合田	合田
1993（平成5）年度	麻田藩陣屋跡（2）	三宮	三宮
1994（平成6）年度	宮の前遺跡（6）	三宮	合田
1994（平成6）年度	螢池東遺跡（3）	金光	合田
1994（平成6）年度	麻田藩陣屋跡（3）	金光・三宮	三宮
1994（平成6）年度	螢池西遺跡（2）	金光・三宮	三宮・松宮
1995（平成7）年度	宮の前遺跡（4）	江浦・岡本	三宮
1995（平成7）年度	螢池遺跡（3）	岡本・三宮	三宮・松宮
1995（平成7）年度	螢池遺跡（4）	三宮・松宮	三宮・松宮
1995（平成7）年度	螢池南地区（1）	岡本・三宮	三宮・松宮
1995（平成7）年度	螢池南地区（2）	三宮・松宮	三宮・松宮
1996（平成8）年度	宮の前遺跡（5）	小野	三宮
1996（平成8）年度	螢池東遺跡（4）	小野・合田	合田
1996（平成8）年度	螢池遺跡（3-2）	三宮・松宮	三宮・松宮
1996（平成8）年度	螢池南地区（3）	三宮・松宮	三宮・松宮
1996（平成8）年度	螢池西遺跡（4）	三宮・松宮	三宮・松宮

4. 調査の実施にあたっては センター職員のほか、大阪府教育委員会、池田市教育委員会、豊中市教育委員会をはじめとする関係諸機関のご指導、ならびに下記の諸氏の援助をたまわった。記して、感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

〔調査指導〕藤澤一夫・富田好久（大阪青山短期大学）、芝野圭之介・福田英人・橋本高明（大阪府教育委員会）、柳本照男・服部聰志・清水篤・橋田正徳・清家　章（豊中市教育委員会）、清水喜美子（豊中市市史編纂室）、田中晋作（池田市歴史民俗資料館）、大東健一

〔調査参加〕赤木　寛・市川奈緒・伊藤栄二・伊藤裕子・今井泰子・内山義行・小野恭代・小野玲美・鹿島真由美・神谷リエ子・川村慎也・川村雪絵・河本華弥子・黒田利恵・駒井悦子・渋谷真理子・園田礼子・高田泰子・田中順子・田中千賀・田畠優子・中前誠子・新見幸子・繩口玲子・平田

麻希・福井真美寿・別府加代・本多真紀・増田志行・松田智子・宮崎認・森木陽二郎・安河内敬志・
柳本考史・山根朋子・山本宏子

5. 調査に関連し、下記の自然科学分野からの分析を実施した。

胎土分析 ㈱第四紀地質研究所 井上 嶽
花粉・珪藻分析 ㈱パリノ・サーヴェイ

凡 例

- ・遺構実測図の基準高は東京湾平均海水位（T.P.）を用い、平面的位置は、国土座標軸第VI座標系に基づいた。本文中における座標の記載は、すべてm単位とする。
- ・方位の矢印の示す方向は座標北を示す。
- ・土色に関しては、小山正忠・竹原秀雄編1988『新版標準土色帖』第8版 監修農林水産省農林技術会議事務局・色票監修財団法人日本色彩研究所に準拠した。
- ・各遺跡の略称は次のとおりである。宮の前遺跡（MIY）、螢池東（HIH）、麻田藩陣屋跡（ASD）、螢池遺跡（HI）、螢池南地区（HIM）、螢池西遺跡（HIN）。
- ・遺物写真の縮尺率は任意である。写真図版の遺物番号は実測図版と同一番号である。
- ・本書の執筆分担は目次に示した。本文中の用語は、執筆者の意図を尊重し、統一していない部分がある。
- ・編集は各執筆者がおこなった。

目 次

巻頭図版 麻田藩陣屋跡絵図（豊中市教育委員会蔵）

　　麻田藩陣屋跡出土遺物

序 文

例 言

凡 例

I	調査に至る経緯	(金光) 1
II	位置と環境	(三宮) 3
III	宮の前遺跡（3～6）	
	1. 調査の方法	(三宮) 9
	2. 宮の前遺跡（3・6）の調査の成果	(合田) 10
	(1)基本層序	
	(2)遺構と遺物	
	(3)まとめ	
	3. 宮の前遺跡（4）の調査の成果	(三宮) 20
	(1)2Cトレンチ	
	(2)3Eトレンチ	
	(3)小結	
	4. 宮の前遺跡（5）の調査の成果	(三宮) 21
	(1)基本層序	
	(2)遺構と遺物	
	(3)小結	
	5. まとめ	(三宮) 26
IV	螢池東遺跡（3・4）	
	1. 調査の方法	(合田) 28
	2. 螢池東遺跡（3）の調査の成果	(合田) 29
	(1)基本層序	
	(2)遺構と遺物	
	3. 螢池東遺跡（4）の調査の成果	(合田) 30
	(1)基本層序	
	(2)遺構と遺物	
	4. まとめ	(合田) 32
V	麻田藩陣屋跡（1～3）	
	1. 調査の方法	(三宮) 34
	2. 麻田藩陣屋跡（1）の調査の成果	(合田) 35
	(1)基本層序	

(2)遺構と遺物	
(3)小結	
3. 麻田藩陣屋跡（2）の調査の成果	（三宮） 51
(1)基本層序	
(2)遺構と遺物	
(3)小結	
4. 麻田藩陣屋跡（3）の調査の成果	（三宮） 91
(1)基本層序	
(2)遺構と遺物	
(3)小結	
5. まとめ	（三宮） 95
6. 付論 麻田藩陣屋の範囲の復元	（三宮・合田） 97
VII 蛍池遺跡（3・4）	
1. 調査の方法	（松宮） 102
2. 蛍池遺跡（3・3-2）の調査の成果	（松宮） 103
(1)基本層序	
(2)遺構	
(3)遺物	（松宮） 112
(4)まとめ	（松宮） 120
3. 蛍池遺跡（4）の調査の成果	（三宮） 121
(1)基本層序	
(2)遺構	
(3)遺物	
(4)まとめ	
VIII 蛍池南地区（1～3）	
1. 調査の方法	（三宮） 126
2. 調査の成果	
(1)基本層序	
(2)遺構	
(3)遺物	（松宮） 139
3. まとめ	（三宮） 147
VIII 蛍池西遺跡（2～4）	
1. 調査の方法	（三宮） 149
2. 調査の成果	
(1)基本層序	
(2)遺構	
(3)遺物	（三宮・松宮） 168
3. まとめ	（三宮） 180

IX 自然科学的調査の成果

1. 萤池南地区他出土土器胎土分析 (㈱第四紀地質研究所 井上 嶽) 182
2. 宮の前遺跡(3)花粉分析及び珪藻分析報告 (㈱パリノ・サーヴェイ) 193
3. 麻田藩陣屋跡(1)花粉分析及び珪藻分析報告 (㈱パリノ・サーヴェイ) 199
X まとめ (三宮・合田・松宮) 205

挿図目次

- 図1 調査対象地
図2 大阪モノレール路線計画図
図3 豊中市内の遺跡
図4 遺跡の位置と立地
宮の前遺跡(図5～図15)
図5 トレンチの位置
図6 1B・3Bトレンチ断面及び3Bトレンチ北西部断面
図7 3Bトレンチ1・2面平面及び1B・3Bトレンチ3面平面
図8 1Bトレンチ4(1)面平面・溝1断面及び1B・3Bトレンチ4(2)面平面
図9 溝・土坑・ピット断面
図10 1B・3Bトレンチ土坑・ピット遺物出土状況
図11 1B・3Bトレンチ土坑・ピット出土遺物
図12 1Hトレンチ断面
図13 1Hトレンチ1面
図14 1Hトレンチ2面
図15 1Hトレンチ2面土坑平面・断面・ピット断面・落ち込み断面
図16 Hトレンチ2面落ち込み1出土遺物
螢池東遺跡(図17～図21)
図17 トレンチの位置
図18 1Aトレンチ平面・断面柱状図
図19 10A・11Aトレンチ断面
図20 10A2・11Aトレンチ平面
図21 埋没微地形
麻田藩陣屋跡(図22～図89)
図22 範囲とトレンチの位置
図23 1A・3A・4Aトレンチ東壁断面
図24 包含層出土遺物
図25 1面平面
図26 2～1面平面
図27 溝1・礫群1・2
図28 溝1・溝8断面
図29 溝1・溝8出土遺物
図30 2～2面平面
図31 溝2・溝3礫群
図32 溝2・溝3・溝5・溝9・溝13・土坑1・2断面
図33 溝2・溝13・土坑1出土遺物
図34 集石ピット平面・断面
図35 3面平面
図36 溝6・溝7断面
図37 土坑・沼状堆積出土遺物
図38 4面平面
図39 土坑・溝断面
図40 土坑・ピット断面
図41 5面平面
図42 陣屋外堀外側の変遷
図43 9A・7A・5A・6Aトレンチ断面
図44 1B・1Cトレンチ断面
図45 盛土・現代耕土・攪乱内出土遺物(1)
図46 盛土・現代耕土・攪乱内出土遺物(2)
図47 1層出土遺物
図48 2～1層・2～2層出土遺物
図49 1面外堀上層出土遺物(1)
図50 1面外堀上層出土遺物(2)
図51 1面外堀上層出土遺物(3)
図52 1面外堀上層出土遺物(4)
図53 1面外堀下層出土遺物
図54 2面外堀出土遺物
図55 3面外堀出土遺物
図56 1～3面外堀・溝1断面
図57 1面平面
図58 1面溝2・井戸1～2・大型土坑1～2・落ち込み2断面
図59 1面落ち込み1下層出土遺物
図60 1面井戸1出土遺物
図61 1面井戸2上層出土遺物(1)

- | | | | |
|----------------|-----------------------------|------------------|-----------------------|
| 図62 | 1面井戸2上層出土遺物(2) | 図97 | 2—2面平面 |
| 図63 | 1面井戸2上層出土遺物(3) | 図98 | 3面平面 |
| 図64 | 1面井戸2上層出土遺物(4) | 図99 | 4面平面 |
| 図65 | 1面溝2出土遺物 | 図100 | 4面落ち込み分布状況 |
| 図66 | 1面土坑1出土遺物 | 図101 | 4面土坑平面・断面 |
| 図67 | 1面溝3出土遺物 | 図102 | 10Aトレンチ2・4層出土遺物 |
| 図68 | 1面落ち込み2出土遺物 | 図103 | 10Aトレンチ2層出土遺物 |
| 図69 | 1面大型土坑1出土遺物 | 図104 | 13Aトレンチ1・2・3層出土遺物 |
| 図70 | 1面大型土坑2出土遺物 | 図105 | 14Aトレンチ1・2・3・4層出土遺物 |
| 図71 | 2面平面 | 図106 | 14Aトレンチ1面土坑1出土遺物 |
| 図72 | 2面溝7断面 | 図107 | 11Aトレンチ4層出土遺物 |
| 図73 | 2面溝1・溝3出土遺物 | 図108 | 14Aトレンチ3面・3面鋤溝出土遺物 |
| 図74 | 2面溝7出土遺物 | 図109 | 10Aトレンチ4面出土遺物 |
| 図75 | 3面平面 | 図110 | 13Aトレンチ4面出土遺物 |
| 図76 | 3面溝8・大型土坑1・土坑1断面 | 図111 | 14Aトレンチ4面出土遺物 |
| 図77 | 3面溝5・溝3・溝8・大型土坑1出土遺物 | 図112 | 11Aトレンチ4面不定形密集土壌群出土遺物 |
| 図78 | 4—1面平面 | 図113 | 13Aトレンチ4面不定形密集土壌群出土遺物 |
| 図79 | 4—2面平面 | 図114 | 14Aトレンチ4面不定形密集土壌群出土遺物 |
| 図80 | 陣屋外堀内側の変遷 | 図115 | 不定形密集土壌群分布状況 |
| 図81 | トレンチ位置・平面 | 図116 | 12Aトレンチ断面図 |
| 図82 | 1A・1B・1Cトレンチ断面 | 図117 | 12Aトレンチ1~3・6面平面 |
| 図83 | 1Aトレンチ盛土・2層・1Bトレンチ2層・3層出土遺物 | 図118 | 12Aトレンチ出土遺物 |
| 図84 | 1Aトレンチ1面石列 | 螢池南地区(図119~図138) | |
| 図85 | 1Aトレンチ1面土坑1出土遺物 | 図119 | トレンチの位置 |
| 図86 | 陣屋外堀外側・内側野変遷 | 図120 | 基本層序模式図 |
| 図87 | 麻田藩陣屋絵図 | 図121 | A~Iトレンチ断面 |
| 図88 | 麻田藩陣屋の範囲の復元 | 図122 | K・J・Mトレンチ断面 |
| 図89 | 麻田藩陣屋跡周辺の田地区画(明治時代?) | 図123 | Lトレンチ断面 |
| 螢池遺跡(図90~図118) | | 図124 | I・J・Kトレンチ平面 |
| 図90 | トレンチの位置 | 図125 | Jトレンチ3~2面溝1・溝2遺物出土状況 |
| 図91 | 10・11・13・14Aトレンチ断面・柱状図(1) | 図126 | J・Kトレンチ遺構断面 |
| 図92 | 10・11・13・14Aトレンチ断面・柱状図(2) | 図127 | G・H・L・Mトレンチ平面 |
| 図93 | 1~1面平面 | 図128 | G・H・L・Mトレンチ遺物出土状況 |
| 図94 | 1~1面土坑1平面・断面 | 図129 | H・L・Mトレンチ遺構断面 |
| 図95 | 1~2面平面 | | |
| 図96 | 2~1面平面 | | |

- 図130 1～2層出土遺物(1)
図131 1～2層出土遺物(2)
図132 1～2層出土遺物(3)
図133 1～2層出土遺物(4)
図134 Jトレンチ4面浸蝕痕出土遺物
図135 3～1面出土遺物
図136 3～1面Jトレンチ溝1・2・3・4・Kトレンチ小溝群出土遺物
図137 3～1面Jトレンチ溝2・3～2面Gトレンチ溝1・Jトレンチ溝1・溝2出土遺物
図138 G・Mトレンチ3～2面～4面流路2出土遺物
- 螢池西遺跡（図139～図175）**
- 図139 螢池西遺跡（2～4）トレンチの位置
図140 2A～2Dトレンチ断面
図141 3A・4Aトレンチ断面
図142 3面平面
図143 2Cトレンチ西平面・2Aトレンチ3面遺構断面
図144 4面平面
図145 2Cトレンチ流路しがらみ
図146 2Cトレンチ流路平面・断面
図147 4面溝断面
図148 2Dトレンチ4面自然流路1しがらみ平面・見通し
図149 2Dトレンチ4面自然流路1しがらみ復元模式図
図150 5面平面
図151 6面平面
図152 4Aトレンチ溝1遺物出土状況
図153 4Aトレンチ溝3遺物出土状況
図154 3Aトレンチ溝1平面・流路断面
図155 4Aトレンチ溝1・溝2・溝3断面
- 図156 4Aトレンチ流路断面
図157 4Aトレンチ弥生時代変遷図
図158 7面平面
図159 12面平面
図160 4Aトレンチ12層内・13面上層石器・礫出土状況
図161 2A～2Dトレンチ1・2層出土遺物
図162 2A～2Dトレンチ3層出土遺物
図163 2Aトレンチ4面溝1出土遺物
図164 2Cトレンチ流路しがらみ下層最下粗砂層出土遺物
図165 2Dトレンチ4面流路最下粗砂層出土遺物
図166 4Aトレンチ1～5層出土遺物
図167 4Aトレンチ4面方形周溝出土遺物
図168 4Aトレンチ5面出土遺物
図169 4Aトレンチ6面溝1出土遺物
図170 4Aトレンチ6面溝3出土遺物
図171 4Aトレンチ6面溝4出土遺物
図172 4Aトレンチ6面自然流路出土遺物
図173 4Aトレンチ12層出土遺物(1)
図174 4Aトレンチ12層出土遺物(2)
図175 4Aトレンチ12層出土遺物(3)
- 自然化学的調査の成果（図176～図182）**
- 図176 三角・菱形ダイヤグラム位置分類図
図177 化学分析相関図(1)
図178 化学分析相関図(2)
図179 化学分析相関図(3)
図180 試料採取層準
図181 各地点の主要花粉化石の層位分布
図182 花粉化石組成
まとめ（図183）
図183 調査全体図

表 目 次

自然科学的調査の成果（表1～表8）

表1 胎土性状表

表2 化学分析表

表3 タイプ分類一覧表

表4 各地点の珪藻分析結果

表5 各地点の花粉分析結果

表6 分析試料表

表7 硅藻分析結果

表8 花粉分析結果

まとめ（表9）

表9 各遺跡の調査成果

図 版 目 次

図版1～3 宮の前遺跡（3・6） 遺構

図版4 宮の前遺跡（4）（5） 遺構

図版5 蛍池東遺跡（3・4） 遺構

図版6～16 麻田藩陣屋跡（1・2） 遺構

図版17 麻田藩陣屋跡（3） 遺構

図版18～21 麻田藩陣屋跡（1） 遺物

図版22～29 麻田藩陣屋跡（2） 遺物

図版30 麻田藩陣屋跡（3） 遺物

図版31～35 萤池遺跡（3） 遺構

図版36～37 萤池遺跡（3） 遺物

図版38 萤池遺跡（4） 遺構

図版39～45 萤池南地区（1～3） 遺構

図版46～48 萤池南地区（1～3） 遺物

図版49～56 萤池西遺跡（2～4） 遺構

図版57～66 萤池西遺跡（2～4） 遺物

図版67～68 宮の前遺跡（3） 硅藻化石

図版69～70 宮の前遺跡（3） 花粉化石

図版71～72 麻田藩陣屋跡（1） 硅藻化石

図版73 麻田藩陣屋跡（1） 花粉化石

I 調査に至る経緯

『都市計画道路大阪モノレール整備事業』は、昭和57年度の『大阪府総合計画』に「大阪国際空港～阪急南茨木までの第Ⅰ期区間の早期完成をはかる」ことが盛り込まれ、平成3年度には南茨木～門真間についても事業認可を受け建設工事に着手し、すでにその一部区間で共用が開始されている。

第Ⅰ区間のうち柴原～大阪国際空港間に、宮の前・螢池東・麻田藩陣屋跡・螢池・螢池西の各遺跡が存在する。このうち、平成元年度には、大阪府教育委員会によって宮の前遺跡の発掘調査が実施され、奈良時代の遺構が検出された。次いで平成2年度・3年度には、宮の前～螢池遺跡の間で大阪府教育委員会と地元豊中市教育委員会によって試掘調査が実施された。その結果、ほぼ全域で遺構・遺物が検出されたことから、大阪府教育委員会は全区間で発掘調査の必要ありと判断し、大阪府土木部に対し、「①財大阪文化財センターに調査を委託して実施する事。②調査終了後の取り扱いについては再度協議する事。」と回答、財大阪文化財センターに対しても発掘調査の実施を通知した。

これを受けセンターやは、平成4年5月1日付で大阪府土木部と上記遺跡の発掘調査の実施について委託契約を締結し、調査に着手した。

平成4年度には、宮の前遺跡(1)、螢池東遺跡(1)、螢池遺跡(1)、螢池西遺跡(1)、平成5年度には、宮の前遺跡(2・3)、螢池東遺跡(2)、麻田藩陣屋跡(1・2)、螢池遺跡(2)の各遺跡を調査した。

螢池遺跡南側の南門前池から螢池西遺跡東側の螢池南町の間は遺跡の範囲外であったが、大阪府教育委員会の指示によりモノレール支柱部分において試掘調査を実施することとなり、南門前池部分は螢池遺跡(1)の調査の中で、螢池南町地内は螢池西遺跡(その1)として実施した。その結果、南門前池部分からは奈良時代の遺構・遺物が、螢池南町地内では古墳時代後期の遺構・遺物が発見され、それぞれ遺跡の範囲が広がるものと判断され、側道部分も調査の対象となった。

平成5年度以降、麻田藩陣屋跡(1・2)の調査に着手したほか、北端の宮の前遺跡から南端の螢池西遺跡の未調査区のうち、調査可能となった地区から随時調査に着手し、平成8年度で螢池遺跡の一部を除く全ての調査を終了した。詳細は例言に示したとおりである。

螢池南地区(1～3)は南門前池と範囲が広がった螢池西遺跡の間であり、モノレール支柱部分とその周辺地において試掘調査を実施した。その結果、古墳時



図1 調査対象地

代流路などが検出されたが、遺構・遺物は希薄であった。

大阪モノレール蛍池東線・西線建設に伴う発掘調査の報告書は、1992・1993年度調査分が既刊であり1993年度未報告分以降を扱う本書が2冊目である。今後は、蛍池遺跡未調査部報告が刊行される予定である。

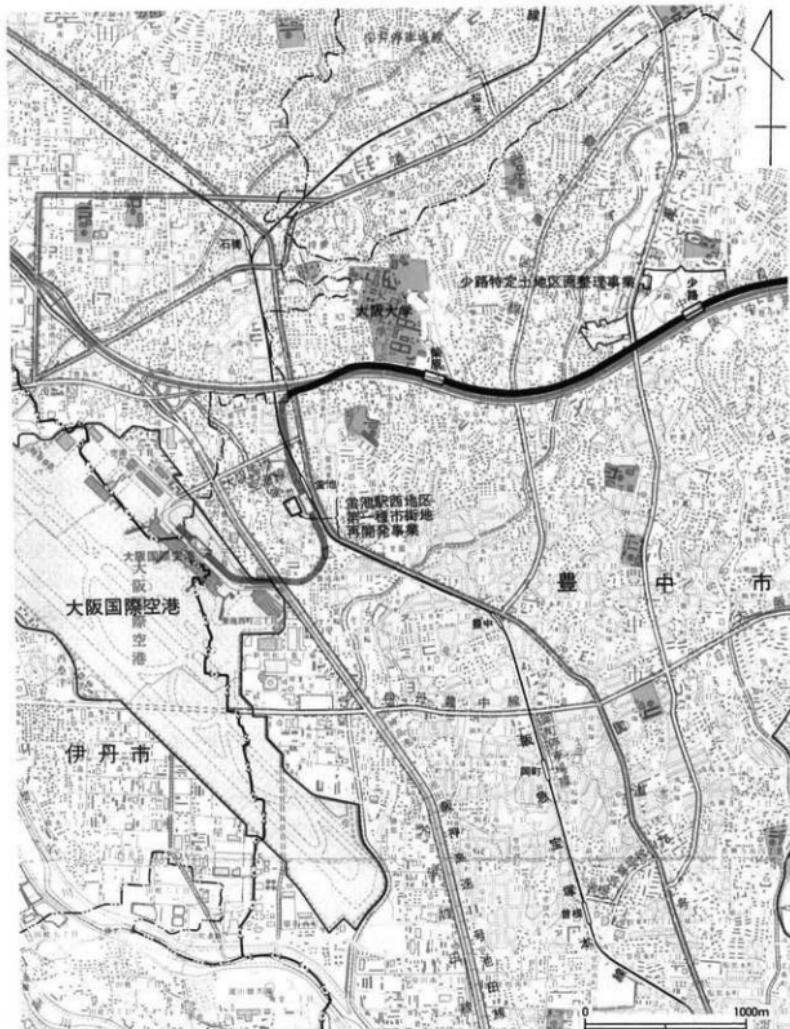


図2 大阪モノレール路線計画図

II 位置と環境

1. 遺跡・調査区の立地

大阪モノレールの計画路線は、豊中市北部を大阪中央環状線に沿って西進してきた後、池田市の東南端、石橋に入った所で南に曲がり、豊中市螢池東町を南下、螢池南町に至って再び西に曲がり、そのまま伊丹空港に達する。

今回の調査では、その池田市石橋から豊中市螢池南町までの間が対象となっている。かかる遺跡は、北から宮の前遺跡、螢池東遺跡、麻田藩陣屋跡、それと重複して螢池遺跡、螢池西遺跡と続く。また、螢池遺跡と螢池西遺跡の間に、螢池南地区が存在する。

これらの遺跡のうち、宮の前遺跡、螢池東遺跡、麻田藩陣屋跡、螢池遺跡は、待兼山・刀根山丘陵の西側の低位段丘上に立地し、螢池南地区、螢池西遺跡は、そこから南西に段丘崖を下りた、猪名川水系の沖積平野に立地している。

待兼山・刀根山丘陵は、西側は沖積平野が広がり、南東は猪名川の支流である千里川の開析谷により千里丘陵から画され、北西は断層により丹波山塊から分断され、独立丘陵となっている。その核心は大阪層群茨木累層であり、高位段丘の段丘崖が見られるが、東は千里川沿いに中位・低位の段丘が細長くみられるのに対し、西側には低位段丘が大きく張り出している。

その西側に沖積平野を形成する猪名川は、兵庫県川辺郡猪名川町に端を発し、丹波山塊で多くの支流を集め、池田市の西辺、五月山公園のある綾羽から平野に出る。千里川は平野で合流する主な支流の一つである。南では神崎川に合流するが、その合流地点より2.5kmほど北の穂積遺跡の調査で、縄文海進期の海岸に近い浅い海の状況が確認されているので、その時期の海岸線は現在の猪名川、千里川の合流地点付近であったと考えられる。

以下、各遺跡と今回の調査地点の立地を述べる。

(1) 宮の前遺跡

豊中市では螢池北遺跡と呼称している。待兼山・刀根山丘陵西側の低位段丘面のほぼ北半を占める。北西から南西は下位段丘崖に接し、東は高位段丘崖までの200~300mの間、大阪層群を開析した谷の続きのようなやや凹凸のある地形が存在する。

南側は、現在、溜池と第十八中学校となっている谷が、南西から下位段丘を開析し、それにより螢池東遺跡と画されているようである。この谷は、溜池等の痕跡をたどって遡ると、下位段丘平坦面を東進し、大阪層群をも開析して、待兼山遺跡の南端にまで達しているようである。

大阪モノレール関連の調査では、遺跡の南東部をほぼ南北に貫くような調査区となった。遺跡内は現状でもかなり平坦であるが、それでも調査区のほぼ中央は基盤の下位段丘堆積層上面自体が高く、削平をかなり受け、その南北に各々少しづつ下がり、北と南では堆積層が異なる事が判明した。今回報告するのはその調査区の北端、大阪中央環状線の直ぐ南の部分（宮の前3・6）、ほぼ中央にあたる部分（宮の前4）と、南端、東西に走る空港道路の北側（宮の前5）の3カ所である。

(2) 螢池東遺跡

宮の前遺跡との境を成す開析谷が下位段丘を南西から切り込んでいるが、その南東岸に接するように



- | | | | | | | |
|-------------|------------|----------------|-----------|------------|------------|---------------|
| 1. 太鼓塚古墳群 | 11. 板井谷源神群 | 21. 金寺山廃寺 | 31. 回町南遺跡 | 41. 原田遺跡 | 51. 若竹町遺跡 | 61. 稲積村圓堤 |
| 2. 野彌春日町古墳群 | 12. 常造北遺跡 | 22. 新免宮山古墳群 | 32. 桜塙古墳群 | 42. 曾根遺跡 | 52. 石落寺廃寺 | 62. 小曾根遺跡 |
| 3. 野彌遺跡 | 13. 常造東遺跡 | 23. 金寺山廃寺塔段柱礎石 | 33. 下原遺跡群 | 43. 曾根東遺跡 | 53. 寺内遺跡 | 63. 南堀目代今西氏屋敷 |
| 4. 野彌春日町遺跡 | 14. 常造西遺跡 | 24. 本町遺跡 | 34. 長興寺遺跡 | 44. 原田大町遺跡 | 54. 利倉北遺跡 | 64. 北条遺跡 |
| 5. 少路遺跡 | 15. 常造遺跡 | 25. 新免遺跡 | 35. 海塚古墳 | 45. 原田大町遺跡 | 55. 利倉遺跡 | 65. 上津島川床遺跡 |
| 6. 待兼山古墳 | 16. 麻田落磧原跡 | 26. 袖輪遺跡 | 36. 船輪散布地 | 46. 堆輪室跡 | 56. 利倉南遺跡 | 66. 上津島遺跡 |
| 7. 待兼山遺跡 | 17. 南刀根山遺跡 | 27. 山ノ上遺跡 | 37. 原田西湖跡 | 47. 豊島北遺跡 | 57. 利倉西遺跡 | 67. 上津島南遺跡 |
| 8. 内田遺跡 | 18. 御神山古墳 | 28. 走井遺跡 | 38. 脊部遺跡 | 48. 曾根北遺跡 | 58. 布堂の前遺跡 | 68. 稲積ポンプ場遺跡 |
| 9. 桜井谷石器散布地 | 19. 上野遺跡 | 29. 回町北遺跡 | 39. 脊部東遺跡 | 49. 城山遺跡 | 59. 脊部西遺跡 | 69. 島田遺跡 |
| 10. 榎原遺跡 | 20. 熊野田遺跡 | 30. 回町遺跡 | 40. 原田城跡 | 50. 脊山遺跡 | 60. 稲積遺跡 | 70. 床内遺跡 |
| | | | | | | 71. 島江遺跡 |

図3 岩手中市内の遺跡

立地している。東の高位段丘ととの間の150mほどは緩傾斜面が存在する。

調査区は遺跡範囲の北西から南東へ、ほぼ真ん中を貫く。今回の調査地点はその北西端で、江戸時代には溜池沿いで、南の麻田藩陣屋の北門と能勢街道を結ぶ、通称「おなり道」にあたる部分である。

(3) 麻田藩陣屋跡

螢池東遺跡の南に接し、南の麻田の集落を北から「く」の字に覆うように立地している。絵図面によれば、北西、北東辺は直線的で北東辺の南東端には張り出す部分がある。南東辺も直線で、南東側の開析谷を利用した溜池である南門前池との間に100mほど間を置く。南側は麻田の集落との境で、複雑に屈曲する凹部を成し、南西側は下位段丘と接している。

今回の調査区は北東辺に沿い、絵図面によれば、北は陣屋外堀からそれに沿った外の田畠、南側は外堀が屈曲して張り出した部分とその内側の藩士の屋敷地にある。

(4) 螢池遺跡

ほぼ麻田藩陣屋跡と重複するが、先述した陣屋南東辺から南門前池までが、螢池遺跡単独の範囲となる。大阪モノレールの調査ではこの部分のみを螢池遺跡と呼称して調査している。

なお、前回報告した調査で、南門前池の中も螢池遺跡に含まれることとなり、今回も開析谷の出口に作られた、溜め池の堤防の裾までを当遺跡とした。

南門前池は低位段丘の南端から北に開析する谷を利用して作られている。この谷は、御神山古墳と南刀根山遺跡の立地する高位段丘をなぞるように東へ屈曲し、その後やや

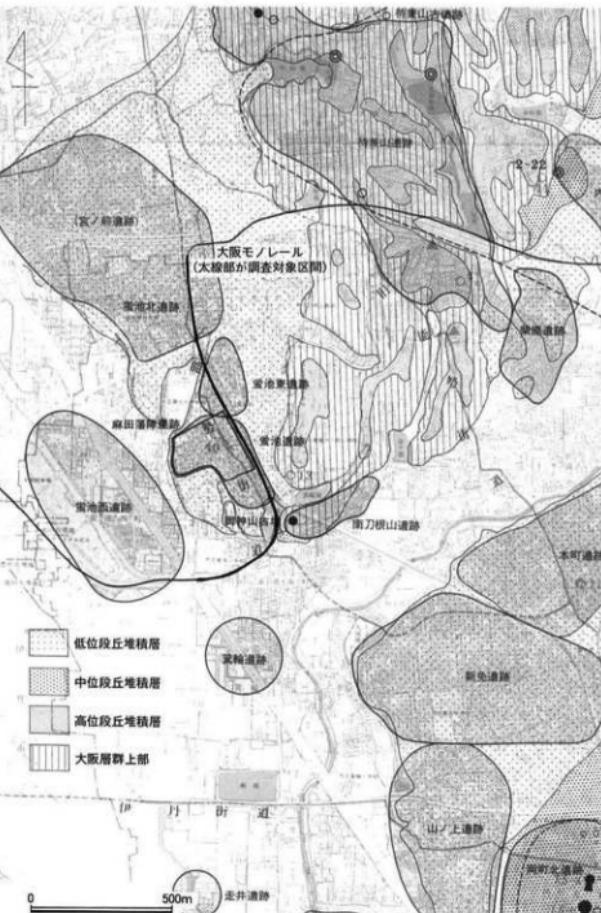


図4 遺跡の位置と立地

北東に向きを変えて、刀根山病院の南東側まで達している。

今回の調査地点は陣屋に最も近い部分と、堤防の裾である。

(5) 蛍池南地区

螢池遺跡から南へ段丘崖を下った位置であり、現地形では、千里川の開拓谷の氾濫原が猪名川水系の沖積平野本体につながる部分にあたり、条里制地割りの達しない、段丘崖直下の緩傾斜面と条里制地割りのみとめられる平坦地にまたがる。

範囲は、東には南門前池の谷からの流路の本流が存在するはずであり、それが東端となろう。西は螢池西遺跡との間に若干の遺構・遺物の空白地帯があり、今回の調査で検出した、埋没段丘崖が、ほぼ西端となると思われる。しかし北側は埋没段丘崖の方向から見て、やや西に広がる可能性があり、下位段丘を開拓し、現在、埋め立てられて麻田公園となっている小さな谷の南側までがその範囲となろう。北は下位段丘崖直下からとなり、南は大きくとれば箕輪遺跡に接する可能性もある。

調査区は南門前池の南西側から螢池小学校の南東側までのモノレール橋脚部分を調査した後、東半分を、側道部分も含めて調査した。

(6) 蛍池西遺跡

螢池遺跡などがのる下位段丘の南西側の沖積平野に広がる遺跡である。段丘崖直下からやや間をおいて遺跡範囲となっており、その間は緩傾斜面が存在する。遺跡内とその周辺の沖積平野には、空港などに破壊されながらも、条里制地割りが良好に遺存している。

前回の調査で遺跡範囲がその南東端で東側に拡大する事が確認された。今回はそのモノレール側道部分を中心に調査した。主に螢池小学校の南側である。

2. 歴史的環境

遙れば、周辺での有名な化石遺物として待兼山のマチカネワニと南刀根山丘陵のトヨウゾウが知られている。マチカネワニは層位的な確認もなされており、大阪層群茨木累層の第7、第8海成粘土層にはさまれた淡水成粘土層から出土しており、約37万年～40万年前の年代が与えられている。

旧石器は、以前から、宮の前遺跡、螢池西遺跡の他、周辺の柴原遺跡、箕輪遺跡、大塚古墳などで出土しており、北摂地域では高槻市の郡家今城遺跡について旧石器の良くみられる地域であると言える。しかし、大阪モノレール関連の調査以前のものは、ほとんど新しいものと共に包含された層からの出土であり、遺構はおろか、帰属する遺構面さえ判然としない。またほとんどが国府型ナイフ形石器であるのも特徴的である。

縄文時代の遺跡は、猪名川水系においては、千里川沿いに集中する傾向がある。野畠遺跡（中期～後期）・野畠春日町遺跡（中期）・内田遺跡（後期）・柴原遺跡（晩期）・新免遺跡（早期）・山ノ上遺跡（晩期）・原田西遺跡（中期）等で、沖積平野に立地する原田西遺跡以外は、千里川沿いの中位・下位段丘上に存在する。

しかし、今回、調査対象となっている遺跡では、新免遺跡等とは千里川をはさんで近接しているのに関わらず、ほとんど縄文時代の遺物は確認されていない。わずかに宮の前遺跡で石棒が採集されているのみである。

なお、先述したとおり、豊中市教育委員会による穂積遺跡第14次調査により、縄文海進のピークを過ぎた中期においても、豊中市服部のあたりまで海であったことが判明している。千里丘陵の南端が低位・

中位段丘、大阪層群に関わらず、緩い弧を描いたラインで切れているのも、その事と関係しているのかとも知れない。

弥生時代では、宮の前遺跡で、大阪中央環状線建設に伴う調査で、中期の住居・方形周溝墓が多数検出されている。その後の池田市・豊中市の調査においても、遺跡の西半を中心として、かなり規模の大きな、集落と墓域が存在しているようである。当調査区はその外縁にあたるといえよう。なお、宮の前遺跡の西端、低位段丘が沖積平野に突出する部分には、現在、住吉神社が存在する。

沖積平野に立地する、弥生時代の周辺の遺跡としては、伊丹空港の南東端で千里川の両岸に広がる、勝部遺跡が有名である。従来から、石槍が突き刺された人骨が検出された木棺が著名であり、これを含む方形周溝墓群が知られているが、近年の豊中市の調査では住居址も発見され、墓域と集落が併存している事が確実となった。また、調査区から千里川をはさんで、南東側の丘陵では、その中位段丘の中心的な位置に立地する原田神社の境内から、流水文銅鐸が出土している。

調査区にさらに近い弥生時代の集落としては、沖積平野に、中期の焼失住居や倉庫がみつかった螢池遺跡、原田神社と同じ丘陵の北西側低位段丘上、調査区と千里川をはさんで向かい合う新免遺跡で、中期の住居や粘土板型の土偶などが知られている。待兼山・刀根山丘陵の南端にあたる南刀根山遺跡でも弥生土器が出土しているが、その実態は明らかではない。

古墳時代に入ると、前期では待兼山丘陵の北端に待兼山古墳、千里川をはさんだ南の丘陵に大石塚古墳・小石塚古墳が築かれる。螢池遺跡に隣接して、南門前池の東岸に御神山古墳が立地しているが、ここは、三角縁神獣鏡と車輪石が出土した地点と推定されているだけで、先の調査で南門前池の底から、埴輪・葺き石等の崩落したものなどが1点も出土していない事からも実態不明と言える。

豊中市には庄内式期の標識遺跡ともなった庄内遺跡が存在するが、調査地周辺では古墳時代前期の集落は判然としない。南側の丘陵の南西側に広がる山ノ上遺跡が古墳時代を通じて存続する程度である。

古墳時代中期に入ると、調査区周辺は活況を呈する。調査区内でも螢池東遺跡の大型倉庫群を端緒として集落が後続する。南側の丘陵では桜塚古墳群で大塚古墳・御獅子塚古墳・南天平塚が相次いで築造される他、山ノ上遺跡以外に新免遺跡・本町遺跡にも集落が成立する。

それらは、千里川上流域を中心に展開する、桜井谷古窯址群での須恵器生産の開始と期を一つにするものと考えられる。特に、新免遺跡と、そこからやや上流の千里川右岸に立地する内田遺跡で、焼け歪みのある須恵器が出土するのはこれらの集落が須恵器の集散・選別の拠点であった可能性を示唆する。

さらに、螢池東遺跡で、早い時期に作り付け竈を持った住居が一般的な集落が成立する事や、本町遺跡で韓式系土器が出土している事から、その背後には渡来人の定住があったものと思われる。

古墳時代後期に入ると桜塚古墳群の大型の古墳は途絶え、前方後円墳でも新免古墳群でみつかった全長23mのものなどになるようである。しかし、集落や群集墳は増加し、宮の前遺跡でも後期の集落と、直径10mほどの円墳が確認されており、螢池東遺跡では新たな集落が成立し、その成員の墓と思われる土坑墓が螢池遺跡に形成されはじめめる。螢池西遺跡ではその集落に伴う生産域と考えられる堰や水路が確認された。南側の丘陵上の集落も存続していくようである。桜井谷古窯址群の窯もこの時期のものが圧倒的に多い。特徴としては、後期には各集落が特色をなくし、一般的な集落として平均化する事があげられる。

古墳時代の終焉を受けて成立していく古代寺院としては、南の丘陵上に、山田寺系の瓦が出土した金寺山廃寺跡が知られている。

螢池遺跡の土墳墓群は古墳時代後期から奈良時代まで継続しており、螢池東遺跡から螢池遺跡にかけて分布する掘立柱建物群の古い時期のものが、当該期の集落と考えられる。宮の前遺跡でも奈良時代の集落が成立している。從来、古墳時代後期と奈良時代をつなぐ時期の遺構がほとんど認められなかつたが、モノレール関連の宮の前遺跡の調査で、飛鳥時代の木棺直葬墓が確認された。また、以上の3遺跡に分布する掘立柱建物群の新しいものは、平安時代の集落と考えられる。

周辺の奈良～平安時代の集落は柴原遺跡・本町遺跡・新免遺跡に存在し、古墳時代からの立地を踏襲している感が強い。

調査区より南西に広がる、猪名川水系の沖積平野には、空港等に破壊されつつも、いまだ、条里制地割りを良く残しているが、これらは主に旧豊島郡の条里であり、その郡内の条里は「北条」が存在し、それに対し「南条」も存在したらしい事、その二つの南北の区画線が東西にずれている事、さらに北条の区画と一致した「仲条」の存在も指摘されている。

北条の南限となる十二条と十三条の境は伊丹街道よりやや南、走井遺跡付近に想定されており、調査区周辺は豊島郡北条の条里制地割りである。

豊島郡の条里は隣接する島下郡・島上郡・河辺郡の統一のとれた条里制地割りと異なり、伊居太神社・垂水神社の両式内社を起点として設定されているらしい。また、条里呼称の上限は記録上、天平勝宝8年（756）である。

調査区周辺の条里制地割りは、下位段丘面以上には現存しておらず、沖積平野でも、千里川沿いやその旧流路の痕跡には存在していない。千里川の開析谷の中では、柴原遺跡の南側あたりまでその痕跡を追跡できるが、それより上流には確認されない。特徴的なのは、条里制地割りが、段丘崖直下までは及んでおらず、そこにある程度の幅を持った緩傾斜面が存在し、その部分では自然地形に沿った地割りがみられる事である。

現在の水利形態は、段丘開析谷からの導水を、その緩傾斜面を利用して延ばし、後は沖積平野の平坦面に至れば、条里制地割りに沿った水路で配水されるのが、基本のようである。

中世の集落は宮の前遺跡・本町遺跡等で確認されているが、やや少ない。これは集落の減少を必ずしも示しているとは言えず、恐らく、江戸期から現代にいたる集落と重複しているものが多いためと思われる。

宮の前遺跡の北側で西国街道と能勢街道が交差し、水路としての猪名川水系も存在する。この周辺は中世においても交通の要衝として、数々の市が立ち、また戦場ともなった。

近辺に刀根山城・伊丹城・原田城・池田城などが置かれ、戦国時代へ入っていった事が文献からもわかる。また、付近に多く存在する溜池も古いものは中世に遡るようである。

江戸時代には北摂は幕府直轄領や旗本の領地、小藩等が錯綜する地帯であり、調査区周辺は青木氏一万石の麻田藩の所領であった。その中心が螢池遺跡と重複する、麻田藩陣屋跡であり、それは、低位段丘南西側末端に中世以来立地していた麻田村を北側から覆うように作られていた。

麻田藩陣屋は明治4年に破却されたが、その繩張りは現在の町の区画にも痕跡を良く留めている。また、陣屋外郭の北門と思われる門が刀根山元町の上西邸に、藩主邸の玄関が春日町の報恩寺に移設されて、現存している。

III 宮の前遺跡（3～6）

1. 調査の方法

調査対象地域は、大阪中央環状線から大阪国際空港線までの間で、阪急宝塚線の東に隣接する。

その地域を、道路により分割された街区毎に北からA～H区とし、その各々の区で、アルファベットの前に番号をふったものをトレンチ名とした。

今回報告するのは、その中で1993年度から1996年度にかけて調査した部分である。1993年度には（3）として1Bトレンチを、1994年度には（6）として3Bトレンチを、1995年度には（4）として2C・3Eトレンチを、1996年度には（5）としてHトレンチを調査した。（図5）

A区は試掘で、ほぼ全体が攪乱により消滅している事が判明し、また部分的に残存する部分も旧耕土層下に灰色粘土層が堆積し、遺物は出土しなかったため調査対象外となった。

B区は着手前に1B～3Bの3トレンチに分割した。2Bトレンチは1992年度に宮の前遺跡（1）として調査を実施し、前冊で報告済みである。3Bの南側にあたる2Bトレンチは住宅建設時に約1mの削平をうけしており、そのため遺構は消滅していた。

C区中の2Cは家半軒分、E区中の3Eは家1軒分である。2Cの北側は、調査時、家を半分残した状態であったが、2Cの調査成果により、遺構・遺物の存在の可能性は薄いとして、調査を省略した。

H区は、南半が段丘を切り通した道路と合わせた高さになっており、北側から2mほど落ちている。着手前にその部分を試掘したところ、現代盛土直下から、段丘疊層の可能性の高い砂疊層のみが連続しており、土壤化面や包含層、遺物など一切確認されなかったため、北半分のみをHトレンチとして調査した。

調査はいずれのトレンチもバックホーにより表土、耕土を掘削したのち人力掘削をおこなった。遺物のとり上げは基本的に国土座標にのっとった一辺10mの区画単位でおこなったが、狭小な調査地においてはとくに区画を設けていない。

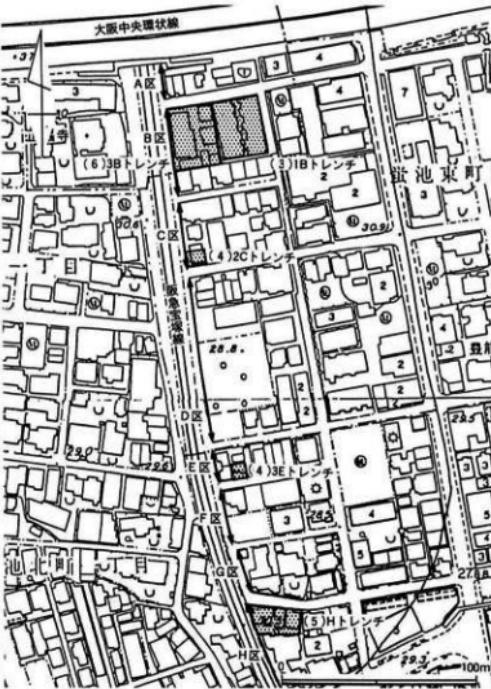


図5 トレンチの位置

2. 宮の前遺跡（3・6）の調査の成果

（1）基本層序

盛土・耕土は、調査地北側で約60～80cm、調査地南側にいくにつれて層厚をまし、調査地南側では層厚80cm～1mである。盛土・耕土除去後面は、北東隅部がやや高く30.4mであるが、この部分以外では北側で30.2m、南側で30.0mであり、北側が高く、南側が低い。これは、調査地が北東から南西へのびる低位段丘上に立地し、周辺の地形はおおきく北東から南西へむかってゆるやかに下降するものであり、これにともない水田面の造成が北から南にむかって段落ちするためである。埋没微地形においても、地山とした礫層が、北東部で高く南西部へむかって下降することを確認した。

層序は、おおきく5層に分層できる。1～3層が耕土、4・5層が弥生時代中期～後期の遺物が出土する土坑の基盤層で、地山の礫層にいたる。層名、面名は、1層上面を1面というようにつけた。

1層 7.5Y5/1灰色シルトに細砂が混じる。酸化鉄をわずかに含む。3Bトレーナーでは2層に細分できるが、土質は類似する。ほぼ水平な堆積であるが、宅地造成時の攪乱のため層厚は一定ではない。近世～近代の染付を含む磁器・陶器、土師器片、三足釜、鉄片が出土した。2面で検出された土坑からワイヤーが出土したことから、現代耕土と考えられる。

2層 7.5Y5/3灰オリーブ色シルトに粗砂・中砂が混じる。酸化鉄を含む。層厚10～20cmの水平な堆積である。近世～近代の染付を含む磁器、魚住系摺鉢、青磁、瓦器が出土した。近世耕土。

3層 5Y5/2～10YR4/1灰オリーブ～褐灰色シルトに粗砂、小礫を含む。酸化鉄をわずかに含む。層厚10～20cmの水平な堆積である。2層に細分され、下層は10YR4/1褐灰色シルトが主体となる。備前・信楽・瀬戸系の陶器片、青磁、瓦器、三足釜、瓦質甕、須恵器高台のある杯身・宝珠形つまみのある杯蓋・高杯脚部、土師器羽釜鉢部が出土しており、中・近世耕土と考えられる。

4層は、4～1層と4～2層に細分される。

4～1層 10YR5/2～6/1灰黄褐色～褐灰色シルト～粘土に粗砂が混じる。酸化鉄を含む。4～2層の凹地に堆積する層であり、層厚は最大20cmである。調査地北西部である3Bトレーナー西半部において、部分的にみられる。4～1層・4～2層上面は、29.8mではほぼ水平であり、3層を耕土とする水田の造成時に、4～1層・4～2層は削平された可能性がある。

4～2層 2.5Y7/6～6/6明黄褐色シルト～粘土に小～大礫を含む。調査地北東部では、地山である礫層上面に堆積し、調査地南西部にむかって層厚を増す。層厚は最大40cmである。弥生時代中期～後期の遺物が出土する土坑の基盤層であり、土坑埋土は本層のブロック土が主体となる。土坑は重複して掘削されており、本来の本層が残る部分は少ない。土坑埋土と本層の判別は困難であるため、断定にはいたらないが、本来の本層からの出土遺物はみとめられなかったことから、本層は段丘構成層の上部になる可能性がある。

5層 主体となる層は、2.5Y7/6明黄褐色粘土に大礫を含むものであるが、地山である礫層に近い部分は、5Y7/4浅黄色シルト～細砂に粗砂～小礫を多く含む層であり、地山に近づくにつれ砂質になり、礫を多く含む。土坑の多くは、4～2層中で掘削が収束するが、一部は本層にまで掘削がおよぶ。本層は調査地の南西部でみとめられたが、その下面までは調査がおよんでいない。本層においても出土遺物はみとめられないことから、本層も4～2層同様、段丘構成層の上部になる可能性がある。地山は、直径3～10cmのしまった大礫であり、段丘構成層とみられる。

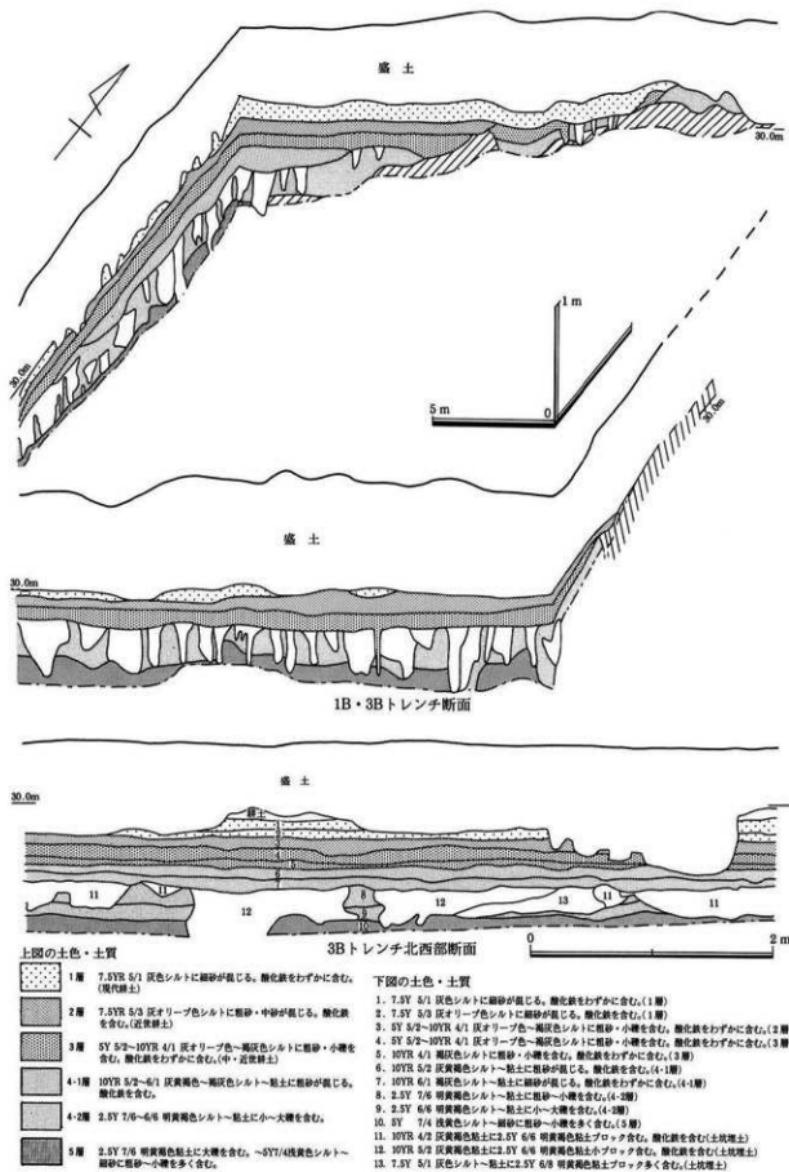


図 6 1B・3Bトレーン断面及び3Bトレーン北西部断面

(2) 遺構と遺物

1・2面は、3Bトレーニングのみでの検出である。1Bトレーニングでは顕著な遺構は検出されなかった。

1面 段、鋤溝を検出した。近代～現代の水田面である。

段1はトレーニング中央を、段2はトレーニング南端を東西方向にはしる。北から南にかけて、各々約10cmの高度差をもって落ちる。水田の区画にともなうものと考えられる。

鋤溝は、段に平行するものと、少數の、これを切る北西～南東方向のものがある。後者は、調査地の西側をはしる阪急電鉄宝塚線と方向がほぼ同じであり、同線開通後の水田区画にともなう可能性が考えられる。この場合、段およびこれに平行する鋤溝は、同線開通以前の水田区画にともなう可能性が考えられる。

本面は、攪乱が多く、段の高度差が約10cmしか残存しないことから、宅地造成時に攪乱、削平をうけたものと考えられる。

2面 畦畔、溝、鋤溝、土坑を検出した。近代の水田面である。

畦畔1は畦畔の基底部のみの検出である。トレーニング南半部を、ほぼ南北方向にはしり、幅30～50cm、検出長14.5mである。溝1は、畦畔1の東側に沿って検出され、幅40cm、深さ4cmである。鋤溝は、1面の段1・2と同じ方向のものを4条検出した。

溝1は畦畔1にともなうものと考えられる。畦畔1および溝1はトレーニング南半部で検出され、鋤溝はトレーニング北半部で検出され、その方向は直交することから、トレーニング北半部と南半部は水田区画が異なる可能性がある。この境界は、1面の段1に相当する。

土坑1・2は、トレーニング南東部で検出された。深さは、土坑1が80cm、土坑2が30cmである。土坑2からは、鉄線が出土した。

3面 段、畦畔、溝、ピット、土坑、井戸を検出した。近世の水田面である。

段1・2は、1Bトレーニング北半部で、北西～南東方向に検出された。北東から南西にかけて、各々約10cmの高度差をもって落ちる。水田の区画にともなうものと考えられる。段2より北東部は疊混じり土、段1より北東部は完全な地山疊層である。段3は東西方向にはしり、北から南にかけて落ちるものであるが、本面において高度差はほとんどなく、段3北側では3層に疊が多く混じり、南側では3層が厚く堆積した状況で検出される。畦畔1・2は、本面でその凸部上面を検出された状態であり、3層耕作時の畦畔と考えられる。畦畔1はオリーブ黄色シルト～細砂、畦畔2は灰色シルト～粘土で構築される。

溝1・2は、段1と同じ方向であり、これにともなうものと考えられる。深さは溝1が5cm、溝2が8cmである。溝1は、不定形で浅いことから、段1落ち際の傾斜とも考えられる。溝3・4は、段2に直交し、水口となる可能性がある。いずれも深さは8cmである。溝5・6は深さが2cmと浅く、段3とはほぼ同じ方向であることから、鋤溝と考えられる。ピット1は椭円形であり、長径60cm、短径50cm、深さ10cmである。疊が集積する。埋土上層が2層であることから、2層耕作時の末面遺構となる可能性がある。土坑は、3Bトレーニング南西部で密に検出された。いずれも深さが5cm以下の不定形なものである。

埋土は、黄褐色シルト～粘土または灰色シルト～粘土である。井戸は、1Bトレーニング北端で2基検出された。井戸1・2とも円形の素掘りの井戸である。井戸1は、トレーニング端部のため全容が明らかではない。幅48cm、深さ約50cmまで掘削した。遺物は陶器片、青磁、三足釜が出土した。井戸2は、直径60cm、深さ1.5m以上である。埋土は、最上層に3・4層ブロック土が落ち込む以外は粗砂～疊層であり、直径10cmの大疊を少し含む。遺物は瓦、擂鉢、染付が出土した。

1面の段1と2面の水田区画になると考えられる境界線は重なる。この線は、3面ではやや南に位置するものの、段3がほぼ同じ方向であるため、水田区画は近世以降大きな変化ではなく、踏襲されたものと考えられる。

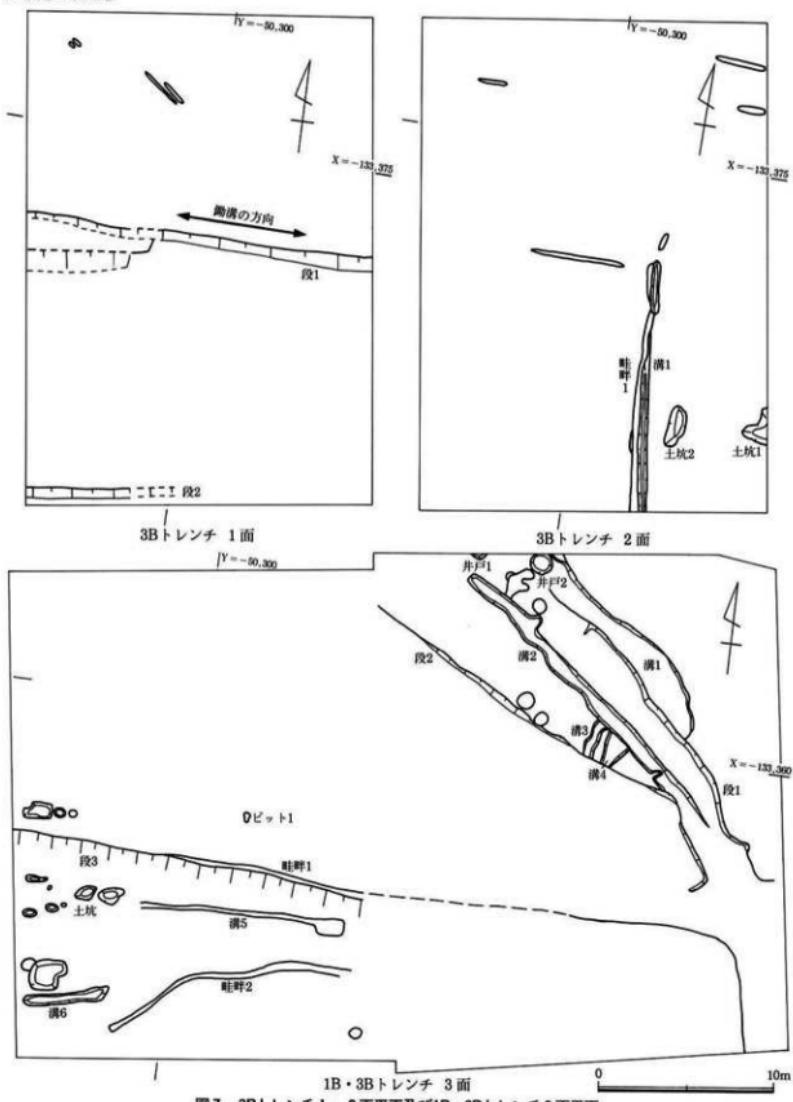


図7 3Bトレンチ1・2面平面及び1B・3Bトレンチ3面平面

4面 本面は、1Bトレーナーでは4-2層上面、3Bトレーナーでは4-1層除去後の4-2層上面である。1Bトレーナーでは、北東部に地山である疊層が露出し、本面はその南西部で検出される。

1Bトレーナーでは、当初、2.5Y7/6～6/6明黄褐色シルト～粘土（4-2層）を基盤とし、10YR5/2～6/1灰黄褐色～褐灰色シルト～粘土（4-1層）やリング状に検出される2.5Y3/1黒褐色粘土を埋土とする、形状の明らかな溝・土坑を検出、掘削した。これが4（1）面である。その後、遺構の掘削の進捗につれ、溝・土坑の埋土がひとつの遺構で収束せず、4-2層内においてその壁面がえぐられた状態で掘削され、別の遺構と連結するものが多く、形状が不明瞭なものが多くなった。こうして掘りきった状態が4（2）面である。

4-2層は、そのほとんどが溝・土坑の埋土であり、これら遺構の集積で形成された層ともいえる。

4（1）面は、その最終段階の溝・土坑を検出したものと考えられる。

4（1）面 溝12条、土坑46基、ピット2カ所を検出した。溝6・7以外の、溝、土坑、ピットは、形状から区別ただけであり、埋土の状況などは同じである。

溝6・7は、1Bトレーナー南半部で検出された。幅15～20cm、最深部の深さ20cm、検出長2～2.5mである。埋土は5Y5/2～10YR4/1灰オリーブ～褐灰色シルト（3層）であり、3層耕作時の耕溝と考えられる。深さが20cmと深いことが注意された。

溝6・7以外の溝は、幅50cm～2m、深さ30～40cm、検出長2～9mである。埋土はおおきく3層に分層され、上層2.5Y3/1黒褐色粘土に2.5Y6/6明黄褐色粘土または5Y3/2オリーブ黒色粘土ブロックを含む、中層2.5Y4/1～5Y4/1黄灰色～灰色粘土、下層5Y4/1灰色粘土に2.5Y5/6黄褐色粘土ブロックを含むである。遺物は出土していない。

土坑は、円形のものと不定形なものがある。円形の土坑は、直径60～70cm、深さ15～40cmのもの（土坑1～6・12）、直径1～1.2m、深さ20～30cmのもの（土坑10・14）がある。不定形な土坑は、長径1.8m、短径1.0m、深さ30cm（土坑9）、長径2.0m、短径1.0m、深さ18cm以上（土坑13）、長径2.0m、短径80cm、深さ54cm（土坑23）である。埋土は溝と同じものが大半であるが、上層5Y4/1灰色シルト～粘土、下層2.5Y4/1 5/4黄灰色～黄褐色粘土に細砂を含む（土坑11・14）のようにブロック土を含まないものも少数ある。遺物は、土坑25から土師質の甕が出土する以外は土器片が少数出土するのみである。

ピットは、溝1底面でピット1が、西壁側溝でピット2が検出された。ピット1は、溝1掘削時にその底面で土器口縁部が検出され、周辺を精査することで検出した。断面を残し観察したところ、ピット1は溝1に切られている可能性もあるが、溝1が深くなつた部分となる可能性もある。輪郭は不明瞭であるが、ほぼ円形であり、直径40cm、深さ35cmである。埋土は、2.5Y4/1黄灰色粘土に細砂を含むものが主体であり、ブロック土は含まない。底部から、完形の弥生時代後期甕が1個体、斜めに立った状態で出土した。ピット2は、側溝で検出されたため、形状は不明である。完形の弥生時代後期甕が1個体、横位で、上からの押圧のために部がやや偏平になった状態で検出された。土器はいずれも、酸化状態にある粘土に埋まっているためか脆弱であり、器表面は剥落した状態である。

4（2）面 不定形な遺構が全面で検出された。土坑状、溝状のものが組み合わさった形で連続する。深さは40～50cmである。埋土は、2.5Y7/6～6/6明黄褐色シルト～粘土（4-2層）が主体であり、下層に2.5Y3/1黒褐色粘土が入るものが多い。先述したとおり、これらの遺構は、一部切り合いがみとめられるが、その大半は連続し、遺構掘削完了時には、4-2層をほとんど掘削した状態であった。本来の4-2層はわずかに残る程度である。

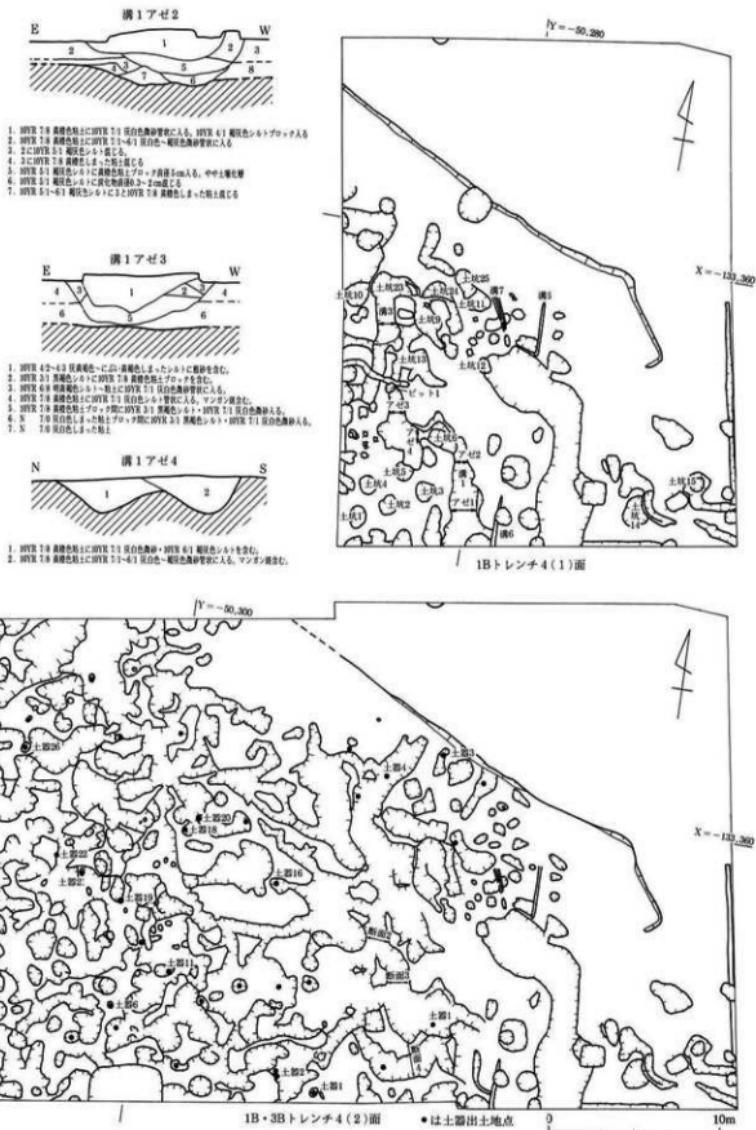


図8 1Bトレンチ4(1)面平面・溝1断面及び1B・3Bトレンチ4(2)面平面

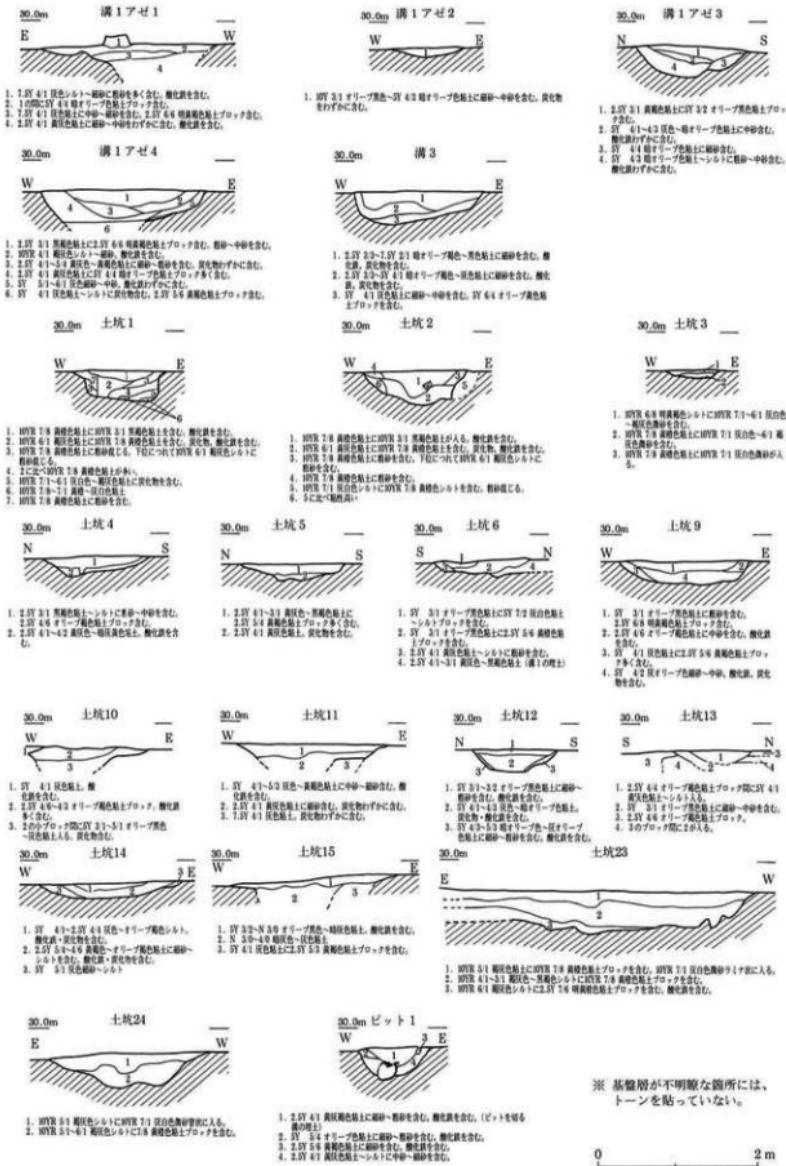


図9 溝・土坑・ピット断面

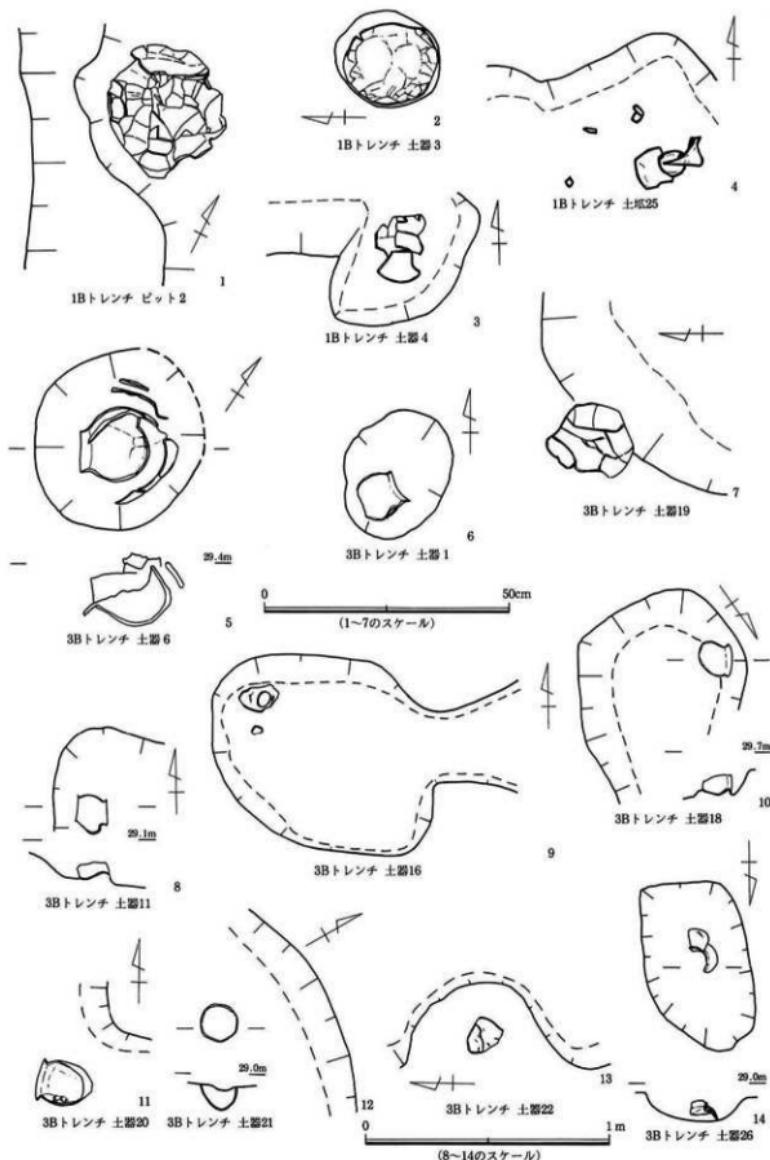


図10 1B・3Bトレンチ土坑・ピット遺物出土状況

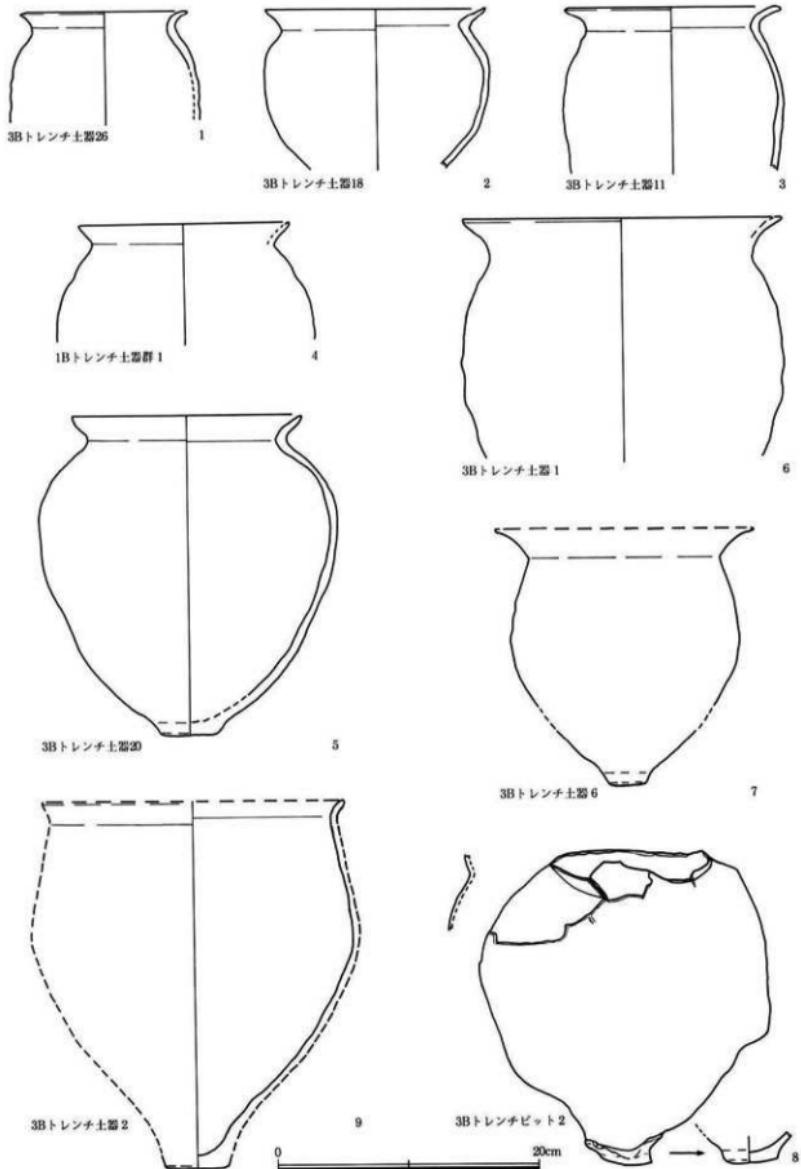


図11 1B・3Bトレンチ土坑・ビット出土遺物

こうした状態のなかで注意されたのが、遺構内から完形に近い土器が多く出土したことである。個体として確認できたものが35カ所ある。これらの土器は、遺構底部から浮いた状態のものが多い。正立するもの（1Bトレンチ土器3、3Bトレンチ土器21・26）、横位のもの（3Bトレンチ土器1・6・11・18・20）があり、遺構とともに土器上部を削平されている場合が多い。土器周縁で掘形がみとめられるものもあるが明瞭ではなく、4（1）面ピット1と同じような状態である。明らかに土器を埋納するようなピットはみとめられない。

土器は、4（1）面ピット同様、脆弱な出土状態であり、器壁の粘土を除去する段階で器壁が剥落するため、調整はほとんど不明である。土器は、確認できる範囲ではすべて甕である。土器は、弥生時代後期甕（図11 1～8）が多く、そのほかに弥生時代中期とみられる甕（図11 9）が1個体ある。弥生時代後期甕は、外面のタキが一部観察できる。弥生時代中期とみられる甕は、ほぼ完形であり、検出時にわずかにハケメがみとめられた。脆弱である為土ごととりあげた個体は断面を図示していない。

（3）まとめ

- ・近世～近代の水田面を検出した。水田面は低位段丘の傾斜にあわせて造成されており、おおきく北東から南西へと段落ちする。

- ・中・近世耕土とみられる3層は、奈良時代～中世の遺物を多く含むことから、周辺に該当する時期の遺構の存在が考えられる。

- ・4面では、不定形な遺構をほぼ全面で検出した。遺構の埋土が連続することから、遺構の壁面はえぐられた状態で掘削され、完掘すると4～2層はわずかに残る程度である。すなわち、この不定形な遺構の集積で4～2層が形成されているともいえる。埋土は、上層では有機物を多く含む黒色粘土ブロックを、下層では本来の4～2層である黄褐色粘土ブロックを含む。遺構からは、ほぼ完形の弥生時代中期～後期の甕が出土し、後期の甕が主体である。

- ・不定形な遺構の成因は、ブロック土がみられることから、人為的な掘削、埋積の可能性もあるが、木の根の痕跡である可能性も考えられる。この場合、調査地周辺は、弥生時代中期から後期、疎林の景観が復元される。調査地西側の低位段丘縁辺部では、豊中市教育委員会の調査により、竪穴住居、方形周溝墓の存在があきらかにされており、宮の前遺跡の集落に含まれた地域と考えられる。本調査地は、こうした宮の前遺跡の集落からはややはざれた、集落の縁辺部にあたると考えられる。

- ・不定形な遺構からは、弥生時代中期～後期の甕が完形に近い形で出土する。この点が、本遺構を木の根の痕跡と考えた場合、説明が困難である。土器周辺では明確な掘形が検出されないため、土器は土坑やピットなどを掘って埋納されたものではない。とすれば、木の根元などに置かれた土器が落ち込んだものであろうか。しかし、土師質の土器が、完形のまま粘土に埋積することは考えがたい。

同じ大阪モノレール建設とともに発掘調査された螢池遺跡では、これとよくにた状況で密集土坑が検出され、土坑からは弥生～奈良時代土器が出土した。また、土坑埋土の脂肪酸分析結果より、土坑は墓壙である可能性が指摘されている。このほかにも、類似する密集土坑は多く検出されており、粘土採掘坑などの可能性が考えられている。本遺跡の不定形な遺構も、その性格を断定するにはいたらないが、弥生時代後期甕を主体とする土器が完形で出土することが注意され、遺構の性格を考えるにあたっての留意点となる。類例の蓄積をまち今後の課題としたい。

3. 宮の前遺跡（4）の調査の成果

（1）2Cトレーナー

住宅一軒分の家屋の約半分を撤去し、その前庭と共に調査した。住宅建設時の盛土と、その直前までの現代耕土を除去した所、中疊を中心とした疊を多く含む粘質土層が露出した。

その上面では、庭木によるものなどの現代の擾乱と思われるものしか存在せず、露出した層はその状態からみても、低位段丘構成層の上部と思われたので、それ以上の掘削はおこなわなかった。

この地点は調査区全体からみても、北は3Bトレーナーから一旦落ちた後また高くなる部分であり、南へは、住宅建設前の耕地区画の段差を踏襲しながら緩く落ちていく地形で、調査区内では一つのピークを成している。

そのため、低位段丘平坦面の中でも、二次堆積などが起りにくく、浸食が卓越する部分で、かつ耕地化されて以降、削平を受けつけたものと思われる。

（2）3Eトレーナー

住宅一軒分の撤去に伴い調査した。1993年度に調査した北隣の2Eトレーナーと、両トレーナーの西側の1Eトレーナーの調査で、3Eトレーナー部分は、北から南へ落ちる耕地区画に伴う、50cm程の段差の直下の部分であり、耕地区画の造成時にかなり削平されている事が予想され、実際、その通りであった。

1Eトレーナーの南半では、それでも削平されなかつた遺構がわずかに認められたが、3Eトレーナーは住宅の基礎や配管が若干深く達していた事もあり、擾乱が多く、遺構は認められなかつた。遺物も住宅の盛土、それ以前の現代耕土に染め付けなどの小片がわずかに認められる程度である。

この時点では露出している層は黄褐色系の粘質土である。この層は1Eトレーナーで深掘りをかけて確認したところでは、下位段丘構成層そのものや、その上部が風化したものではなく、それに起源を持つ二次堆積層らしい事が判明している。しかし、無遺物・無遺構であるので、この面で調査を終了した。

（3）小結

調査範囲内での今回の調査では、残念ながら遺構・遺物を検出する事はできなかつたが、下位段丘上の平坦面でも、若干の凹凸がみられる事、調査範囲内での北と南で堆積層が異なるが、それを分ける一つの地形上のピークが確認された事、また、そういった高まりの浸食・削平・二次堆積の状況を考える補強材料が得られた事は一応の成果と言える。

4. 宮の前遺跡（5）の調査の成果

（1）基本層序

トレンチの地勢は基本的に北が南より高く、西が東より高い。中央から東寄りに、ほぼ南北方向の流路状の落ち込みが見られる。包含層は概して薄く、平均で20cmほど、それも西側は削平されてほとんど残っていない。その包含層は基本的に4層に分けられる。以下、道を隔てた北壁にあたる、1993年度調査の1G・2Gトレンチの基本層序と比較しながら述べる。（図12）

1層 近世の水田耕土と思われる。10YR4/1～3/2（灰黄褐色～黒褐色）砂質土である。後世の攪乱により、ほとんど遺存していない。わずかに遺存するトレンチ南壁断面から見れば、層厚15cmほどであろうか。G地区の1層にあたる。

2層 10YR3/2～2.5Y3/2（黒褐色）粘質土でシルト主体、粗砂を含む、3層の二次堆積層と考えられる。一番低い傾向にある、トレンチ南東側に堆積している。G地区にはない。

トレンチ西半でこの上面で遺構がいくつか検出されたので、1面として調査した。遺構の埋土は1層に似る砂質土系のものが多い。流路状落ち込みはこの面で完全に埋没して平坦化しているようである。もしくは、2層と流路状落ち込みの最上層埋土は同一のものかも知れない。

3層 7.5YR2/2（黒褐色）粘質土。シルト主体、粗砂含む、酸化マンガン多し。G地区の2層にあたる。多くの遺構がこの層の上面から切り込んでいたため、それを2面として調査した。西半では削平され消滅している。酸化マンガンの沈着が激しいため、上面切り込みの遺構でも、平面的に検出しにくいものもあり、それらの中にはさらに下面で検出したものもある。

流路状落ち込みは、この層上面で埋土最上層の切り込みがあり、存続していたものと思われる。

4層 7.5Y4/4～10YR4/4（褐色）粘質土。シルト～粘土主体、粗砂含む、酸化マンガン多し。G地区の3層にあたる。西半では削平されて消滅している。

5層 2.5Y6/8～7/4（明黄褐色～浅黄色）粘質土。シルト主体、粗砂～中疊多し。基本的に無遺物でしょりも良く、低位段丘層の二次堆積層と思われる。この上面で既に流路状落ち込みが形成されているようである。G地区の4層にあたる。

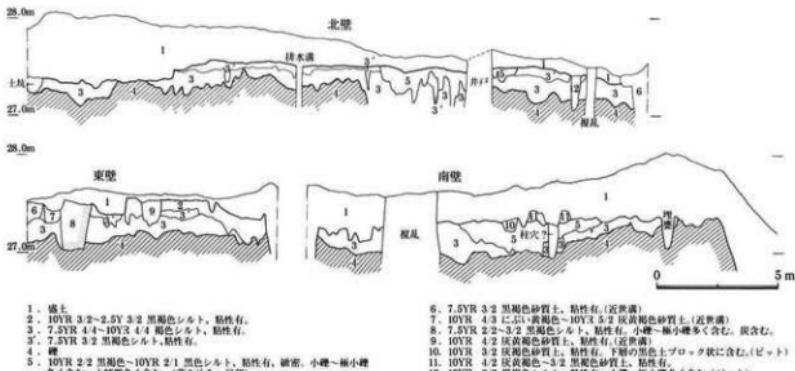


図12 1Hトレンチ断面

(2) 遺構と遺物

1面 (図13)

トレチ東半のみ、住宅建設時の攪乱・削平が少なく、遺存していた面である。東西方向と南北方向の溝を検出した。溝と溝の切り合いに特に規則性はない。東西方向の溝の中にやや幅が広めで、トレチ内を貫通するものが2本あるが、それ以外は鉛溝・独立の溝の類と思われる。出土遺物は皆、小片のみで、須恵器、土師器を含むものの、瓦器片もあり、それが一応の上限となる。

しかし、溝の埋土が1層と似たものがほとんどである事から、1層が耕土であった時期の、床面の遺構と考えられ、近世のもとのみるのが妥当と思われる。

2面 (図14)

3層上面であるが、西半は削平が著しく、5層上面が露出している。ただその部分の遺構も東半と共に通した、2～4層に似た埋土を持っているため、元々の切り込み面は同じと思われる。

2面の遺構は二つの落ち込み以外は土坑とピットのみである。その内、落ち込み1付近に集中し、列を成すものもあるピット群と、長方形土坑が注目できる。(図15)

ピットには柱痕の認められるものもある。特に、落ち込み1の西肩部北半に集中しているピットの中に、柱痕のあるものがいくつか確認できているので、この部分のピット群は、整然と列を成さないにしても、棚列であった可能性が高いものと思われる。

また、落ち込み1の中にあるピットは、底部か、その埋土の最下層上面からの切り込みである。落ち込み1の埋土は沼状の止水堆積であるので、本来の切り込み面は確定できないが、少なくとも完全に埋没する以前に掘られたピットとはいえる。

それらのピットのうち、トレチ南端で落ち込み1を横切るように並ぶ一群が注目できる。また、P71・72・91などは柱痕が確認できる。しかし、いずれも、深さは10cm前後と浅く、落ち込み1を渡るような施設の存在は断言できない。

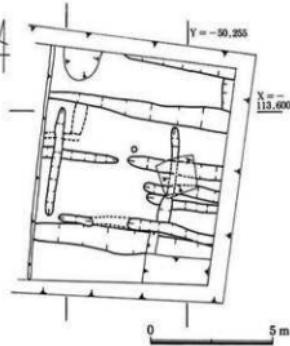


図13 1Hトレチ1面

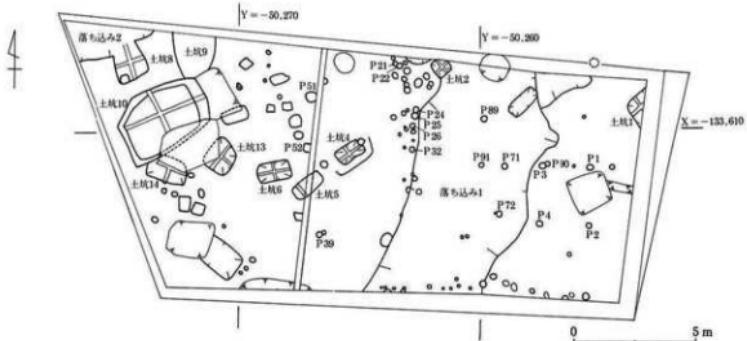


図14 1Hトレチ2面

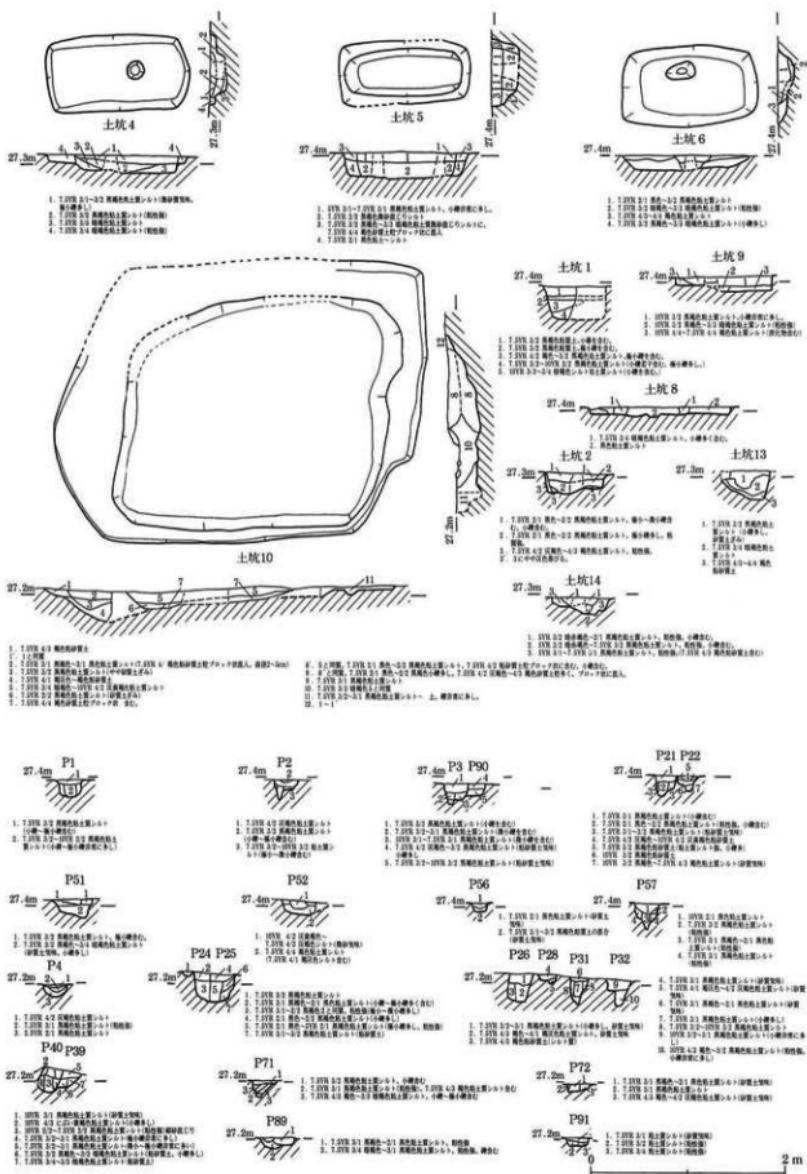


図15 1Hトレンチ2面土坑平面・断面・ピット断面・落ち込み断面

土坑類はピットに切られるものが比較的多いが、全体的に土坑がピットに先行しているかどうかは不明である。土坑10の一番外側の輪郭や土坑9が不整形で、土坑13が大体隅丸方形に近い以外は、ほとんどが整った隅丸長方形で検出された。

北隣のG区で、飛鳥時代の木棺直葬墓が検出されていたので、その可能性を考慮して調査したが、遺物がほとんどなく、削平のため残存する深さが20cm以下のものが大部分であったので、確定できるものはなかった。

土坑10は三重の、土坑5・11・13は二重の輪郭が平面的に検出されたが、断面から木棺の痕跡の可能性を残すものは土坑5のみである。また、それらを含め、長方形とはいえ、その長さが150cm以下、100cm強いどの物ばかりで、壁面が立つものが多く、削平で縮小したともいえない事も土壙墓の可能性を低める要素である。脂肪酸分析をおこなう事ができなかつたため、墓の存在は確定できない結果となつた。

なお、これらの土坑の本来の深さは、トレンチ東壁にかかる土坑1が、全体形は分からぬものの、深さ40cmほどあるのが参考になるよう思う。

ピット・土坑の時期については弥生土器らしきもの的小片のみなので、弥生時代以降としかいえないが、G街区の調査からみれば、飛鳥時代前後、大きくみて、古墳時代後期から奈良・平安時代までの間に納まるものと思われる。

落ち込み1は幅4～5mほど、深さ50cm前後の流路状で、トレンチ中央よりやや東を、ほぼ南北に貫いている。ただ、細かくみると、北北東から南南西へ抜けた流路状の落ち込みであるようだ。

トレンチ断面からは、5層の上面すでに形成され、4層、3層の上面では各々の二次堆積で埋没していき、最終的に2面で10YR2/2～2/1（黒褐色～黒色）の粘質土で埋まり、平坦化するようである。

埋土はいずれも有機物を多く含む、シルト主体の粘質土であるため、普段はほとんど水の流れはなかつたものと思われる。また、その中に、堆積後の降下ではない、粗砂～小礫が入る事から、あまり、滲水もせず、雨毎に土砂が二次堆積していくような状況であったものと思われる。

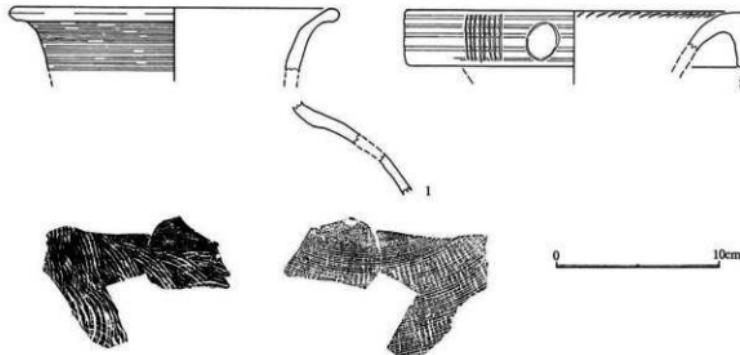


図16 Hトレンチ2面落ち込み1出土遺物

土器が比較的多く出土したが、大部分が、接合できもしない小片である。最上層埋土からが一番多く、弥生時代中期のものから、奈良～平安時代の須恵器までを含む。

ただ、同一固体と思われる須恵器壺の破片が若干まとまって出土している。（図16-1）の体部上半は縦方向の平行タタキを若干残しながらカキメが施され、口縁部外面にもカキメが入る。内面は半スリケシの同心円タタキを残し、口縁部内面は回転ナデ。口縁端部は外に折り曲げて玉縁状の口縁にしている。6世紀後半頃のものか。

出土状況から、破碎した壺の破片をこの付近で落ち込み内に投棄したものと思われる。

他に、やや大きめの破片としては、弥生中期の壺口縁片がある。（図16-2）はかなりの幅の垂下口縁を持ち、その外面に円形附文が付く、円形附文の直径は21mmあり、14cm以上の間隔を開けるようである。

器表の磨滅が激しく、判然としないが、垂下口縁外面には5条ていどの凹線文があったようであり、円形附文のない部分では、縦方向の沈線も何条かみえる。また内縁端部にも縦方向の線が見えるが、櫛描き列点文であろうか。IV様式2段階のものと思われる。

落ち込み2は、トレンチ北西端で検出された。深さ20cmほどで、3・4層系の二次堆積層で埋まっている。おそらくG街区の南東端の落ち込み2と同一のもので、幅5～7mほどで北東から南西に抜ける流路状の落ち込みになるものと思われる。

これに、G街区の落ち込み1を加えると、3本の落ち込みが、北東方面から、西・南西・南南西と扇状に形成されていたように思える。いずれも、段丘平坦面上のわずかな凹凸に形成された浸食跡と考えられるが、何故扇状に形成されているのか、幅の割に浅い状態で浸食が停止し、二次堆積層で埋まっているのは何故かなどの問題は残る。

段丘平坦面と言えども、浸食が進行する事によって生じる凹凸が意外とあったのであろう。また、そういった浸食の水の流れは、大部分が段丘を開析した谷に集約していくとしても、一部には排水不良で泥土が堆積し、沼状の環境が生まれた所もあったと考えられる。そして、推論を重ねるのを恐れずに言えば、このような浅い浸食痕の一部をせき止めて、雨水を溜めたり、耕化する方法もあったのかも知れない。落ち込み1を横断する杭列は、そういったものである可能性を考えておいても良いようと思える。

（3）小結

今回の調査では、後世の削平、遺構内の遺物の少なさなどから、不明確な部分が多い調査結果となつた。もし、長方形土坑を、G区で確認された土壙墓の類と考えられるなら、落ち込み1の西肩部に並ぶピット列も、自然地形を利用した墓域の境を明示する柵列と位置づける事も可能かもしれないが、墓である事に否定的因素もあり、現状では確定できない。

しかし、そのような、土坑・ピットといった遺構が、流路状の浸食跡という微地形と有機的な関連を持って存在しているとはいえ、それだけでも将来につながる調査成果とはいえる。

また、螢池東遺跡と隣接する、宮の前遺跡の南端部が、両遺跡の調査の対比からも遺跡の境になると見える。すなわち、分布図上の境のみでなく、地形的には一つの開析谷と、その周囲にある、段丘平坦面としてはやや低く浸食痕が散在する地域をはさむ。また、遺構・遺物群としては、宮の前遺跡の南端では、弥生中期の土坑・飛鳥時代の土壙墓・古墳時代～平安時代の土坑、ピットが検出され、螢池東遺跡の北端では古墳時代の集落・奈良～平安時代の集落が検出されることからも、この部分が遺跡の実際上の境目であることが明らかになったといえる。

5. まとめ

宮の前遺跡は、猪名川流域の弥生遺跡としては、尼崎市の田能遺跡、豊中市の勝部遺跡にならぶ代表的な遺跡であり、律令制以後の建物群としては、その棟数において上津島南遺跡に匹敵し、地方官衙の可能性も指摘されている遺跡であるが、その全容はいまだはっきりとしていない。

大規模な調査としては、1969年の大阪中央環状線建設に伴う調査が、遺跡のほぼ中央で東西に長い形で行われたが、今回の大阪モノレールの調査はその南東側で、南北に長いトレンチを開けたといえる。

残念ながら本調査地点は遺跡の核心部にあたるとはいせず、その周辺的な状況を検出したようである。おそらく、核心部はここより、やや西にあるものと思われる。

大阪中央環状線以南の調査は、主に豊中市教育委員会により行われており、それらの当調査区より西の調査をみてみると、環状線南隣の、「螢池北遺跡12次」（1989）では弥生時代中期の方形周溝墓・木棺墓、奈良時代の掘立柱建物、それよりやや南の「螢池北遺跡14次」（1989）・「螢池北遺跡15次」（1991）では遺構密度が少なく、中世の井戸や溝中心。遺跡の南西端に近い、「螢池北遺跡13次」（1989・90）では弥生時代中期の住居址、古墳時代中期の古墳・木棺墓、奈良時代の井戸が発見されている。

この状況をまとめると、環状線あたりに弥生時代中期の集落と墓域、古墳時代後期の集落と墓域、奈良時代の集落が存在し、それから遺構密度の少ない部分をあけて、遺跡南端あたりに弥生時代中期の集落、古墳時代中期の墓域が存在する事になる。それらは、この報告書でわかった宮の前遺跡（3・6）とした北部、同（4）とした中部、同（5）とした南部の遺構密度に対応している。

これらの事をふまえ、今回の調査をまとめてみたい。

北部では、西に存在する弥生時代中期の集落と墓域から少し離れた、周辺地域の状況が判明したといえよう。弥生後期にはそこは疎林であり、土器・主に甕が置かれるような行為があった可能性がある。

しかし、少なくない数の土器があるのにも関わらず、その時期に該当する弥生時代後期の集落は確認されていない。当調査区の土器に、中期の可能性のある甕もあるが、それは土圧でかなり変形しており、取り上げ時にわずかに外面調整に刷毛目を確認したものの、摂津地域では後期までかなり刷毛目調整が残る事を考へても、これらの土器群が西の集落と同じ、中期に遡る可能性は少ないと見える。

また、甕ばかりを、林の中に置くと言う行為の類例と意味はほとんど知りえないし、それが、木根痕と思われる遺構の中にはほぼ完形を保ったまま埋没していく状況というのも今のところ解明しない。

木根痕としたものの中で、土坑状のものは土器の存在と結び付ければ土壙墓の可能性があるのかも知れない。確かに、近くの螢池遺跡の密集不定型土坑群が、古墳時代から奈良時代にかけての土壙墓群であった例以外に、弥生時代にも密集不定型の土壙墓群は類例があるが、否定的要素もある。

まず、土器の出土状況であるが、墓の場合、遺体と共に埋納されたものは埋土内で下半に多く、完形に近い。埋葬後、供獻されたものは埋土の上か、少なくとも上半に位置し、破碎・散乱の状況で検出される事が多い、という傾向があるが、ここでは、土器のほとんどは遺構の底からかなり浮き、埋土下半に存在しながら、後世の削平で失われた分以外は、土圧での変形を受けたぐらいでほぼ完形である。むしろ、破碎・散乱の状況を示すものが遺構底に近い傾向がある。

そしてなにより、これらの遺構は溝状の部分と土坑状の部分があるが、平面的に検出した際、土坑状の部分で埋土が完結し、溝状の部分と切り合い関係にあるものがほとんどといって良いほどなく、埋土の堆積状況が連続する事が確認されたものが多いという事である。

つまり、土坑状の部分が単独で人為的に掘られたものとはいはず、埋土にブロック土が存在しても、木根痕の類例から、木の根が腐食していく過程で上部の土がブロック状に崩落するという説明がつき、土壇墓にするには否定的な要素が強いといえる。

古墳時代・奈良時代の西側に存在する墓域・集落はここまで及んではいないようである。いつごろ耕地化されたかは良くわからないが、一部、中世の包含層が確認できた事から、中世には既に耕地化されていた事が知れる。それも現在の土地区画に踏襲される、自然地形に沿った地割りであったようだ。

中部で遺構密度が非常に低いのは、元々若干高い地形で、後世の浸食・削平を強く受けたためと考えられ、西側の豈中市の調査も、写真で見るかぎり、遺構面のすぐ下に、礫を多く含んだ層がせまっているのを見ても同じような状況と思われる。しかし、モノレール関連の調査でも、過去に弥生中期の壺の出土した溝状遺構が検出されており、弥生時代・奈良時代の遺構がまったくないわけではない。

問題は遺構が削平などにより、消滅する度合いが強かったから遺構密度が低いのか、元々遺構の形成自体がまれな部分であったかである。

環状線部分の弥生時代中期の集落は、大体そこから北へ広がるような遺構配置であり、そのまわりを方形周溝墓がとりまいているような構造が考えられる。また、遺跡南側で検出された住居址はそこから400mほど離れており、そこまで一つの集落と考えると、少なく見積もっても南北径400m以上の大集落となり、それなら東西幅においてモノレールの路線の位置まで達しないのも不自然である。

古墳時代においては南部は中期の古墳を含む墓域、北部は後期の集落と土壇墓のみの墓域と、時期も性格も異なっている。

また、奈良時代の建物は今のところ環状線近辺でのみ検出されており、南は螢池東遺跡まで行かないで存在しない。

それならば、中部は遺跡内にいくつかある中核部分同士の境目にあり、元々、遺構の形成の少ない部分と考えるのが、自然と思われる。

南部は、西側の段丘崖直上あたりに、弥生時代中期の集落と、古墳時代中期の古墳を含む墓域の存在が確認できる事から、弥生時代中期に関しては、以前の調査で検出した、高杯等が出土した土坑や、今回の調査での包含層に含まれる弥生土器の量から言っても、その集落の周辺的な状況と考えられる。

おそらくは、集落の南西側で、段丘崖や南側の開析谷に向かう浸食跡が何本か走る緩傾斜面といった感じであろう。

しかし、古墳時代に関しては、包含層にその時期の土器はあるものの、遺構は確認されず、かつ、西側の古墳・木棺墓が古墳時代中期であるのに対し、モノレール関連の調査では以前に飛鳥時代の木棺直葬墓が確認されているのが時期的に断続している。

その時期をつなぐ遺構が南部周辺に存在しているのか、時期の異なる墓域が隣接しているのかは今後の課題であろう。

今回の調査は、林の中に弥生土器の甕を置く、といった珍しい状況が確認できただけでなく、宮の前遺跡内部の具体的な状況・構造を把握するための重要な要素を明らかにできたともいえる。

IV 蛍池東遺跡（3・4）

1. 調査の方法

螢池東遺跡は、豊中市北西部、待兼山・刀根山丘陵の西側にひろがる低位段丘上に立地する。遺跡は南北270m、東西169mの範囲であり、北側は主要地方道大阪国際空港線、東側は国道176号線、西側は豊中市立第18中学校、南側は麻田藩陣屋跡との境界で区切られる。豊中市立第18中学校は旧溜池であり、低位段丘の小開析谷である。遺跡は地形的には北側にゆるやかに下降し、西側は段丘崖で約5mの比高差をもって落ちる（図5）。

これまで、螢池東遺跡の調査は、1988年の螢池東遺跡調査会による調査後、大阪モノレール建設に伴う調査が1992・1993年に当センターによって実施された。これら調査の成果としては、古墳時代中期以前の大形掘立柱建物群をはじめとして、それ以降にひろがる古墳時代中期の竪穴住居を主体とする集落、奈良・平安時代の掘立柱建物からなる集落が明らかにされている。

今回の調査位置は遺跡の北端にあたる。これまでの調査では、遺跡の北側は埋没地形においてもゆるやかに下降し（3Aトレンチ）、その先端ではほぼ東西方向にはしる谷が検出されている（2Aトレンチ）。今回の調査位置は、この谷の北側にあたる。

トレンチの設定は、『助大阪文化財センター和歌山線遺跡調査マニュアル』に準拠し、未買収地を含め調査予定地内の北東から付けている。したがって、1992・1993年度の調査時、1~9Aトレンチを設定したが、1Aトレンチは未買収地であり、2~9Aトレンチを調査した。今回、螢池東遺跡（3）として実施した調査は、この未買収地であった1Aトレンチ部分である。

その後、1Aトレンチのすぐ北側の部分に、モノレールの側道がはることとなり、螢池東遺跡（4）として調査を実施した。調査地は、2カ所あり、南側が約10×4m、北側が約10×5mの大きさである。調査は南側から実施し、調査順に10A・11Aトレンチとした。

10Aトレンチは、店舗の前面に位置することから、店舗への通行路を確保する必要があり、全面を一度に調査することは不可能であった。そのため、10A1トレンチは、バックホーによりトレンチを掘削し、断面観察を主とし、その埋め戻し後、10A2トレンチを平面的に調査した。

1A・10A・11Aトレンチとも、機械掘削により、盛土、耕土を除去後、人力鋤削により調査した。いずれも道路に面し、矢板を用いない調査であるため、地表面より最深部は-2mまでの調査となった。



2. 蛍池東遺跡（3）の調査成果

（1）基本層序

基本層序は、2Aトレンチと基本的に同じである。各層の年代は2Aトレンチの調査成果による。

1層—盛土・旧表土。機械掘削により除去した。

2層—旧耕土。酸化鉄やマンガン斑の集積を境に、やや土質の異なる、層厚約10~15cmの単位が2~3層みとめられ、旧耕土として一括した。谷部では10~40cmの層厚がある。黄褐色~褐色シルトに微砂が混じるもののが主体であり、下層につれて微砂~粗砂の含有量が多くなる。上層ではマンガン斑を多く含むが、下層につれて管状酸化鉄が入るようになる。近世~中世。

3層—黄褐色シルトに粗砂・小礫を多く含む。谷部のみの堆積層である。中世。

4層—マンガン斑を多く含む黒褐色~灰黄褐色シルトが3単位みとめられる。遺構埋土と同じ層であり、本来段丘上において一定の堆積があったものが、後世の耕作などで削平され、谷部にのみ残存するものと考えられる。弥生時代中期~奈良時代の遺物が出土する。

5層—谷部最下層に堆積する黒色粘土層である。弥生時代中期~奈良時代の遺物が出土し、古墳時代の遺物を多く含む。

（2）遺構と遺物

遺構は5層上面と5層除去後面で検出した。5層上面では、ピット・土坑状の窪みを多く検出したが、明らかに遺構となるものはなかった。5層除去後面では、東側が高く、西側が低い、緩傾斜面を検出した。この緩傾斜面は、1Aトレンチ南側の2Aトレンチにおいても検出されており、低位段丘の小開析谷の一部と考えられる。小開析谷は、北東~南西方向にはしり、最深部は2Aトレンチ南半部にある。谷はこれより北東側にむけてゆるやかに上昇し、1Aトレンチはその途上の部分にあたる。

出土遺物は、小片のみであり、時期を特定できるものはない。

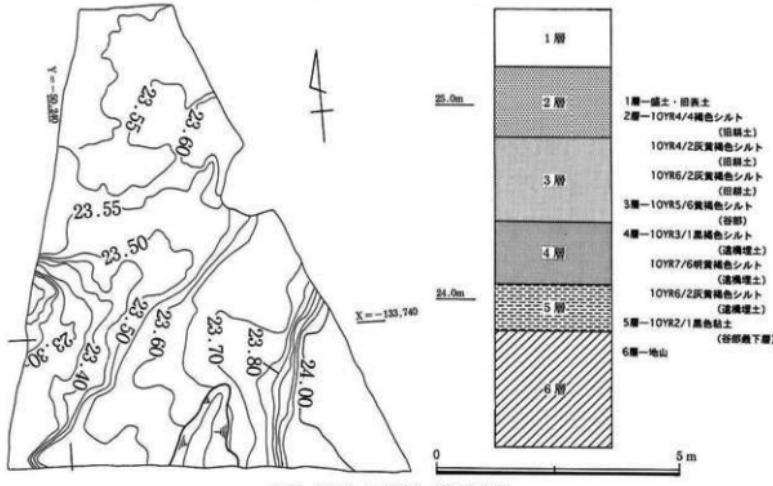


図18 1Aトレンチ平面・断面柱状図

3. 蛍池東遺跡（4）の調査成果

（1）基本層序

10Aトレンチ

10A 1・2 トレンチは近接するものであるが、各々かなり様相が異なるため、10A 2 トレンチ西壁と10A 1 トレンチ西壁南半部について記述する（断面の位置は図17を参照）。

10A 2 トレンチ西壁は、1～6層の中・近世耕土と7層以下の中世以前の耕土である可能性をもつ層におおきくわけられる。1～6層は、1・2層のやや還元化した明褐色～褐灰色粘土と3～6層のやや酸化状態にあるぶい黄褐色～黄橙色シルトがある。7層は、灰黄褐色しまったシルト層に疊・黄橙色シルトブロックを含むもので人為的な整地層と考えられる。7層は南半部で層厚10cm、北半部の溝と共に伴う落ち込みの上位では層厚16～18cmを測り、その上面が水平であることから、耕土層である6層の形成に先立つ整地層と考えられる。沈下をふせぎ、乾田化をはかるためのものであろうか。9層は灰黄褐色砂・小礫混じり粘土に10層の黒褐色シルトブロックを含む。9層は溝肩部の耕土層と考えられ、耕作時の攪乱により10層の黒褐色シルトを巻き上げたと考えられる。10層の黒褐色シルトは土師器片を含み、1A トレンチ4層または5層に類似する。11層は疊が主体の層である。掘削深度に制限があり、今回はこの11層を地山とした。

10A 1 トレンチ西壁は、1～3層は10A 2 トレンチ西壁と同じであるが、その南端で高まりがみられることが注意された。高まりは断面台形であり、上辺2.0m、下辺2.5m、高さ80cmである。高まりは凹地を埋める9・10層を基礎として、5～8層のおおきく4層に分層できる。いずれもブロック土を含む。ブロック土は、5層は明褐色シルトと明黄褐色シルト、6層は明黄褐色シルトと7層、7層は暗褐色シルト、黒褐色シルト、黄橙色粘土からなる。明褐色シルト、明黄褐色シルトは中・近世耕土、暗褐色

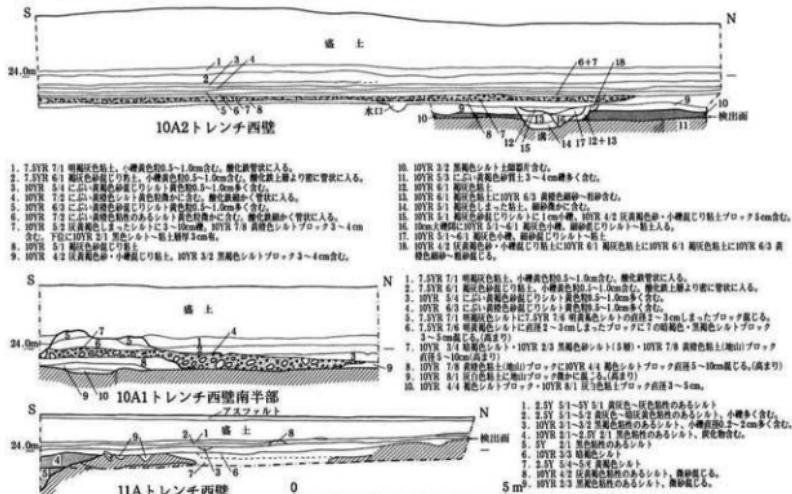


図19 10A・11Aトレンチ断面

色シルト、黒褐色シルトは古墳時代包含層、黄橙色粘土は地山であり、外部より土を搬入するのではなく、付近の堆積層を掘削して高まりを形成したと考えられる。とくに7層は、縦5cm、横10cmの偏平なブロック土を多く含み、一定の掘削具を使用した人為的な盛土であることが明らかである。7層は1～4層の下層にみられることから、高まりの形成後、1～4層の中・近世耕土が形成されたと考えられる。ただし、高まりの最上層である5層は、1層耕土のブロックが混じることから、1層形成時とあまり時をへだてない時期に形成された可能性がある。出土遺物は、1・2層から磁器片、瓦器片が出土したのみであり、高まりの形成時期は確定できないが、奈良時代以降中・近世を含む時期と考えられる。

11A トレンチ

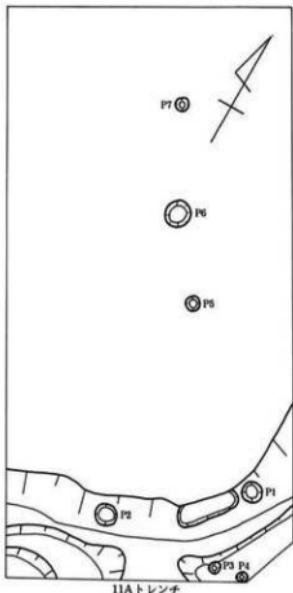
1～3層の水平堆積、4・5層の南側落ち込み内の堆積、6・7層の地山類似土がある。1・2層は、黄灰色を主体とするシルトである。2層除去後面では、幅40cm、高さ10cmの黒色シルトからなる小畦畔がみられることから、1・2層は旧耕土と考えられる。3層は、黒褐色シルトであり、小礫を多く含む。小礫は、同層下に地山とみられる疊層があり、これが混入したものであろう。3層は、地山面で検出されるピット埋土と共通し、10A 1 トレンチ東壁の7層下位に堆積する黒色シルト～粘土に相当する可能性がある。4・5層は、黒色の粘性のあるシルトであり、南側落ち込みに堆積する。4層は炭化物を含む。4・5層とも擾乱はみられず、元來の堆積層が後世の削平をまぬがれて、落ち込み部分に残ったものと考えられる。10A 2 トレンチ西壁の10層、1A トレンチ4層または5層に相当する可能性がある。

（2）遺構と遺物

10A 2 トレンチ

平面的に調査した10A 2 トレンチについて、記述する。
面の検出は、掘削深度の制限もあり、基本的に8層除去後面でおこない、その後地山面確認のため、北端部分にトレンチをいた。

同面は、南から北にむかってゆるやかに下降する。同面では、段とこれにともなう溝、北東～南西方向の溝を検出した。段は、トレンチ西壁沿いで検出された。段は、北西～南東方向にはしり、約10cmの比高差をもち北東にむかって落ちる。この段をきる形で、幅40cm、深さ10cm、検出長50cmの溝が検出された。底



11A トレンチ

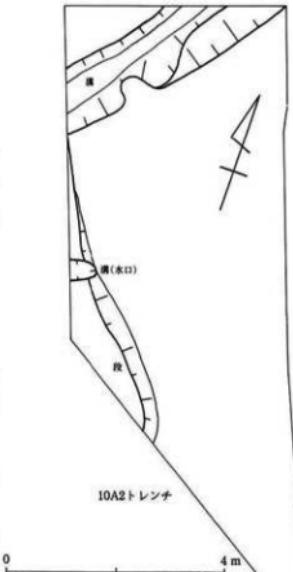


図20 10A2・11A トレンチ平面

面はほぼ水平である。埋土は、検出面上層の8層と同じ褐灰色砂混じり粘土であり、ブロック土などはみとめられない。段は、水田面にともなうものと考えられることから、これをきる溝は水口になる可能性が考えられる。水口とした場合、これを人為的に埋めた堆積状況はみられないことから、水口が開いた状態で、耕土とみられる褐灰色砂混じり粘土が堆積したと考えられる。

北東—南西方向の溝は、トレンチ北端で検出された。幅2.0m、深さ60cm、検出長4.6mである。断面(図19 10A2 トレンチ西壁)から1度掘り直されたことがわかる。すなわち、12~14層が古い溝であり、15~17層が新しい溝である。古い溝は、断面U字形である。埋土は、褐灰色粘土に細砂~粗砂を含むもので、あまり激しい流れはないままに埋積したと考えられる。新しい溝は、断面V字形である。埋土は、16~17層にみられるように小~大礫が主体であり、溝の最終段階で激しい流れがあったと考えられる。最上層の15層は、褐灰色砂混じりシルトに小礫および溝の肩部である9層のブロック土を含むもので、人為的に埋めた可能性が考えられる。溝からは、須恵器甕・高杯脚部、土師器杯・把手が出土した。これより、溝は古墳時代後期~奈良時代のものと考えられる。

11A トレンチ

面は1~3層除去後、礫層である地山上面で検出した。同面は、北から南へむかってゆるやかに下降する。同面では、ピット7カ所、落ち込み1カ所を検出した。

ピットは、落ち込み内でP1~4を、ゆるやかに下降する面でP5~7を検出した。すべて円形である。7カ所のうち、掘形が明確なものは、P1・2・5である。P1は直径40cm、深さ26cmである。中央に直径10cmの柱痕があり、6cmの深さで礫層に沈みこむ。埋土は黒褐色粘性のあるシルトである。P2は直径38cm、深さ26cmである。埋土は、上層が礫を多く含む黒褐色粘性のあるシルト、下層が黒褐色粘性のあるシルトである。P1・2は、2.7mの距離をもつが、掘形、埋土ともに共通することから、同一建物の柱穴になる可能性がある。P5は直径25cm、深さ10cmである。埋土は黒褐色粘性のあるシルトである。他のピットはいずれも深さ6cm以下である。とくに面で検出されたピットは、落ち込み内に比べ残存状況が不良であり、後世の水田造成時に削平されたものと考えられる。

落ち込みは、トレンチ南端で検出した。トレンチの短辺が約5mであり、落ち込みの明確な方向は不明であるが、ほぼ北東~南西方向にはしる肩部をもつ、南東方向への落ち込みと考えられる。検出した幅は、1.5~2.0m、深さは最深部で80cmである。落ち込みの斜面は、幅20cmの平坦面をへて、おおきく2段に落ち込む形状である。

4. まとめ

1992・1993年度の螢池東遺跡の調査では、低位段丘上にひろがる古墳時代中期以前の大形掘立柱建物、古墳時代中期の集落とその北側を画する谷の存在が明らかとなった。谷は3Aから2Aトレンチにかけて幅50mにわたり検出され、南肩部はT.P.25m、最深部はT.P.23mであった。今回調査を実施した1Aトレンチは、2Aトレンチの北側に位置するトレンチであり、ここでは谷の北肩部へむかって上昇する斜面の継続部を検出した。最深部はT.P.23.2mである。谷は地山が礫層であり、その上部に黒色粘土が堆積する。同様の礫層と黒色粘土は10A・11Aトレンチにおいても検出され、礫層上面は10AトレンチでT.P.23m、11Aトレンチ落ち込み最深部でT.P.23.2m、肩部でT.P.24mである。これより、11Aトレンチの落ち込み肩部を谷の北肩部とすると、3Aトレンチで検出した南肩部からは約100mをはかり、おおきくみればこの地に幅約100mの谷が存在したこととなる。しかし、10A・11Aトレンチで検出され

た溝、落ち込みからは、2Aトレンチで検出された東西方向の谷筋とは異なる、北東一南西方向のもうひとつの谷筋の存在が想定される。この谷筋は、第18中学校建築以前の溜池の谷筋に合致することからも存在の可能性が高い。したがって谷は、おおきくは第18中学校建築以前の溜池の谷筋に合致するものであるが、その先端は北東一南西方向と東西方向の二手の谷筋に分岐していたと考えられる。

10A2トレンチで検出された古墳時代後期～奈良時代の溝は、明らかに人為的な掘削によるものであり、谷の北肩部の落ち際を利用したものと考えられる。また、水田の造成にともなうとみられる段落ちは、限られた調査面積ながらもこれと直交することから、溝もまた水田の水利に関係する可能性がある。これと関連する遺構として、1992・1993年度の螢池遺跡8Aトレンチ（南門前池内）で検出された、北西一南東方向の奈良時代溝があげられる。これも溜池内の埋没する谷筋と方向を同じくするものであり、明らかに人為的な掘削による溝である。螢池東遺跡、螢池遺跡では、奈良・平安時代の掘立柱建物が多数検出されており、奈良時代を中心とする時期、低位段丘上に居住域をおいたことは明らかである。しかし、両遺跡にともなう水田遺構は明らかにされていない。今後、この二つの溝は、両遺跡周辺の奈良時代の水田開発を考えるあたり、資料のひとつになる可能性がある。

10A1トレンチ南半で検出された高まりは、その形成時期が、奈良時代以降中・近世を含む時期と幅広いものであるが、その性格については二つの可能性が考えられる。ひとつは、第18中学校建築以前の溜池にともなう堤防であり、ひとつは江戸時代におかれた麻田藩陣屋跡への「おなり道」にともなう盛土である。「おなり道」は能勢街道から分岐し、麻田藩陣屋跡へとむかう藩主専用の道とされ、現在の第18中学校東側の道路がこれに比定されている。調査地が限られた面積であり、また、高まりは断面観察のみでの確認であることから、今回は二つの可能性を指摘するにとどめ、今後の調査に期待したい。

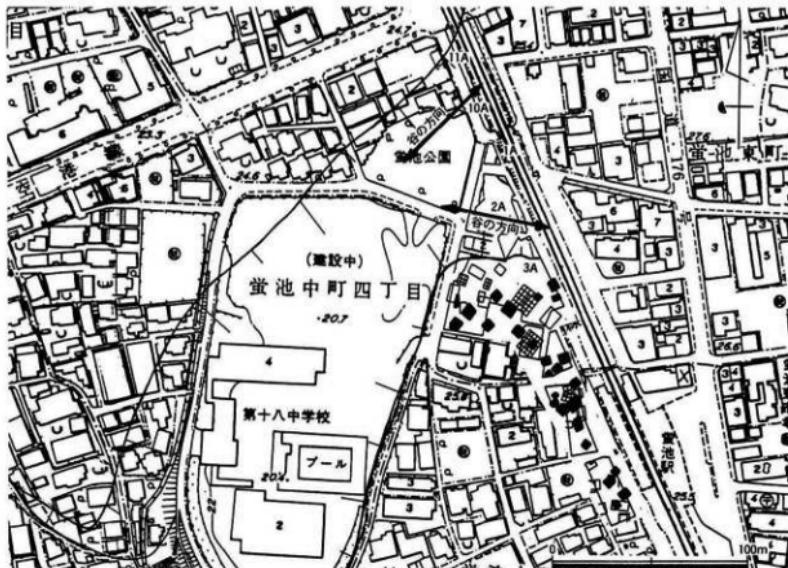


図21 埋没地形

V 麻田藩陣屋跡（1～3）

1. 調査の方法

麻田藩陣屋跡は豊中市螢池中町2～3丁目に広がる遺跡で、螢池遺跡と重複する。大阪モノレールの路線が、その北東辺に沿って計画されたため、その部分を（1）・（2）として調査した。また、用地買収の住宅代替地である、陣屋南西端、段丘崖斜面の住宅敷地試掘を（3）として調査した。

（1）は1993年6月5日～同年10月6日、（2）は用地買収や建築物撤去の遅れでの幾度かの中断を含み1993年9月6日～1994年6月30日、（3）は1994年7月20日～同年8月5日に調査を実施した。

（1）・（2）は、調査範囲を北西から道を境にしてA～C区に分けた。（1）は全体を3分割し、北西側を1A、南東側の東半を2A、南東側の西半を3Aとし、3A・2A・1Aトレンチの順に調査した。

（2）は建築物撤去の順に着手し、かつ工事用道路確保もあり、A区は4A～9Aのいびつなトレンチになった。番号は着手順である。B・C区は面積が狭く、各々一度で調査でき、1B・1Cトレンチとした。

（3）は住宅の庭が3分されており、庭の北西半に十字形トレンチを設定し1A、南北半に逆「ト」字形のトレンチを設定し1B、家に囲まれた坪庭内に方形のトレンチを設定し1Cトレンチとした。

なお、調査成果は、基本的に4Aトレンチ南側をほぼ東西にとおる陣屋外堀の屈曲部を境とし、その外側（北側）を（1）、内側（南側）を（2）として報告する。したがって、4Aトレンチは（1）に含めた。



図22 範囲とトレンチの位置

2. 麻田藩陣屋跡（1）の調査成果

（1）基本層序

調査地は北東から南西へとのびる低位段丘面に立地し、調査地内も北東から南西にかけてゆるやかに傾斜する地形である。層名、面名は1～3Aトレンチと4Aトレンチで異なるため、各々について記述し、4Aトレンチの記述のなかで相互の関連を整理する。各層の土色、土質は図1のとおりである。

1～3Aトレンチの層序は上層から以下のとおりである。

I層 盛土

II-1層 層厚は10～20cmであり、南にいくにつれ層厚を増す。3Aトレンチ南半部では、上層が細砂主体、下層がシルト主体の2層に分かれる。陶器、磁器が少量出土する。近世～近代耕土である。上面を1面とした。

II-2層 層厚は10～20cmであり、II-1層と同様南にいくにつれ層厚を増す。II-1層に比べ、やや粘質でしまが良い。陶器、磁器が少量出土する。近世～近代耕土である。上面を2-1面とした。

II-3層 黄色粒を含む点が特徴的である。層厚5cmの薄く不安定な層である。1Aトレンチ南半と2A・3Aトレンチ南半の溝6周辺に部分的に堆積し、下層のIII層と混じる部分が多い。本層は、溝6の埋積後にできた凹地周辺に堆積した層が、II-2層を耕土とする水田の造成時に削平されたため、部分的に残ったものである可能性が考えられる。本層は、耕土とするには粗砂、小礫を多く含むが、1A南半では本層上面で鋤溝が検出されており、耕土の可能性もある。上面を2-2面とした。

III層 II-1～3層に比ベシルト主体であり、かなりしまった層である。層厚は10cm前後である。1Aトレンチ溝6以西では、本層にII-3層が混ざる堆積物があり、この上面では鋤溝が検出されたことから、この混ざった堆積物は耕土の可能性がある。しかし、その他の部分では、本層上面で鋤溝は検出されず、また本層はしまった土質であることから、本層が耕土の可能性は小さい。上面を3面とした。

IV層 下位段丘構成層と考えられ、本層を地山とした。上面を4面とし、最終面として調査した。1Aトレンチで本層の下層を確認をした。すべて段丘構成層と考えられる。

3Aトレンチと4Aトレンチとの間には、東西方向の段があり、北から南へ約20cm落ちるため、層序は直接つながらない。4Aトレンチの層序は上層から以下のとおりである。

1層 層厚は10cmであり、段より南に堆積する。近世～近代耕土である。3AトレンチII-1層に対応すると考えられる。上面を1面とした。

2層 層厚は10～20cmであり、南にいくにつれ層厚を増し、上層がシルト主体、下層が細砂主体の2層に分かれる。陶器、磁器が少量出土する。近世～近代耕土である。3AトレンチII-2層にレベル的には直接対応する。上面を2-1面とした。

3層 4Aトレンチの北端から南へ4mの地点で、東西方向にはしるアゼおよび段以南に堆積する近世耕土である。3-1層、3-2層の2層に分かれる。2層と4層間の堆積層という点から、3AトレンチIII層に対応する可能性があるが、出土遺物からはII-3層に対応するため、上面を2-2面とした。

4層 層厚は10～20cmである。アゼ以南は薄く不安定な堆積で、2次堆積と考えられる。須恵器、土師器片が出土するのみで明確な年代は不明であるが、上面の4面は近世の可能性が大きい。3AトレンチIV層にレベル的には対応するため、年代は異なるが1～4Aトレンチ4面として平面図を作成した。

5層 段丘構成層と考えられ、本層を地山とした。上面を5面とした。

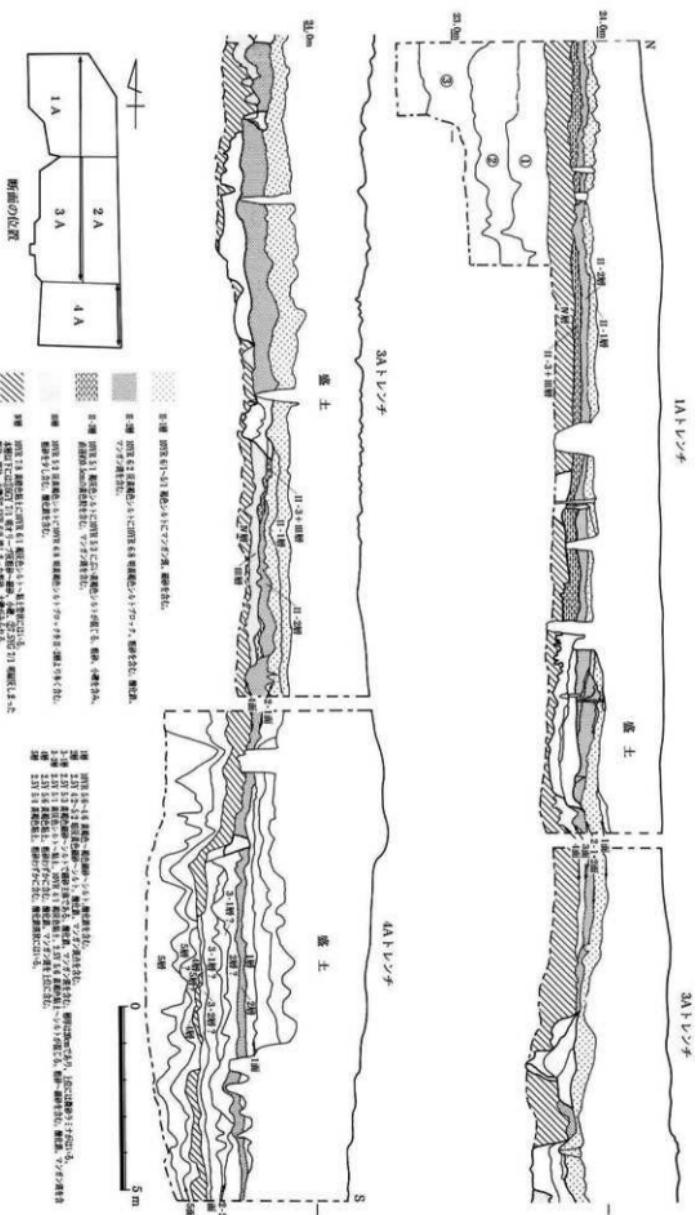


図23 IA・3A・4Aトレンチ東壁断面

遺物は、1～26が1～3A、27～32が4Aトレンチ出土。1～18がII-1層、19～22がII-2層、23がII-2・3層、24・25がII-3層、26がIII層、27が2層、28～32が3層出土。1～9は磁器で、1～6は染付、7は絵付である。8は紅猪口。10～13、17・18は施釉陶器で、10は高台内側に、17は見込みにトチンがあり17世紀のものか。18は中国産で、他に比べ年代が古い。14は土師器皿。15・16は擂鉢で、16は信楽窯か。19は磁器染付で17世紀のものか。20は施釉陶器。21は擂鉢で備前窯。22は瓦質羽釜の鉢部。23は東播系擂鉢。24は施釉陶器で17世紀後半のものか。25は土師器皿。26は奈良時代須恵器壺底部。27～29は磁器碗。30～32は施釉陶器。近世陶磁器は、18世紀後半のものが主体である。

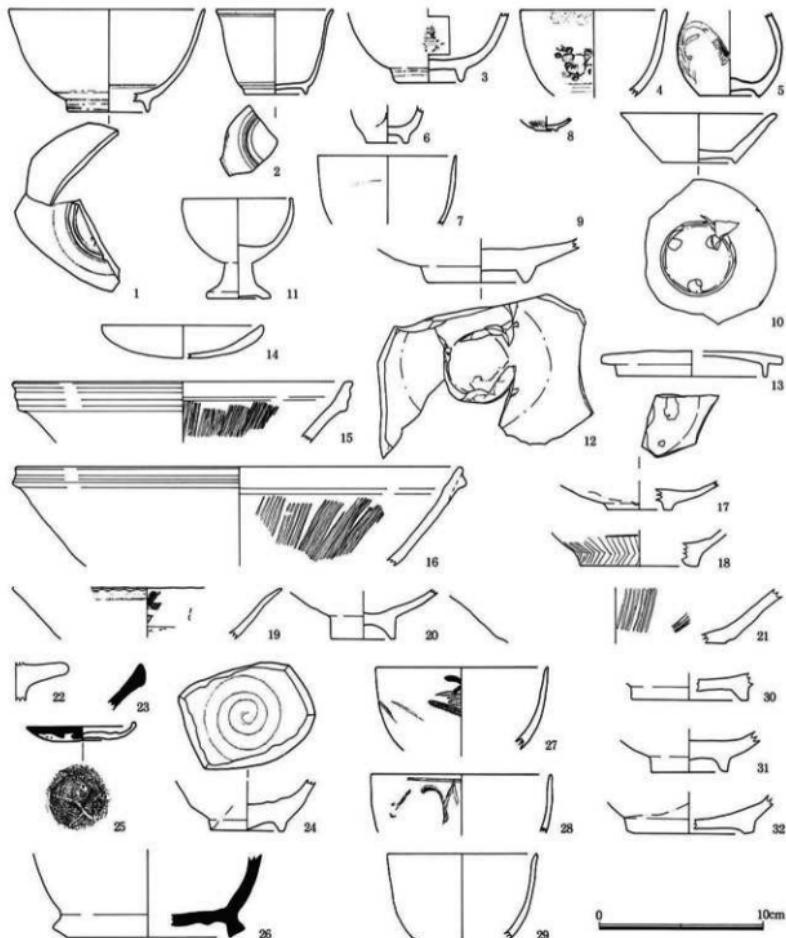


図24 包含層出土遺物

(2) 遺構と遺物

1面 近代水田面であり、北から南へと順に段落ちする、おおきく3面の水田を検出した。3面の水田は、ほぼ1A、2・3A、4Aトレンチに合致する。2・3Aトレンチと4Aトレンチ間は、高低差があるものの、搅乱のため、段は検出されなかった。3面の区画は、宅地に合致することから、水田区画をいかし、宅地化したことがわかる。

遺構は、段、鋤溝、井戸、土坑を検出した。

段は、2A・3Aトレンチ北側で、やや湾曲しながら、ほぼ東西方向に検出された。段差は20cmである。段下には、幅30cm、深さ5cmの浅い小溝がはしる。段では、水口と考えられる土坑・溝状の遺構を4ヵ所確認した。水口1・3は土坑状の遺構であり、水口1が直径50cm、深さ10cm、水口3が1m×80cm、深さ20cmである。水口2・4は溝状の遺構であり、水口2が長さ2m、幅50cm、深さ10cm、水口4が長さ2m、幅50~90cm、深さ18cmである。埋土はいずれも7.5YR5/1褐色粗砂混じりシルトである。水口1・3間と水口2・4間の距離が、約8mと同じであり、水口1・3に比べ水口2・4の残存状態が良好であることから、埋土は類似するものの、水口1・3から水口2・4へと付け替えられた可能性が考えられる。

鋤溝は、1Aトレンチ・2Aトレンチ北半・4Aトレンチでは粗、2Aトレンチ南半・3Aトレンチでは密に検出された。2Aトレンチのほぼ中央で鋤溝の有無が分かれ、これに対応する3Aトレンチのほぼ中央で東西方向に鋤溝が粗になる部分があることから、2・3Aトレンチのほぼ中央で水田区画が異なる可能性がある。鋤溝は1~3Aトレンチでは北東-南東方向にはしるもののが主体であり、段周辺では段に平行する。4Aトレンチでは北東-南西方向にはしる。長さ50cm~5m、幅3~10cm、深さ2~3cmである。

井戸は1Aトレンチで2基検出した。コンクリート枠の近代井戸である。土坑1は段とともにうなう水口となる可能性がある。

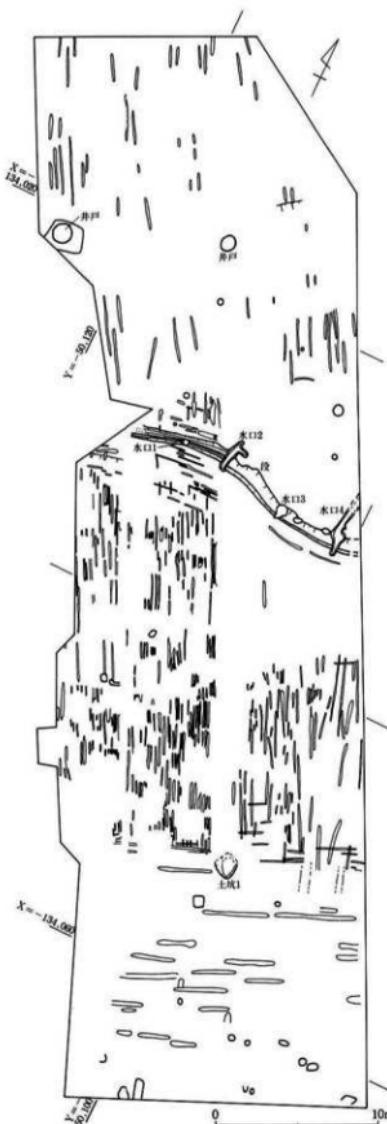


図25 1面平面

2-1面 近世～近代水田面である。

遺構は、段、鋤溝、溝、道状遺構を検出した。

段は、1面と同じく、2A・3Aトレンチ北側で、やや湾曲しながら東西方向に検出された。段差は15cmである。

鋤溝は、1A・4Aトレンチで検出された。北西～南東方向のものが主体である。1Aトレンチほぼ中央では、一部北東～南西方向のものがあり、これを境に水田区画が異なる可能性がある。長さ50cm～6m、幅10cm、深さ2～3cmである。

溝は、段の下で、段に平行にはしる溝1と、これに直交する溝8を検出した。

溝1は、長さ18mを検出し、幅60cm～1m、深さ20～40cmである。西から東にかけて深さを増し、溝8との直交部でもっとも深くなる。断面形は浅いU字形である。埋土は、2.5YR6/2～5/1灰黄～黃灰色細砂～中砂が主体であり、最下層南側に炭化物がまとまって入る。溝1南側には炭化物粒が広がることからも、溝1掘削後間もなく、周辺で火の使用があつた可能性が考えられる。溝底からやや浮いた状態で、約4mの距離をもって、礫群1・2を確認した。礫群1は、35×80cmの範囲に直径3～14cmの礫が広がる。礫中に瓦片、須恵器片を含む。礫群2は、50×80cmの範囲に直径3～12cmの礫が広がる。礫中に平瓦片、須恵器片を含む。遺物はこのほかに、磁器碗、陶器壺、土師器皿が出土した。

溝8は、長さ30mを検出し、幅80cm～1.3m、深さ40～50cmである。北から南にかけて深さを増し、溝底のレベルの高低差は20cmである。断面形はU字形である。断面から新旧2段階の溝があることがわかった。両者はほぼ重複するものの、3Aトレンチなかほどでは旧溝が東、新溝が西に位置し、4Aトレンチでは旧溝が西、新溝が東に位置する。旧溝の埋土は、10YR5/8～4/4黄褐～褐色粗砂であることから、流水に運ばれた粗砂により旧溝が埋積したため新溝を掘削したと考えられる。新溝の埋土は、おおきく上層10YR5/1褐灰色シルトに10YR4/6褐色シルトブロックを多く含む、中層10YR5/1～4/1褐灰

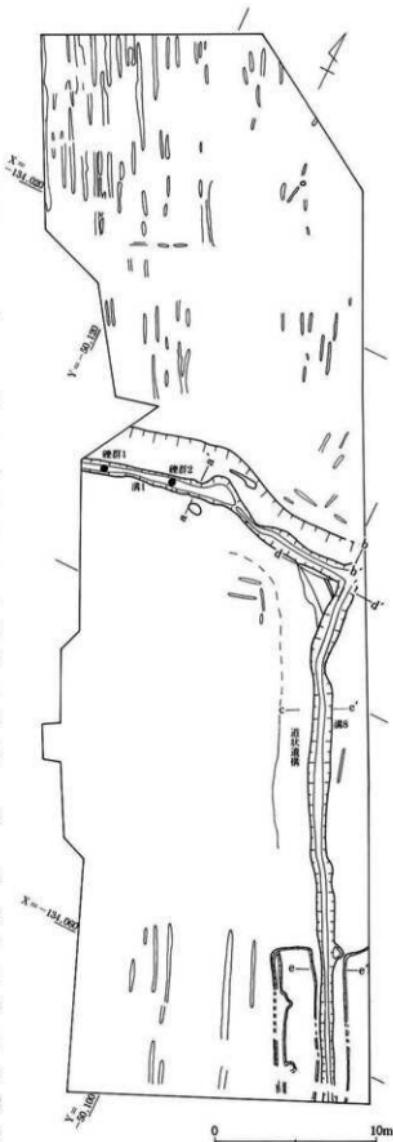


図26 2-1面平面

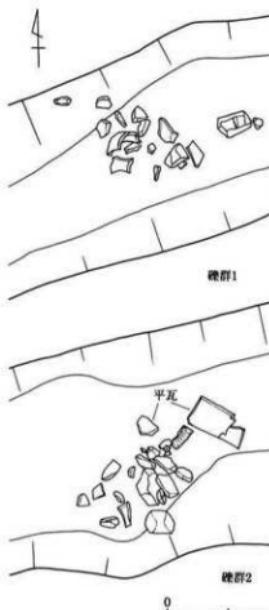


図27 溝1・礫群1・2

色シルト、下層10YR5/1褐色粗砂である。これより新溝は、当初流水があったものの、次第に流れがよどみ、最終的に人為的に埋められたと考えられる。遺物は、磁器碗、土師器火容、鉄製品が出土した。「宣明年製」の裏銘をもつ磁器碗は、新溝中層から出土した。

溝1・溝8は、断面から前後関係はみとめられず、直交部の底面が同レベルであることからも、同時存在と考えられる。

道状遺構は、3Aトレーナーで確認した。10YR6/8明黄褐色シルトブロックを主体とする盛土が、溝1の南側、溝8の西側に沿ってはしり、溝1・8にともなうものと考えられる。幅2m、高さ10cm、検出長約20mである。なおdd'断面から、本遺構下層に溝2があることがわかり、2面を2-1・2面にわけた。

本面は、「宣明年製」の裏銘のある磁器碗をはじめとする出土遺物、および明治40年代の史料である麻田村全図に溝1・8と道状遺構に相当する溝と道がみられることから、江戸時代でも18世紀後半～明治時代の面と考えられる。溝1・8に囲まれた3Aトレーナーの部分は、顕著な遺構は検出されなかったが、水田として利用された可能性が大きい。溝1・8からは磁器碗など出土遺物が比較的多いこと、また、溝1南側には炭化物粒が広がり、火が使用された可能性があることから、水田ではあるが、屋敷地が近いと考えられる。

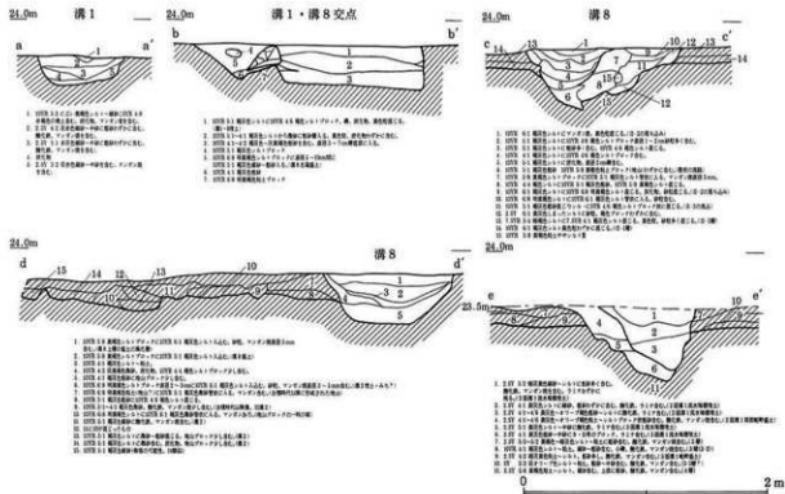


図28 溝1・溝8断面

遺物は、1～9が2・3Aトレンチ溝1出土、10～16が2Aトレンチ溝8出土、17～24が4Aトレンチ溝1出土。1～4は肥前系磁器碗で、1～3が白磁、4が青磁である。1・2は染付で、2はくすんだ地色である。1は裏銘に「太(?)明」とある。2はくずれた網手文であり、体部下半から高台にかけて断面が褐色であり、陶胎に近い。18世紀前半のものか。5は備前窯壺口縁部で、16世紀のものか。6～9は土師器皿で、8・9は口縁端部に炭化物が付着する灯明皿である。10～15は磁器で、11～13が白磁、14が青磁、15が染付青磁である。10～14は染付で、13は外側面と見込みに絵付の痕跡がある。11は裏銘に「宜明年製」とある。12は年代幅に18世紀前半を含むと考えられる。14は肥前系で18～19世紀と考えられる。15は肥前系で17世紀前半～18世紀後半と考えられる。16は三足をもつ土師器火容である。口縁部が内側に肥厚し炭化物が付着する。17～19・22は磁器で、17・18は染付である。20・21は施釉陶器で、21は見込みにトチンがあり、17世紀か。23は土師質でつまみ又は火舎の脚。24は鉄製品で、断面長方形、頭部に円形の穿孔がある。陶磁器は、18世紀後半のものが主体である。

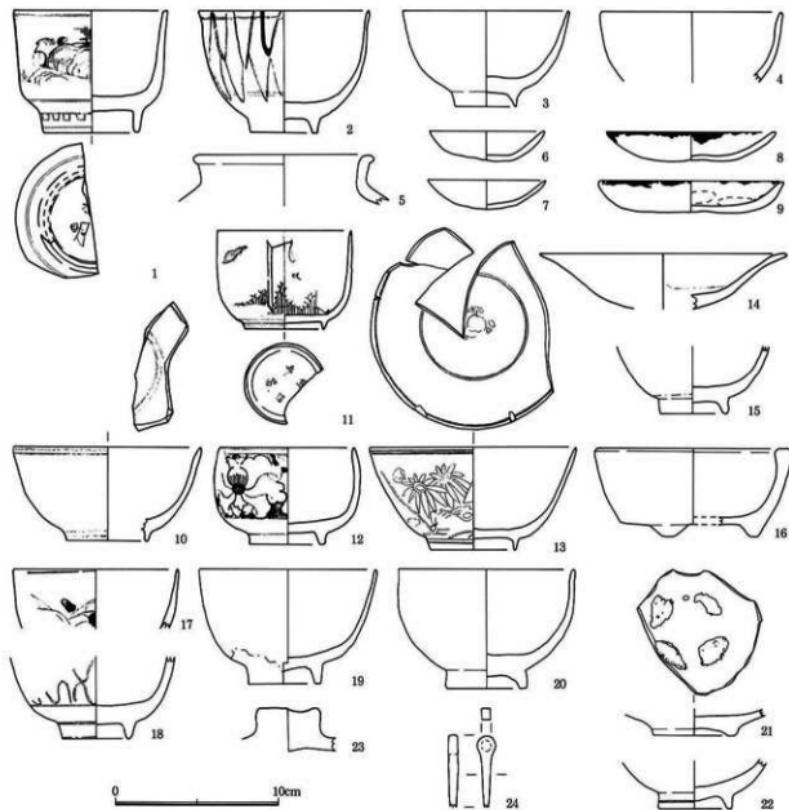


図29 溝1・溝8出土遺物



2-2面 近世水田面である。

遺構は、鋤溝、畦畔、溝、土坑を検出した。

鋤溝は、主に1Aトレンチ西半で北西-南東方向のものを、4Aトレンチ南半で北西-南東および北東-南西方向のものを検出したほか、1Aトレンチ東半、3Aトレンチ中程で北西-南東方向のものをわずかに検出した。長さ50cm~5m、幅10cm、深さ2~3cmであり、長さ1~2mの比較的短いものが多い。4Aトレンチ南半は東半と西半で水田区画が異なると考えられる。

畦畔は2A・3Aトレンチと4Aトレンチ境の一段落ちた下の部分で、北東-南西方向に約16mにわたり検出した。幅80cm、高さ10~20cmである。

溝は、幅50cm~1mの溝13・2・9・10・3・5と幅50cm以下のものがある。前者はその性格から、溝13、溝2・9・10、溝3・5の3組にわけることができる。

溝13は、1Aトレンチ西端で検出され、現在の土地区画にそってはしる。東肩のみを北西-南東方向に長さ11mにわたり検出し、幅1m以上、深さ20~40cmである。検出部分の断面形は浅いU字形である。埋土は、10YR6/1~5/1褐色シルトが主体であり、上層に直径10cmのブロックが入ることから人為的に

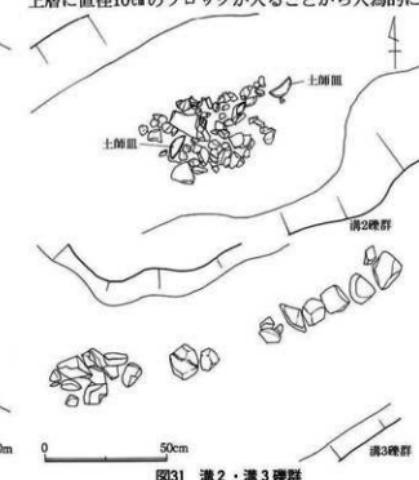


図30 2-2面平面

図31 溝2・溝3群

埋められた可能性があるが、ほとんど肩部のみの検出のため、ブロック土は肩部の補強である可能性もある。遺物は磁器碗が出土した。本溝は絵図との照合から、麻田藩陣屋外堀と考えられる。

溝2は、3Aトレーナーで南西—北東方向に、2Aトレーナーで屈曲しほば南北方向にはする。2Aトレーナー南半で溝2と溝9に分岐する。分岐より南では、溝2が溝9より明瞭に検出されたが両者に前後関係はみとめられなかった。3Aトレーナーでは幅1.3m、深さ25cm、屈曲後幅80cm、深さ20cm、分岐後幅60～70cm、深さ15～20cmであり、しだいに規模を減ずる。埋土は10YR6/1～5/1褐色粗砂が主体であり、流水があったと考えられる。溝2内では、3Aトレーナーで礫群を、2Aトレーナーで炭溜まりを検出した。礫群は溝底からやや浮いた状態で、50×70cmの範囲に直径3～10cmの礫が広がる。礫中に平瓦、磁器碗、陶器碗、土器部品を含む。炭溜まりは、2-1面溝8にはば半分を切られた状態で検出した。1.7m×

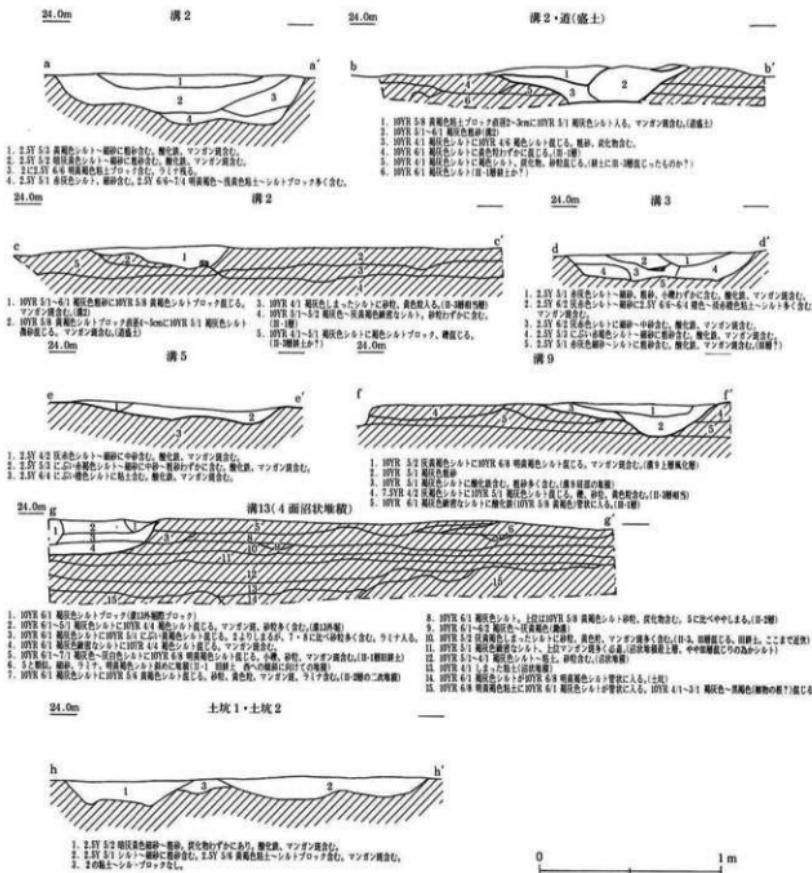


図32 溝2・溝3・溝5・溝9・溝13・土坑1・2断面

90cm、溝肩部からの深さ70cm、溝底面からの深さ20cmである。底部には炭が約10cmの厚さで堆積する。溝9は、幅40~60cm、深さ20cmであり、埋土は10YR5/1褐色シルト～粗砂である。溝10は、溝2に切られる状態で検出された。幅40~80cm、深さ5cmであり、埋土は10YR5/1褐色シルトである。溝2・9・10は2-1面溝1・8に先行する溝であり、2-1面溝1・8に比べ不安定な溝であったと考えられる。

溝3は、2Aトレーナーで南西-北東方向に、3Aトレーナーで屈曲し北西-南東方向にはしる。幅30~60cm、深さ5~15cmであり、埋土は2.5Y6/2灰赤色シルト～細砂が主体である。直径10cmの礫が長さ1.6mにわたり一列に並ぶ礫群が、溝底で検出された。溝5は、3Aトレーナーほぼ中央を南西-北東方向にはしる。幅1.1m、深さ10cmであり、埋土は2.5Y5/3にぶい赤褐色シルト～細砂が主体である。溝3の南肩、溝5の北肩は不明瞭である。溝3・5は、2Aトレーナー西側ではば連続することから同一の溝である可能性が高く、7×11m以上の長方形の土地を区画する溝と考えられる。区画内には鋤溝があることからこの長方形土地区画は水田区画の可能性がある。

幅50cm以下の溝は、1Aトレーナー西半で、北東-南西方向のものを1条とこれに直交する北西-南東方向のものを3条、4Aトレーナーで北東-南西方向のものを1条検出した。いずれも幅30~40cm、深さ5~10cmである。鋤溝の方向に平行または直交することから、水田区画にともなう溝と考えられる。

土坑は溝5内で、土坑1・2を検出した。土坑1は直径1m、深さ15cmであり、埋土は2.5Y5/2暗灰黄色細砂～粗砂である。土坑2は短径70cm、長径1.2m、深さ7cmであり、埋土は2.5Y5/1黄灰色細砂～粗砂である。埋土が砂であることから、水口のような施設になる可能性が考えられる。

遺物は、1~9が溝2、10・11が溝13、12が土坑1出土である。1~3、10~12は磁器碗である。1~3、10は染付であり、3はくすんだ地色である。10は広東碗である。4は陶胎の可能性が残る磁器碗である。5は肥前系灰釉陶器碗である。6~9は土師器皿である。6・7は口唇部に炭化物が付着し灯明皿の可能性がある。

本面は、溝13が江戸時代麻田藩陣屋東側外堀であり、調査地はそのすぐ外側の空間にあたる。検出遺構から、ここには水路および小さく区画された水田があったと考えられるが、水田のわりには出土遺物が多く、この点が屋敷地に隣接する水田であることを反映していると考える。

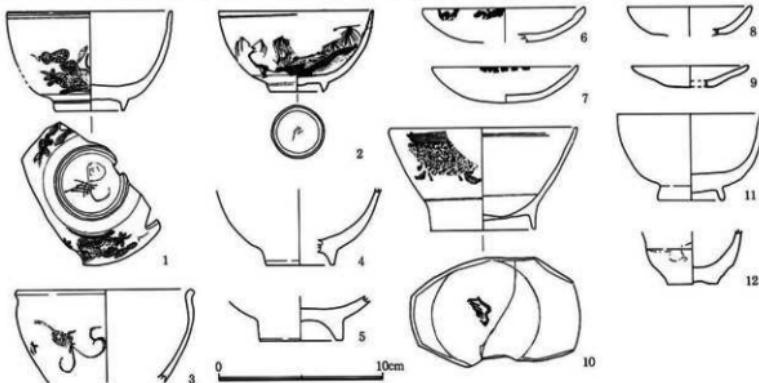


図33 溝2・溝13・土坑1出土遺物

3面 中世水田面である。

遺構は、鋤溝、溝を検出した。

鋤溝は、1Aトレンチ西半、溝6の西側で検出した。北半は北西—南東方向が主体であり、やや空間をあけて南半は、北半の鋤溝に比べやや軸を北にふり、溝6に平行する鋤溝が混在する。空間の存在は水田区画が異なる可能性が、溝6に平行する鋤溝は溝6による方向性の規制が考えられる。

溝は、溝6およびこれから分岐する溝群、溝11他を検出した。

溝6は、1A・3Aトレンチを北北西—南南東方向に貫流し、南端で北東—南西方向に曲がる。長さ40mを検出し、幅1.5～2m、深さ10～20cmである。溝底のレベルは、北端で23.8m、1A・3Aトレンチ境で23.7m、集石ピット周辺で23.6～23.5m、集石ピット以南は23.5m前後であり、北端から集石ピットまでは下降するもののこれ以南は傾斜がほとんどみられない。断面形は基本的に浅いU字形であるが、1Aトレンチでは東肩部の傾斜がゆるく、西肩部下

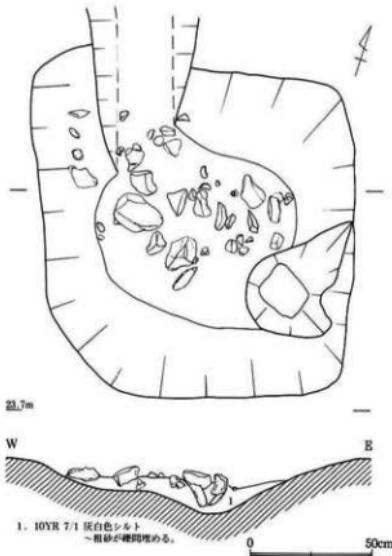


図34 集石ピット平面・断面

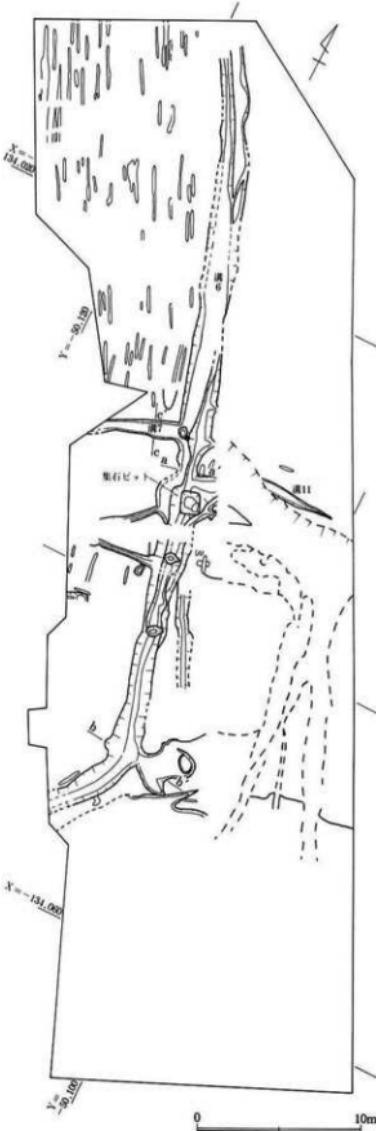


図35 3面平面

端に最深部がある。最深部では偶蹄類の足跡を検出した。埋土は、上層が10YR6/1~5/1褐色シルト～細砂、下層が10YR4/1褐色粗砂～礫である。当初水流があったものの、しだいに滯水、埋積したと考えられる。3Aトレンチ北側の溝底で集石ピットを検出した。1.4×1.25m、溝底からの深さは20cmである。北側には溝6の最深部が入り込み、両者に前後関係はみとめられない。埋土は10YR7/1灰色シルト～粗砂であり、ピット中央部には70×80cmの範囲に直径3~30cmの礫がひろがる。集石ピットは、溝6とこれから北東および南西方向にのびる小溝が交差する地点に位置し、埋土中に礫がみられることから、集水坑のような水量調節の機能を果たした可能性が考えられる。溝6からは、瓦器、青磁碗、羽釜片が出土した。

溝6から分岐する溝群には、溝7のほか集石ピットから北東および南西方向にのびる溝、その南側3.5mの地点で西方向にのびる溝がある。溝7は長さ5mを検出し、幅1m、深さ5cmである。埋土は10YR5/1褐色シルトである。溝底のレベルは溝6最深部よりやや高くほぼ一定であり、水流の方向は不明である。溝6との交点には直径65cm、深さ5cmの土坑がある。集石ピットから北東方向にのびる溝は、長さ1mを検出した。幅1.8m、深さ17cmである。集石ピットから南西方向にのびる溝は、長さ1.2mを検出した。幅30cm、深さ5cmである。溝底のレベルが集石ピットに向かって低くなっていることから、集石ピットへの集水の機能を果たしたと考えられる。集石ピットから南側3.5mの地点で西方向にのびる溝は、長さ5mを検出し、幅30cm、深さ5cmである。溝底のレベルはほぼ一定であり、水流の方向は不明である。溝6との交点やや北寄りには直径70cm、深さ20cmの土坑がある。交点にある小土坑は、集水地点としてやや窪められた可能性がある。いずれの溝も溝6との前後関係はみとめられない。

溝11は2Aトレンチ北側で長さ5mを検出した。最大幅50cm、深さ5cmである。その他、溝6と4面土坑3の間で長さ2.5m、幅80cm、深さ8cmの溝状の遺構を検出した。埋土は10YR4/1褐色シルトに10YR6/8明黄褐色シルトブロック、粗砂が混じる。

本面は、北から南にかけてゆるやかに下降する地勢を示し、溝7および溝11の南側は、段にはならないうが約10cmの高低差がある。集石ピットはこの下側にあり、高低差をいかした地点に設けられている。また、溝11は集石ピットから北東方向にのびる小溝の延長線上にあり、トレンチ境で明らかにできなかつたが、両者は連結する可能性が考えられる。この場合溝11から集石ピットへの集水が考えられる。

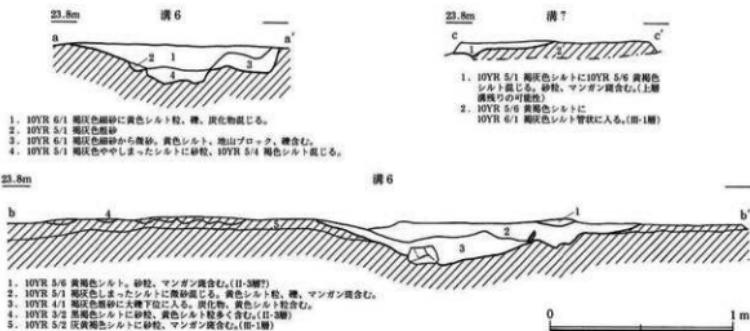


図36 溝6・溝7断面

4面 奈良時代の谷およびその下層にひろがる土坑群、平安時代以降の溝、ピットを検出した。

谷は1Aトレーナー西半から3Aトレーナー北部にかけて検出され、北西から南東方向にひらく。検出長21m、北西端で幅1.5m、南東端で幅5.5mである。肩部は、北東から南西へゆるやかに下降しており、調査区内での深さは約30cmであるが、最深部は調査区外になると考えられる。埋土は10YR6/1～4/1褐色シルト～粘土が主体であり、下層には植物の根のような有機物が分解されずに残る（図32）。埋土からは、滯水した沼状の堆積環境が考えられる。

遺物は須恵器杯身（図37-2・3）、円筒埴輪下端片（図37-4）が出土した。2・3ともに回転ナデおよびナデ調整で仕上げられるが、3は高台内側のみ回転ヘラケズリがみられる。3は口縁部がやや歪む。胎土は2は精良、3は砂粒を多く含む。2・3ともに平城II前後のものと考えられる。4は1/6円周程度の破片であり、復元径に不安が残る。外面はタガの上下に縱方向ハケメが施され、下端8cmは上部に比べ褐色を呈し斜方向の粗いカキメが残る。内面は粘土紐織目を中心に粗いハケメが施される。

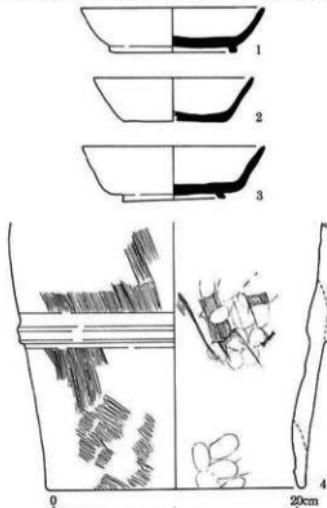


図37 土坑・沼状堆積出土遺物

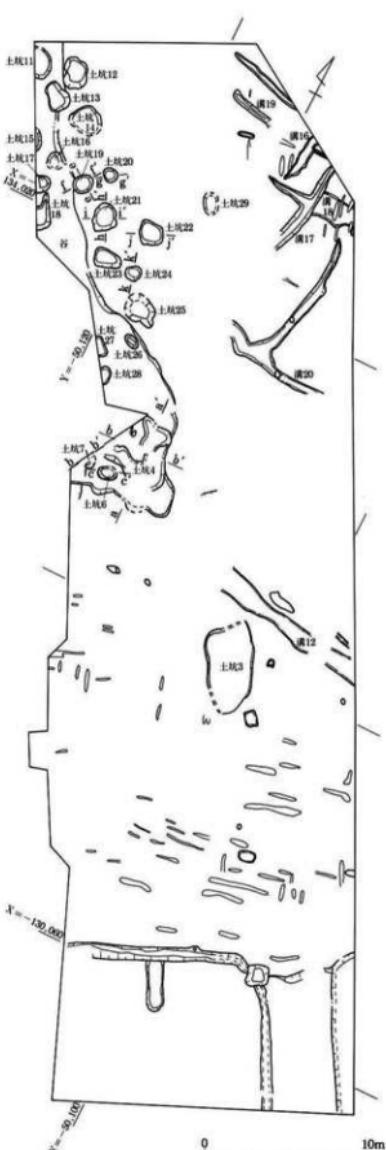


図38 4面平面

土坑は、1Aトレンチ西半から3Aトレンチ北部にかけて検出した。谷の肩部からやるやかに下降する斜面にかけて、谷の埋土を除去した段階で23基を検出した。不定型な椭円形であり直径50cm～5.3m、深さ20～50cmである。土坑の多くは直径1m、深さ25cm前後であるが、谷の南東端にある土坑4のみ検出長2.4×5.3m、深さ50cmと大きい。埋土は、10YR7/1～5/1灰白～褐灰色シルトが主体のもの、10YR3/1黒褐色シルト～粘土が10YR7/1～5/1灰白～褐灰色シルトに介在するもの、のおおきく2種類がある。いずれも地山とした4層10YR6/8明黄褐色粘土ブロックが最下層に入る場合が多い。最下層にブロック土がみられることから、当初人為的掘削があった可能性が考えられるが、その上層の10YR7/1～5/1灰白～褐灰色シルト、10YR3/1黒褐色シルト～粘土からは止水堆積に似た堆積環境が想定される。

遺物は、土坑4の上～中層で須恵器杯身(図37-1)・壺体部片が出土した。これ以外は、土器片が土坑上層でわずかに混じる程度である。1は回転ナデ、ナデ調整で仕上げられ、胎土は精良である。

1Aトレンチ東半には黄褐色シルト、2Aトレンチ北部には黄褐色(下層)～茶褐色シルト(上層)の薄層がN層上にあり、上面を4面とした。溝は、1Aトレンチ東半で、東西、南北方向にはしらものを10条検出した。幅50cm～1.5m、深さ4～7cmである。埋土は10YR4/4褐色シルトが主体である。溝20では、埋土除去後直径50cmのピットを2カ所検出した。遺物は、土師器片、黒色土器片が出土した。

このほか、2A・3Aトレンチ南半では北北西～南南東、西北西～東南東方向の鋤溝を検出した。この方向は1Aトレンチ東半で、溝を切る形で検出された鋤溝と同じであり、東西、南北方向の溝より新しいと考えられる。また、鋤溝の方向は、3面溝6に平行、直交する方向であり、これに伴う可能性がある。なお、4AトレンチのL字に屈曲する溝は、段の下で検出され、近世の溝である。

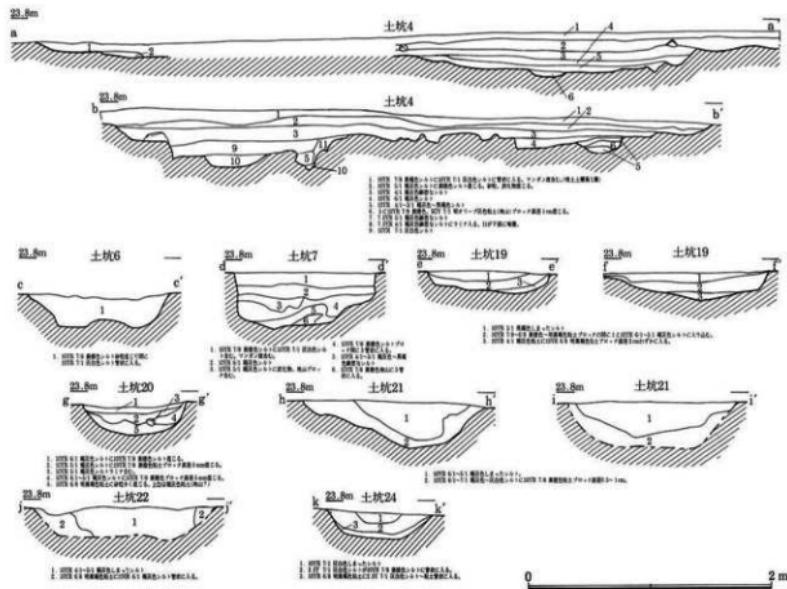


図39 土坑・溝断面

5面 1～3Aトレンチでは、IV層（地山）下層は、10YR7/8黄橙色粘土から5GY7/1明オリーブ灰粗砂～細砂へと漸移的に移行する。最終遺構面はIV層上面の4面までであるが、確認のため黄橙色粘土に粗砂が混じらない部分まで掘削し、除去後面を5面とした。ただし、2Aトレンチ北部のみ、黄褐色シルト上面を5面として検出しており、この部分は4面に相当すると考えられる。4Aトレンチは、地山とした5層上面が5面であり、最終遺構面である。

2Aトレンチ北部では、土坑、溝、ピットを検出した。土坑9は、不定型な円形であり、直径2.7～3.5m、深さ20cmである。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト～粘土に粗砂が混じる。浅い落ち込み状のものである。溝は、土坑の南側で2条を検出した。うち1条は直角に屈曲する。2条ともほぼ東西、南北方向にはしり、幅50cm～80cm、深さ7cmである。埋土は10YR4/4/褐色シルトである。ピットは5ヵ所を検出した。ピット2は土坑9の、ピット4は溝の埋土除去後の検出である。ピット2～4は、円形であり、直径40～60cm、深さ20～25cmである。規模が同じであり、ほぼ南北方向に並ぶため棚になる可能性がある。ピット1・5は、方形であり、一辺50～60cm、深さ50～60cmである。ピット1北東のピットは深さ5cmと浅いものであるが、これを妻側中央のピットとした場合、ピット1・5は掘立柱建物の柱穴となる可能性がある。

1～3Aトレンチでは、土坑、ピットを検出した。4Aトレンチでは、不定型な溝状遺構、ピットを検出した。いずれも遺物は出土していない。

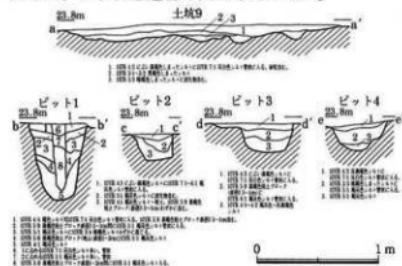


図40 土坑・ピット断面

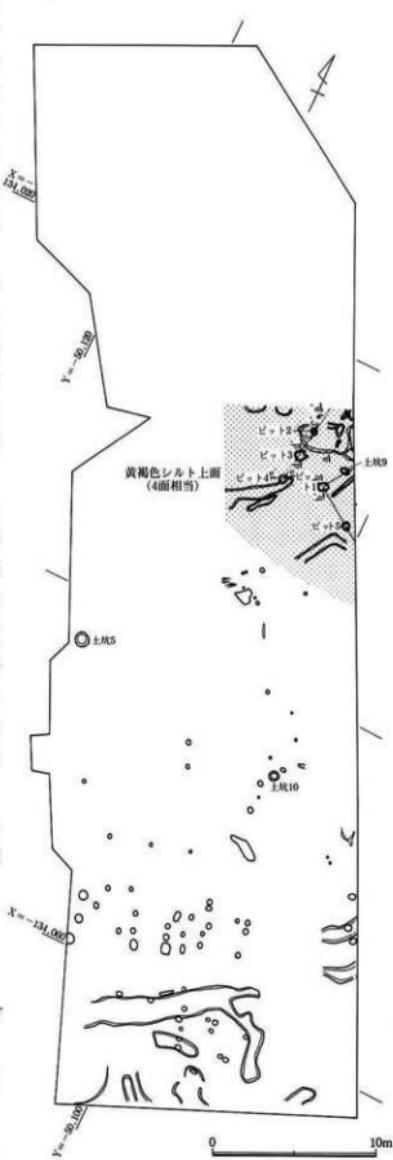


図41 5面平面

(3) 小結

外堀外側の調査について、古いほうから年代順にまとめておきたい。

奈良～平安時代 1A・3Aトレチで北西から南東にむかう谷の斜面に奈良時代土坑群がひろがる。土坑群の性格は不明であるが、本調査地南側の螢池遺跡で土壤墓群の可能性がある同じような土坑群を検出していることから、今回検出した土坑群はこの土壤墓群の延長にあたる可能性がある。谷はその後、沼状の様相をいしながら埋積しており、下流に堰などの施設がつくられた可能性がある。一方、谷東側の微高地には、東西南北方向に軸をもつ溝がひろがり、埋土から黒色土器が出土したことから、平安時代の水田になる可能性がある。この場合、条里制にもとづく低位段丘上の開発が平安時代におこなわれた一例となる。奈良時代後半から平安時代には、周辺の螢池・螢池東遺跡で東西南北方向に軸をもつ建物群が検出されており、この時代、建物群、水田が低位段丘上にひろがる景観が復元できる。

中世（13～14世紀） 北北西から南南東へ溝6が貫流し、これに沿って区画された水田が広がる。この頃には谷も埋まり水田となる。溝6底部には偶蹄類足跡があり、耕作に牛が使用された可能性がある。また、集石ピット北側、すなわち2A・3Aトレチ北側に北から南へ下降する傾斜があったと考えられる。

江戸時代 谷の方向を踏襲して麻田藩陣屋の外堀が掘削され、水田はこれを基準に区画される。外堀外側は空閑地をおかずして水田がひろがる。2A・3Aトレチ北側の東西方向の段下には、溝2が屈曲して南流し、内側に溝3・5で区画されたコ字形の小区画がある。小区画は水田と考えられ、外堀内側の屋敷地に対応する可能性がある。溝から磁器碗・炭化物が出土しており屋敷地が近いことと整合する。

江戸～明治時代 溝2を踏襲した溝1・8が屈曲して南流し、その内側に道がめぐる。水田区画は前代とはほぼ同じであるが、外堀東肩部は埋まり、また、屋敷地に対応するような小区画はみられない。

近代 2A・3Aトレチ北側の東西方向の段を境に水田が広がる。溝1・8は人為的に埋められ、より大きな水田区画となる。

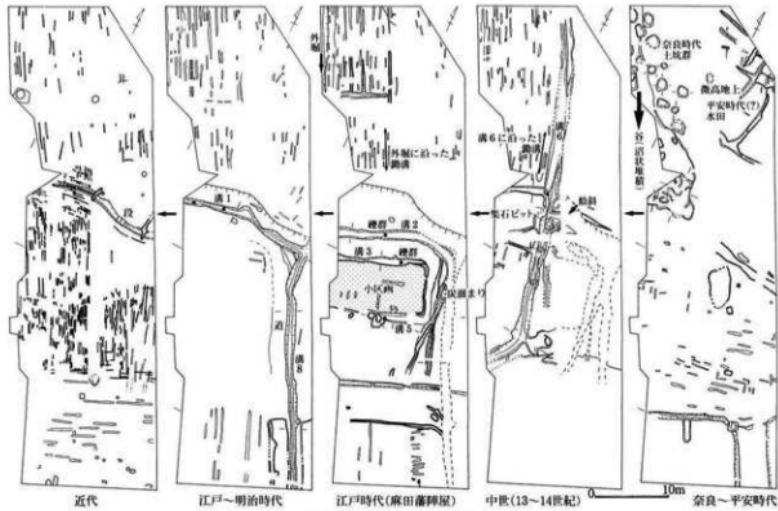


図42 陣屋外堀外側の変遷

3. 麻田藩陣屋跡（2）の調査成果

（1）基本層序

当地区は陣屋内の屋敷地であり、整地されているためか、陣屋以前の面以外は自然地形的な凹凸はない。陣屋の存続期間では5Aトレンチの北端、5A・6Aトレンチ境、1Bトレンチ北端あたりに陣屋の外郭線に合わせた方向の段差があり、北西から南東へ落ちていく、屋敷地の境を示すものと思われる。

調査区の北東辺は基本的に外堀を縦に半割りした状態で、トレンチ壁には外堀の現代埋土しか見えず断面図は取れなかった。そして複雑なトレンチ割りに加え、原因不明の湧水や、土壤改良剤の影響などにより、土色は一定していない。ここで述べる土色は、なるべく現代の影響を受けていない、普遍性があると思えるもののみとする。なお、1層の上面が1面というように層とその上面の番号が対応する。各層の状態（図43・44）

1層 2.5Y6/1（黄灰色）粘質土 シルト主体、粗砂あり、斑状酸化鉄あり。層厚10～20cm。

この上面は明治維新による陣屋破却後、耕地化され、それは昭和初期まで存続する。一部のその耕土が残存する部分もある。その上に宅地化に伴う盛土が2層あり、上下の盛土間に炭や焼土が存在するのは第2次世界大戦中の爆撃による火災の痕跡か。

面的には江戸時代後半まで遡るか。層は基本的に整地土と思われるが土壤化も強い。

2-1層 2.5Y6/2（灰黄色）砂質土 シルト主体、細砂含む、粗砂あり、酸化鉄あり。層厚10～12cm。

調査時には2層としていた。屋敷地の裏庭で耕土とされていた可能性がある。

2面は確実に陣屋存続期のものである。ただ江戸時代でもさほど古い時期には遡らないようである。

2-2層 2.5Y6/1（黄灰色）砂質土 シルト～細砂主体、粗砂多し、小礫わずかにあり、酸化鉄・酸化マンガン粒あり。層厚10～8cm。

調査時には3層。北西半のみに残る。2-1層と同時に整地された層の下半か。

調査時に2-2面（旧3面）として検出した遺構で整理時点で2面の遺構とつながるもののが判明してきて、断面・レベルなどチェックした結果、ほとんどの遺構が2面に属する事が判明した。2-2面にほとんど遺構がない、という事も、この層が2-1層と同時期の整地層である傍証となるのかも知れない。

3層 2.5Y6/6（明黄褐色）粘質土 粘土～シルト主体、粗砂多し、酸化鉄多し。層厚25～10cm。

調査時には4層。陣屋造成時の整地土と考えられる。下位段丘構成層上部の二次堆積層を起源としているようである。陣屋の範囲内で、当時の耕土や腐食土を取り除いた後、高い部分を削って、低い部分に整地したものか。

3面では、外堀の屈曲部で、自然地形を利用した盛土のラインが検出でき、造成時の排水に利用したような溝、造成以前の耕地のものかも知れない、畦畔の痕跡などが見られる。

4-1層 10YR5/8（黄褐色）粘質土 粘土主体、粗砂降下多し、酸化鉄多し、酸化マンガン粒若干あり。層厚10～14cm。

低位段丘構成層上部の二次堆積層と思われる。陣屋造成以前の層である。陣屋内部にも広がる、螢池遺跡の密集不定型土壙墓群は、この層の下面から形成が始まり、上面まで継続する。

4面では、自然地形の凹部が見られる。また、陣屋の外堀の屈曲部に利用された、流路状の浸食跡も全体形を現す。不定型土坑群も見えはじめると、東西南北の正方位に向く溝や鶴溝が存在するのが注目できる。時期としては奈良時代から陣屋造成直前までと考えられるが、その中でも新しいものはあまりないようである。この面以下は麻田藩陣屋跡というより、螢池遺跡としたほうが良い状況である。

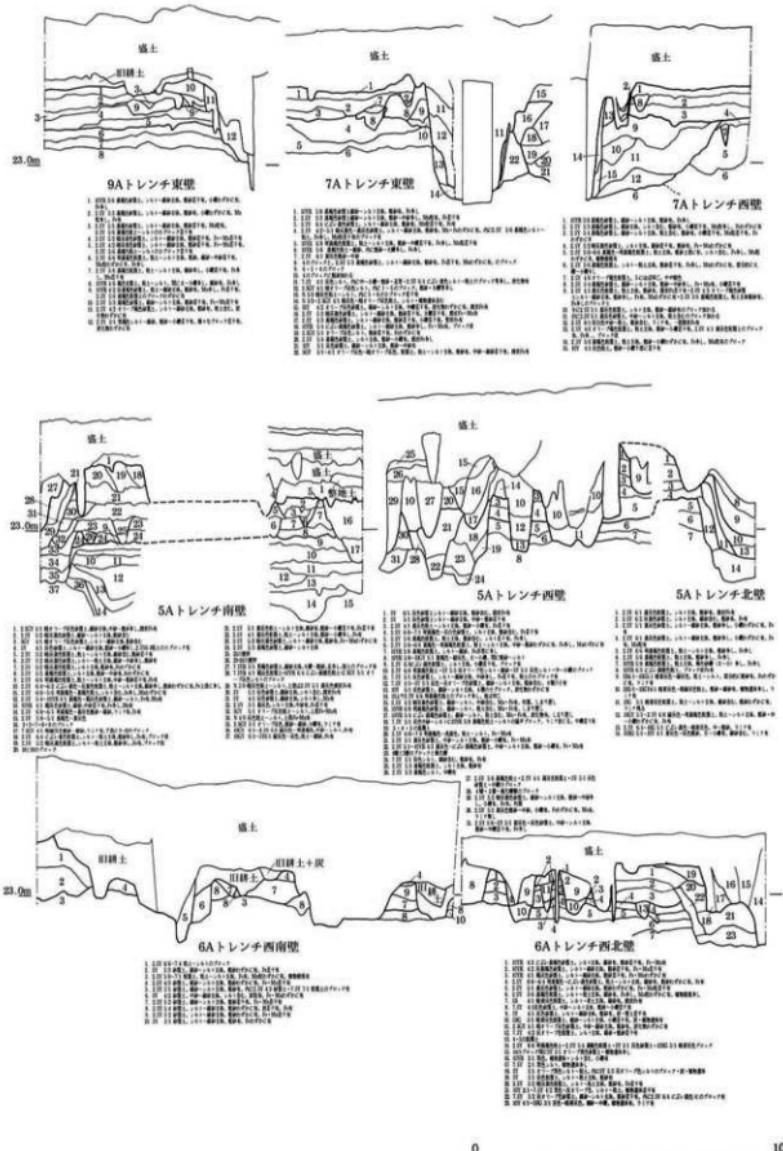


図43 9A・7A・5A・6Aトレンチ断面

4-2層 2.5Y6/6～10GY6/1（明黄褐～緑灰色）粘質土 粘土主体、粗砂～小礫含む、炭化物若干あり、酸化鉄あり。

風化した礫を含み、締まった層である。下位段丘構成層上部の風化層か。若干含まれる炭化物は土壤化を進行させた植物のものと思われる。無遺物で、調査深度の下限とできる層である。

4-2面を平面的調査の最終面とした。陣屋外堀の屈曲部に利用された浸食跡はこの面から形成されていて、それ以外の浸食による凹凸も現れる。また、この面でも数は減るが不定型土坑が検出される。その事からこの面の時期は古墳時代後期とそれ以前と言える。

陣屋外堀外側とは、堆積状況が異なるが、遺物の時期などから対応させれば、以下の通りとなる。

- 1面は外側の1面と2-1面に対応、1層はII-2層に対応。
- 2面は外側の2-2面と対応、2-1層・2-2層はII-3層に対応。
- 3面は外側の3面に対応、3層はIII層に対応。
- 4面は外側の4面に対応、4-1層はIV層に対応。
- 4-2面は外側の5面に対応。

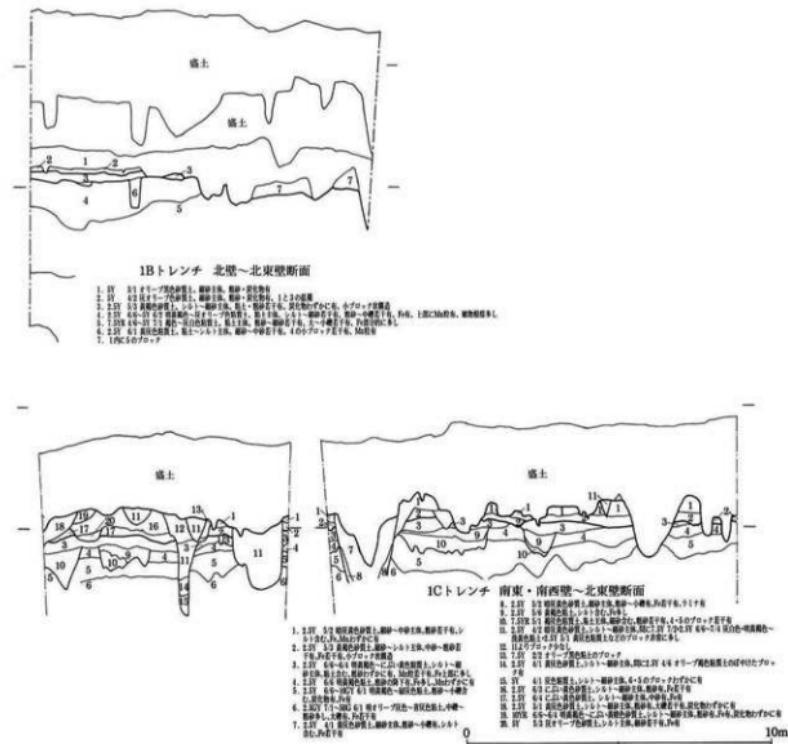


図44 1B・1Cトレンチ断面

各層の包含遺物

盛土・現代耕土・擾乱 これらの中にも江戸時代に遡ると思われる遺物もかなり含まれる。その中からいくつかの特徴的なものをここに挙げる。（図45・46）

（図45-1）は染め付けの枕である。内面はナデとケズリが不規則にはいる。外面底部は釉がなく、布压痕が見られる。

（図45-2）は染め付け碗である。外面は青磁で、5GY7/1（明オリーブ灰色）を呈す。高台下端部は露胎に鉄錆を塗り、砂が付着する。口縁端部まで青磁釉がまわるので、その影響か内面も若干青味を帯びる。見込みの五弁花文はコンニャク印判である。降灰痕が若干ある。

（図45-3）は染め付け中皿である。高台端部のみ釉カキトリ、底部外面には「渦福」内を含めて4カ所、針支えの痕がある。

（図45-4）は白磁紅猪口である。釉は内面から外面上半まで。内面は施釉前に底部を一ナデした後に口縁をヨコナデする。

（図45-5）は色絵磁器の人形である。髪の毛・眉毛・目は黒、衣服部分は駿斗色、衣服の襟・裾は明赤褐色に塗られる。うつ伏せに寝た形をした唐子人形と思われる。

（図45-6）は型押し素焼きの土人形である。内面はユビナデ・ユビオサエを残す。胎土は精緻でわずかに1mm以下の長石を含む。人か猿のしゃがんだ姿をうつしたものと思われる。

（図46-1）は土師質の粘土円板である。表裏とも中央付近にユビオサエを施した後、ハケ目を入れている。裏面の周囲には3カ所、脚のような突出が欠けた痕がある。

（図46-2）は無釉陶器の水入れ（？）である。色調は外面2.5YR4/3（赤褐色）、内面2.5YR5/4（にぶい赤褐色）で備前のようにある。内外面とも回転ユビナデ後、回転ナデで、内面の底部からの屈曲部分はユビナデを残す。外面底部は未調整。外側面下端に「○」を3分割したような印を押す。

（図46-3）は土師器である。内面から外侧面まで回転ナデ、外底面未調整、外側面下端部は回転ヘラケズリで面取りする。その後、外側面にヘラアテで亀甲文状の文様を入れる。

（図46-4）は陶器植木鉢である。内面は下から1/4ほどが、強い回転ナデでナデの原体下端のアタリが沈線状に見られる。それより上から外側面は回転ケズリ、外底面は不整方向のユビナデが残る。

底部の穿孔は、薄く仕上げた部分を焼成後、内側から割り、数回の打撃でおおまかな形を整えているようである。釉は外側面の口縁直下から下端までにかかる。

釉の部分は2.5Y4/3（オリーブ灰色）、地色は7.5R6/2（灰赤色）から10Y6/1（灰色）。

（図46-5）は陶器の行平鍋である。調整は、外面は底面から胴部下半まで回転ケズリ、胴部上半は7条の飛び鉢が入る。受け部から内面は回転ナデ。

注口と把手は飛び鉢の後に張りつけられる。注口は器壁に半月形の孔を切り出し、その外面に付く。

把手は断面台形の上半部と断面半円形の下半部を貼り合わせている。どちらも型押し成形で、それにによる文様がある。文様は、把手端部の孔のまわりに菊花文、上半の三つの平坦面には端部寄りに、それぞれ壺形の枠があり、その中に真ん中は「壽」の字、両側は雷文を意識した多重菱形文が見られる。

釉は内面のみ、口縁のやや下よりかかり、10Y7/2（灰白色）を呈す。地色は5YR4/6（赤褐色）から10YR5/2（灰黄褐色）。

（図46-6）は陶器土瓶である。注口は遺存していない。調整は、外面は底部から胴部下半にかけて回転ケズリ、これは上半まで及んでいたようである。その上に、胴部中位のやや上めの部分に繩目がめ

ぐる。それは上部では回転ナデに消され、内面はすべて回転ナデである。

釉は内面は口縁のやや下まで、外面は胴部最大径のやや下までかかり、口縁端部では剥ぎ取られる。釉は2.5Y7/4（浅黄色）に発色し、地色は5Y8/2（灰白色）である。外面下半には煤が付着する。

（図46-7）は土師器焙烙である。内面から外面上半、直立した部分までが回転ナデで、底部外面はケズリである。外面にはやや煤が付着する。

（図46-8）は瓦質土器火鉢と思われる。しかし残存度から見ると焜炉の可能性も否定できない。調整は全面回転ナデで仕上げるが、内面にはユビオサエ、外面にはケズリが若干残る。器表はやや鉄分が付着し2.5Y2/1（黒色）、断面で見る胎土は7.5Y7/1（灰白色）。

（図46-9）は真鍮製と思われる水瓶である。底面に「水道創設二十五周年」「記念」「通水式」の文字が刻まれる。

この真鍮製水瓶のように現代のものが含まれている事は確実であるが、コンニャク印判の見られる染め付けなど、18世紀に遡る遺物が含まれているのも事実である。また、これら盛土出土の遺物も、ほぼ下層で見られる器種が出揃っている。

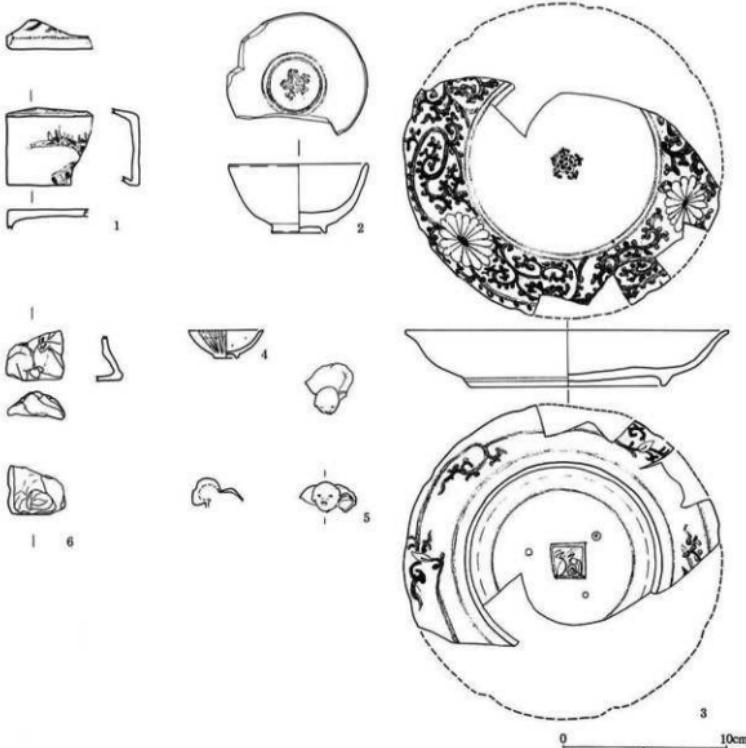


図45 盛土・現代耕土・擾乱内出土遺物(1)

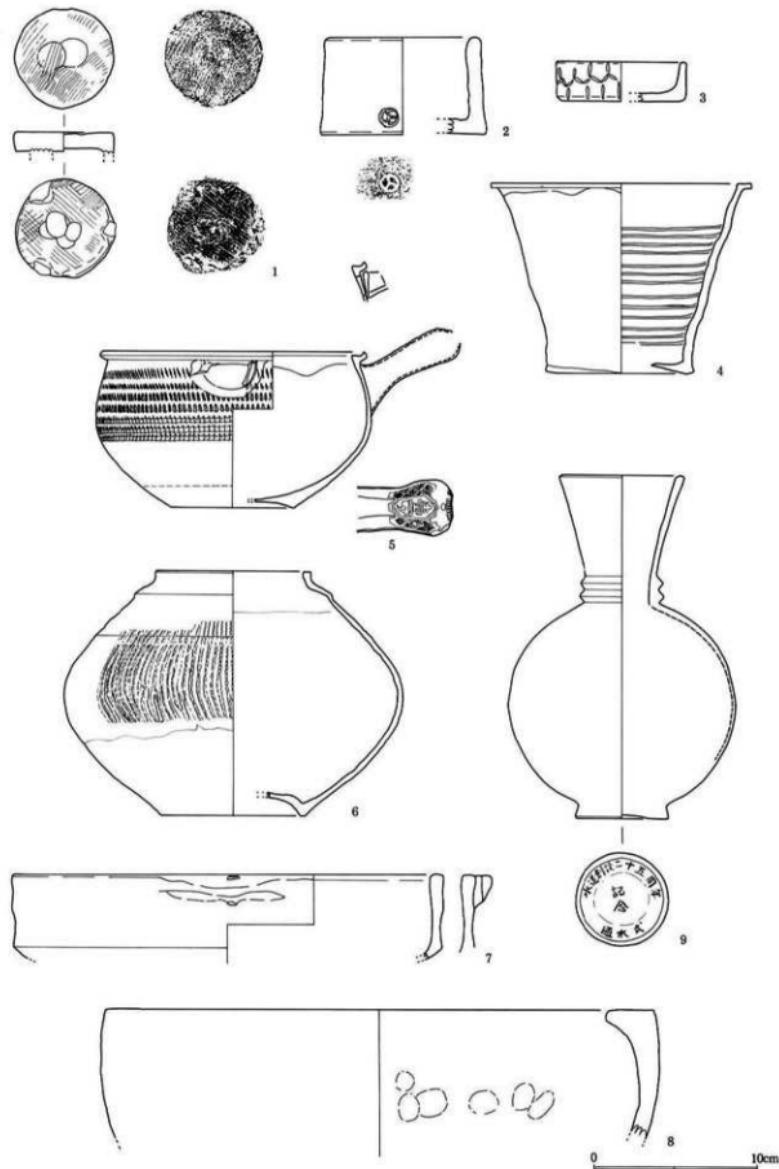


図46 盛土・現代耕土・擾乱内出土遺物(2)

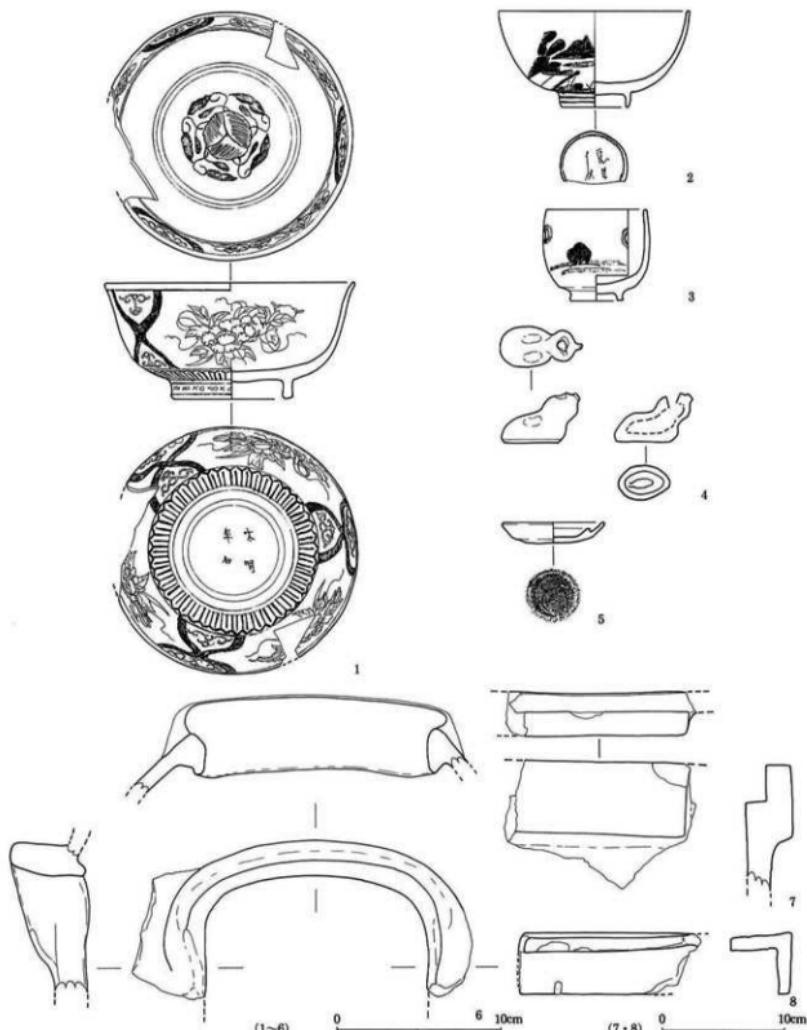


図47 1層出土遺物

1層

(図47-1)は色絵磁器鉢である。色絵は、外面は、全体を3分割する位置を紺色の太い線で「X」字状の文様で区切り、その上下の空間を朱色で塗り込め、その上に鑄のような形の唐草文を上下対向に金泥で描く、それらの間は朱色で牡丹と思われる草花文を線描きする。口縁内面に、外面の「X」字状

の文様の上半だけのものが三つ入る。

それ以外は、その間の七宝文や見込みの花文などは染め付けである。高台内に「太明年製」の銘が入る。高台端部は釉ハギトリ。色絵は磨滅が激しい。

(図47-2)は染め付け碗である。高台端部は釉ハギトリ。高台内に銘があるが、右上の字が「馬」と読める以外は不明。

(図47-3)は染め付け湯飲み碗である。高台端部、釉ハギトリ。

(図47-4)は陶器で水滴と思われる。瓢箪の形を写し、中空で上部に孔。下部の上面に二つの強いユビオサエがあるのは持ちやすくするためか。底側面はケズリで面取りをし、底面には中央にケズリによる凹部をつくり、高台状にする。全体に透明釉をかけ、上部あたりに緑釉をかける。底部側面以下は無釉。地色は7.5Y8/1を呈する。

(図47-5)は柿釉土器皿である。内面に凸帯がめぐるが、これは一度口縁端部状に作った後、その外面のやや下から口縁を付加して作ったものようである。内外面ともナデを一周してナデあげる。底部は糸切り底。釉は内面から口縁外面まで7.5Y6/8(橙色)を呈す。地色は5YR8/3(淡橙色)。

(図47-6)は瓦質の竈か焜炉の焚口の破片と思われる。一応、焚口の底とみたが、類例では天地逆で焚口の下に舌状にできるものもあるようである。外面はミガキ、内面は横ユビナデ後縦ユビナデ、底接合部の内面はそれに沿って強いユビナデが一条に入る。器表はN1/0(黒色)、断面で見る胎土はN5/1(灰色)。

(図47-7・8)は瓦質の磚である。7は全面ナデ。8は外面はナデ、内面は布目痕。

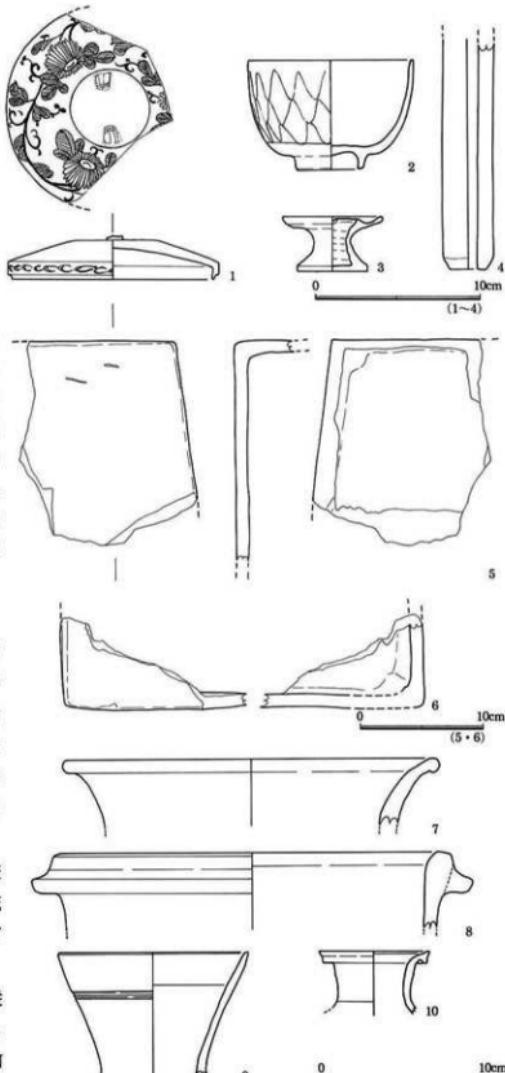


図48 2-1層・2-2層出土遺物

2層 2-1層と2-2層の遺物を共に示す。

（図48-1）は染め付け段重の蓋である。口径・文様とも1面井戸2上層出土の身（図61-6）と合う。合わせ目のみ釉剥ぎ取り。つまみは基部を残し欠失するが、板状の上面両側を削り、断面「凸」字状にしたものである。

（図48-2）は染め付け碗である。高台端部に砂が付着する。

（図48-3）は陶器燭台である。外面と上面蠟受け部に施した釉は2.5Y5/2~7/2（暗黄灰～灰黄色）に発色する。内面は釉だれが見られるが露胎で回転ヘラケズリ底側面は釉剥ぎ取り、外底面は回転ヘラケズリで、2.5Y6/2（灰黄）を呈する。

（図48-4）は金属製の棒である。2層出土だが、突き刺さったような状態で出土し、2層以上の層でも類品が見られる。鉄製と思われるが、表面はかなり焼けている。第二次世界大戦時に投下された焼夷弾の部品ではないかと推測される。関係品に円錐形キャップ状の真鍮製品もある。

（図48-5・6）は同類の瓦質の箱型の土器と思われるものである。外底面は平坦で未調整、わずかに棒状工具の当て痕が見られる。他は一定方向のナデ、立ち上がりの内面は強くナデが入る。5は角の角度が90°よりやや聞く。

3層

（図48-7）須恵器壺の口縁である。内外面とも回転ナデ、口縁端部は折り返しで丸く仕上げ、下端に緩い沈線を入れる。外面は自然釉の飛び痕があり、内面にも若干の自然釉が見られる。胎土には1mm前後の長石が若干入る。

（図48-8）土師器羽釜の口縁である。器壁は荒れるが、内外面とも回転ナデと思われる。短めの鉗は、厚くなった口縁の外側に貼り付けられる。胎土には1～2mmの長石とチャートを多く含む。

（図48-9）は須恵器壺の口縁である。内面は縦方向のナデ、内面上部から外面にかけて回転ナデ。外面に2条の沈線が巡る。胎土に1mm前後の長石を若干含む。

（図48-10）は須恵器の花瓶形の小型の壺の口縁である。内外面とも回転ナデ。胎土には砂粒をほとんど含まない。

（2）遺構と遺物

外堀 1～3面に継続する遺構であり、調査区の外郭を成すので、先ずこれを各遺構面の前に述べる。

5～7・9Aトレンチで検出された、4Aトレンチの南西辺に沿ってきた外堀は7Aトレンチで直角に曲がり北東へ張り出し、9Aトレンチの北東辺に至って再び直角に曲がり、5A・6Aトレンチの北東辺に沿って南東へ直進する。絵図面や、外堀を踏襲した現代の水路を見れば、1Cトレンチの東隅の外側で直角に曲がり、南西へ直進しているはずである。

5A・6Aトレンチではその内側の肩部分程度しか検出されず、全体の幅が分かるのは7A・9Aトレンチのみである。そこで見れば幅は約3m、約1間4尺であろうか。

外堀は、現在でも主要な用水路の一部として機能しており、現在その中にコンクリート水路が埋設されている。その埋設に伴う掘り方を1面外堀上層とし、その両脇に残る、1面切り込みの埋土を1面外堀下層とした。また、2面・3面でも、各々、肩部にブロック土、底部に層位的にその下層となる層等があり、それらを2面外堀・3面外堀として遺物を取り上げた。

1面外堀上層の遺物 コンクリート水路設置の際の現代の攪乱で、ガラスや煉瓦なども多く含むが、江戸時代に遡ると思われる遺物も大量に出土したので、その中で特徴的なものを個々に挙げる。

(図49-1) は染め付け碗である。高台端部のみ釉剝ぎ取り。

(図49-2) も染め付け碗である。見込みの五弁花文は手書き、外面は獅子(?)とかなり崩れた七宝文が入る。高台端部のみ釉剝ぎ取り。

(図49-3) は染め付け鉢である。蛇の目凹型高台は釉を剥ぎ取るが中心の凹部には釉が残り、渦福文の一部が残存する。見込みには残存部だけで胎土目が2個残る。

(図49-4) は白磁紅猪口である。内面は見込み部分を一ナデした後、口縁部にヨコナデ、口縁端部はケズリによる面があり、シャープである。外面は沈線により菊花文を成す。底部は削り出し高台。底部周辺のみ無釉。

(図49-5) は白磁の手塙皿である。全体形も文様も型押し、高台は貼り付け高台。高台端部のみ釉剝ぎ取り。

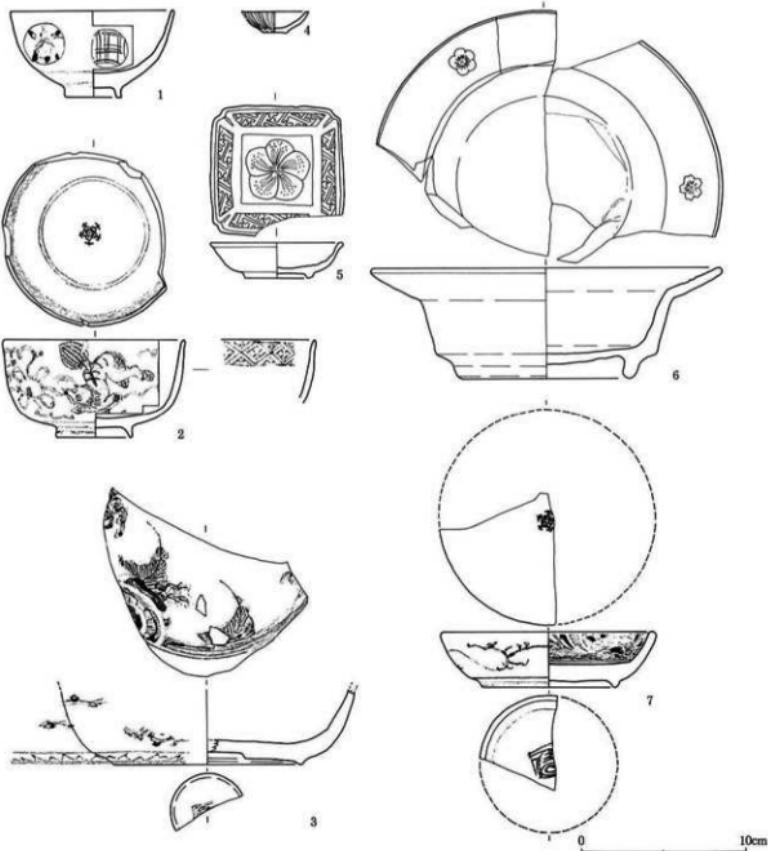


図49 1面外堀上層出土遺物(1)

（図49－6）は青磁鉢である。屈曲して開く口縁内面の、型押しによる梅花文と高台端部のみ無釉で鉄錆を施す。

（図49－7）は染め付け小皿である。見込みの五弁花文はコンニャク印判である。内側面の図柄には墨書き技法が見られる。高台端部のみ釉剥ぎ取り、高台内には方形枠内にかなり崩れた渦福文がある。

（図50－1）は軒丸瓦である。巴文の尾は長い。瓦当面以外荒れて調整不明。

（図50－2）も軒丸瓦である。瓦当面の文様は凹凸が激しく、1cm近くの高さがあり、珠文も巴文も、外縁高と同じ高さで平坦面がある。また、一カ所巴文から珠文を通じて外縁までの直線の突帯がある。丸瓦部外面はタテナデ、瓦当側面はそれを消すようにヨコナデが入る。瓦当裏面は不定方向の軽いナデが見られる他、丸瓦部との接合部分に強いユビナデが入る。丸瓦部裏面は布目痕が残り、それを消すようによばらに棒状工具によるナデが入る。

（図50－3）は染め付け鉢である。高台端部のみ釉剥ぎ取り、釉には貫入多し。

（図50－4）は染め付け大皿である。復元すると十角形の口縁になる。高台端部のみ釉剥ぎ取り、高台内に針目が見られる。

（図50－5）は鉄釉陶器徳利である。大きさから見て五合徳利か。内外面回転ナデで仕上げ、外面から頸部内面まで鉄釉がかかる。胴部には白い釉で「麻田村」「岸田」と書かれる。外底部は無釉で砂目が見られる。断面の胎土は10Y6/1（灰色）を呈す。

（図51－1）は石製の硯盤である。かなり使用による凹みが見られる。表面が荒れ、石の種類は定かではないが、被火の痕跡があり、色調は10YR8/4～7/4（浅黄橙～にぶい黄橙色）を呈す。

（図51－2・3）は柿釉土師皿で共に糸切り底、釉は内面から外面口縁端部にまでかかる。

（図51－4）は土師器である。一応は皿形を呈する。外底面は無調整、外側面はヨコナデ、内側面はヨコユビナデ、内底面は手づくねである。胎土には1mm強の長石・石英・赤色粒が見られる。

（図51－5）は型押しによる馬の土人形である。胎土には1mm以下の長石・石英と1mm強の赤色粒が若干見られる。

（図51－6）は黄釉陶器の土瓶である。蓋は上面のみ施釉、下面是回転ナデで、側面に薄く煤が付着する。つまみは小さい円板を二つ折りにしたものである。身は胴部上半に縄目が巡り、釉は内面の上部1/4ほどから、外面の上部3/4ほどまでかかる。内面は回転ナデ、外面下部は回転ヘラケズリで煤が付着する。釉は2.5Y8/3（淡黄色）、胎土は2.5Y8/2（灰白色）に発色する。

（図51－7）は染め付けの仏飯器である。外面は口縁端部を除いて全て呉須で染める。脚部はほとんどを欠失するが、内部上方に径4mm程度の棒を刺した痕が残る。

（図51－8）は黄釉陶器碗である。高台端部のみ釉剥ぎ取り。貫入が見られる。

（図51－9）は鉄釉陶器壺である。外面は鉄釉の上に黒釉で太い線を施す。内面は口縁よりやや下まで釉がかかるが、頸部以下は無釉、回転ナデが見られる。胎土は2.5YR5/2（灰赤色）を呈する。

（図51－10）は黄釉陶器行平鍋と思われる。注口と把手の部分は欠失する。内面から外面上半まで釉がかかり、蓋受け部は釉剥ぎ取り、外面下半は回転ケズリ、底部側面に付く小粘土塊状の脚は位置的に見て、3個付くものと思われる。

（図52－1）は土師器焙烙である。内面から外面立ち上がり部までヨコナデ、腰部に一条のケズリ、底部外面は型押しのまま。底部外面と内面に煤が付着する。把手の穿孔は上内方から入れられ、下外方に貫通する。胎土は1mm前後の石英・長石・赤色粒を若干含む。

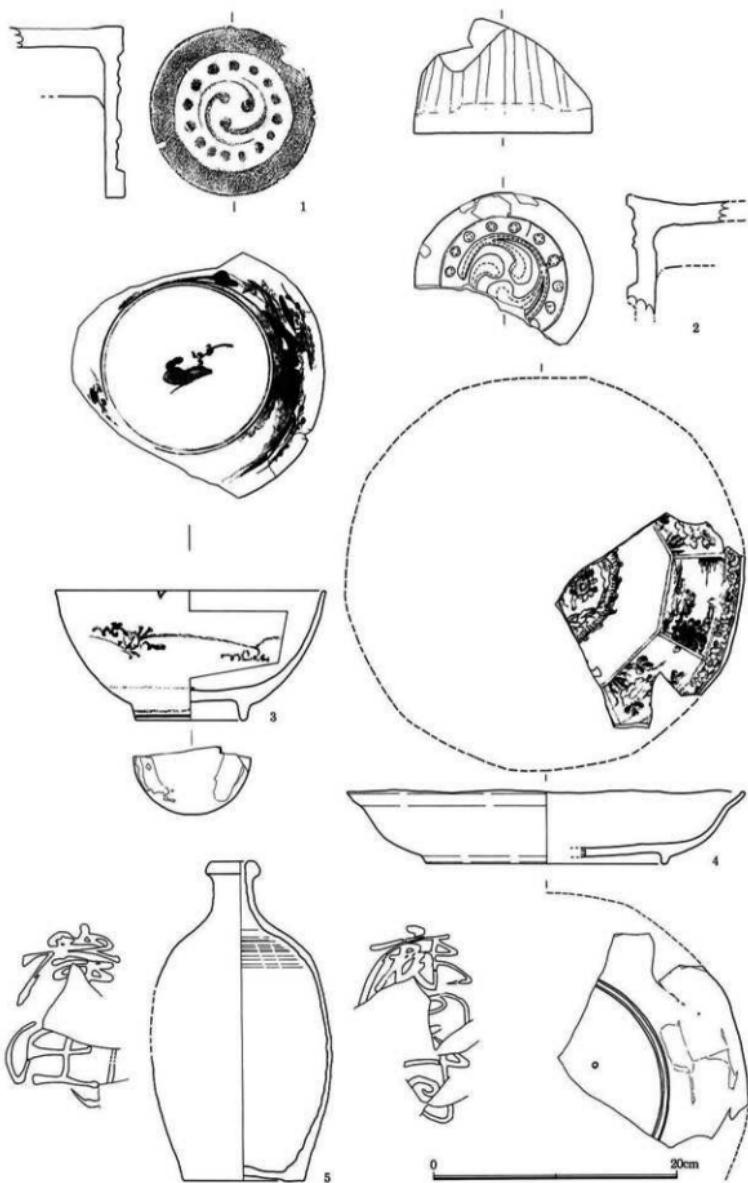


圖50 1面外堆上層出土遺物(2)

（図52-2）も土師器焰烙である。内面は底部と立ち上がり部の接合部に強いユビオサエとユビナデがあり、その後、ヨコナデで仕上げる。外面はヨコナデ、外底部は型押しのまま、ケズリはない。内外面に煤が付着する。胎土は1に似る。把手は遺存していなかった。

（図52-3）も土師器焰烙である。把手部分は遺存していない。内面から外面上半はヨコナデ、外面上半は器壁が荒れ、調整不明。内外面に煤が付着する。

（図52-4～8）は陶器摺り鉢である。

（4）は残存部が少なく、復元口径に若干問題がある。基本的な調整はヨコナデ、外面はその前に入ったユビオサエが若干残る。胎土には1～3mmの長石を多く、1mm前後の石英をそれより若干少なく含

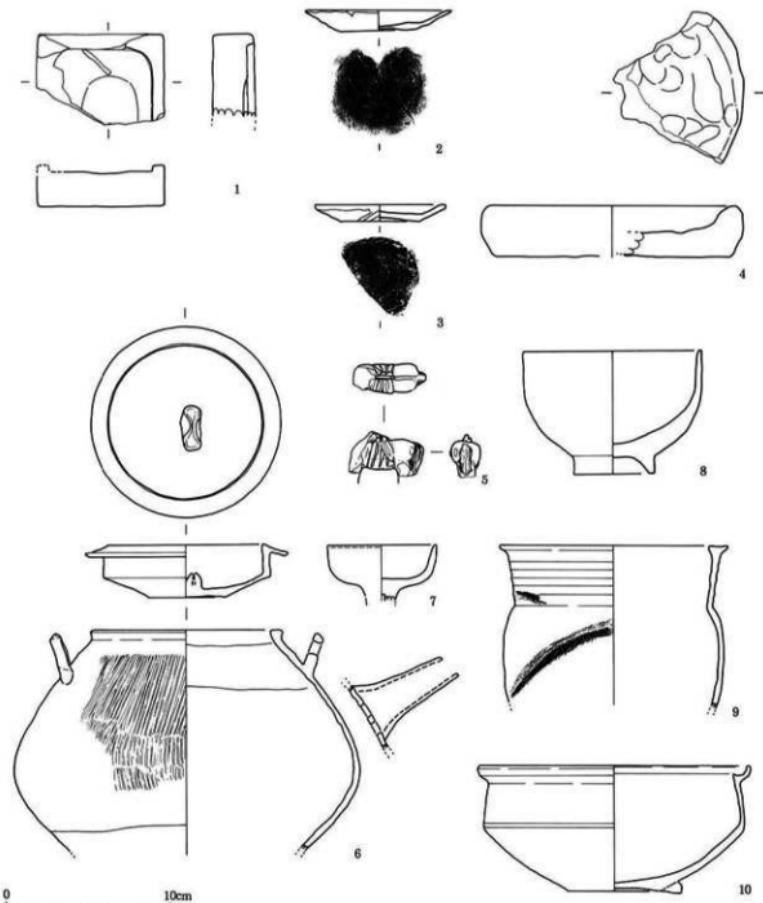


図51 1面外堀上層出土遺物(3)

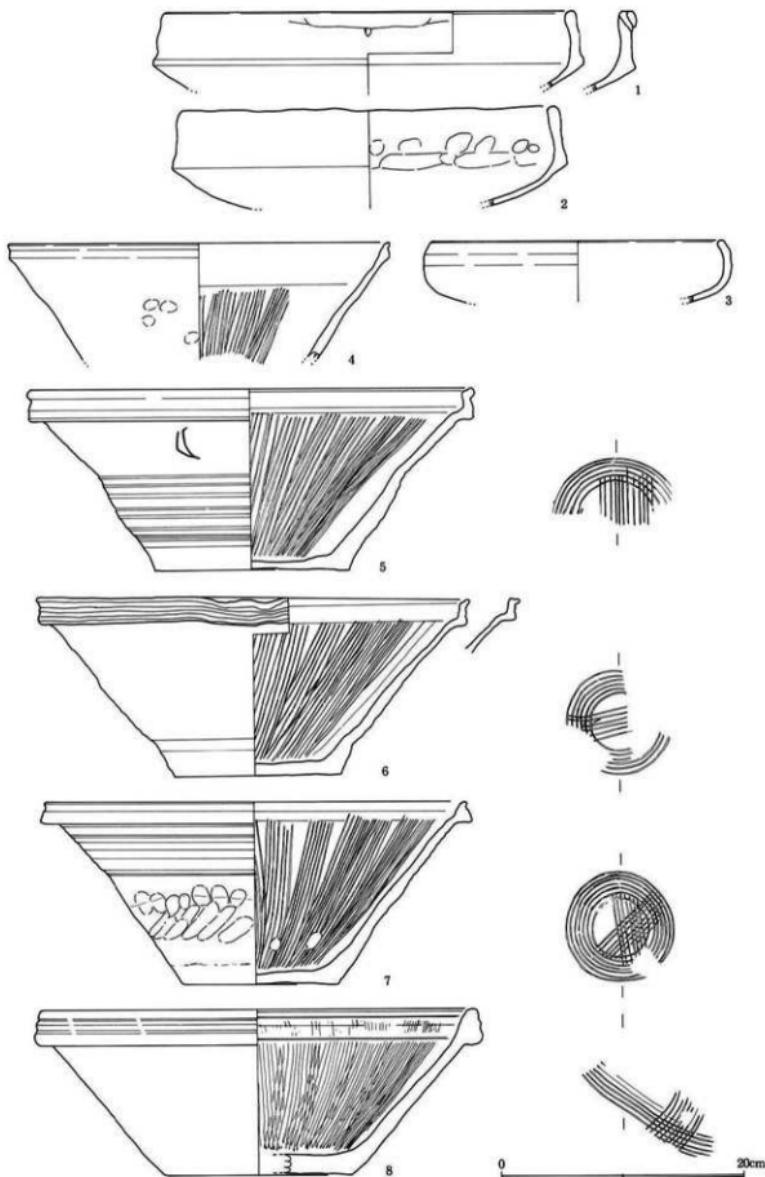


图52 1面外堀上層出土遺物(4)

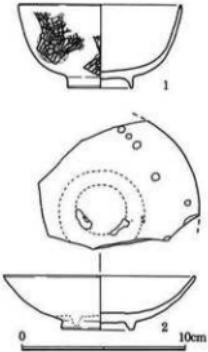


図54 2面外堀出土遺物

転ナデ、それ以下は高台内側まで回転ヘラケゼリ。見込みには釉蛇の目刻ぎが見られ、その周囲の釉が発泡している。釉は7.5GY8/1（明緑灰色）で、内面は鉄釉で松葉文を入れる。胎土の色は7.5Y8/2（灰白色）。

（図55-3）は灰釉陶器文鏡である。底部は釉なく、布目痕を残す。

（図55-4）は瓦質の火鉢か風炉の底部である。外面と内底面は剥落激しく調整不明、内側面は右下がりのユビナデ、高台内部はヨコナデ、底部との接合部に強いユビナデが入る。胎土には1mm前後の石英粒多し。高台部の穿孔は外から内側に開ける。

（図55-5）は陶器摺り鉢である。外内面回転ナデ、外底面無調整。刻み目は7本一組で左を右が切る。色は外面7.5YR6/4（橙色）、内面5YR3/6（暗赤褐色）。

（図55-6）は土師器焼成である。内面から外面立ち上がり部までが回転ナデ、外面の底部接合部に1条のケズリが入る、外底面は型押しのまま。外面に煤付着。

（図55-7）は瓦質土器で竈の焚口侧面の破片と思われる。裏面には2本のタガが横方向よ走る。基本的には内外面ともヨコナデで内面は粗い。タガはユビナデで接合され、焚口は口縁に沿ったナデが入る。胎土には1mm強の石英と黒色粒が若干見られる。

（図55-8）は花崗岩製五輪塔空風輪である。下部の突起の周囲は浅く溝が彫られる。鑿痕はない。

外堀の形状と面ごとの変化 外堀の肩部は面毎に大体陣屋内側から拡張されているよう、表土流失により下がり気味になった肩部にブロック土を盛るという形がとられる。

7A・9Aトレントチで見ると外堀の外側の肩はそのようなブロック土がほとんど見られず、表土流失による肩の下がりも見られない事から、面毎に外に削りこんで整形しているよう、外堀が面毎にわずかながら外側へ張り出していった事になる。但し、7Aトレントチの南西部分のみ一部で外側の肩から堀側面に粘土が貼られていた。壁土のような粘土で、1面の時点でのものである。

外堀の底部の深さは、北東辺では全体形を明らかに出来ないし、コンクリート水路埋設時の影響で土圧を受け、下がっている部分もあるので、正確な値がおさえられない部分が多いが、9Aトレントチ北東側で外堀に水を供給する用水路が、外堀張り出し部分の北角に取りついており、その付近が一番高いようである。

3面ではそこから南東へは次第に下がった後、T.P.+22.52~60m程度で安定しているが、南西方向はそれよりやや高く、南西に向かってT.P.+22.86m、T.P.+22.70mと下がっていく。調査区内だけでも低い所で水深30cm以上ないと全体に滞水しない事になる。肩からの深さは、外堀近くは造構や盛土が多い部分もあり、高さが一定しないが、北西部分ではおむね60cm強の深さであるようだ。しかし、陣屋内の段差により、6Aトレントチ付近では38~48cmの深さとなる。

2面、1面と変化していく過程で、溝の底のレベルは微妙な変化を見せる。7A・6Aトレントチ部分では掘りなおしにより、底のレベルが維持、もしくはやや深くなるのに対して、5A・6Aトレントチ境を中心とした部分では堆積が進行し、1面ではT.P.+22.85cmほどと、5Aトレントチ北側のみか、7Aトレントチよりも高くなる。

調査区外でさらに深かった可能性は否定できないが、調査区内での断面でも底部のラインが水平に近

む。色調は外面10YR6/3（にぶい黄橙色）、内面10YR6/1（褐灰色）。刻み目は7本一組で右が左を切り、一周した最後の一組だけが右の刻み目を切る。

（5）は外底部が荒く不定方向のナデが入る以外は基本的に回転ナデ。外面にヘラ記号あり。刻み目は6本一組で左が右を切る。底部は2組の直線の刻み目のある、一組が左回りに入る。胎土には1～2mmの石英あり。色は外面5YR3/6（暗赤褐色）、内面7.5YR4/4（褐色）。

（6）は（5）と調整・胎土・色調ともほぼ同じである。ただ、外底面・内底面が磨滅著しい。

（7）は基本的に内面から外面上半では回転ナデである。外面下半はユビオサエと縦方向のナデ。内面下半にもいくつかユビオサエが残る。刻み目は7本一組で左が右を切る。底面は2方向に一つずつ直線で入れた後、左回りに一周する。外面底部側面に粘土の接合痕残る。胎土に4mm前後の石英などの砂粒多く含む。色調は、外面7.5YR4/6（褐色）、内面10YR5/6（黄褐色）。

（8）は調整は回転ナデ、口縁内面は刻み目をいたれた後にもナデる。刻み目は11本一組で左が右を切る。底面は9本一組（？）で直線的に2方向に一つずつ入れる。胎土は、1mm前後の長石・石英を含み、それより大きめの砂粒も若干見られる。底部には砂粒付着。色調は10R6/8（赤橙色）。

1面外堀下層の遺物 これらは、外堀内のコンクリート水路設置の際の掘方以外の1面切り込みの埋土からの出土で、外堀肩部付近で出土したものである。

（図53-1）は土師器焙烙である。内面から立ち上がり部外面まで回転ナデ、底部との接合部外面に一条のケズリが入る。底部外面は型押しのままで、煤が付着する。

（図53-2）は土師器で火容か焜炉の底部と思われる。内面はヨコナデ、外面にはミガキが見られ、外底面は軽い不定方向ナデが見られる。底部の脚は粘土円板を貼り付けたもので総数は不明。胎土には1mm弱の長石・赤色粒と1mm強の黒色粒が若干入る。

2面外堀の遺物 2面切り込みで、外堀肩部にあったブロック土層の下のシルト系の流水堆積層から出土したものである。

（図54-1）は染め付け碗である。高台端部のみ釉剥ぎ取り。

（図54-2）は施釉陶器皿である。内面から外面高台直上まで施釉し、見込み部分に蛇の目釉剥ぎ、それより上に水玉状に白釉を何点か散らす。釉剥ぎ部分に胎土目の痕を残す。釉は5Y7/2（灰白色）、地は2.5Y8/2（灰白色）。

3面外堀の遺物 1面・2面切り込みの肩部から外堀底部までの埋土を全て除去した後、3面で新たに検出された肩部からの、残りの埋土内から出土したものである。

（図55-1）は染め付け鉢である。高台端部のみ釉剥ぎ取り。

（図55-2）は施釉陶器小皿である。釉は内面から高台のやや上まで見られ、その範囲は回

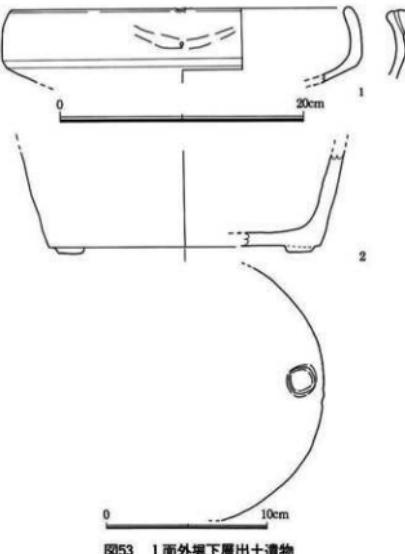


図53 1面外堀下層出土遺物

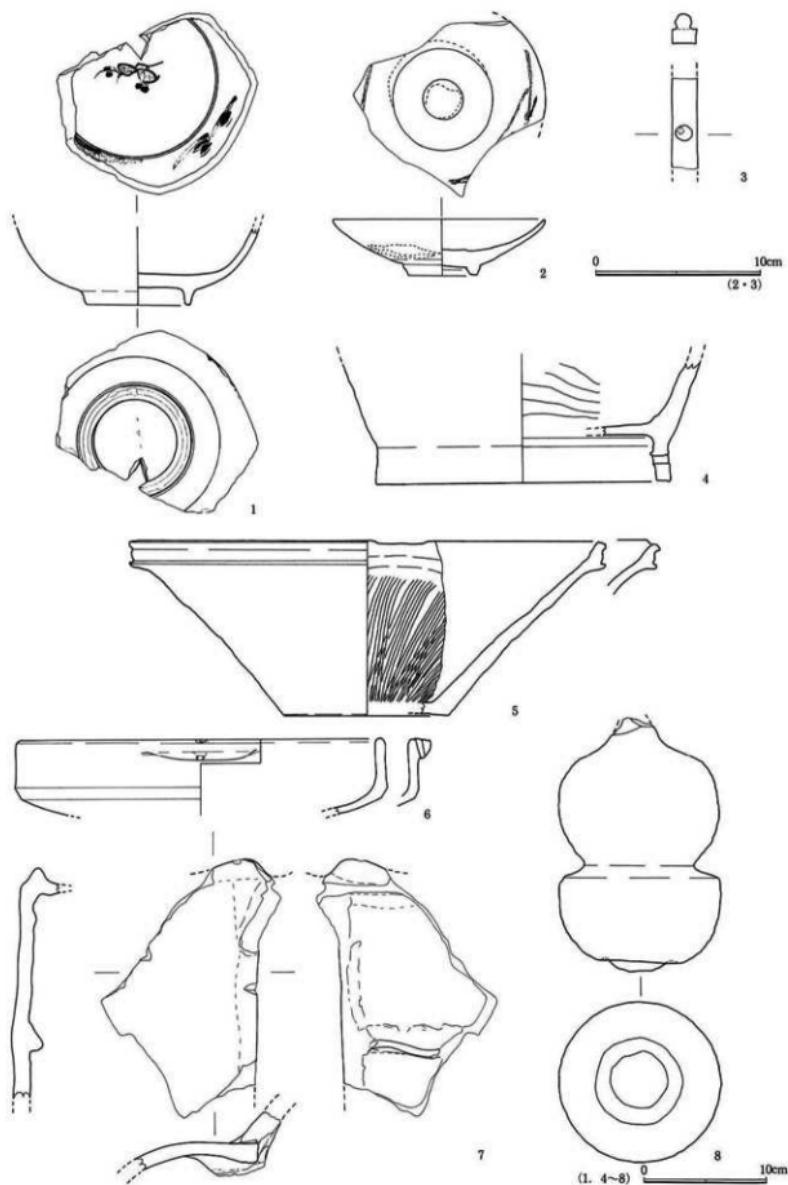


図55 3面外堀出土遺物

くなった部分の数値であり、堆積層が残されているのは間違いない。

一つ考えられる理由は、その堆積が進行して浅くなつた部分が、外堀の維持管理の作業単位の境目ではなかつたかという事である。ちょうどその位置に陣屋内部で段差があり、それが屋敷地の境で、外堀に接する屋敷地が、外堀の維持管理の単位であるといふ仮定が許されるならば、その境目の浚渫作業がなおざりになり、堆積が進行したとも考えられる。

1面では遺構面が3面より20~40cm高く、かつ外堀の底も下がっている部分もあるので、イレギュラーな例を除けば、肩からの深さは68~89cm、大体80cmほどの深さになつてゐる。

外堀の埋土は、肩部のブロック土等を除けば、3面の時点では下層に砂層、上層に黒泥土系の粘土~シルト層、2面のものは一部に粘土~シルト層、1面のものは下層に砂層、上層に黒泥土系の粘土~シルト層が存在しているのが分かる。砂層だけでなく、粘土~シルト層もラミナが認められるものが多いので、大体、常時水が流れている事が分かる。

調査成果だけでなく、絵図面や現在の状況を見ても、陣屋の外堀はこの地域の水利体系の中に組み込まれる形で作られており、常時水が流れている必要があったと考えられる。おそらく、流速が落ちて、黒泥土がかなり堆積した状況になるたび、再掘削して維持されてきたのではないだろうかと思われる。外堀が屈曲し、北東へ突出する部分は、基本層序のところで前述したように、4面に存在した流路状の浸食跡を利用して作られているが、それは、3面落ち込み1の部分で後述する。

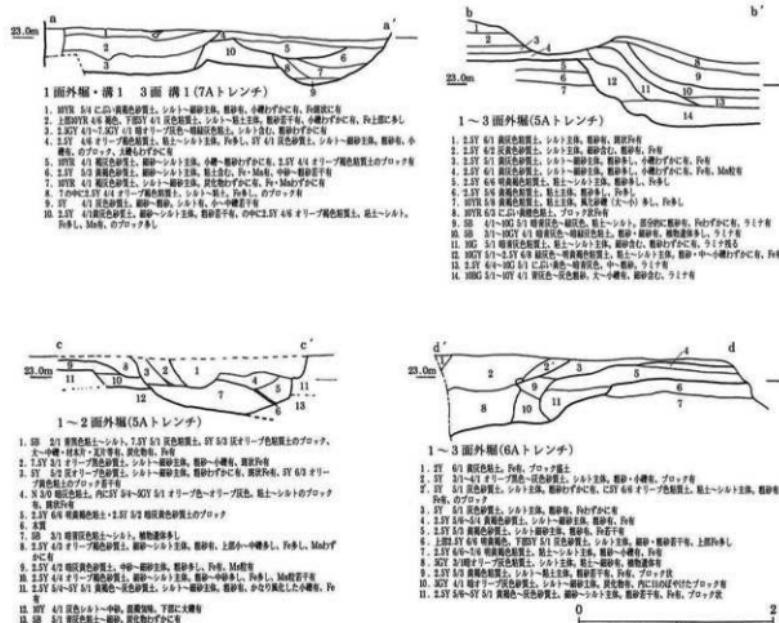


図56 1~3面外堀・溝1断面

1面

江戸後期から現代までの面である。上に明治初期の陣屋破却以後から住宅造成までの耕土がかかる部分と住宅造成の盛土が直接のる部分がある。遺構としたものには、普通なら攪乱として処理しそうな埋土を持つものや、現代の遺物の入るものもあるが、埋没が現代にかかっても成立が陣屋が存続していた江戸期にかかるものもある可能性が高いので、現代の住宅の基礎・浄化槽・重機による攪乱以外は全て遺構とした。以下、北西側から順に状況を述べる。

北西側外堀外側 江戸期にも耕作地であった部分である。鋤溝などが見られる。外堀沿いには、断面から見ると幅60cmほどの畦畔が巡っていたようである。それを切って水口状に外堀に開く溝もある。

溝1 7Aトレチで外堀の南東側で、それに平行して幅120～70cm、深さ20cmほどの溝が走る。外堀との間に幅60cm、深さ10cmの溝を持ち、南西方向にも、幅60cm、深さ5cmの溝を直角に伸ばす。北東は落ち込み1の北西辺に取りつき、その部分では落ち込みの底より低い。南東の肩は二段落ちである。この溝から落ち込み1にかけては、上層10Y4/2（オリーブ灰色）砂質土 細砂～シルト主体、中疊若干あり、炭化物わずかにあり、酸化鉄あり、下層2.5Y5/2（暗灰黄色）砂質土 シルト～細砂主体、大疊若干あり、粗砂若干あり、酸化鉄・酸化マンガンあり、の上下2層の盛土が60～30cmほどの厚さでつまれている。溝1はその北西裾部に埋没している形になる。

絵図面によると、落ち込み1も含めたこの部分は「蔽地」と記載されており、この盛土は締まりがわるく上層に炭化した有機物を含むを考えると、竹林などの「蔽」のための盛土かも知れない。そして溝1はその土留めと、浸透した水分の排水を目的としたものではないだろうか。外堀につながる枝溝が、外堀側に傾斜するのもそのためか。

落ち込み1 先述の溝1が北西辺に取りつき、南東辺も浅い溝が通っているようである。全体形は明らかでないが、4m80cm×5m40cmぐらいの方形に近い形のようだ。底には溝状・ピット状の凹凸があるが、比較的平坦である。北側の、外堀北角に面した部分が、この面ではかなり、高くなっている。そこからの落ち込み1の深さは60cmぐらいになるが、南西側の面からは30cm程度である。埋土は溝1の部分で先述した盛土だが、つまり、盛土の最高部分は南西側の1面から30cmほど高い事になり、外堀北角の高い部分と高さが合う事になる。調査時は、この盛土の高まりは締まりが悪く、上部に腐食土や耕土を伴わなかったため、住宅造成時の盛土と区別がつかず、削平してしまったため、平面形は明らかでない。但し、絵図面で

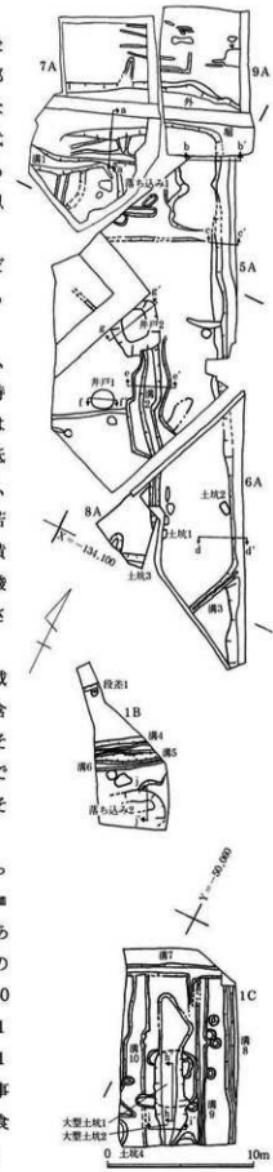


図57 1面平面

「蔽地」の南東端の屋敷地境界ラインは、外堀より「四間四尺」(8.484m)と記載されているので、落ち込み1の南東端より、2.3m以上は南東へ広がらないはずである。

遺物は落ち込みの下層から若干出土した。

(図59-1)は外面青磁の染め付け碗である。青磁釉は口縁内面から高台のやや上までかかる。内面は見込みに具須で放射状の線を描く。底部は高台内外に鉄錆が塗られ、高台端部のみ剥ぎ取り。

(図59-2)は須恵器壺の底部である。一部焼きぶくれが見られる。胎土に0.5mm以下の長石を若干含む。高台はヨコナデ、それ以外は回転ナデ。

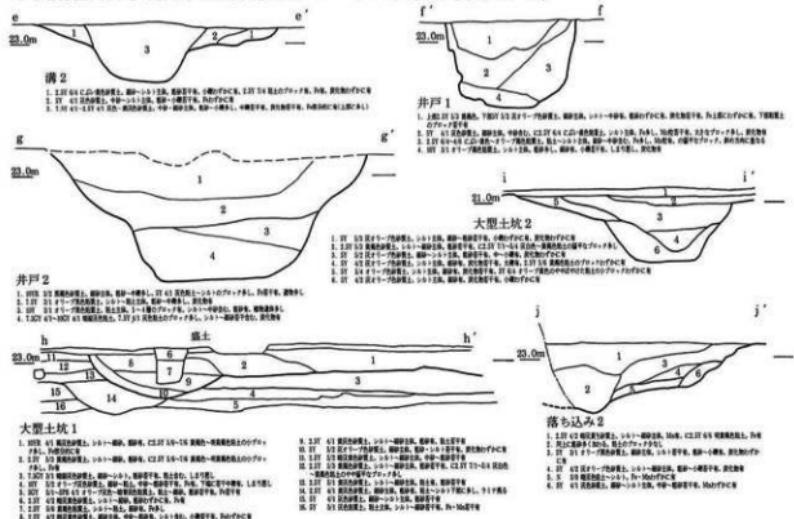
(図59-3)は土師皿である。外面中ほどにユビオサエが1列に並ぶ。やや器壁が荒れ、それ以外の調整は不明。胎土には赤色粒が若干見られ、わずかに2mm程度のチャート含む。

(図59-4)は土師器熔炉である。把手部は残存していない。内面から外面上半回転ナデ、底部との接合部にケズリはない。底部外面は型押しのまま。外面に煤付着。胎土に2~1mm弱の石英・長石・赤色粒をわずかに含む。

井戸1 直径1.35m、深さ90cm、壁は垂直に近く、底部は皿状である。最下層にしまりの悪い粘土質土が存在する他はブロック土で埋まっている。深さからみると井戸ではないかも知れないが、この付近は1面とはば同程度の浅いところから原因不明の湧水があったので、井戸として機能する事も可能かもしれない。底部には直径54cm、深さ8cmほどの凹部がある。位置的には、陣屋破却後の耕地に伴ったと思われる、畦畔の痕跡（鉄分などの沈着）の脇につくようにあるため、陣屋より後のものかもしれない。

遺物はわずかである。

(図60-1)は外面青磁の染め付け湯呑み碗である。青磁釉は外面の腰部より上にかかる。高台端部のみ釉剥ぎ取り。見込みの五弁花文はコンニャク印判で、潰れている。



（図60-2）は陶器碗か。残存部は全体に施釉され、外面に鉄釉で文様を描く。5Y7/2（灰白色）を呈し、肥前系と思われる。

（図60-3）は施釉陶器鉢か。外側面に磁土を象嵌し、文様を成す。色調は7.5Y7/2（灰白色）。

（図60-4）は陶器で、大型の植木鉢か？ 内外面とも粗い回転ナデで、外面のみ透明釉がかかる。外底面は周囲のみナデ、他は不定方向のハケナデが荒く入る。信楽焼で、現代も同じものがある。

井戸2 直径3mほどのやや不整な円形か、3m×2.5mほどの隅丸長方形に近い平面形と思われるが、一部が、ガス管維持のため残した未掘部分にかかるため、明らかではない。深さは約1.26mである。埋土はいずれもブロック土だが、上半の砂質土系の埋土には大量の陶磁器類以外にガラス・コンクリート片が入っており、上部は再掘削して廃棄土坑に転用したものかも知れない。その砂質土系の埋土を取り除くと、下部は黒泥土を主体とした粘質土系のブロック土で、丁度その上面で上部をちぎられたような状態で節を抜いた竹が、垂直に差し込まれていた。井戸を埋め戻す際に節を抜いた竹を刺す事がよくあるため、これにより

り井戸と判断した。底部は径1.4mほどで平坦、下部の壁は60°程の傾斜だが、上部の砂質土系の埋土の部分はさらに傾きになり大きく広がる。

遺物はほとんど上層から出土し、ガラス・煉瓦などの現代ものもはいっている。しかし、大量の遺物の中には江戸時代に遡ると思われるものも多く含まれるので、いくつかの遺物をここに挙げる。

（図61-1）は染め付け碗である。高台端部のみ釉剥ぎ取り。

（図61-2）は染め付け碗である。高台端部のみ釉剥ぎ取り。外面の文様は線が非常に細く、その上に濃みをかける。

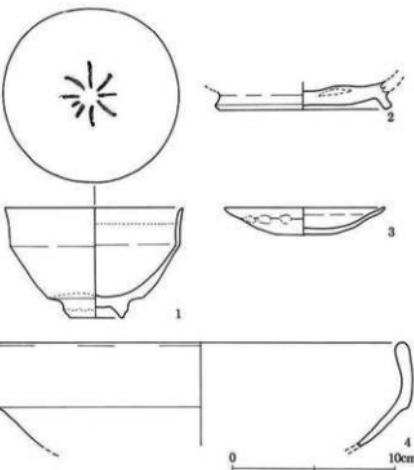


図59 1面落ち込み1下層出土遺物

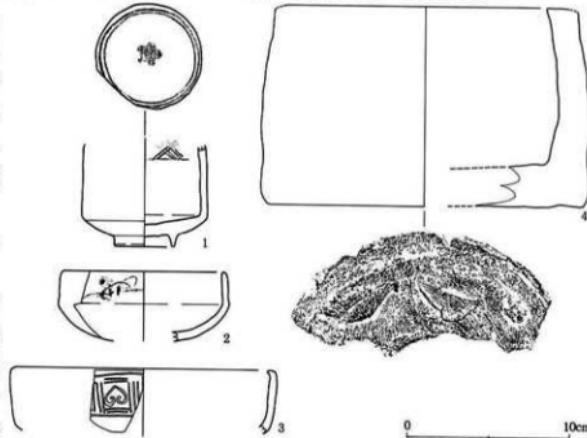


図60 1面井戸1出土遺物

(図61- 3) は青磁鉄絵碗である。底部は高台も含め無釉、鉄錆も塗られない。

(図61- 4) は黄釉陶器である。釉は高台のやや上までかかる。外面には赤い2本の縦線を中心にして両側に縦釉で太い線を2本ずつ引き、花と葉を表しているようである。

(図61- 5) は染め付け碗か、広東碗の変形のようだ。高台端部のみ釉剥ぎ取り。文様に墨弾き技法を多用する。中国的な図柄である。

(図61- 6) は染め付け段重である。2層出土の蓋(図48- 1)と法量・文様とも一致する。口縁端部と高台端部のみ釉剥ぎ取り。

(図61- 7) は染め付け中皿である。口縁は、やや不明確だが、10弁の蓮華様に波打つ。見込みの後弁花文は手描き。高台内は二重方形枠内の渦福文の中央とその周囲に計4カ所の針支えが見られる。高台端部のみ釉剥ぎ取り。その部分に砂付着。

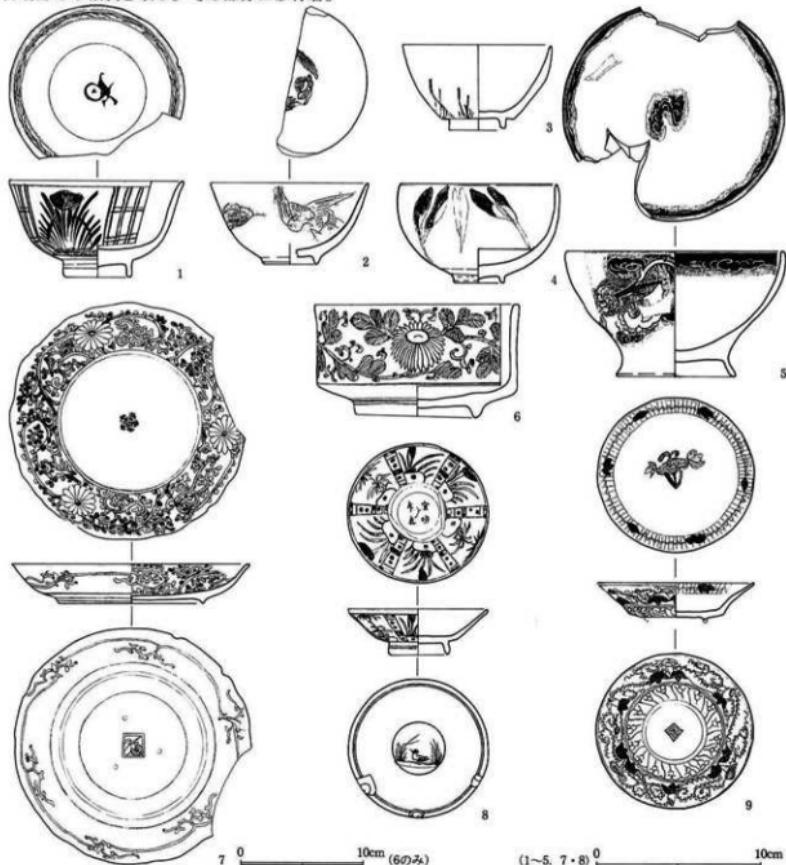


図61 1面井戸2上層出土遺物(1)

（図61－8）は染め付けの碗蓋か。図柄の向きから皿状に実測した。つまみ端部のみ軸削ぎ取り。口縁には3カ所外側からの打撃による欠けがあり、打ち欠きの可能性もある。つまみ内側に「宣明年製」の銘あり。

（図61－9）も染め付け碗蓋と思われるが、図柄の向きから皿状に実測した。つまみは端部を消失している。つまみ内部の銘は「福」の示偏のみの変形字。

（図62－1）は陶器碗である。透明釉を内面から高台のやや上までかける。無釉部分は回転ケズリが見え、色調は2.5Y8/3（淡黄色）。

（図62－2）は陶器湯呑み碗である。外面下半に螺旋状にヘラ沈線が入る。外面は褐釉が高台上端までかかり、その上から、口縁外側から内面にかけて白い釉がかかる。褐釉部分には白い釉で文様を入れる。高台とその内側は回転ナデで、色調は7.5YR4/2（灰褐色）。

（図62－3）も陶器湯呑み碗である。内面から高台上部まで灰釉をかけた後、外面に白い釉を螺旋状に上から下へ入れる。その部分はかなり盛り上がる。釉のない部分の色調は7.5YR6/4（にぶい橙色）。

（図62－4）は灰釉陶器汁次である。外面のみ施釉、底部側面はヘラケズリで面取り。底部は回転糸切り痕が見られ、胎土目が3カ所にある。胎土の色調は10YR7/1（灰白色）。

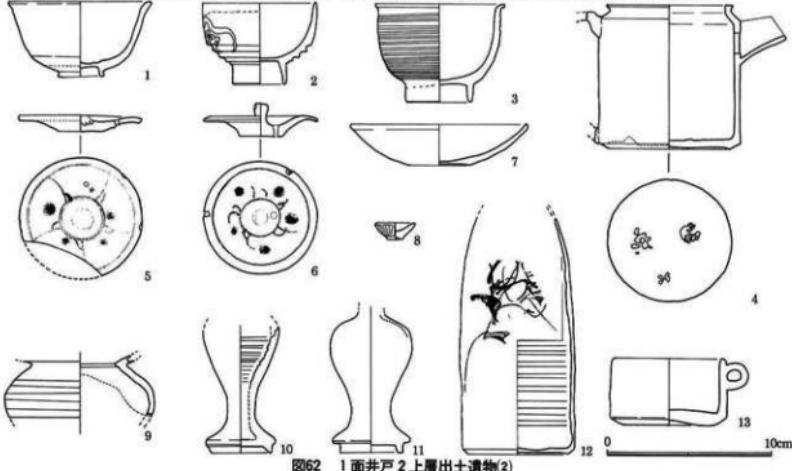
（図62－5）は黄釉陶器、汁次の蓋と思われる。上面は鉄釉で線を描いた後、黄釉をかけ、5カ所に緑釉で点を入れる。下面は無釉で周囲は回転ナデ、底部は糸切り底。胎土の色調は2.5Y8/3（淡黄色）。

（図62－6）は（5）とまったく同じである。つまみは丸い小粘土塊を横から少し押し潰した形。

（図62－7）は灰釉陶器の皿である。内外面ともすべて回転ナデで釉は内面から口縁外側まで。胎土の色調は2.5Y8/1（灰白色）。

（図62－8）は白磁紅猪口である。内面から口縁端部まで施釉。外面は菊花状に沈線を入れ、高台は削り出し。ただ、他の紅猪口に比べてかなり小さい。

（図62－9）は灰釉陶器壺である。釉は外面と内面上半にかかる。外面は肩部が回転ナデ、それ以下は回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。釉のない部分の胎土の色調は10YR7/3（にぶい黄橙色）。



(図62-10) は施釉陶器の御神酒徳利である。外面のみ施釉、釉は具須色。内面は棒状工具によるカキ目が入るが、下部は不明。胎土の色は5Y8/3（淡黄色）である。

(図62-11) は(10)とまったく同じ。上部の欠失が少ないため内面は不明。

(図62-12) は灰釉陶器徳利である。外面のみ施釉で黒釉で文様を入れる。内外面とも回転ナデだから内面のものは強い。底部側面はヘラケズリにより面取り。底部は回転ヘラ切りである。胎土の色調は7.5YR8/2（灰白色）。

(図62-13) は施釉陶器把手付平碗である。釉は内面から外側面までかかり、2.5Y8/2（灰白色）に発色。把手は粘土紐状。底部は露胎でヘラケズリが入る。胎土の色調は2.5Y8/3（淡黄色）。

(図63-1) は陶器蓋である。行平鍋の蓋か。上面に6本の沈線が巡る。釉は口縁端部のみ割ぎ取りで、7.5Y4/3（暗オリーブ色）に発色する。

(図63-2) は青磁鉢である。外面はスタンプ文の組み合わせで浮き彫り状の文様を構成する。高台端部のみ、釉を割ぎ取り、鉄錆を塗る。

(図63-3) は陶器鉢である。釉は内面から高台直上まで、見込みには中央に回転ケズリの痕跡が見え、胎土目が3ヵ所にある。釉は7.5Y7/2（灰白色）、胎土は5YR7/3（にぶい橙色）。

(図63-4) は陶器鍋である。行平鍋と思われるが、注口・把手は遺存していない。内面は回転ナデ、外面は回転ケズリ。釉は内面から外面上半にかかり、蓋受け部は割ぎ取る。底部側面に小粘土塊状の脚が1個現存、おそらく3個あったと思われる。釉は5Y8/3（淡黄色）、胎土は7.5Y4/3（褐色）で、外面下半には煤付着。

(図63-5) は陶器蓋である。土瓶の蓋と思われる。釉は上面のみ、下面はヘラケズリ、底部はヘラ切り。つまみは粘土円板を二つ折りしたものをする。釉は5Y4/8（淡黄色）、胎土は2.5Y8/1（灰白色）で石英・長石を含む。

(図63-6) は陶器片口鉢である。内面回転ナデ、外面回転ケズリ。釉は内面から外面上側2/3までかかる。注口は口縁直下に半円形の孔を切り取り、板状の粘土を曲げて貼り付ける。釉は5GY8/1（灰白色）、胎土は7.5YR8/2（灰白色）。

(図63-7) は鉄釉陶器片口鉢である。釉は内面から外面高台よりやや上までかかる。外面上半は二度がけし、その釉だれの下端が濃色を呈す。注口は半円形の孔に板状粘土を曲げて差し込む。高台内部に墨書があるが、読みは分からぬ。

(図63-8) は陶器行平鍋である。把手は遺存していない。釉は内面から外面上半までかかり、蓋受け部は割ぎ取る。注口は半円形の孔の外側に板状粘土を曲げて貼り付ける。底部側面に小粘土塊状の脚が1個遺存する。釉は5Y7/3（浅黄色）、外側下半の胎土の色は煤が付着し、定かでない。

(図63-9) は陶器行平鍋の把手である。断面が、上半台形、下半半円形の型押し作りのものを張り合わせた、中空のものである。釉は2.5GY6/1（オリーブ灰色）のものを全体にかけ、遺存する蓋受け部のみ割ぎ取る。さらに把手上方の型押しの文様部分のみ凹部に溜まるように白釉をかけ、凸線を浮きださせる。文様は笠を被った左向きの人物とその後ろに小さい人物、そして背後に菱形文と菊花文を散らす。上には雲文、そして端部の孔の回りは花弁文。中国風である。

(図63-10) は瓦質の火鉢と思われる。風炉の可能性もある。外面はミガキ、内面は強いユビヨコナデ、高台内面はナデ。高台には丸い穿孔の外側を彫って飾った透かしがある。

(図64-1～4) は柿釉土師皿である。調整は内面左回りのナデでナデ上げ、外右回りのナデで底

部へナデ下げ、底は糸切り底、釉は内面から口縁外側まで。1・2は口縁に何箇所も煤が付着し、灯明皿として使われた事が分かる。3は内面に突帯が1条巡り、他よりひとまわり小型である。

(図64-5・6)は土師質の独楽と思われる。粘土紐を螺旋状に巻き上げたような形をするが、上面は型押しである。

(図64-7)は土師器焼き塩壺である。内面から口縁上面までヨコナデ、外面は左上上がりのヨコユ

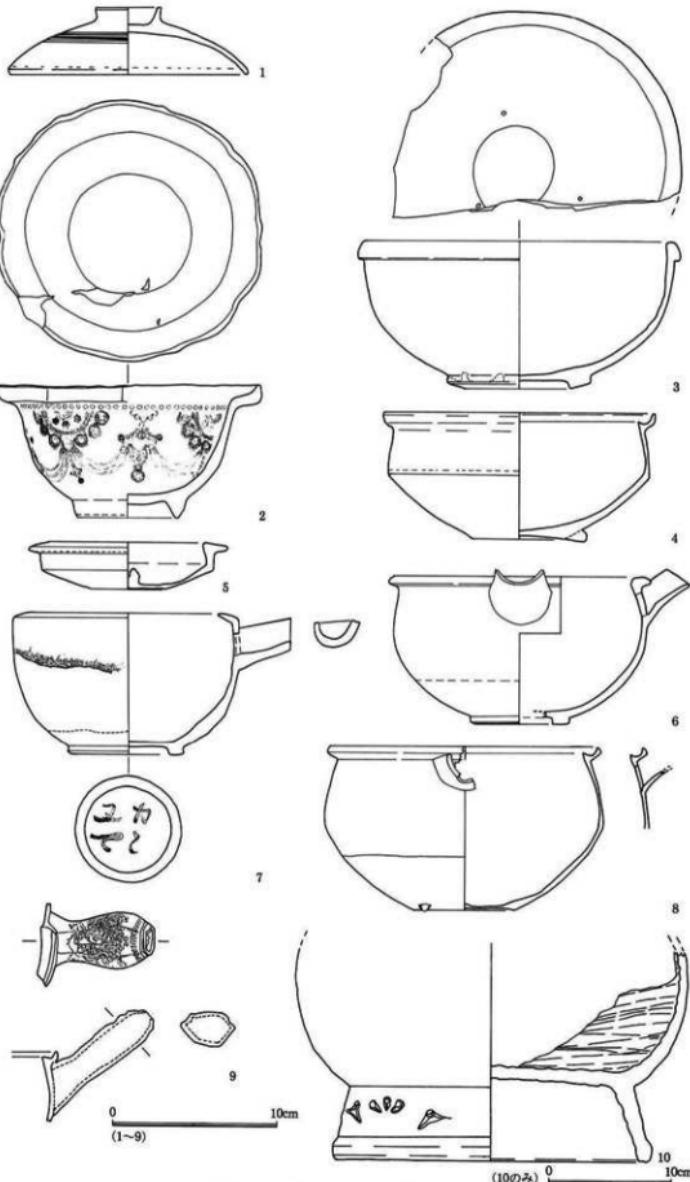


図63 1面井戸2上層出土遺物(3)

ビナデで、所々に指を止めたユビオサエが入る。外底面は回転ナデ。胎土には1~4mmの長石・石英がわずかに見られ、赤色粒が多い。

(図64-8) は陶器植木鉢である。外底面が無調整の他は回転ナデ。底部の穿孔は内面からヘラを回

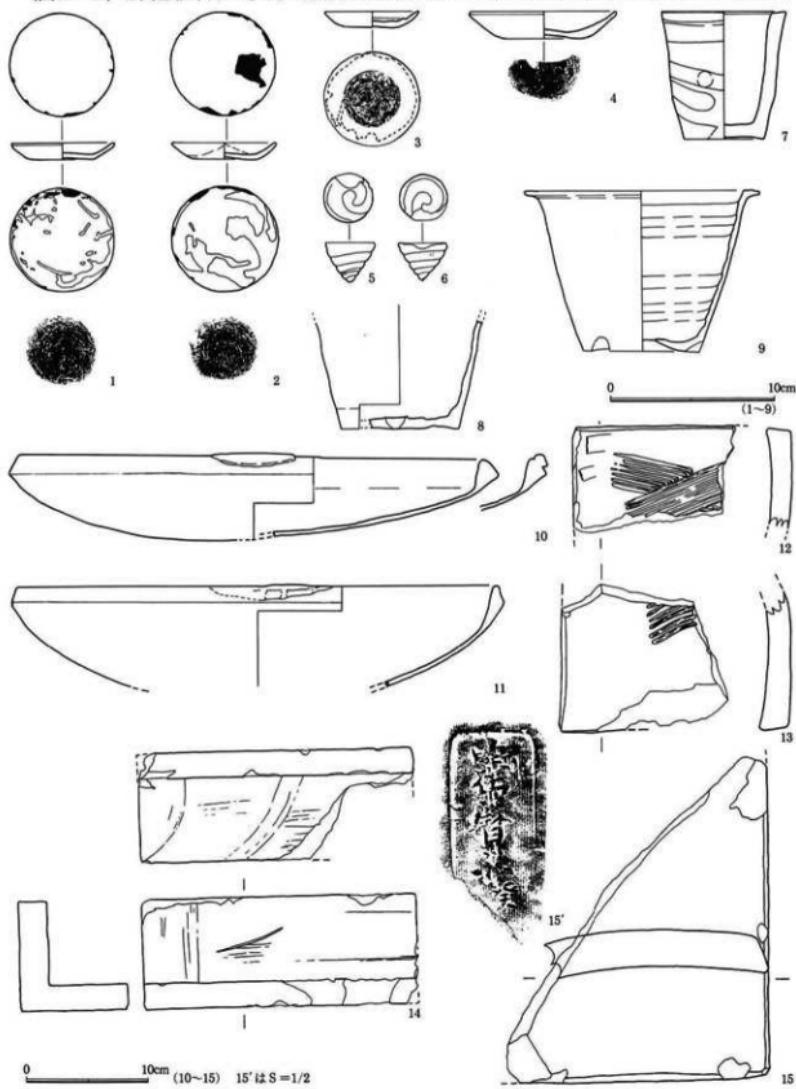


図64 1面井戸2上層出土遺物(4)

してえぐる。内底面には自然釉・降灰痕多し。胎土は10YR6/4（にぶい黄橙色）で、黑色粒・石英を若干含む。

（図64-9）も陶器植木鉢である。外底面無調整、内外面は回転ナデで、内面のナデは強い。口縁部は内面から上面にかけてヘラケズリ。底側面3方向にえぐりがある。底部は中央で上に立ち上がり、その端部に上に向いた割れ面が見られ、不整形な孔のまま焼成した後、打ち欠いて形を整えたと思える。色調は外面が7.5YR5/4（にぶい褐色）、内面が2.5Y6/1（黄灰色）。

（図64-10）は土師器培培である。内面から立ち上がり部外面までヨコナデ、外底面は型押しのまま。内底面に炭化物付着、外底面に煤付着。把手に穿孔はない。

（図64-11）も土師器培培である。調整も同じ。把手に穿孔はない。内外面に煤が付着する。

（図64-12・13）は井戸枠瓦である。凹面に櫛状の刻み目が入る。それ以外はナデ。

（図64-14）は瓦の一種であろう。残存部は全てナデである。

（図64-15）は平瓦である。凸面に押印があり、「宝曆三 癸□」とある。宝曆三年癸酉（1753年）か。調整は全面ナデである。

溝2 北西で井戸2に取りつき、まっすぐ南東へ伸びる。断面から見ると、幅2.55m、深さ28cmほどの溝の中央に、幅1.28m、深さ60cmの溝が掘りなおされている。平面形では、古い方の溝は型崩れしているのかかなり、不整形である。新しいほうの溝も若干肩のラインが歪んでいる。位置関係から、井戸まわりの作業で使用した水の排水溝と考えられる。但し、5Aトレンチにおいて、この溝と外堀との間に、かなりしまりの良い黄褐色系粘質土が1面の上にのっているのが検出された。1面検出時点でかなり削平してしまったので高さは不明である。断面で確認しようとしたが、5Aトレンチ南東壁でその部分が崩壊し、確認できなかった。わずかに残った外堀近くの断面では1面と、陣屋以後に耕地化した際の耕土との間に、外堀沿いから積みはじめ、次第に陣屋内側に積んでいく、高さ30cm程度残存するブロック土が見られた。これが、陣屋破却後のものでなければ、陣屋存続時の1面では外堀内側に、幅2mほど、高さ30cm以上の土壘が存在していた可能性が高く、その内側の裾部を溝2が走っていた事になる。

（図65-1）は染め付けの広東碗である。見込みに鶯、外面に蝶を描く。高台端部のみ釉剥ぎ取り。

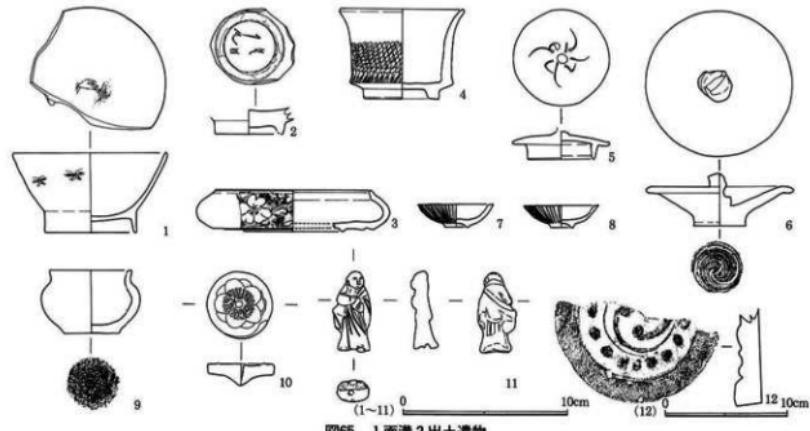


図65 1面溝2出土遺物

(図65-2) は染め付け碗である。見込みに4文字の銘があるが解読不能。

(図65-3) は染め付け壺である。外面底部以外施釉。底部は回転ケズリが入り、削り出し高台である。外面の文様は描線外側を濃みで埋める。

(図65-4) は陶器湯呑み碗である。青味がかった透明釉を内面から高台直上までかける。外面下半に繩目あり。高台は露胎で5Y8/2(灰白色)を呈す。

(図65-5) は鉄釉陶器蓋である。いかなる器種の蓋かは不明。上面のみ鉄釉を施し、その上に白釉で文様を入れる。胎土は2.5YR7/2(灰黄色)を呈す。

(図65-6) は陶器蓋である。茶入の蓋か? 上面のみ施釉で、つまみは板状の粘土をひねったものを縦に付ける。下面是回転ナデ、底部はヘラ切り底。釉は5GY6/1(灰オリーブ色)、胎土は7.5YR6/6(橙色)を呈す。

(図65-7・8) は白磁紅猪口である。内面は見込みを直線的にナデた後側面ヨコナデ。外面は菊花文状に沈線を配し、高台は削り出し。釉は内面から外面上半にかかる。

(図65-9) は土師器小壺である。内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り。

(図65-10) は土師質独楽である。上面は型押しの花文で、中央に軸を刺す孔がある。下面是回転ナデで中央を尖らす。

(図65-11) は土師質土人形である。前後面とも型押し、底部に深さ3mmの孔あり。僧形である。

(図65-12) は軒丸瓦の瓦当片である。

土坑1・2 土坑1は長さ60cm、土坑2は長さ80cm、幅60cm、どちらも深さ10~15cmほどの隅丸長方形の土坑である。灰黄色砂質土系の埋土を持つ、6Aトレンチで、土壙があったとするとその裾部にあたる位置にある。

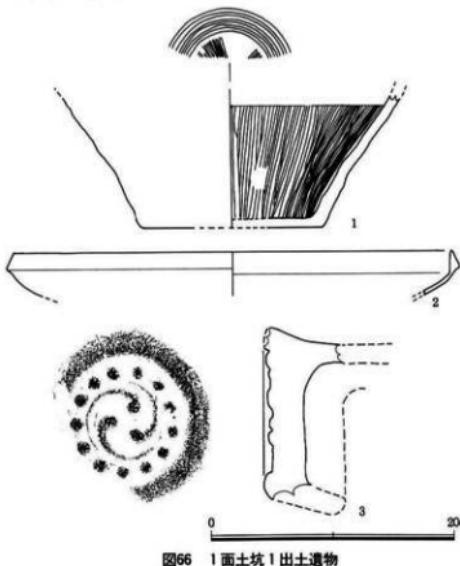


図66 1面土坑1出土遺物

土坑1から以下の遺物が出土している。

(図66-1) は陶器堀り鉢である。外面は上半がヨコユビナデ後、回転ナデ。下半がユビオサエ後、回転ナデ。内面は使用による磨滅が激しいが、7~8本一組の刻み目で右が左を切るか。胎土は5YR3/2(暗赤褐色)を呈する。

(図66-2) は土師器焙烙で、内面から立ち上がり部外面まで回転ナデ。外表面は型押しのまま。把手は遺存していない。

(図66-3) は軒丸瓦だが、丸瓦部以外も瓦当の裏面全周囲に剝離痕がある。

土坑3 8Aトレンチの南東端で検出された。暗灰黄色砂質土系の埋土を持つ、肩の一部を検出したのみで全体系は不明であるが、深さは30cm以上ある。埋土から見ると溝ではないようである。大型の土坑になる可能性もある。

溝3 幅60cm、深さ40cmほどの溝で、外堀に開口する。底部は25cmほどの、断面台形の溝である。底部に瓦質の土管列が埋設されており、それらは外堀側に傾斜して、とくに外堀からの3個は大きく傾き、最後の一個の口は外堀底部近くまで下がる。

（図67-1・2）は瓦質の土管で、法量は径15.1cm、厚さ1.7cm、稚ぎ目の径11.5cm、長さ32.1cm、差し込み部を除く長さ30.3cm（1尺）。外面は縦方向のミガキ、差し込み部は内外面ともヨコナデ、内面は布目痕を残しながら横方向のケズりが入る。受け部内面は端部に向かって広がる面をケズりで成した後、ミガキ。

この瓦質の土管は、溝3に切られていた、2面溝5に一部残されていた土管と、法量、調整とも全く同じであり、転用した可能性もある。さらに溝3自体が新しいものの可能性が強い。というのも、この溝は6Aトレンチと1Bトレンチの境を成す道路に直交する位置にあるが、その道路は明治43年（1910年）に開通した箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄宝塚線）の工事の際につけられた道だからである。

段差1 1面の他の段差が、遺構がらみで明確な形で検出されなかったのに対し唯一はっきりと検出されたものである。1Bトレ

ンチの北西端に位置する。検出部分が短いので、方向は分かりにくいが、ほぼ外堀と直交する形で南東に落ちていると見て間違いないだろう。幅25cmほどで、約40cm落ちる。陣屋内部の屋敷地境に関わる段差であろう。

溝4～6 幅20～50cm、深さ15cmほどの溝が平行して並ぶ、一部、切り合い、溝5が溝4・6を切っている。一面の上にのる耕土より上の盛土で埋没しているので、古くとも陣屋破却後の耕地に伴うものと思われる。

落ち込み2 1Bトレンチの南東端にあり、半分近くを南側のコンクリート製防空壕により破壊されているが、深さ50cm、底部の幅60cmほどで、おそらく、幅2mほどの、隅丸長方形に近い形と思われる。埋土も、防空壕の堀方と思われる部分が多いが、本来の埋土は最下層にN2/0（黒色）粘土～シルトの止水堆積層があり、肩部にそれより層位的には下になる1層系の二次堆積層、上部は暗灰黄色砂質土系の土で埋まる。埋土から見ると1面で掘削され、陣屋破却後の耕地化に伴い埋没したような状況である。

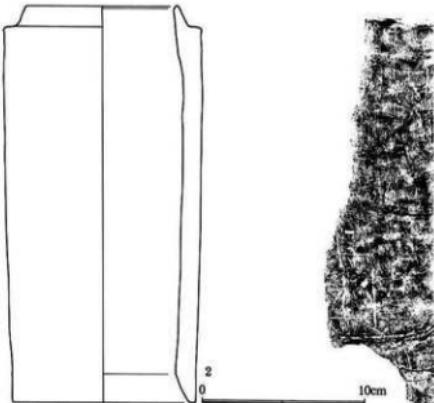
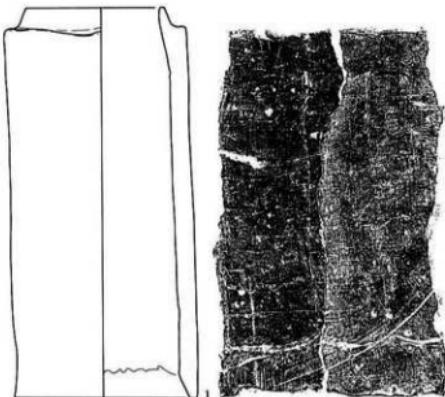


図67 1面溝3出土遺物

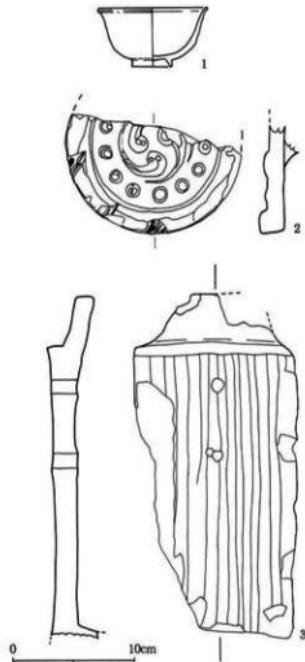


図68 1面落ち込み2出土遺物

1～2面に見られる大型土坑の類かもしれない。

(図68-1)は青磁碗である。内面から高台直上まで施釉、ほとんどの調整が回転ナデだが、外面体部中ほどに3条のケズリが入る。露胎部分に鉄錆は塗らない。

(図68-2)は軒丸瓦瓦当片である。外縁部前面に幾つか、絞り込みのような凹部が残り、そこには布目が残る。朱点と巴はかなり突出し、外縁部と同じ高さで平坦面を持つ。

(図68-3)は軒丸瓦である。瓦当部は消失する。背の後半に縦に2個の穿孔が並ぶ。外面はタテナデ、胴部凹面側縁は鉄線切り、凹面には布目、玉縁部凹面には蓆目が残る。

溝7～10 溝9が溝7に切られている以外、切り合い関係は明らかでない。溝7は幅70～80cm、深さ10cmほどで、上部の埋土で直接埋まっており、攪乱したほうが良かったかも知れない。外堀とは直交する方向性を持ち、新しいものならば建物の基礎の溝の名残の可能性もあるが、屋敷地の境に比較的近い位置の溝であるかも知れない。溝8は幅45～60cm、深さ20cm、溝9は幅70cm、深さ16cm、溝10は幅120～150cm、深さ10cm、いずれも灰黄色系砂質を埋土に持つ。溝8・9は外堀のすぐ内側に平行に走り、溝10はそこから、大型土坑1・2をちょうどさむ幅をあけて、平行に走る事になる。外堀に沿った土塁が存在していたと考えると、溝9などはその裾部にあった溝の可能性もあると思われる。しかし、溝8は外堀に近すぎ、むしろ、陣屋が破却され、いったん耕地化された時点で、用水路として残存した外堀と、畦畔一つぐらいを隔てた距離にある溝と考えたほうが妥当な位置にあるといえよう。溝10はその位置関係から、大型土坑1・2、特に2の方と同時期併存していた可能性が高いと思われる。

大型土坑1 南西側で大型土坑2を切っており、北西側は攪乱にやられているが、幅2.2m、長さ3.1mほどの隅丸長方形を呈するようだ。深さは、大型土坑2と重複して分かれにくいが、およそ40～25cmだったと思われる。最終的にブロック土を含む砂質土で埋まる。

(図69-1)は瓦質で、分厚い板状だが、端部の面が斜めで、激しく磨滅する。擦り具として使用したようだ。色はN3/0(灰色)で1mm以下の長石・石英を含む。瓦の転用品かも知れない。

(図69-2)は土師質の縁釉土器である。内面のみ縁釉残る。ミニチュアか。

(図69-3)は黒色土器碗である。「内黒」で内面のみ炭素吸着。調整は回転ナデ。

(図69-4)は瓦質土器で、燭台の脚部か。外面はユビオサエで成形した後、粗いハケを強く押さえ、基本的に下に撫で下ろす。大体、強いユビオサエの下端部に入る。てづくねの凹凸をならしているものか。脚据部の内面は不定方向のナデが入る。脚柱部は中実で、刺突痕などもない。上の身部との接合部にはヨコナデが入る。

(図69-5)は土師質土鉢片である。外面はユビオサエ・ユビナデ。内面はナデ。ヘラ切りで開けた口が一部残存する。

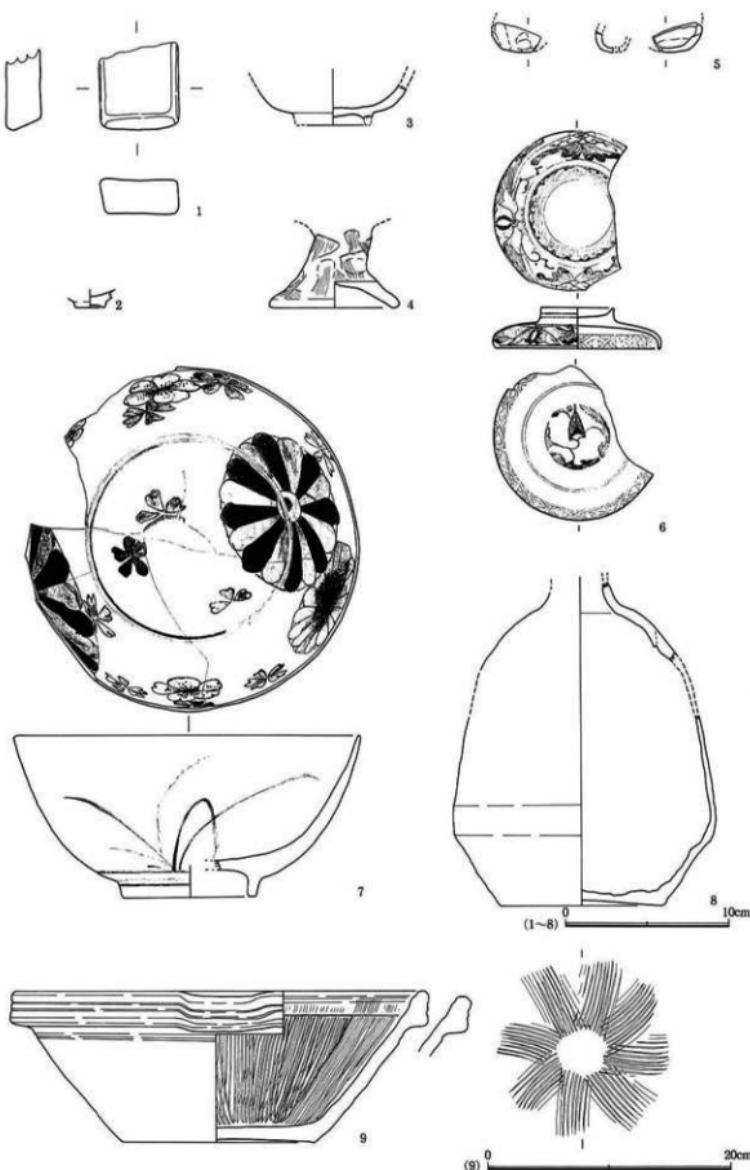


図69 1面大型土坑1出土遺物

(図69-6) は染め付け碗蓋である。軸の剥ぎ取りはない。全体に偏平な形で、口縁端部の曲がりが激しく、高台状のつまみの径は広い。

(図69-7) は染め付け鉢である。5Aトレンチ部分の外堀下層から破片が接合した。高台端部のみ軸剥ぎ取り。呉須は濃淡2種を使い分け、特に菊花の花弁は交互に濃淡がある。内面に比べ、外面の絵付けはあっさりしている。

(図69-8) は鉄軸陶器器底である。軸は外面のみ。内面と外底面は回転ナデ。特に内面下半部のナデは凹凸が強い。内面肩部には接合痕が残る。また、かなり下にある胴部最大径部分は外面にケズリの痕跡が残り、その上下で器壁の厚さがかなり違う。内面露胎部分の色は2.5Y6/2(灰黄色)。

(図69-9) は陶器壺鉢である。内面の刻み目は底部から放射状に口縁まで至り、左が右を切る。口縁内面のヨコナデは刻み目の後。口縁部外面の突帯は断面三角形で、垂直に立つ面を持ち、そこに2本の沈線が入る。注口はそのまま曲げて、幅広の水平なものを作り出す。口縁突帯の下に2条の棒状工具によるナデがあり、それより下はヨコハケ後ナデ。外底面は焼成後の磨滅があるが、内面に使用痕はない。胎土は1mm強の長石を含み、7.5R4/6(赤色)を呈す。

大型土坑2 当初、中央を大型土坑1が切り、北西側は擾乱にやられていたので、南東端のみで土坑状と認識していたが、完掘した結果は、溝としたほうが良かったかも知れない。北西端は、やや広がってから丸く納まるようで、それより南東側の平均的な幅は1.4m程度、長さは8.2m以上、緩い傾斜の上部と壁の立つ下部で二段落ち状の断面形を成す。底部の形状は平らで幅60cm程度、ただし南東端は幅を減らして25cmほどになる。深さは平均76cm、南東端で78cm、一度掘りなおした跡があり、その前後のどちらも最下層にオリーブ黒色の砂質土系の層が堆積する。特徴的なのはトレンチ南東壁にかかった断面で、下半部の幅がかなり狭くなり、その底に丸瓦が置かれ暗渠状になっている事である。北西側の断面との埋土のつながりは明らかでないが、その瓦は北西側断面の掘りなおし以前の底部よりもまだ低い位置にあり、少なくとも一時期は北西から南東の細長い土坑が、南東側の外堀と暗渠で連結されているような状況があったと思われる。その場合、疑問なのは、6Aトレンチ以北で確認できる外堀の底の高さが、例外的に低いものでも、この土坑の底とはほぼ同じ高さにある事である。この付近でかなり外堀の底、及び水位が低くなっていると外堀への排水はできず、水の入替えも自然には行われにくい。むしろ、常時外堀と同じ水位を保つ水溜めのようなものがあった事になり、暗渠でつながっているような構造であるなら、ある程度徹底した管理を行わないと、かなり不衛生な状況になってしまふのではないかとう事が推測される。

出土遺物は以下のとおり。

(図70-1) は円形板状の砂岩である。片方の面と側縁の一部に擦痕があり、側縁のその部分はかなり磨滅して平面形でもやや直線的になっている。擦り具と思われる。



図70 1面大型土坑2出土遺物

(図70-2) は軒平瓦である。調整はナデ。胎土に2~1mmの石英・長石を含む。

土坑4 1Cトレンチ南角付近で南西壁にかかる土坑で、規模、形とも不明である。溝10との切り合いもはっきり確認できなかった。

南西壁で深さ55cm、幅1.6mを測り、溝10と似た砂質土で埋まる。

2面

この面は江戸時代後期の面と思われる。陣屋の存続期の面である。高さが不明な部分も多いが、6Aトレンチの南西側から1Bトレンチの北西端あたりがやや高い他は、全体的にかなりフラットな面となっている。7A・9Aトレンチ部分の外堀南東側は土墨があったかも知れないが、1面の溝1・落ち込み1に大きく破壊されており、断面などでも2面時点での盛土と断言できるものはなかった。遺構の分布のしかたから、屋敷地の境は6Aトレンチ南東端の溝5・6あたりと、1Bトレンチと1Cトレンチの間に想定できる。

溝1 現在、調査区の北東側の道路の下でコンクリート水路となっている用水路の前身の溝である。この用水路はかなり北側の侍兼山の高位段丘の開析谷から取水している、この地域では幹線的な水路である。（その1）の調査区内を真っ直ぐ伸びて、陣屋外堀の角に取りつく。幅80～90cm、深さ45cmほど、北東側の段差1との間が畦畔の高まりとなっている。南西側にも畦畔が付いていたようだ。

染め付け碗が1点出土している。（図73-1）は外面に網目文に魚。高台端部のみ釉剥ぎ取り。

溝2 陣屋内側から外堀への排水溝と思われる。幅70cm、深さ15cmほど。外堀への取りつき部分は深さを増し、開く。北西側の外堀に土墨が存在していたとするならば、この溝のラインが大体その南東堀になるものと思われる。

溝3 北西側で溝2につながる、陣屋内側で外堀と平行する溝である。幅50cm、深さ10cmほど。外堀との距離は2.7m～2.9mほどで、その間に土墨のあった可能性もある。1間半の幅か。

黄釉陶器碗が1点出土している。（図73-2）は釉が内面から外面高台のやや上までかかり、外側は回転ケズリ。釉は7.5YR7/4（にぶい橙色）、胎土は5YR7/4（にぶい橙色）を呈す。

溝4 外堀や溝3と平行して走る、幅60～80cm、深さ10cm弱の溝。直角に取りつく枝溝もある。北東側肩部に畦畔の痕跡らしきものが見られる。

この溝と溝2・3をあわせて考える
と溝に囲まれた長方形の区画が幾つか
存在していたようで、その一つは長さ
12m、幅3mほどと思われる。

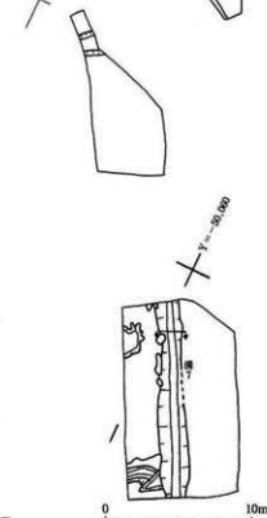
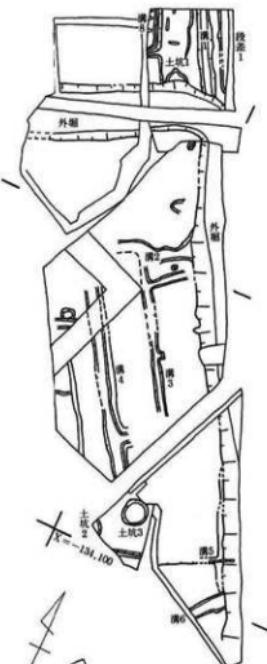


図72 2面溝1断面

この溝のさらに南西側にも平行する畦畔の痕跡のようなものもあり、なにか耕作地のようなものと感じさせられるが、屋敷地の裏庭にあたる部分で、畑でも作っていたのだろうか。

土坑2・3 溝4の南東側にある。土坑2はトレンチ端で規模、深さも不明であるが、土坑3とはほぼ同じと思われる。土坑3は直径1.8~1.6mの梢円形、深さは45cmである。

溝5 幅40cmほど、深さは削平や攪乱により定かでない。外堀に直角に取りつき、その部分は深さを増し、広く開いている。その中に、外堀の底へ傾斜していく形で瓦質の土管列が遺存していた。それより南西側は溝も上からの攪乱でかなり破壊され、土管も遺存していない。しかし、この溝の上に重なるようにある1面溝3の瓦質土管が、全く同じものであるので、この溝から取り上げた土管を転用したものと思われる(図67)。この溝 자체は、外堀への排水を目的とした土管列の埋設構と考えられる。

溝6 幅60~40cm、深さ20cmほど、外堀に斜めに取りつく。この溝から見ると、この部分は外堀沿いの土塁の存在は若干疑わしくなる。排水用の溝か。

溝7 1Cトレンチの中を北西から南西に真っ直ぐ走る。北東側の調査区外にある外堀と平行し、南東側は直角に曲がった外堀につながっていると思われる。北西側は何処まで伸びているか不明である。幅120cm、深さ60cmで、おそらく、外堀とはほぼ同じ深さではないかと推測される。その事から見てもこの溝は外堀の水位に合わせて灌水している事になり、機能がよく分からぬ。

出土遺物は以下の通り。

(図74-1)は染め付け碗である。高台端部のみ釉剥ぎ取り。口縁部は塗った須を内外面に短く垂れさせる。見込みには瓢箪と团扇の絵、外面には「榮」の字と「福」の字が3文字ずつ交互に並ぶ。高台内部には「乾隆」の「乾」の略字。

(図74-2)は染め付け湯呑み碗である。見込みはくずれた昆虫文か。外面は大きめの渦文を配し、その間を濃みで塗りつぶす。高台端部のみ釉剥ぎ取り。

(図74-3)は染め付け碗の蓋である。(1)の碗とセットになり、法量・文様とも一致する。つまみ端部のみ釉剥ぎ取り。

(図74-4)も染め付け碗の蓋である。つまみ端部のみ釉剥ぎ取り。

(図74-6)は鉄釉陶器土瓶、(図74-5)はその蓋である。蓋は上面のみ施釉、上面から側面まで回転ナデ、底部は周囲をヘラケズリで面取りし、回転ヘラ切り。つまみは粘土円板を二つ折りにしたもの。土瓶本体は、内面は注口取り付け位置より上まで施釉、外面は底部よりやや上まで施釉。内面から外面の上から3/4は回転ナデで仕上げ、それより底部まで回転ヘラケズリ。口縁端部は釉を剥ぎ取る。把手掛けはヘラで形を整える。注口取りつき部分の体部の穿孔は4カ所。底部側面には小粘土塊状の脚が三つ付く。外面の無釉の部分は煤付着。胎土は7.5Y7/2(灰白色)を呈す。

(図74-7)は土師質七輪である。外面は回転ナデ、外底面は周縁をナデた後、低い脚を3個付けその接合部をナデる。他は粗いナデでその下に消えかかったハケ目が見えるが脚接合以前かは不明。内面は底部は回転ナデ、底部に近い側面はユビオサエ後、回転ナデ。それより上は8本一組のタテハケを粗く入れた後、送風孔より上にタガを一条貼り付け、全体に回転ナデ。送風孔の上には焚口の一部が遺存する。内面に煤付着。胎土は7.5Y8/4(浅黄橙色)を呈す。

(図74-8)は柿釉土師皿である。釉は内面から口縁外側に及ぶ。全体に回転ナデ、底は糸切り。

(図74-9)も柿釉土師皿である。(8)と同じ。口縁端部に煤が付着し、灯明皿である。

(図74-10)も柿釉土師皿である。(8)と同じ。(9)と同じく口縁端部に煤付着。

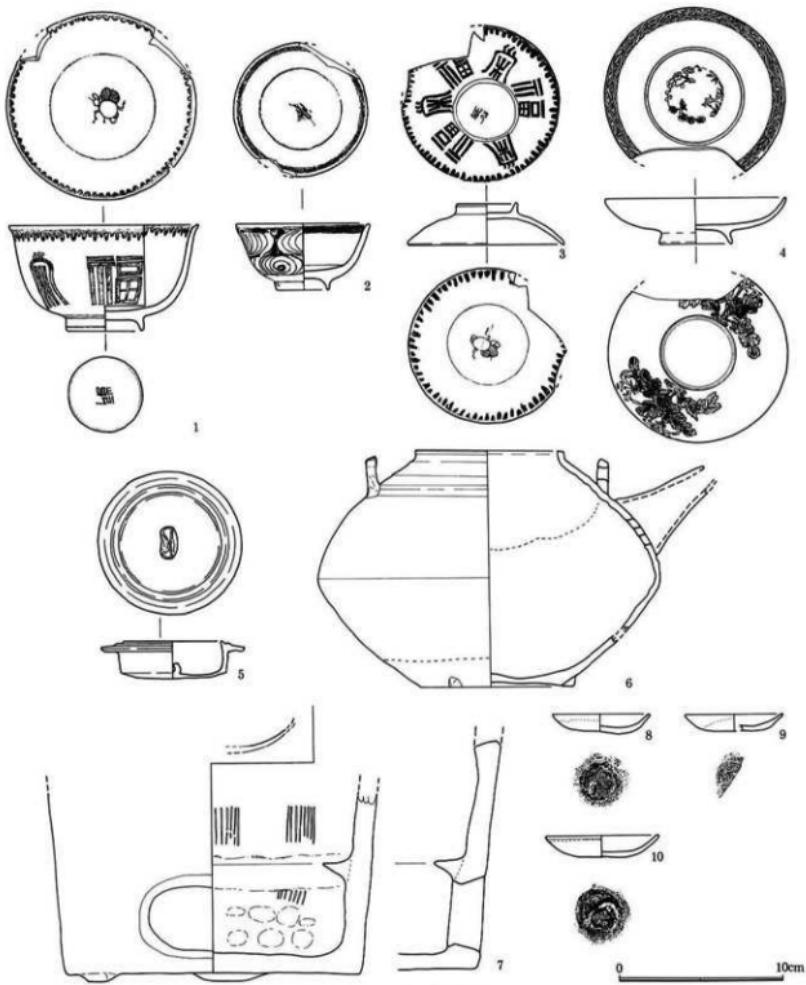


図74 2面溝7出土遺物

3面

陣屋築造の過程を示す遺構の他に、それ以前の耕地の痕跡ものもある。しかし、遺構内出土遺物には18世紀以降のものもあり、その頃まで存続していた面と思われる。

落ち込み1 TAトレンチ西側で外堀の屈曲部分を造成するために埋め立てられた自然地形の北側の肩である。下層にラミナのある流水堆積層、上部はブロック土で埋められる。

溝1～3 落ち込み1がその北の肩となる自然地形の南の肩は、ほぼ溝1・3の南側の肩に対応する。

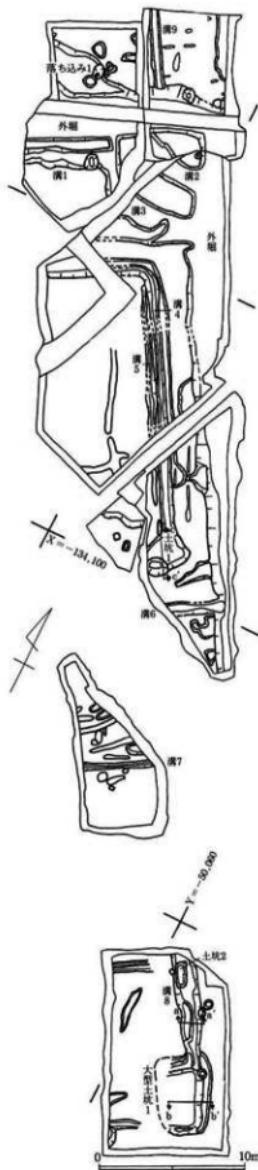


図75 3面平面

その北側に土盛りをし、外堀の輪郭のような状態である。その後、溝2で東側へ排水し、最終的に溝1～3もブロック土で埋めているようである。陣屋造成時の様相を示すものと思われる。どの溝も30cm前後の深さである。

溝3から鉄陶器が出土している(図77-2)。一部に注口状に張り出す部分があり、汁次のようなものか。内外面回転ナデだが、内外からの強いコビオサエで胸部を不整形に凹凸させる。内面に釉はなく、N6/0(灰色)を呈す。

溝4・5 溝4は南西から来て直角に曲がり、外堀と平行して伸び、土坑1に取りつく。深さ30cmほど。溝5は4に切られ、一部しか現存していないが、同じような形であったと思われる。深さ15cmほど。溝4は、外堀につながる枝が出る。外堀との間の幅は110～60cm。注目できるのは、これらの溝の周囲に、同じ方向性を持った鋤溝がある事である。南西側には畦畔の痕跡もある。鋤溝は土壌の想定される部分にも存在するので、これらは陣屋以前の耕地区画が存在した。つまり、陣屋以前に、同じ方向の耕地区画が存在したか。

溝5から染め付け小皿が出土(図77-1)。見込みの五弁花文はコンニャク印判である。高台端部のみ釉剥ぎ取り。

土坑1 溝4が開口する、径1.5m～1mの不整形な土坑。深さは50cmほど。溝4との関係から見ると、排水がこの土坑に溜まり、水が増え、溝4まで滞水すると外堀へ排水される形が考えられる。

溝6 外堀に開口する幅50cm、深さ20cmほどの溝。この溝と土坑1の間に屋敷地の境が存在するか。

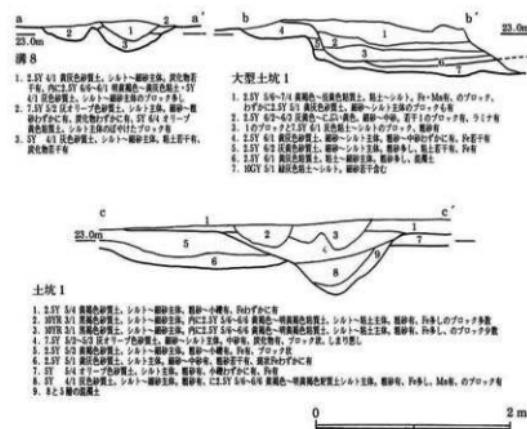


図76 3面溝8・大型土坑1・土坑1断面

溝7 外堀と直角の位置関係にあり、幅20cm、深さ10cm弱の溝。

溝8 外堀と平行し、大型土坑1に取りつく、幅90cm、深さ30cmほどの溝。溝の底部に長さ90cm、幅50cm、深さ50cmほどの土坑2がある。下部にシルト～細砂層があるが、上はブロック土で埋没。

溝8から染め付け鉢が出土（図77-3）。口縁は7弁に復元される花弁状である。高台端部は釉剥ぎ取り。見込みの五弁花文にはコンニャク印判がみられる。高台内には「大明年製」の銘と針支えが一個あり。

大型土坑1 南西辺が攪乱されているが、推定幅190cm、長さ280cm、深さ50cmの長方形の土坑。15cmほど粘質土が堆積した後、ブロック土で埋没。埋土上面に径40～80cm、深さ10～20cmほどのブロック土のかたまりを多数検出したが、これは土坑を埋める際の、土一杯分の単位であろうか。この土坑は水溜めと考えられるが、下の層はあまり、有機物を含まず、比較的短い期間で埋没か。廃棄土坑としては遺物が少ないのである。

出土遺物は以下のとおり。

（図77-4）は染め付け碗。高台端部は釉を剥ぎ取り。高台内に白釉で文字を書くようであるが判読不能である。

（図77-5）は青磁碗。高台端部は釉を剥ぎ取り、胎土目あり。外面に鉄釉の描線あり。

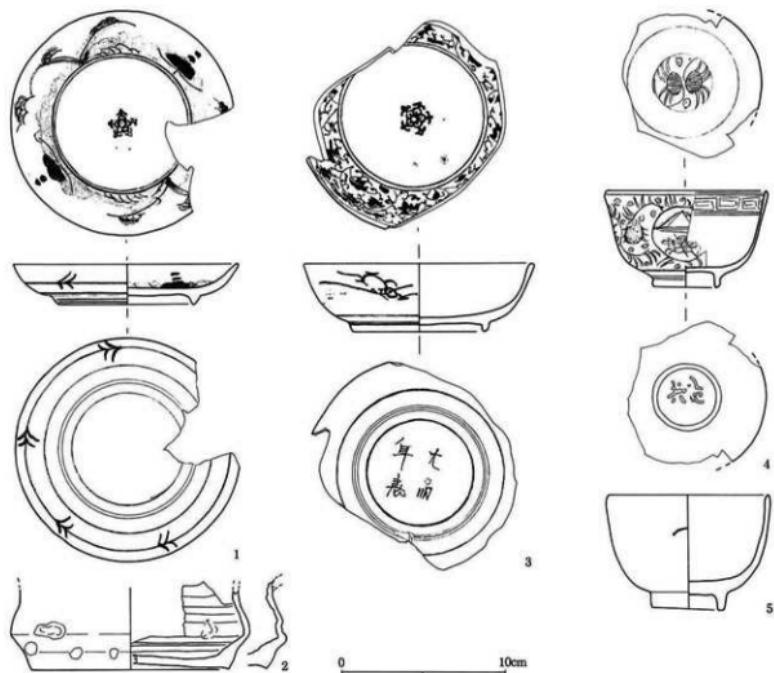
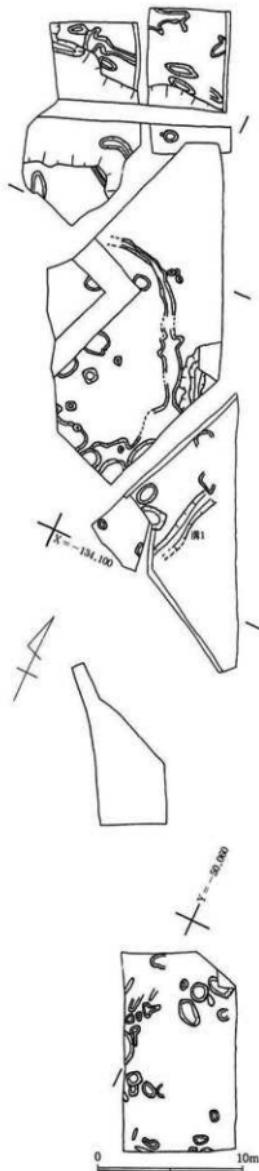


図77 3面溝5・溝3・溝8・大型土坑1出土遺物



4-1面

陣屋造成以前の面で、陣屋造成時の盛土や整地土と、それ以前の耕土らしき層を取り去った状態である。低位段丘構成層の上部を覆う黄褐色粘質土系の層を基盤とする。

上の面と違い、自然地形の凹凸が少し目立ってくる。但し、やや高い部分は陣屋造成以前の耕地化の際に削平され、比較的フラットな面を成す。

周辺の遺跡の調査成果から見ても、古墳時代後期から平安時代ぐらいの時期であろう。

自然地形としては調査区北側の7A・9Aトレーニチではほぼ東西に走る自然流路が全容を現す。

幅約5m、深さ60cm程で、3面落ち込み1の断面からみても常時水流があった可能性が高い。

流下方向は、東へ流れ、東南の南門前池となっている開析谷に流れ込むのか、東の高位段丘から流れてきて西に向かうのか、今一つ明確でない。

他に5Aトレーニチの南端に南へ下がる凹地があり、6Aトレーニチの南東側は疊を多く含む層が露頭しているところから、削平以前は比較的高い部分であったと推測される。

人為的な造構として確実なものは、鋤溝群と不定型土坑群がある。

鋤溝群は自然流路の北側と1Cトレーニチの西側に見られる。

特徴的なのはそれらが東西南北の正方位を指向している事で、正方位を基準とした耕地画の存在を示唆する。

3面で陣屋造成直前に既に陣屋の方位性と同じ耕地画が存在していたと思われる事と対照を成し、低位段丘上にも条里制地割りが存在した時期があった可能性を提起する造構である。

不定型土坑群は長径2m前後の梢円形に近いものと、径70~80cmほどの円形に近いものがある。

5Aトレーニチ南側の凹部、6Aトレーニチの北西半と、比較的に低く削平を免れた部分で検出された。埋土に黒色粘質土系の土をブロックなり、ラミナ状なりで含むのが特徴である。

これらは下面の4-2面から形成が始まり、5Aトレーニチで見ると、凹部が埋没していく各段階で掘り続いているのが分かる。

麻田藩陣屋跡と重複する螢池遺跡のここから南東部分で集中的に見つかり、土壙墓群と判明しているものの一部である。

この部分では遺物は出土しなかったが、周辺の不定型土坑の年代から見れば、古墳時代後期から奈良時代にかけてのものであろう。

本面から下は、実質は重複している螢池遺跡として捉えられる。

図78 4-1面平面

4-2面

4面からさらに、黄褐色粘質土系の二次堆積層を除去した面である。礫や砂粒をかなり含み、風化礫もかなり見られる層が露頭するので、下位段丘層上部の風化層が基盤となっていると思われる。自然地形の浸食痕が見られ、おおまかな傾向としてそれらは北東から南西へ抜けていくようである。

遺構として確実なものは4面から見られる不定型土坑群の古い段階のものが見られるのみである。その事から考えると、古墳時代後期とそれ以前の面と言える。

(3) 小結

外堀内側の調査について、古いほうから年代順にまとめておきたい。

先ず調査区内では、密集不定型土坑（土壙墓）群の形成が始まる。これがおそらく古墳時代後期である。そして、低位段丘平坦面上の二次堆積が進むなかで、その形成は続き、奈良時代まで継続する。立地としては平坦面のなかでもやや凹地となった低湿な部分に集中する傾向がある。

奈良時代から中世までの間で、この部分も耕地として開発される。その際、やや高い部分は削平される。地割りを正方位にあわせた区画が存在したようで、条里制地割りが下位段丘上に施行された可能性もある。ここまで麻田藩陣屋跡というより、蓄池遺跡として捉えるのが正しい。

その後、陣屋の繩張りを規定したと思われる西に傾いた方向性を持つ地割りが施行される。そして、江戸時代に入り、青木氏一万石麻田藩の根拠地として1615年（元和元年）に陣屋が置かれ、1628年（寛永5年）頃には陣屋が整ったと言われている。

陣屋の外堀は元々の自然地形をある程度利用し、整形して作られている。陣屋北東辺の南東側で突出部が設けられたのも、それ以前にあった自然流路を利用したためと思われる。また、外堀への給水は、それ以前から幹線的な水路であっただろう待兼山の高位段丘から伸びる水路で行い。外堀内は常時ある程度の水位を保ちながら水が流れているようである。

造成当初はかなり平坦に整地されたようで、調査区内でもほとんど高低差はない、しかし時期が下るとかえって藩主邸に近い北西側が高くなる傾向がある。

今回、外堀に沿った土塁は確認されなかったが、存在した可能性はかなり高く、その裏にあったと思われる排水溝からみれば、少しずつ拡張されてきたようである。また、外堀が屈曲して北東へ張り

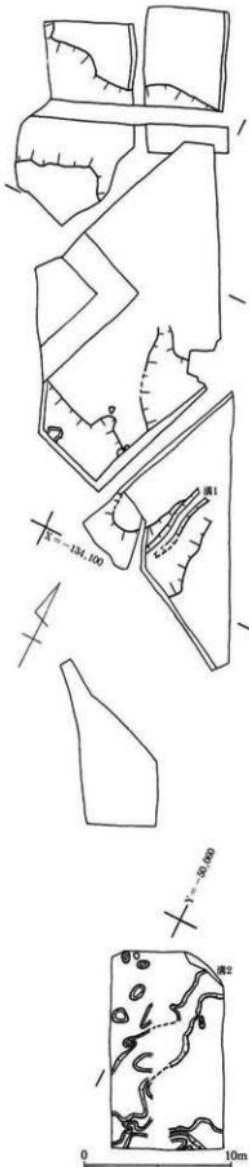


図79 4-2面平面

出す部分は土塁の幅もひろく、最終的に竹藪になっていた可能性がある。

今回の調査地点は外堀にそった藩士の屋敷地であるが、建物の痕跡は確認出来ず、おそらくその裏庭のような部分であると思われる。絵図面から見て3軒の屋敷地がならんでいたようだが、丁度その屋敷地の境を示すような遺構の分布も見られる。

またある時期はその屋敷地の裏庭部分で畑を作っていた可能性もある。

陣屋の東隅にあたる部分は早い時期に大型土坑が掘られる他、外堀と同じような深さで滯水状態になるはずの溝が掘られるなど、やや特色のある部分である。この部分は古い絵図面で一軒の屋敷地だったのが幕末までに4軒分の屋敷地に細分されている。

外堀は何回か掘りなおされ、維持されていたようだが、その場合外側の肩を削り、内側の肩には土盛りで補修する傾向があるようである。また、次第に外堀の底のレベルが凹凸が激しくなる傾向があるが、これは外堀に面した屋敷地毎に補修・維持の仕事の単位が決まっていたため、屋敷地境の部分が浅く残されるような形になったとも推測できる。

陣屋は明治6年(1874)に廃藩置県に伴い破却されたが、その後この地は再び耕地になる。そして鉄道開通以後住宅地化し、第2次世界大戦時にはほとんどが焼失するが戦後復興し、駅前の商店街として現在にいたる。

なお、陣屋存続期の遺構面の各時期は3面が江戸初期から18世紀、2面が18世紀から19世紀前半、1面が幕末から明治と考えられる。

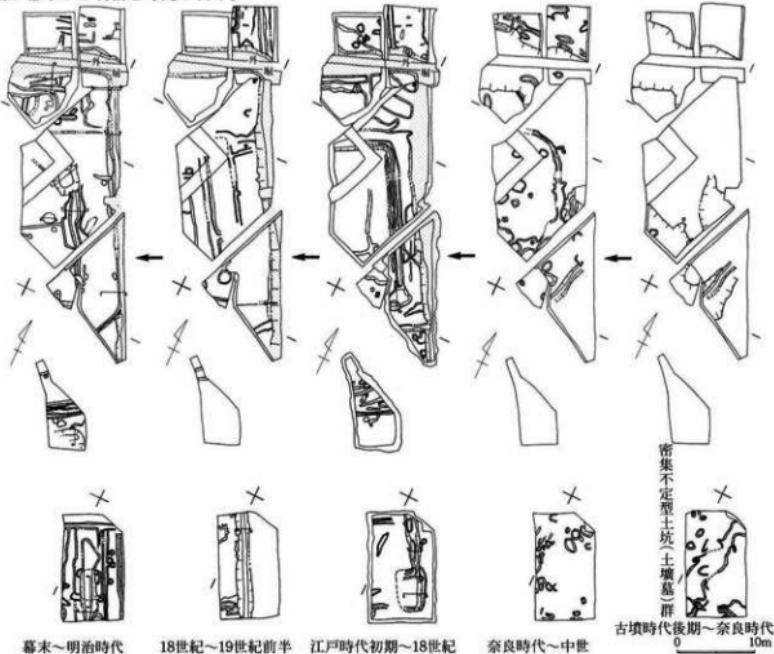


図80 陣屋外堀内側の変遷

4. 麻田藩陣屋跡（3）の調査成果

（1）基本層序

調査地点が段丘崖の崖面であり、現在の住宅造成以前からかなりの盛土が行われていたようである。そのため、結局は確実な下位段丘層は一切確認出来なかったが、一応1～3層に分けた。面は1面が1層の上面である。

1層 場所により色の変化が激しいが、基本的に黄褐色砂質土系である。主体粒子はシルトであり、粗砂から小礫を多く含む。酸化鉄あり。1面は比較的に平坦である。

2層 これも色の変化が激しい。基本的に褐色砂質土系、粗砂から小礫を含む。1層が埋めている傾斜地の下層にあり、2面は1層を取り除いた部分で段差を成す。

3層 基本的には黄褐色粘質土系、粘土主体、粗砂含む。3面は1A・1Bトレーニチで南西側に激しく落ちていく。1Cトレーニチでは3層が存在せず、段丘疊層の二次堆積らしき砂や礫の層が下部に見られる。

1Bトレーニチでは1面より下で、各層が北西に向かい落ちていくが、3面以降、現在住宅の玄関の階段を作られている部分で、切り通しのようなものがあったためと思われる。ここでは3面が落ちていく部分の直上に瓦を多く含む層が厚く堆積しており、その瓦から、埋没時期が現代と考えられる。

各層の包含遺物は以下のとおり。

盛土内出土の遺物を2例挙げる。（図83-1）は白磁の手塩皿片である。平面形は丸みを帯びた隅丸長方形になるものと思われる。外面に蓮弁をヘラ彫りし、高台は貼り付けで、その端部のみ釉を剥ぎ取る。

（図83-2）は鐵刀である。模造刀かどうかは不明。両刃刃造りで、鉤は直線的、棟は断面形三角状に山を成す。柄は関から身部中程まで、関部は刃部側はわずかに緩くすぼまる、棟側に半円形のくぼみがある。茎部の目釘孔は1個で銅製の鋸頭覆をつけた鉄製の目釘が遺存する。

（図83-3～14）は2層出土である。（図83-3）は染め付け小皿である。口縁には口銹。外面には蓮弁がヘラ彫りされ、その1葉分の口縁が直線的になり、平面的に14角形を呈す。高台端部のみ釉剥ぎ取り。見込みの文様は遠景に山、湖畔の松下に庵である。

（図83-4）は鉄釉陶器蓋である。釉は上面のみか

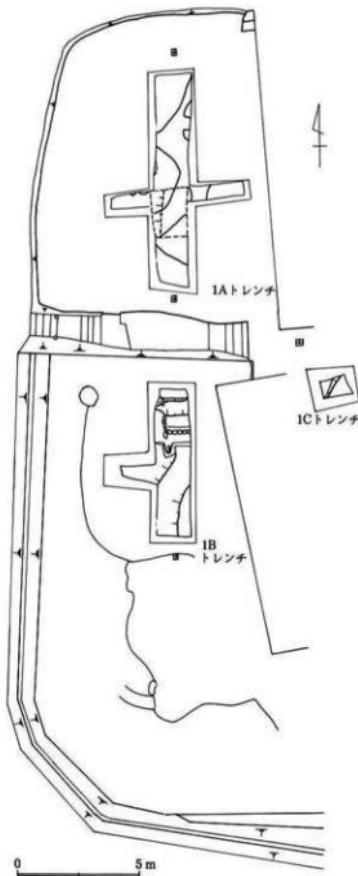


図81 トレーニチ位置・平面

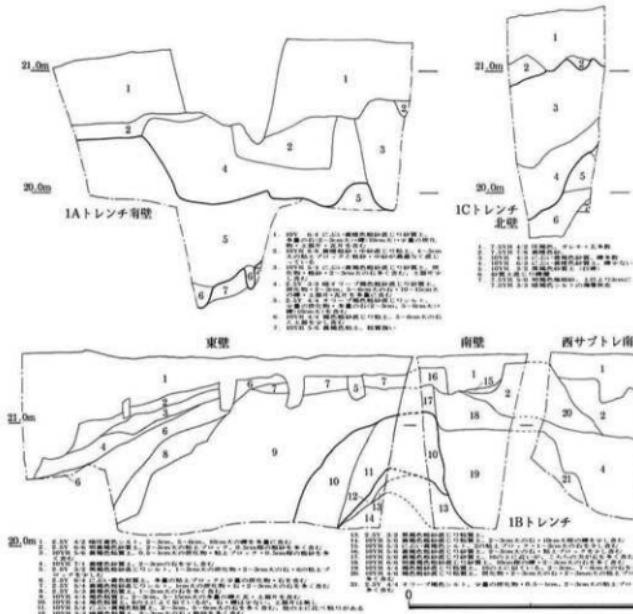


図82 1A・1B・1Cトレンチ断面

かる。上面は軽い回転ナデ、下面は回転ヘラケズリ後回転ナデ、底部は糸切り後ナデ。胎土は2.5YR4/4(にぶい赤褐色)を呈す。

(図83-5)

は青磁蓋である。軸は上面から側面までかかる。上面と側面の角を回転ヘラケズリで面取り、他は回転ナデ。下面の周縁部のかたよった位置に2カ所、細長い胎土目がある。

(図83-6)

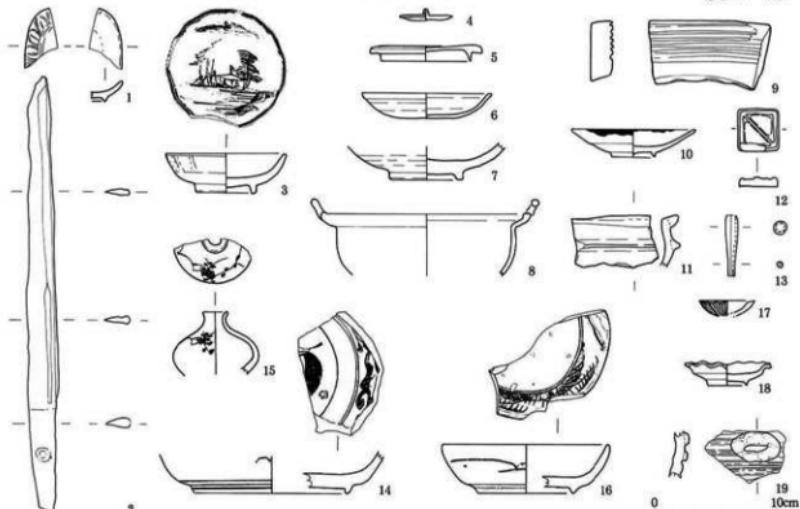


図83 1Aトレンチ盛土・2層・1Bトレンチ2層・3層出土遺物

は施釉陶器小皿である。釉は内面から外面口縁よりやや下まで及ぶ。内面は回転ナデ、外面は上半に回転ユビナデ、下部はヘラケズリ。釉は5Y6/2(灰オリーブ色)、胎土は10YR6/3(にぶい黄橙色)を呈す。(図83-7)は陶器碗である。内面は釉、外面は露胎で回転ヘラケズリ、見込みには3カ所の胎土目があり、中央に降下溶着したものを削り取った痕を残す。釉は灰釉であり、胎土の色は10YR6/2(灰黄褐色)を呈す。(図83-8)は施釉陶器鍋である。内外面とも施釉で、蓋受け部のみ釉剥ぎ取り。釉は10Y7/2(灰白色)、胎土は2.5Y6/6(明黄褐色)。(図83-9)は瓦質土器である。一端は直線的に伸び、もう一端は湾曲していく、帯状の部分であり、一つの面に6本の沈線が平行して走る。何の部分かは不明。(図83-10)は土師器高台皿である。内面から外面上半は回転ナデ、外面下半は回転ヘラケズリである。口縁部にタール状の煤が付着し、灯明皿に使用されたものと思われる。(図83-11)は土師器で、鍔付きの焰烙の破片か。口縁部に把手の一部が残存。全体に回転ナデだが、鍔より上の外面にヨコハケの当たり痕を残す。胎土には1mm弱の長石・赤色粒を若干と0.5mm以下の石英粒を多く含む。(図83-12)は泥面子である。型押して、升形を現す。(図83-13)は銅製の煙管の吸い口である。内部に筒部の簾竹を残す。(図83-14)は染め付け鉢である。高台端部のみ釉剥ぎ取り、見込みに胎土目が一つ残存する。

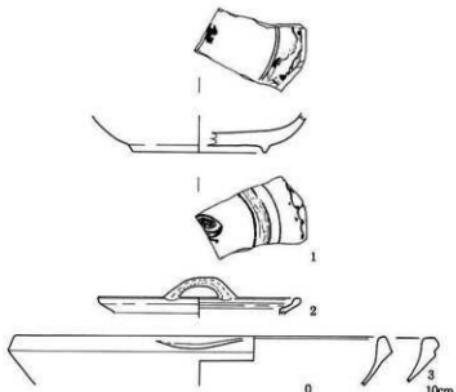


図85 1Aトレンチ1面土坑1出土遺物

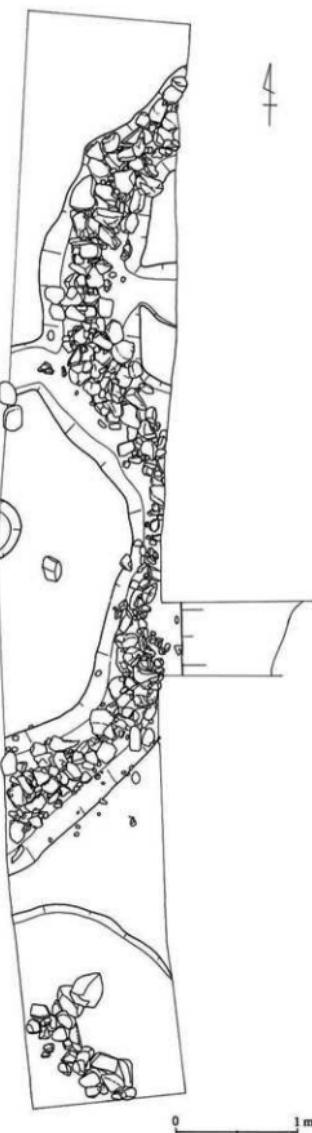


図84 1Aトレンチ1面石列

(図83-15～19)は3層出土である。(図83-15)は染め付け油壺である。釉は外面から内面頸部あたりまで。内面は回転ユビナデ。(図83-16)は染め付け鉢である。見込みに胎土目が2カ所残存する。口縁端部のみ釉剥ぎ取るが、その周囲に砂が付着する。(図83-17)は白磁紅猪口である。内面から外面上半まで施釉、外面には菊花状の刻み目が入る。(図83-18)は施釉陶器手塙皿である。外面下半回転ヘラケズリ、口縁は波状に折り曲げる。高台とその内側は無釉。釉は10Y7/2(灰白色)、胎土は10YR7/4(にぶい黄褐色)を呈す。(図83-19)は鉄釉陶器で甕か。沈線の巡る胴部に梢円形の輪にした粘土紐をユビオサエで貼り付ける。内面は釉だれがあるが無釉。胎土は7.5YR7/3(にぶい橙色)を呈す。

(2) 遺構と遺物

基本的に各面で南西方向への落ちがみられるが、その他は、1Aトレンチ北東側張り出し部で北東への落ちが、1Bトレンチ北西側で北西への落ちがあり、1Aトレンチ1面で石列状に疊のつまつた溝が見つかった以外、顕著な遺構はない。

1Aトレンチ1面石列は、「S」字状の溝に中疊～大疊が多く詰まった状態のものである。二つの溝が枝状に取りつく。石の並びに規則性はない。また、疊の中にコンクリートの付着したものがあった事から現代のものと思われる。

その北東側で、トレンチ突出部において北東への落ちを確認し、肩がやや弧を描き、底が丸みを帯びるところからそれを1面土坑1とした。出土遺物は(図85)である。

(図85-1)は染め付け鉢で、高台端部のみ釉剥ぎ取り。見込みにコンニャク印判の五弁花文あり、高台内部に渦福文がある。

(図85-2)は鉄釉陶器鍋で、蓋受け部のみ釉剥ぎ取り。胎土は2.5Y7/4(浅黄色)を呈す。

(図85-3)は土師器焙烙で、内面から立ち上がり部外面まで回転ナデ、底部外面は型押しのままで煤が付着する。

(3) 小結

陣屋の南西端にあたり、下位段丘崖に接する部分があるので、陣屋存続期は斜面のままであったと思われる。現代になってから擁壁を立ち上げ、大規模に盛土して宅地にしたのであろう。

1・2層はおそらく、その時の盛土であろう。わずかに3面がある程度古い地形を止めているとも考えられるが、それでも、1Bトレンチの北西側の落ちから見て、1A・1Bトレンチ間に切り通しのようなものがあった事になり、陣屋の絵図面にはなく、また建物の配置から、あった可能性も少ない事から、陣屋存続期の地形とは思われない。

出土遺物から見ても、江戸時代としても良い遺物も多いが、大量に出土した瓦にわざながら電気窯焼成らしきものが含まれる事から、古い時期に遡るのが難しい。

結局はこの部分は陣屋の外側で、低位段丘崖法面にあたり、調査の必要性は薄いと判断した。

絵図面などでも陣屋のあった頃は、この段丘崖を下りていく道ではなく、おそらく、かなり急傾斜な崖面であったようで、現在、宅地の南西側に接している道までの間に、畠地として若干の耕地があったようである。おそらく、陣屋破却後に交通の便の為に道を付けるのに切り通しと盛土が行われ、さらに住宅地の造成の際、さらなる盛土が行われていったのであろう。

5. まとめ

今回の調査では、初めて麻田藩陣屋の外堀が調査対象となった。外堀の規模、造成過程やその後の変化を明らかにできたのは重要であろう。内側の屋敷地は、建物は検出されなかったが、その裏庭の利用状況を知る事ができた。外堀内側の土壌に關しても、そのものを検出する事は出来なかつたものの、存在した可能性が高い事を示唆する資料が得られ、その幅なども遺構面毎に変化を追えた。

それらの成果を項目ごとに以下にまとめてみる。

陣屋の立地

陣屋の立地の最大の要因は下位段丘平坦面の南西端に位置する麻田の集落を北から覆い、城下町のように取り込む事であったと思われる。その際、麻田の集落は段丘崖と開析谷が自然の外郭線となる。陣屋南側のラインが比較的複雑になるのは、麻田の集落の元々の屋敷地とのかねあいであろう。

下位段丘平坦面においては外堀の外で、北西と南東に走る開析谷が二次的な防御ラインとなる。北東側に關しては高位段丘崖直下から、緩斜面帯が南西方向へ傾斜しているが、明確にそれを避け、南西に下がりきってから、また少し上がり始める部分に外堀のラインを設定している。

陣屋北東辺の南東隅に突出部を設けた事は、一番長い、この辺の防衛を強化する為であろう。

外堀

外堀はある程度自然地形を利用し、掘削・盛土整形で作られる。その給水は幹線的な用水路を用い、外堀が水利体系の一部に組み込まれている。つまり、外堀の中は絶えず水が流れていると思われる。

補修では、内側は土を貼り、外側は削り込む傾向があり、若干、外側に拡張していく。また、外堀底部のレベルの変化から、浚渫などは、外堀に接する屋敷地が作業単位になっていた可能性がある。

屋敷地

屋敷地には裏庭が存在した。ある時期にはそこで畠などをしていた可能性がある。各屋敷地からの排水は溝や土管で外堀に行っていた。溝などの施設は各屋敷地で完結していたようである。

陣屋南東隅にあたる部分は大型土坑や、外堀と同じ深さでつながる溝など、特異な遺構が存在する。大型土坑は存続期間が短いが、廃棄土坑とも思われない。深い溝は、細かく分割されている屋敷地の集中的な排水溝であった可能性もあるが、やはり、排水の面で疑問が残る。

土壌

土壌本体は検出できなかつたが、外堀と平行する溝から、その存在を推定できる。それから見ると土壌の幅は途中で若干拡張されるようである。また、排水溝などで分断されていた部分もあったようだ。外堀突出部の北西辺は、絵図面で蔽とされ、竹林の盛土のような土が、土壌状に盛られていた。

陣屋以前の遺構

螢池遺跡のものとしたほうが良いものである。古墳時代後期～奈良時代の密集不定型土壌墓群は南側で集中しているものの分布域の北東端がこの調査区にあたる。

鋤溝や畦畔の痕跡などを検討すると、正方位にのった耕地区画があった可能性があり、下位段丘上での条里制地割りの存在した可能性を指摘する事ができる。また、その後異なる区画となり、陣屋の方向性を規定する元となった耕地区画が、陣屋に先行していた可能性もある。

今後の問題

外堀沿いの土壌の確認、屋敷地の建物配置、屋敷地の区画の時期的変化、等が問題となろう。

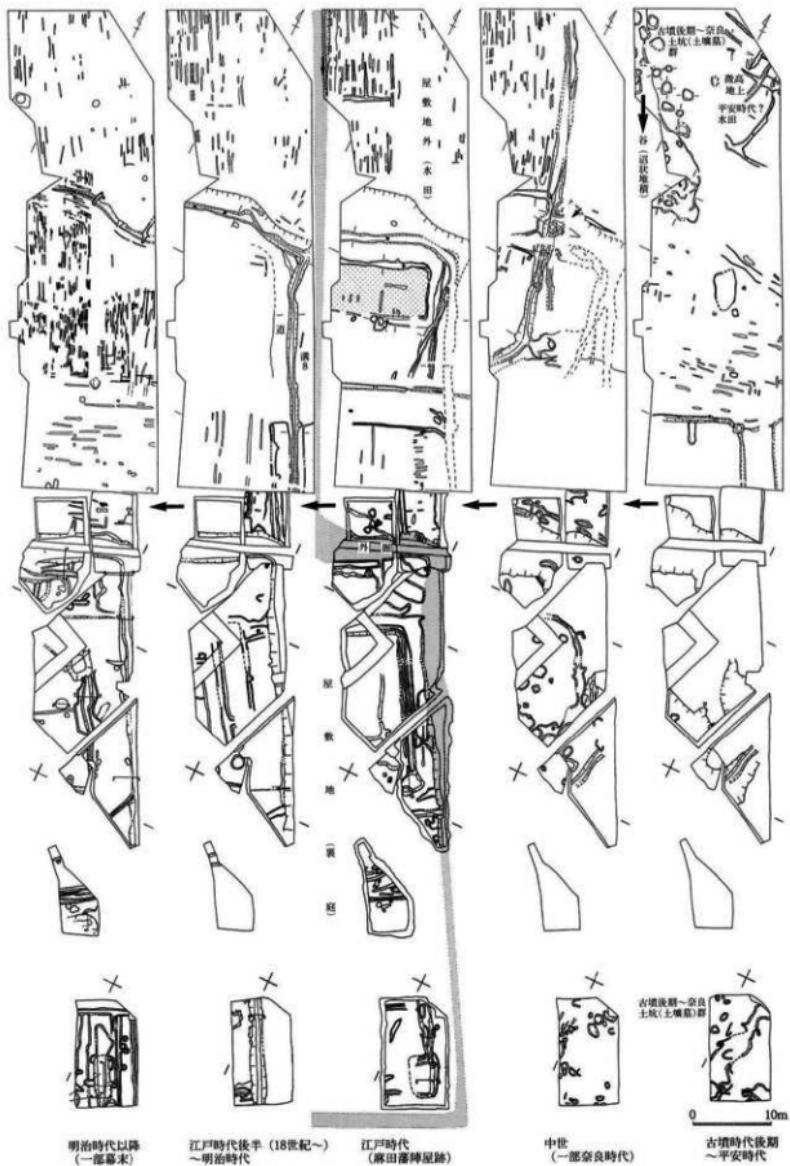


図86 陣屋外堀外側・内野野変遷

6. 付論 麻田藩陣屋の範囲の復元

（1）復元の材料

麻田藩陣屋の絵図面は現在2枚確認されている。一枚（図87・左）は豊中市図書館所蔵のもので、（以後、便宜的に「図書館図」と呼ぶ）書写年代等は不明のものである。紙があまり劣化していないので、模写されたものの可能性もある。陣屋の外郭線や各屋敷地などが示され、道路、堀、水路なども描き込まれている。門、堀、建物が単純な側面觀か鳥瞰図法で簡略に描かれるが、鳥瞰図法の方向性は統一されていない。またそれぞれの絵は、道側から見た方向に合わせて配されている。他に、井戸の位置が「井」の字で示され、外堀の内側には、石垣を思わせる格子文がある。陣屋外郭線の各辺や、屋敷地には、長さを示す書き込みが「〇間〇尺」とあり、それが陣屋の復元の有力な材料となったのであるが、ある外郭線の一辺には「三拾九間半」と書かれているのに、その内側の各屋敷地の幅の合計は41間2尺となるなど、おかしな所もあり、あまり正確に測られたものではないようである。あと、各々の施設や屋敷地には、その性格や所有者を示す紙片が貼り付けられている。屋敷地では「家老職 宮本邸」と、家名の前に役職も付く。ただしこれらの紙片は絵図面の紙よりさらに新しく、横書きで左から書かれてるので、かなり後から貼り加えられたものかも知れない。

もう一つの絵図面（図87・右）は小谷英一氏所蔵のもので、「日本城郭大系」にその写しが掲載されている（以後、便宜的に「城郭大系図」と呼ぶ）。元の図は、明治期に麻田藩の元藩士が、明治6年の陣屋破却直前の状況を、記憶を元に写したものであるらしい。堀や屋敷地の区割りが示され、大きな屋敷地は建物の範囲もおおよそ示されている。藩主邸のみは内部の見取り図まで示される。各施設の名や、大きな屋敷地の所有者の家名などが書きつけてある。

復元の手順としては、この2枚の絵図面を、現代の地図上に当てはめた。先ず、長さの記載のある図書館図の方をその長さを手掛かりに当てはめ、それを元に城郭大系図をあてはめた。なお、現代の土地区画の内、古い地籍図にない土地区画は原則として、陣屋のラインに当てはめないようにした。

絵図面上の長さや角度、また記載されている長さなどが、実際にはかなり適当であったので、作業者によって、復元案はやや異なるものになったのは後述するとおりである。

（2）絵図面の比較

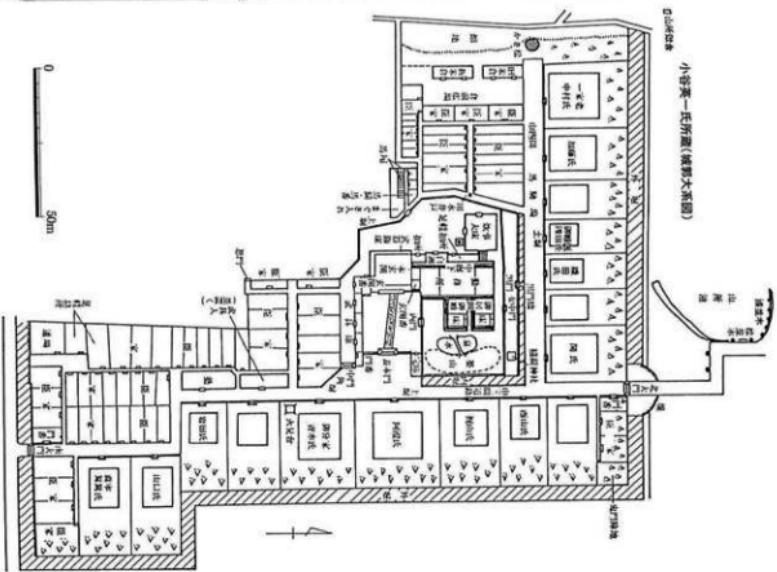
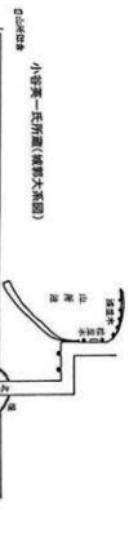
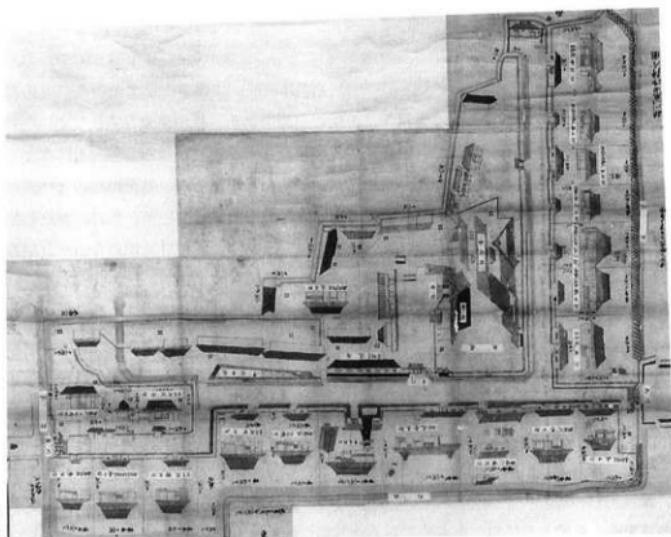
復元の前提として、2枚の絵図面を比較し、その共通点と異なる点を検証しておきたい。

2枚の絵図面とも、実際には西へ40度ほど傾いている陣屋外郭線の北西辺を北面とし、そこに開く門を「北（大）門」、南東辺に開く門を「南（大）門」としている（以後の記述の方位も、簡素化のため、これに従う）。また、外堀のラインはほとんど異ならないようである。他に、藩主邸の位置と、北門から藩主邸の東を通り、一度東に屈曲してから南門に至る道と、藩主邸の北側を西に伸びる道は、陣屋内的主要な道であったようで、幅はともかくも、その位置は異ならない。

また、藩主邸北側の東西の道は西端（実際は南西端）で低位段丘崖に突き当たるが、城郭大系図ではその部分に点を打ち、「かさ松」と記載がある。図書館図でもほぼ同じ位置に点が打ってあり、この「かさ松」を示していると思われる。いかなる意味を持つのかは分らないが、この笠松が、どちらの絵図面にも記されるような、特別に意識されたものであった事を示唆するようである。

両絵図面で一番異なる点は、城郭大系図の方に小さな屋敷地が密集している部分がかなり多い事である。中には図書館図では一つの屋敷地である部分が細かく分割された屋敷地になっているものもある。

臺中市圖書館所屬(圖書館圖)



これは、図書館図の状況の方が、城郭大系図より、確實に古く、分家などが進んで、家臣の数が増えたか、陣屋への家臣の集住が進んだ結果、幕末には、城郭大系図のような状況になったものと考えられる。小さい屋敷地の密集は、南門付近では元の屋敷地を細分する形で行われ、藩主邸南側では、図書館図では窓のない、長い蔵のようなものなどが描かれている地点にも集中している。但し、この部分はその長い蔵のようなものが、長屋風の屋敷の表現であったかも知れない。もう一つの集中区は藩主邸の西側である。この部分は図書館図では、3軒の小屋風の建物と1軒の蔵風の建物があるのみの大きな空閑地のように描かれている。ここは、城郭大系図では、図書館図で3軒の小屋風の建物がある位置に、「馬屋」、「馬舎 馬番」、「まぐさ入れ」などの記載がある小さな区画があり、また、北側の東西の道が「馬馳場」と記載されている事からも、元々馬場であったのを臣下の家に分割し、北側の道を馬場がわりに使用するようになったものと推測される。

藩主邸もかなり大きく異なるようである。図書館図の藩主邸は、その描き方のため、実際の建物の配置が分かりにくいが、推定復元しえる建物の配置は城郭大系図とかなり異なる。まず確実に玄関の位置と聞く方向が異なり、図書館図で「会議所」とされている建物が城郭大系図ではない。図書館図の復元のしかたにもよるが、両絵図で変化が少ないと考えるやり方で行けば、図書館図の会議所がなくなり、その図の玄関の南側に、城郭大系図では本玄関が増設され、元の玄関が勤務所になったと考える事もできる。

（3）地図上での陣屋の復元

まず、地図上での陣屋の復元の手掛かりとなったのは藩主邸の位置が現在公民館となっている所に特定できている事と、絵図面の主要な陣屋内の道が、ほとんどそのまま現存している事であった。それにより、北と東の（実際は北西と北東）の外郭線はほぼ問題なく確定でき、東側の外堀は暗渠になった部分もあるが、現在も水路として存続している事が判明した。

ただし、やや問題となったのは陣屋が旧の麻田村と接していた南西部（実際は南側）である。その部分の陣屋外郭線は屈曲が多く、その屈曲の角度が絵図面では実際の角度と異なる可能性が高い事、また図書館図ではその部分でも長さの記載があるが、一部、長さの記載のない辺もあり、またその長さが完全には信用できない事などから復元を試みた合田・三宮両者の案がやや異なるものとなった。

結論から言えば、城郭大系図の方は、藩主邸をはじめ大きな屋敷地がかなり、分割されているものの外郭線や各々の屋敷地の境界などが、非常に良好に現代の土地区画に遺存しており、ほぼ問題なく復元出来たが、図書館図の方が、それ以前の状況でもあり、城郭大系図の状況までにどの程度の変化があるかという点で違いが出た。

合田は図書館図の陣屋西側の西と南の外郭線が、記載された距離と絵図面の表現から、城郭大系図に比べやや内側になるとえた。西の外郭線については、図書館図の黒点と城郭大系図のかさ松が同じ位置を示すとえるとこれと道の関係から、図書館図では黒点東側にあった道が城郭大系図では笠松西側にあり、この道を陣屋の西の外郭線とみるならば西側への拡張が考えられる。また、南西隅部と南の外郭線については、図書館図では南西隅部には屈曲がみられるが、城郭大系図では南西隅部がほぼ直角に曲がり、また旧米倉に加え新米倉がみられることから、南西隅部から馬屋に至る部分がやや南に拡張され、現在道路となっているラインになったと考えた。

三宮は藩主邸の西側にあたるその部分が、図書館図の時点では馬場であったと推測し、その3軒の小屋風の建物が、城郭大系図の馬屋などがある位置と同じではないかと考え、陣屋以前から存在した麻

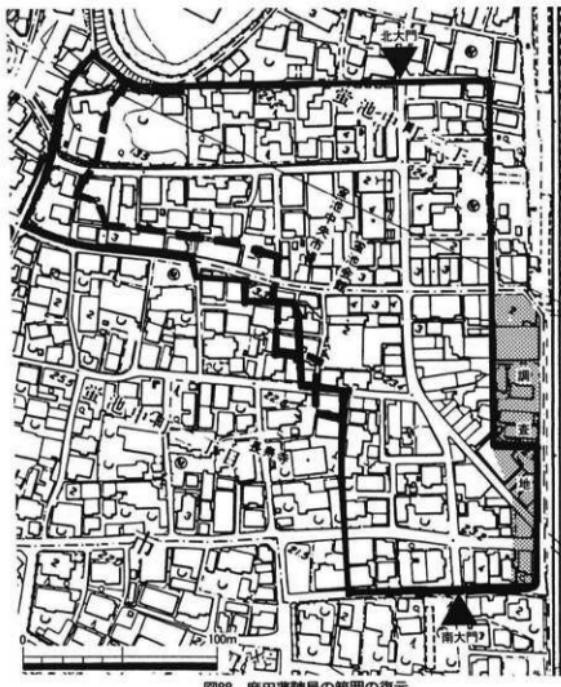


図88 麻田藩陣屋の範囲の復元

田村の範囲に向けての拡張はなかったと考えて、図書館図の時点で、現在道路となっているラインに外郭線が既に位置していたと考えた。

両者の案の主な違いは以上のようなものである。すなわち（図88）において、合田は図書館図（破線）→城郭大系図（実線）への陣屋の拡張があったと考え、三宮は図書館図から城郭大系図に至るまで実線の範囲であり陣屋の拡張はなかったとするものである。

なお、藩主邸の敷地の西側の境界は、2枚の絵図面ではかなり異なり、この点においても両者で意見が異なった。

合田は両絵図で馬屋と藩主邸の玄関の位置関係が変化しないとすると、両者を結ぶ線の南側にあたる部分が図書館図では屈曲しながら屏に囲まれ陣屋内に含まれるが、城郭大系図では藩主邸の玄関の南側には区切り線があり同部分は陣屋外となっており、この部分については図書館図から城郭大系図に至る間に縮小された可能性を考えた。

三宮は、図書館図の藩主邸の表現は、建物などが、南から見た鳥瞰図的表現と、北側から見た側面図的表現が、不整合なまま合わさっている特徴があり、そこから考えると、西側の境界も、実際は城郭大系図と異なる可能性を考えた。

(4) まとめ

今回のモノレール関連の調査では、(1・2)で、この絵図面から推定できたとおりの外堀を検出し、また、ある程度の屋敷地の境界も推定する事ができた。また地元の人からの聞き取りによれば、昔、公民館の裏で工事があった時、「せともんがたくさん出た。」との事であり、その位置は絵図面で藩主邸の「炊事 大床」と記されている部分と思われる。

なお、文献上で陣屋の普請に関する記載の有無を『大庄屋日記』（住吉神社蔵）をもとに調べた。同書には、例えば「亨保二十年はちがつ十八日、天氣、山所とんと石つミ普請、」などの記述があり、陣屋の北側に接する山所池（現豊中市立第18中学校）の普請の記録などが含まれるが、陣屋関連の普請に関する記載は見出せなかった。この点からみれば、三宮案が有利となろう。

現在、住宅が密集した地域ではあるが、今後の調査により、この復元案の検証がなされ、藩士の屋敷の構造や、そこでの生活の復元がなされる事が期待される。

最後に、参考までに麻田藩陣屋跡周辺の田地区画図を挙げておく。本図は地元の歴史に詳しい大東健一氏所蔵の青焼きの図面である。明確な年代は不明であるが、阪急電鉄宝塚線の軌道が破線であるため、明治末年以前の図かと考えられる。

註

- 1) 絵図の実見、撮影、掲載については、豊中市教育委員会柳本照夫氏のお世話になりました。記して感謝申し上げます。なお、同絵図および麻田藩陣屋については、下記文献を参照した。
豊中市役所1961『豊中市史』
豊中市教育委員会1986『文化財ニュース豊中』No.5
上田 一1984『城と陣屋シリーズ160号 摂津麻田陣屋（麻田藩古青補）』日本古城友の会
- 2) 新人物往来社1981『日本城郭大系』12巻
- 3) 麻田藩陣屋関連の文献については、豊中市史編纂室清水喜美子氏にご教示いただきました。記して感謝申し上げます。
池田市役所1992『池田市史 史料編⑨ 大庄屋日記（住吉神社蔵）』



図89 麻田藩陣屋跡周辺の田地区画（明治時代？）

VI 蛍池遺跡（3・4）

1. 調査の方法

今回の調査地区は、大阪府豊中市螢池中町一～二丁目地内で、阪急宝塚線螢池駅から大阪梅田方面へ約100mの、線路沿い西側の部分に位置する。これは平成4～5年度に調査を実施した螢池遺跡（1・2）の調査地区的すぐ北側の部分に相当する。螢池遺跡の範囲は、今回の調査範囲から南は当遺跡が立地する低位段丘を開拓する谷をせき止めた南門前池内までとなる。これまでの調査では、条里を意識していると考えられる耕作面に残る鋤溝痕、弥生時代中期～奈良時代の時期幅をもつ不定型密集土壌群、



図90 トレンチの位置

また、包含層内からは旧石器などが検出されている。

今回の調査は、平成7年度に螢池（3）としてモノレールの橋脚部分を2カ所、10A、11Aトレンチとして、また螢池（4）として南門前池南側堤防下のモノレールの橋脚部分を1カ所、12Aトレンチとして、平成8年度に螢池（3-2）としてモノレールの橋脚間および側道部分を13A、14Aトレンチとして実施した。設定されたトレンチは5カ所で、調査が行われた順にトレンチ名を付けているため、トレンチの並び方は北から11A、13A、10A、14A、12Aとやや変則的な配置となっている。ここでは、隣接する11A、13A、10A、14Aトレンチを合わせて螢池遺跡（3-3-2）として、12Aトレンチを螢池遺跡（4）として報告する。

調査は、盛土直下の現代耕作土下面から、隣接する麻田蓬陣屋跡とともに遺構の存在が予想されたことから、バックホーによる機械掘削の段階を現代耕作土層除去までとし、それ以下の掘削及び遺構、遺物の検出は人力により行った。なお11A、13A、10Aトレンチの東側は阪急電鉄の軌道と接することから、この部分に鋼矢板を打設した後調査にとりかかった。遺構、出土遺物の実測に関しては、座標杭を用いての平面・断面測量、平板測量を行い、不定型密集土壌群の全体遺構測量はトラッククレーンによる航空測量を行い作業の迅速化を図った。

2. 蛍池遺跡（3・3-2）の調査の成果

（1）基本層序

螢池遺跡の堆積層は大きく6層に区分する事が出来る。基本的には前回までの調査と同一であるが、地山の6層は、螢池遺跡の中では最終遺構面を形成する層であり、遺跡形成過程を復原する上でも重要なため、不定型密集土壤群が掘り込まれている地山の低位段丘構成層ではあるがこれも大別層の一つに加えた。低位段丘構成層は粘質シルト～粘土が主であり低位段丘疊層の風化層か風成層と考えられる。

今回の調査では土層の観察にあたり、基本的に南北方向はトレント西壁を、東西方向はトレント南壁の観察を行った。その結果、4層から下層、3面以下の面では、東から西に緩やかに傾斜してしていることが確認された。南門前池の西側の谷に向かっているようである。

今回注意された層は、4層及び4層と5層の間に介在する暗灰色系シルトである。今回の調査では両層が堆積する落ち込みが数カ所検出され、部分的に層厚は30cm以上あり、14Aトレントではラミナも確認することができた。ただし4層と暗灰色系シルトとの層境は曖昧であり、両層には鉄分の激しい沈着がみられ、また、両層は同質の堆積物であるということから判別は困難であった。分層は若干の疊の混入する量と粘質の度合を基準に行った。しかし、両層はおそらく同じ生成要因で形成された堆積物であり、両層の分層は、4層と4面の分離と4面の不定型密集土壤群の埋没した時点を決める事には有効だが、遺跡の環境復元には無関係な層とみられる。

層名、遺構面名は、1層掘削後の面を1面というようにつけた。

1層 2.5Y6/2灰黄色砂混じりシルト。中粒砂～中疊を多量に含む。4カ所のトレント全体に約10～20cmの層厚で存在している。（盛土及び近・現代耕作土・遺物包含層）

2層 10YR5/6黄褐色砂質シルト。Feと中粒砂～粗粒砂を多量に含む。耕作層。（近世耕作土・遺物包含層）

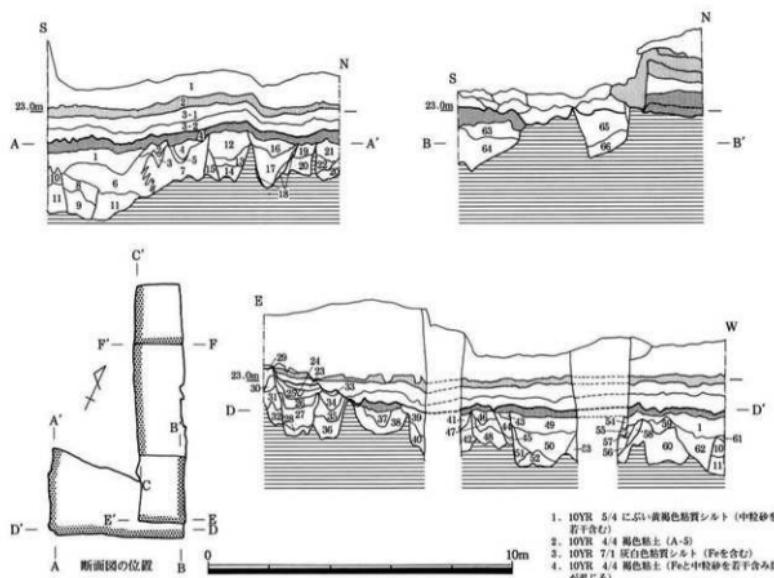
3-1層 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト。Mnと中粒砂～小疊を多量に含む。耕作層で今回の調査では瓦器片も含まれている。（中世耕作土・遺物包含層）

3-2層 5Y7/1灰白色砂質シルト。Feを含み中粒砂を多量に含む。瓦器片が共伴する。（中世耕作土・遺物包含層）

4層 10YR5/4にぶい黄褐色～10YR7/6明黄褐色粘質シルト。細粒砂～中粒砂を含む。水成堆積物層で、シルト～粘土が主な堆積物であるため、上層の耕作層から溶脱した鉄分が水と共に抜けずに沈着し全体的に黄褐色を呈している。4層そのものではラミナは見られないが、連続する5層の堆積中では明瞭に確認することができる。4面を検出する際に、4層を掘削する過程で遺構の輪郭がしだいに明確に確認できる事があるので、4層の一部は水成堆積物ではなく、5層の上部が鉄分の沈着などにより土壌化し4層と同化した部分があると考えられる。（古墳時代後期～中世包含層）

5層 10YR3/1黒褐色シルト～10YR5/1褐灰色粘質シルト。黄褐色シルトブロックを含む。不定型密集土壤の埋土。土壤の度重なる複雑な切り合いのために、本来の遺構切込み層がほとんど消失し、土壤内埋積土により一つの単一層になっているので便宜的に一層として扱った。

土壤埋土は大きく10パターンに分けられる。その中にはブロックで構成されるものがあるが、問題なのはそのブロックがどの土に由来するものかである。特に黒褐色ブロックとしているものはその由来が



1. 10YR 5/4 に近い褐色粘質シルト (中粒砂を若干含む)
2. 10YR 4/4 褐色粘土 (A-5)
3. 10YR 7/1 白灰色粘質シルト (Feを含む)
4. 10YR 4/4 褐色粘土 (Feと中粒砂を若干含み灰が混じる)
5. 10YR 4/6 褐色粘土 (Feと中粒砂を若干含み灰が混じる)
6. 10YR 6/1 褐色粘土 (Feを含む)
7. 10YR 6/2 明黄色粘質シルト (A-3)
8. 10YR 7/2 褐色粘土 (Mnを含む)
9. 10YR 4/1 褐色粘土 (Mnを含む)
10. 10YR 7/8 褐色粘土 (Mnを含む)
11. 10YR 7/8 褐色粘土 (Mnを含む)
12. 10YR 5/6 褐色粘土 (Mnを含む)
13. 7.5YR 5/1 褐色粘質シルト (B-1)
14. 10YR 6/8 明黄色粘土 (若干のFeを含む A-5)

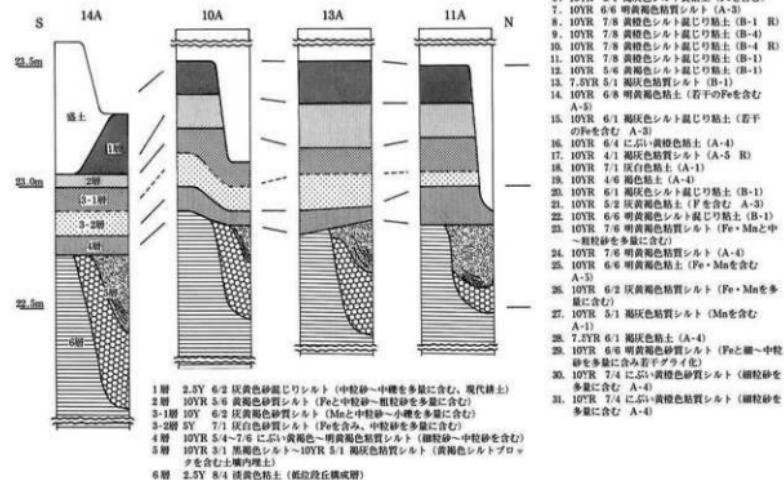


図91 10-11・13・14Aトレーニング断面・柱状図(1)

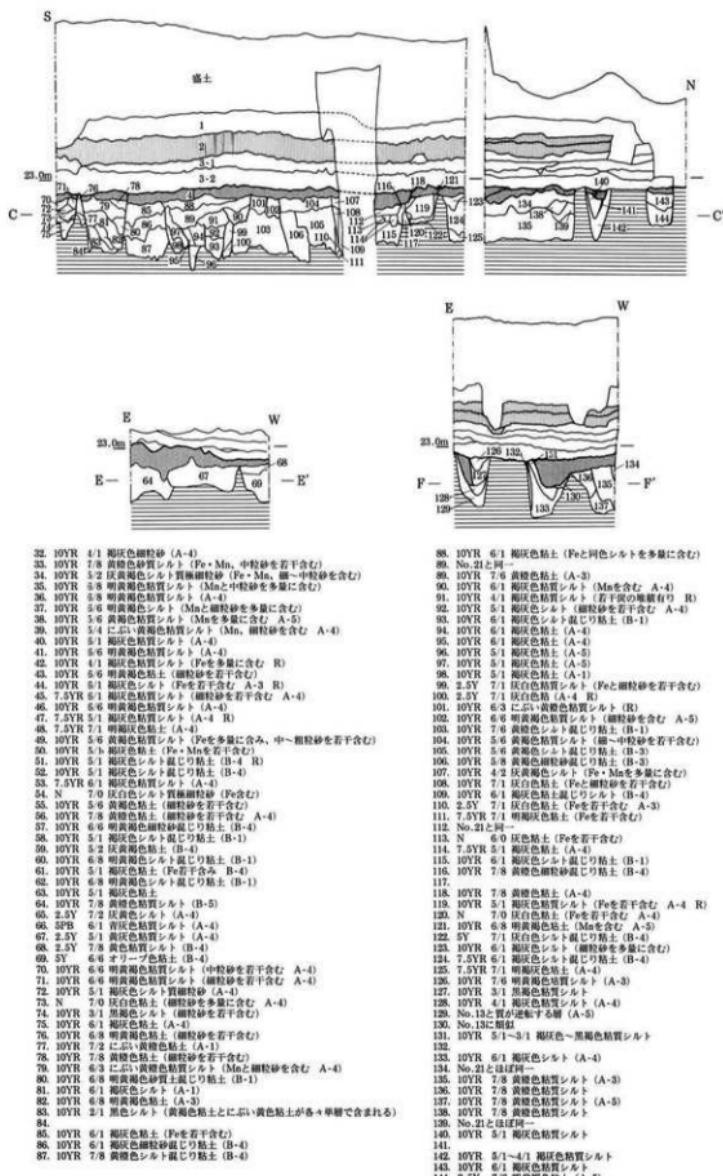


図92 10・11・13・14Aトレンチ断面・柱状図(2)

よくわからず、今のところ考えられるのは、レンズ状に堆積したラミナの確認できる土壌内の黒褐色土が、再掘削されてブロックとなり他の土壌に充填されている可能性である。また当時、現在では消失した黒褐色土層が存在していた可能性も考慮しなければならない。他の黄褐色ブロックは、低位段丘構成層を搅乱し充填した堆積物と考えられる。（古墳時代後期～奈良時代包含層）

ここで、不定型密集土壌群の埋土分類パターンを挙げておく。

A-1 (黒褐色系のブロック+黄褐色系のブロック+その他のブロック)

A-2 (黒褐色系のブロック+黄褐色系のブロック)

A-3 (黒褐色系のブロック+その他のブロック)

A-4 (黄褐色系のブロック+その他のブロック)

A-5 (その他のブロック)

B-1 (黒褐色系のブロック+黄褐色系のブロック+その他のブロック)

B-2 (黒褐色系のブロック+黄褐色系のブロック)

B-3 (黒褐色系のブロック+その他のブロック)

B-4 (黄褐色系のブロック+その他のブロック)

B-5 (その他のブロック)

R (黒褐色・褐灰色シルトがラミナ状に堆積)

以上のグループ分けは（図91・図92）の層序注記に対応する。

6層 2.5Y8/4淡黄色粘土。風化砂質化した礫を若干含む。部分的に風化礫が見えるレベルまで5層に搅乱されている。そのため前回までの調査で二次堆積とされていた低位段丘構成層土壌化層（黄褐色粘土）は部分的にしか残存していない。（低位段丘構成層）

(2) 遺構

遺構面は計6面を検出した。これまでの調査成果を踏まえて不定型密集土壌群が掘り込まれる面を主要な調査面としたが、その上面にあるいくつかの耕作面についても若干細かく面を分けて調査を行った。

調査が実施できた範囲が年度を進めて飛び石状になってしまったため、10A、11Aトレンチと13A、14Aトレンチで検出面が異なってしまったが、結果的に複数の遺構面を調査したことになり意義はあったと考える。耕作層は近い地域内でも層数が変化するため調査は困難であるが、今後の調査では基本層と遺構面の認識が共通した調査が必須であるといえよう。

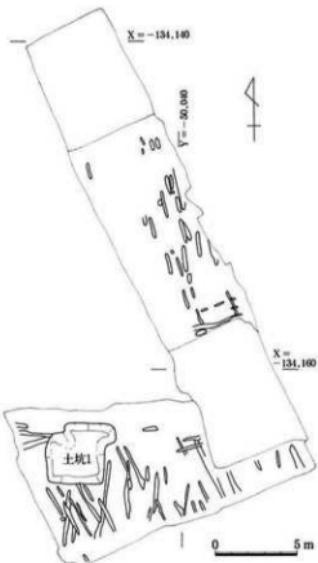
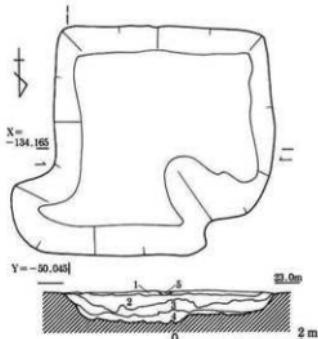


図93 1-1面平面



1. 10YR 6/2 淡黄色細粒砂混じり極細粒砂
2. 10YR 6/1 褐灰色細粒砂混じりシルト（若干の土器片を含む A-4）
3. 10YR 6/1 褐灰色細粒砂混じり極細粒砂（若干の土器片と細粒砂を含む）
4. 7.5YR 6/1 褐灰色細粒砂混じりシルト（若干の土器片を含む）
5. 10YR 5/1 褐灰色粘土（A-3）

図94 1-1面土坑1平面・断面

1-1面（図93）

1面は、1-1面をトレンチ全体で検出し、1-2面を11Aトレンチのみで検出した。

1-1面は近世から近代までの遺構が検出された。1層から掘込まれる擾乱が1-1面を大きく擾乱しており耕作に関する遺構の残存状況はあまり良くなかった。その擾乱に埋もれていた遺物は、瓦や陶磁器などの日常生活品以外に旧阪急螢池駅の立て替えに伴うと考えられる瓦石などが含まれていた。

その他1-1面からは、13Aトレンチを中心として現在の宅地区画に沿うような方向の鋤溝を、14Aトレンチを中心として、前回の1Aトレンチでも検出された麻田藩陣屋跡と同一の方向に並行に走る鋤溝を検出した。幅5~20cm前後、深さは2~4cm前後が残存していた。前者は1層の下層である現代までの耕作土に伴う耕作痕であり、後者は調査地のすぐ北側に麻田藩陣屋跡が存在したことから考えて、近世の麻田藩陣屋周辺に存在した耕作地に伴う痕跡と考えられる。

また14Aトレンチの西側で、変形凸形をした、最大長3.34m、最大幅3.12mで突出部の長さ3.24m、幅1.4mの土坑1を検出した。深さは52cmである。土坑内埋土の特に上層部分からは遺物が多量に出土しており、陶磁器の他に軒丸、軒平瓦片が出土した。

1-2面は先述したとおり、11Aトレンチのみで調査している（図95）。13Aトレンチ検出の鋤溝よりやや北に振れているが、同一の区画単位を示していると思われる。近代～現代の耕作痕と考えられる。それを裏付けるように、鋤溝切り込み層の1層からは大正の貨幣などが出土している（図104・105）。

2-1面（図96）

耕作に伴う鋤溝を多数検出することができた。1-1面では現代の耕作痕が多く残っていたが、2-1面では1-1面とは方向が異なる鋤溝を検出した。11A、13Aトレンチでは南北方向に、14Aトレンチでは引き続き若干西に振った麻田藩陣屋跡に沿った方向に確認できた。幅5~20cm前後、深さは2~4cm前後である。また10Aトレンチでは細い高まりが検出され、それを境に鋤溝の方角が変化している事から、高まりは畔の可能性が考えられる。近世耕作面の痕跡であろうか。

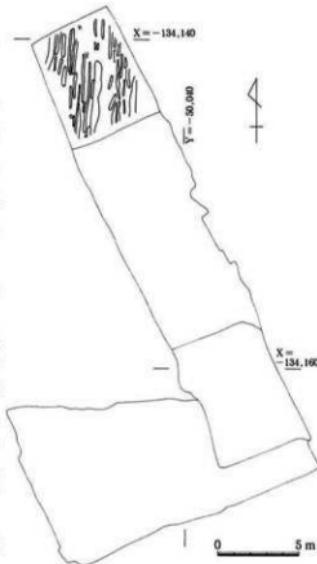


図95 1-2面平面

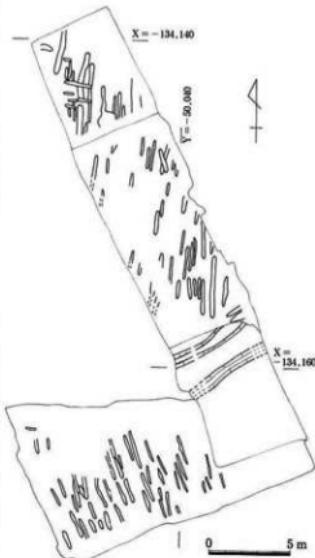


図96 2-1面平面

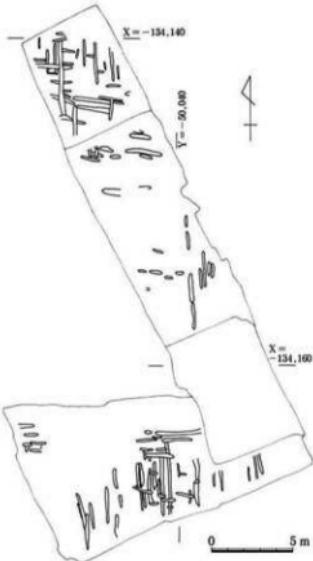


図97 2-2面平面



図98 3面平面

2-2面(図97)

2-1面と同じく鋤溝を多数検出した。2-1面の鋤溝の方向とは異なり、11A、13Aトレンチでは2-1面の残りの鋤溝と東西方向の鋤溝が、14Aトレンチでは東西方向と南北方向の鋤溝が確認された。おそらく14Aトレンチの中心で区画が変わると考えられる。幅10~20cm前後、深さは2~4cm前後である。

本面で検出された鋤溝は、方向が前回の1Aトレンチの2面で検出された条里の方向に沿う鋤溝と同一で、遺物も瓦器椀が伴う事から、本面の遺構は中世の条里制の施行に伴い段丘上も開拓された痕跡と考えられ、前回の螢池遺跡(1・2)の調査成果と共通性を持つ事がわかった。

3面(図98)

若干の鋤溝と畔のほか、4面で検出した不定型密集土壌群の一部を検出した。鋤溝は11A、10Aトレンチで南北方向のものが検出されたが、基本的に2-2面の鋤溝の残りと考えられる。しかしそれとは若干異なり北に振れる溝も検出されているので、もう一つ時代の古い耕作面が存在する可能性がある。また10A、14Aトレンチでは鋤溝のない高まりや畔状の部分も確認され、水田区画を示している可能性が考えられる。

4面(図99)

4面は通常の耕作に関連する堆積層を除去した後に現われる地山上の遺構面ではなく、本来の遺構面で遺構を検出することが困難であったため、より明確に検出する目的で、やや本来の面よりも検出面を下げて設定した面である。検出面はトレンチによって異なり、やや深く下げて検出した箇所もあるが、上記の理由から全てを含めて4面とした。検出された遺構は、前回の調査で土坑から採取した土壌を脂肪酸分析した結果、墓壙と確認された不定型密集土壌群と落ち込みである。奈良時代の掘立柱建物は今回は検出されなかった。

落ち込みは不定型密集土壌群に重なるように検出されている。主に13A、14Aトレンチで見られ、厚いところで40cm前後の層厚がある(図100)。堆積物はシルト~粘土で14Aトレンチの南西壁ではラミナも確認されている。螢池遺跡(1・2)の調査でも1Aトレンチの北側で同様の落ち込みが検出されており、いずれも西側の小開折谷に向かって伸びている事から、この落ち込みは小開折谷に向かう小さな谷地形と考

えられる。落ち込み出土の遺物は少ないが、土師器甕などが出土している（図113-2）。

不定型密集土壤群は今回の調査地区で計122基が検出された。特に14Aトレンチの遺構面が低くなる西側に多く作られている。また土壤の重なる頻度も他のトレンチに比べ14Aトレンチは高くなっている。遺物が伴う土壤の数は少なく、たとえ出土しても埋土中のものがほとんどで、土壤の底面や据えられた状態で出土する例は少ない。土壤の埋土は、ほとんどが段丘構成層とその土壤化層、出自不明の黒褐色化した土壤化層などで、シルト～粘土のブロックが主体である。同じ黒褐色土でもレンズ状に堆積するものも存在するが、ブロックではなく土壤の凹みに堆積した泥質の堆積物であり、ラミナが確認されている。

（図101）は遺物の伴う土壤である。

13Aトレンチ土壤1は長さ1.52m、幅1.38mを測る三角形を呈する土壤で、ほぼ完形の土師器甕と完全に細片化した土師器甕が出土している。完形の甕は土壤の埋土中に据えられたように埋積していたが、細片の甕はその埋土の上面に貼り付くように散逸していた。ちょうど完形の甕の口縁部付近がその散逸している面である。時期は古墳時代後半と考えられる。

13Aトレンチ土壤5は、長さ1.16m、幅1.37m、深さ52cmである。埋土はブロック土であり、底面中心部から須恵器甕の胸部片が出土している。

13Aトレンチ土壤5に隣接する土壤17は、長さ1.1m、幅58cm、深さ48cmである。埋土はブロック土であり、8世紀の土師器鉢が出土している。

13Aトレンチ土壤16は、長さ1.08m、幅1.13m、深さ8cmで、比較的浅い土壤である。須恵器甕の上半部が、口縁を下にして据え置かれた状態で出土した。時期は5世紀後半と考えられる。この周辺は土壤の切り合いで激しく、遺物がどの土壤に伴うものなのかの判定が難しく、この須恵器甕も土壤3に伴う遺物である可能性がある。

13Aトレンチ土壤23は、長さ1.86m、幅78cm、深さ32cmで、長方形を呈する。遺物は出土していない。

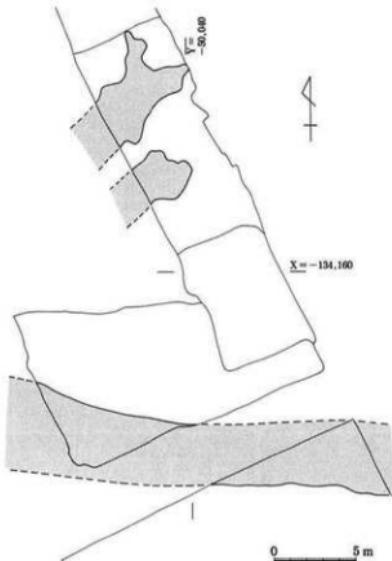


図100 4面落ち込み分布状況

ため原形は不明だが、検出できた部分は、長さ98cm、幅26cmである。脇の側溝を掘削する際に、須恵器壺蓋の完形品が仰向けに置かれた状態で出土したが、土壇35に伴うか否かは不明である。

小結

今回の調査では、中世～近世の耕作面と古墳時代後半～奈良時代の不定型密集土壇群を検出した。結果は概ね前回の調査成果を補強するものであり、螢池遺跡周辺は遅くとも中世、具体的には13世紀中頃までには耕作が始まり、その後は水田として現代まで継続した事、不定型密集土壇群は古墳時代後半～奈良時代と継続する事がわかった。水田面で検出された鋤溝のあり方からは水田区画の推定が可能であり、また、2-1面と2-2面の鋤溝の方向が、条里に規定される方向→陣屋の建物に沿う方向→現在の道路に沿った方向への変化が確認できた事は、中世以降の麻田地域の変遷を考慮する上で重要な資料になると考えられる。

不定型密集土壇は、これまでと同様切り合いで激しいが、前回の分布状況と合わせて、土壇の密度は場所によってばらつきがある事がわかった。土壇は落ち込みなどが検出される比較的低い部分を中心にして切り合いで多く見られ、周辺の高まりの部分では土壇の輪郭が明確にとらえられるほど土壇がやや間隔をおいて分布する。不定型密集土壇群は、弥生時代の方形周溝墓と同様、住居が微高地に立地するのに対し、低湿地の居住に適しない掘削が安易な場所に立地するといえる。螢池遺跡の不定型密集土壇群は、低位段丘上でも、浅い谷や落ち込みの中という比較的低湿な場所を墓域に設定しており、細かな土地の使い分けが行われている事が推定できた。ただし土壇の分布する範囲はまだ確認できていないので、旧地形のあり方を含め今後も立地条件について検討してゆく必要がある。もう一つ確認されたのは、供獻される土器の少なさである。完形品で土壇に伴うものは今回の調査では一点も出土せ

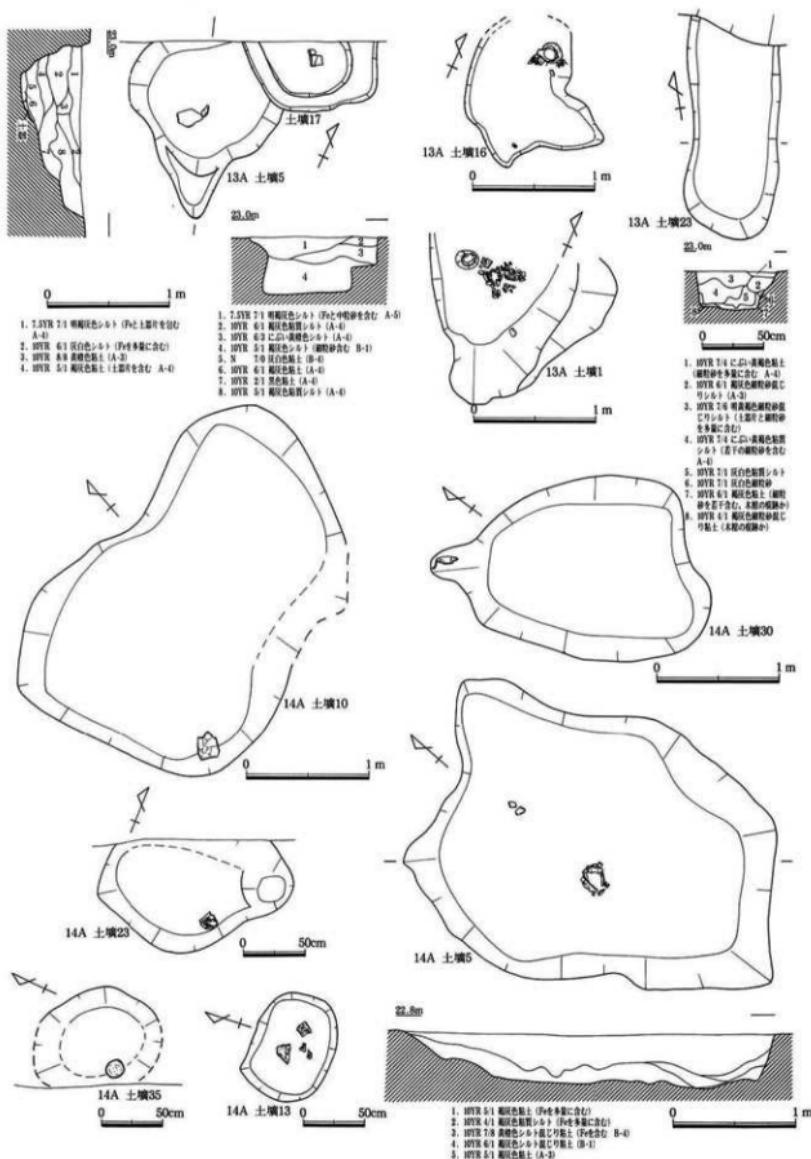


図101 4面土坑平面・断面

ず、欠損した遺物が多かった。4層に包含される遺物は少なくはなかったので、土壤群形成時に同一部分を繰り返し掘削するため、供献されていた土器が攪乱され、破片となり土壤埋土や包含層内遺物となっただとは考えられないであろうか。ただしその場合は、土壤の数と遺物の量は比例しないので、時期により共献しない時期があるのか、もともと土壤墓には供献遺物が少ないのか、いろいろな可能性を考えなければならない。今後の検討課題の一つである。

(3) 遺物

塙池遺跡は、前回、今回の調査地区ともに、出土遺物はそれほど多くはない。遺物の大半は4層出土



図102 10Aトレンチ2・4層出土遺物

であり、耕土層や不定型密集土壤群出土遺物は少量である。各層の出土遺物はほとんどが土器であり、他には耕土から錢貨や石器が出土している。土器は破片が多く、接合出来たものは極めて少ない。不定型密集土壤にともなう遺物にのみ、完形品、半完形品があるという状況である。また、土壤中、その上～中層出土土器は、土壤に伴うものではなく、土壤の埋め戻し土に含まれ、二次的に堆積した可能性をもつ土器が多い。

10Aトレンチ1・2・4層 (図102・103)

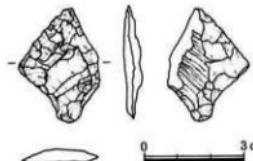


図103 10Aトレンチ2層出土遺物

施釉陶器、須恵器片が出土している。1層出土が1、2、2層出土が3～6、4層出土が7である。1と2は施釉陶器片。1は片口鉢で端部が緩やかに外反する。復元口径は11.4cmである。2は土鍋で直線的に立ち上がり口縁端部のみが外反する。復元口径は12.9cmである。3は炮烙の口縁部で端部が肥厚する。復元口径は16.3cmである。4、5は須恵器の高台付き壺身でそれぞれ復元底径は11.8cm、12.2cmである。高台の高さや断面形などはいずれも類似しており近い時期のものと考えられる。中村編年でⅣ段階に相当すると考えられる。6は須恵器壺底部で復元底径は9.0cmである。7は須恵器の壺の口縁部で外反する口縁形を持ち、端部は丸みを帯びている。復元口径は14.6cmである。

(図103)は2層出土の石鐵である。平面形は四角形に突出部が付いた形を呈し、調整は刃部の細部調整を片方の面からのみ入れるという特徴がある。調整は全体に入り、細部調整がない面は、その面を利用し、しのぎを意識した稜線となっている。

13Aトレンチ1・2・3層 (図104)

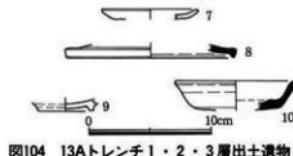
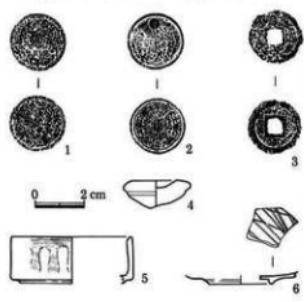


図104 13Aトレンチ1・2・3層出土遺物

1層からは1～3、2層からは4、5、3層からは6～10が出土している。1、2、3は耕土にあたる1層出土の貨幣で、1は大正十年の桐一錢青銅貨、2は大正十一年の五十銭銀貨である。直径はそれぞれ2.2cm、2.3cmである。3は寛永通宝で直径2.2cmを測る。腐食が激しく文字などはわずかに見られるほ

どしか残存していなかった。4は土製の独楽で、直径は2.8cm、器高は1.15cmであり、天井側は先端が丸いものを回転させながら押したように凹み、下部は中心軸線からは若干ずれている。中心部には1条凹線状に段が巡るが、この部分に紐を巻いて回したと考えられる。5は磁器碗で復元口径9.85cm、残存高3.85cmを測る。口縁部は垂直に立ち上がり端部内面には明瞭な面をもつ。外面の染付は口縁端部から下方に突起が同じ間隔で突出した模様である。6は瓦器椀の底部片で、胴部は緩やかに立ち上がるようである。高台は低く断面は台形を呈し、復元底径は5.4cmを測る。外面にはユビ压痕が残り、内面には径に沿ってミガキが比較的広い間隔で施されている。7はやや外側に広がる口縁をもつ土器皿で、復元口径は8.0cmである。8は須恵器坏蓋で内側に突出する口縁端部をもち、その外面には沈線状の凹みが巡る。復元口径は13.8cmである。9は瓦器椀底部片で、高台部は径も小さく断面は方形に近い台形を呈している。磨耗著しく調整は不明である。10は須恵器坏身で復元口径は9.55cmである。口縁部は開きぎみに立ち上がり、口縁端部はやや肥厚し外面に面をもつ。調整は、回転ロクロナデで底部は反時計回りの回転ヘラ切りである。内面は不定方向のナデである。

14Aトレンチ1・2・3・4層（図105）

1層からは1～5、2層からは6～8、3層からは9、10が出土している。1は染付皿で口縁端部が緩く内湾する。内面には花の絵が描かれており外面は無地である。口縁端部には鉄軸が施されている。口径は11.0cm、底径は6.2cmである。2は土鍤で、幅4.8cm、径1.9cm、孔径0.6cmを測る。全体は砲弾形をしておりユビ压痕が残る。3は施釉陶器で徳利または花瓶と考えられる。外面の高台部と口縁部付近に1条づつ染付の線がある。高台は断面が隅丸長方形で底部径は4.6cmである。4は明治～大正期の竜一銭銅貨で鋳びのため年号は不明である。径は2.8cmである。表面には竜の柄が刻まれている。5

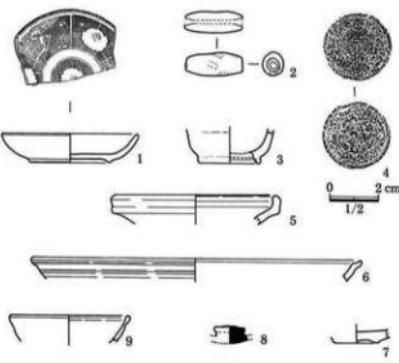


図105 14Aトレンチ1・2・3・4層出土遺物

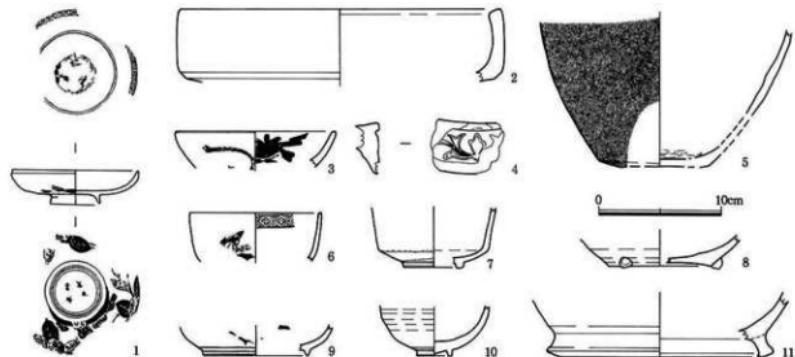


図106 14Aトレンチ1面土坑1出土遺物

は鉄軸が施される陶器で瓶と考えられる。端部が垂直に立つ口縁部をもち、その外面には凹線が1条巡る。6は白釉の陶器だが口縁端部のみの残存のため器種は不明である。端部形状は一段外側に折れ曲がりつつ内弯している。7は施釉陶器の皿の底部で上げ底風の削りだし高台をもっており内面には鉄軸がかかる。8は須恵器壺蓋のつまみで、つまみは平たく中心が盛り上がるものである。9、10は瓦器碗で、9は端部がやや肥厚する口縁部片、10は断面三角形の低い高台が付く底部片である。それぞれ復元口径、復元底径は9.75cm、5.1cmである。

14Aトレンチ1面土坑1（図106）

1は染付皿で、口径10.6cm、底径4.2cmである。底部外面には富、貴、長、春の4文字が書かれている。2は火鉢片で復元口径は25.1cmである。厚みのある垂直に立ち上がる口縁部をもつ。3は染付碗である。復元口径は12.95cmである。口縁端部は釉薬が剥き取られている痕がある。4は軒平瓦片である。

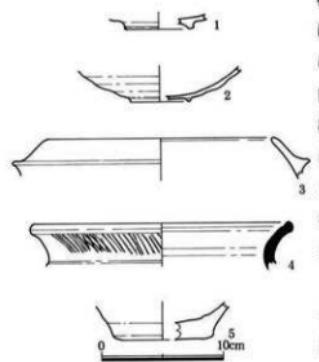


図106 14Aトレンチ1面土坑1出土遺物

模様にシャープさは無く退化している。5は土師器斐片で外面は全体に2次焼成を受けている。調整は不明だが、内面の底部にユビ压痕が残る。復元底径9.0cmを測る。6は染付碗である。内面の口縁部には格子状の模様が描かれている。7は施釉陶器碗で内外面とも鉄軸が施される。高台は削り出されている。8は鉄軸が施された土瓶で三方に突起が付き、器を支えるようになっている。9は施釉陶器碗で復元底径は8.6cmである。10は磁器碗。11は瓦質火鉢の高台か。

11Aトレンチ4層（図107）

1と2は瓦器碗でそれぞれ底径は5.8cm、5.1cmと小さく、高台自体も小型化している。碗部の立ち上がりも緩く浅い器形が推測される。内外面ともに磨滅のため調整は不明である。3は土師器羽釜で復元口径は18.4cmとやや大きい。口縁端部片しか

残っていないため全体は不明だが、口縁部は大きく内側に内弯し鋲が小さく突出する。4は須恵器壺蓋で口縁部は外反し端部は丸く肥厚し内面に段がある。口縁部外面には縦方向のタタキがナデ消されたものが残っている。復元口径は20.9cmである。5は土師器の底部である。復元底径は7.8cmである。弥生土器の底部の可能性もあるが、内外面とも調整が不明であり、接合できる破片がないため確認できない。

14Aトレンチ3面・3面鋤溝（図108）

1は3面出土、2は3面鋤溝から出土した遺物である。それぞれ旧石器の打面調整時に剝離したと考えられるチップである。1はサヌカイト製でネガボジ両面とも細部調整時の痕跡は無い。縦2.6cm、横1.8cm、厚さ4.5cm、重量1.84

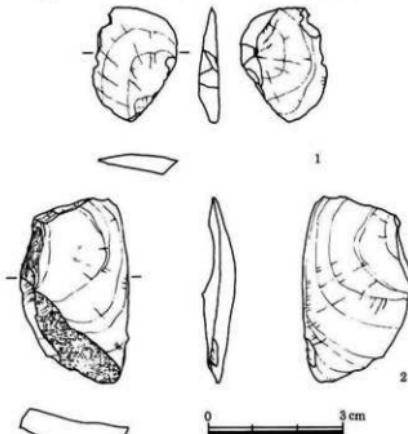


図107 11Aトレンチ4層出土遺物

gである。2は赤色のチャートで原礫面を残す。比較的強く打撃されたようで、剝離面は湾曲が激しく階段状になっている。縦4.2cm、横2.5cm、厚さ0.6cm、重量7.48gである。両チップとも打点やフィッシャー、リングの残存状況は良好である。

10A・13A・14Aトレント4面（図109・110・111）

図109は10A、図110は13A、図111は14Aトレントのそれぞれ4面出土遺物である。上層の耕土の下層にあたる包含層の4層除去後の遺構面であるため、耕作による遺物混入の度合は減少し遺構に関連する時期の遺物が出土している。

図109の1は一辺が丸く弧になっている板状の石器で、風化により表面の器面調整痕は残っていないが、何らかの製品であったと考えられる。残存する法量は縦17.5cm、横7.15cm、厚さ2.3cmである。2は甕底部であり内面にはユビ压痕が残る。また胴部には外面からの穿孔が一ヵ所ある。調整などは磨滅がひどく確認できないため、時期は特定できなかった。3は須恵器の甕または壺の胴部片で、外面には縦方向の平行タタキの後カキ目が入り、内面には同心円文が残る。4も須恵器の甕または壺の胴部片で、外面調整は縦方向の平行タタキ後カキ目が3列に巡り、内面調整は同心円文が半月形に残る。

図110の1は須恵器で口縁端部が内側に折れ曲がり、やや丸くなる。器種は不明である。復元口径は17.0cmを測る。2は須恵器壺蓋で復元口径は18.0cmである。口縁端部は下方に屈曲する。3も須恵器壺蓋で、口縁部は二重に湾曲し、端部は下方に屈曲する。天井部はその残存片から若干凹むと考えられる。4は須恵器壺身で底径10.0cmを測る。5は須恵器壺蓋で天井部が丸く回転ヘラケズリ痕の径も小さくなり口縁端部にかえりがつく。復元口径10.1cmを測る。6は須恵器壺身で大きく外側に開き、端部のやや外面が肥厚している。残存部分が少なく法量は不明である。

7は須恵器壺底部で平底である。復元底径は7.2cmを測る。胴部は丸みを帯びて立ち上がる。回転ヘラ切りで切り離された底部を回転ヘラケズリの後回転ロクロナデで仕上げている。8は須恵器壺で底径9.5cmと大きめの底部をもつ。ハの字形に高台は開き外面に面をもつ。胴部は比較的厚く内湾しながら立ち上がる。内面には自然釉が多く付着するが外面には皆無である。9は須恵器壺身で、断面隅丸三角形の低い高台がつく。内面底部には不定方向のナデが施される。

図111の1は須恵器壺身である。出土位置から土壤35に伴う可能性があるが、土壤脇の側溝から出土したため、4面出土遺物として扱っている。ほぼ完形で、

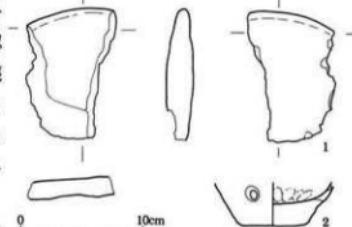


図109 10Aトレント4面出土遺物

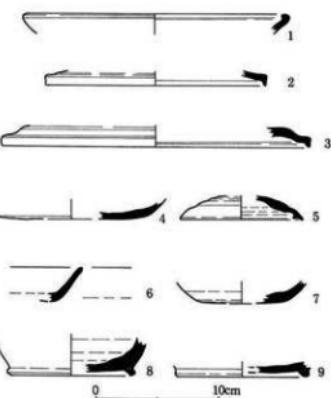


図110 13Aトレント4面出土遺物

口径14.85cm、器高5.5cmである。天井部と口縁部の間の稜線は明確だが、稜の下の凹線は退化している。口縁端部内面に一段明確な段がつき、部分的に古い型式を残している。2は須恵器坏蓋で丸い天井部につまみがつく形態となろう。口縁端部は屈曲する。ロクロ回転は時計回りで内面には回転ロクロナデのはか不定方向ナデも入る。復元口径は12.3cmである。3も須恵器坏蓋で復元口径は17.4cmを測る。ロクロ回転は時計回りである。口縁端部は丸く短くつまみ出されている。4は須恵器壺？の口縁部である。調整は磨滅のため不明だが、口縁端部内面にハケメが若干残る。復元口径は25.3cmである。5は須恵器坏蓋のつまみで中央が山型に突出する。内面調整は不定方向ナデである。6は須恵器の脚部で、外側にハの字形に開き端部が横方向に突出する。調整は回転ロクロナデである。復元底径は6.3cmである。7は土師器皿で口縁部は全体が内湾する。調整は剥落のため不明である。復元口径16.0cmである。8は須恵器壺口縁部で、わずかに垂直に立ち上がる。復元口径は7.95cmである。9は須恵器壺口縁部で端部は外反する。焼成はややあまい。外面調整は縦方向ハケメの後強いヨコナデである。復元口径は14.8cmである。10は須恵器坏身で復元口径が24.6cmと坏身としては非常に大きくなる個体である。口縁端部内面に一段明確な段がつき、受け部は器形の大きさに似合はず小型である。底部外面にはカキメが入る。このような大型の坏身は陶邑付近で数点確認されており、特に祭祀関連の遺構からの出土例が目立つ。またこの個体を胎土分析したところ陶邑産との鑑定結果がでており、陶邑のみで生産されている器種の可能性も考えられ興味深い。11は須恵器坏身片で外面には回転ヘラケズリ痕が残る。また底部外面には溶着痕らしき盛り上がりがある。復元底径は10.7cmである。12も須恵器坏身である。口縁部は外側に開き、底部は平底である。底部外面は回転ヘラケズリ後に回転ロクロナデ、その他は回転ロクロナデである。復元口径は12.9cm、復元底径は9.7cmを測る。13は須恵器坏身で高台がつく。高台は断面長方形である。復元底径14.2cmである。

11A・13A・14A トレンチ 4面不定型密集土壤群（図112・113・114）

図112は11A、図113は13A、図114は14A トレンチのそれぞれ4面不定型密集土壤群出土遺物である。

図112の1は土壤3出土の須恵器壺または壺の胴部である。外面は縦方向平行タタキの後横方向のカキメ、内面には半弧状の同心円文が残る。2は土壤4出土で、須恵器壺または壺の胴部である。おそらく肩部付近の破片と考えられる。外面は縦方向平行タタキ後、均等な間隔でタタキのスリケシが施され、内面は同心円文が若干残る。3は土壤4出土の須恵器片である。外面は縦方向平行タタキ後等

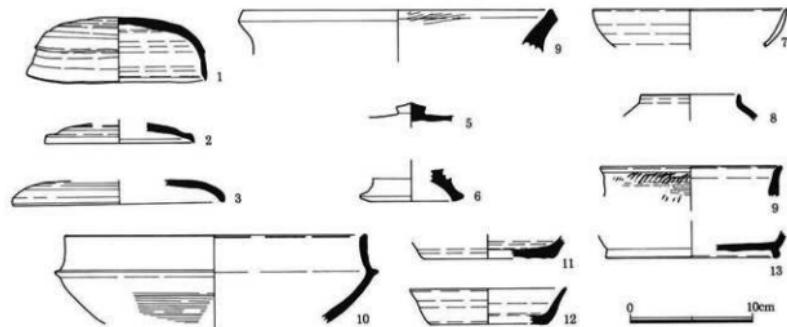


図111 14Aトレンチ 4面出土遺物

間隔の横方向カキメ、内面は半弧状の同心円文が残る。4は土壇6出土の須恵器胴部片で、外面は縦方向平行タタキ後横方向カキメ、内面は同心円文が残る。5は土壇7出土の須恵器甕肩部である。外面は磨滅のため調整不明、内面は同心円文がかすかに残る。6は土壇7出土の須恵器甕胴部片である。外面は縦方向平行タタキ後カキメ、一部不定方向の平行タタキが施される。内面は細かい同心円文が残る。7は土壇7出土の須恵器甕肩部片である。外面は縦方向平行タタキ後に横方向カキメ、内面は半弧状の同心円文が残る。

図113の1は土壇1出土の土師器甕である。口縁部は厚く外反し途中で段がつき、端部は丸くおさまる。底部は丸底である。復元口径は12.3cmである。内外面とも磨滅のため調整が不明瞭であるが、外面底部に横方向ケズリと細かいハケメ、内面にユビ圧痕が残る。外面には煤が付着する。2は落ち込み1出土の土師器甕である。復元口径は22.4cmである。くの字形の口縁で胴部は内弯する。調整は内外面とも磨滅のため不明である。3～7は土壇5、8は土壇16出土の須恵器甕または甕の胴部片である。外面は縦方向平行タタキの後横方向カキメ、内面は同心円文が残る。3や4は外面に均等な間隔でカキメが施され、6は内面の同心円文がやや太めである。8・9は土壇16出土である。9は須恵器甕で外面は縦方向タタキ後カキメ、内面は同心円文が残る。磨滅しており焼成も甘く、器壁は粉状である。10は土壇17出土の土師器鉢で、復元口径33.0cmである。外面は縦方向ハケメ後斜方向ハケメ、内面は強いケズリである。11は土壇5出土の土師器甕底部で、復元底径8.5cmである。内面にユビ圧痕が残る。12は土壇18出土の土師器甕底部片である。

図114の1～3は土壇5出土で1・2が須恵器胴部片、3が土師器甕である。1は外面磨滅のため不明、内面は同心円文タタキ後強いスリケシである。2の外面は縦方向タタキ後斜方向タタキ後横方向カ

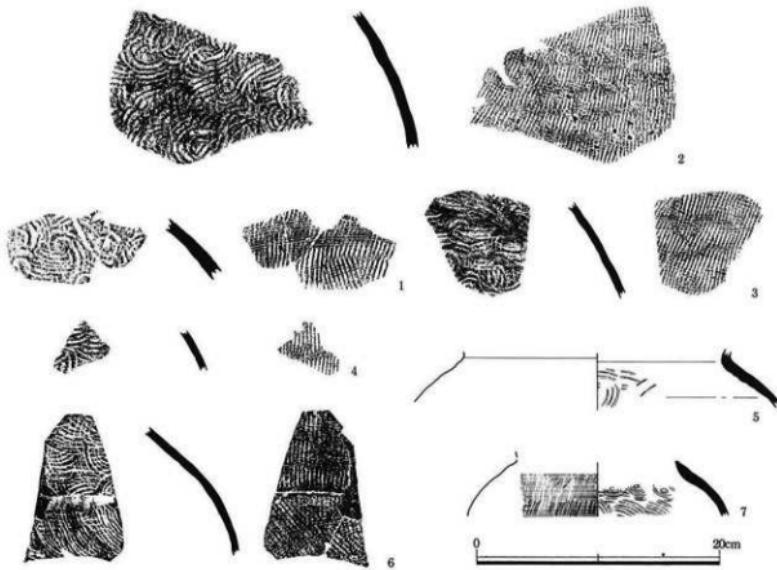


図112 11Aトレンチ4面不規則形密集土壇群出土物

キメ、内面は同心円文が残る。3はくの字形口縁で胴部は縦に長い筒形である。口縁端部外面に面をもつ。外面は縦方向ハケメ、内面は口縁部～頸部に横方向ハケメ、胴部にユビ压痕が残る。4は土壌7出土の須恵器胴部片である。外面は不定方向平行タタキ後カキメ、内面は同心円文が残る。5は土壌8出土の須恵器杯蓋である。口径は小さく天井部と口縁部の間に明瞭な稜はない。復元口径は10.6cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリである。6は土壌10出土の須恵器胴部片である。外面は不定方向平行タタキ、内面は同心円文叩き後スリケシである。7は土壌11出土の須恵器壺口縁部である。口径は11.3cmである。内面は同心円文が残る。8は土壌11出土の須恵器胴部片である。外面はタタキ後細いカキメ、その後再度タタキが施される。内面は細かい半弧状の同心円タタキである。9は土壌33出土の須恵器壺口縁部で復元口径は16.4cmを測る。口縁端部は丸く、つまみあげられている。10は土壌13出土の須恵器

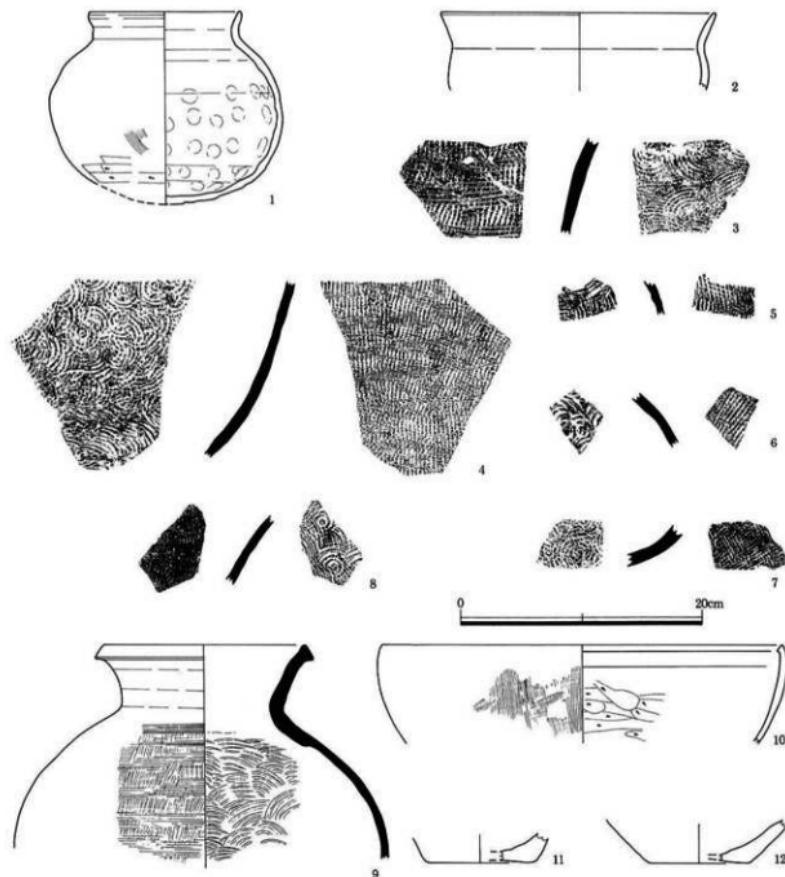


図113 13Aトレンチ 4面不定形密集土壌群出土遺物

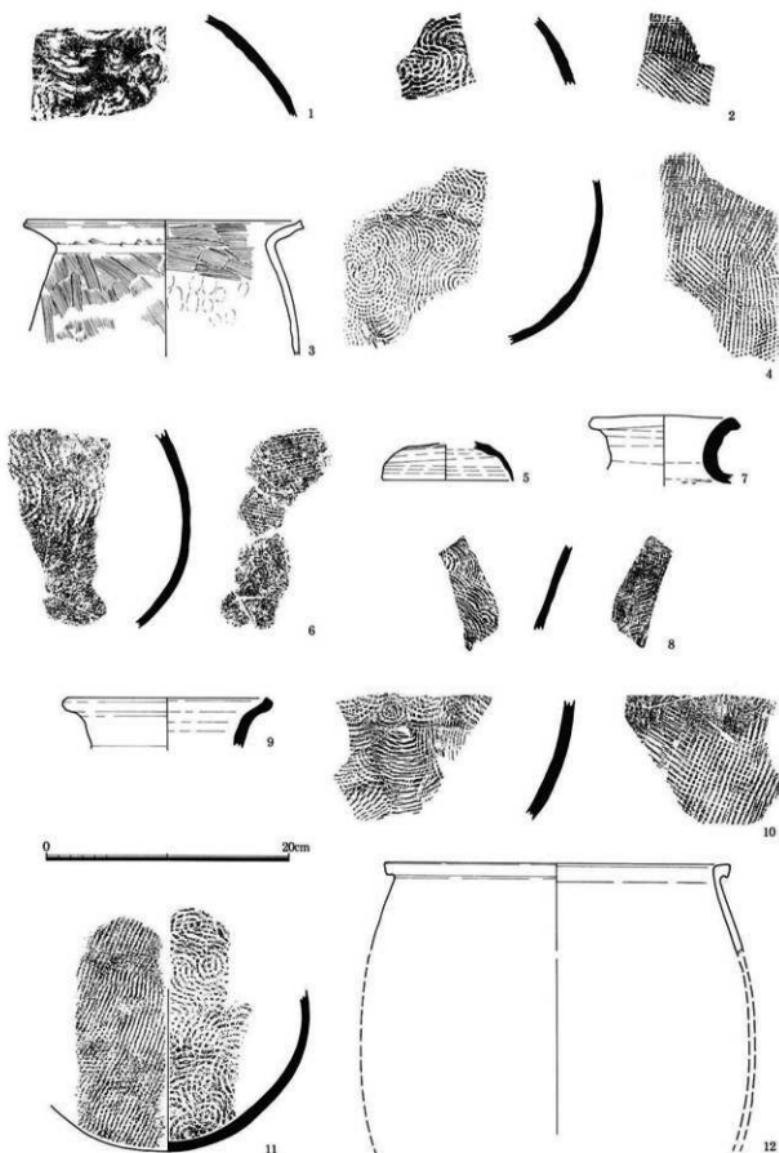


図114 14Aトレンチ4面不定形密集土壤群出土物

胴部片で、外面は平行タタキが格子状に入り、内面は細かい同心円文が残る。11は土壙43出土の須恵器胴部片で、外面は縦方向平行タタキ、内面は細かい同心円文が残る。12は土壙30出土の土師器甕で、復元口径28.6cmである。口縁部は短く屈曲し端部外面に面をもち下垂する。胎土は粗い砂粒を含む。

小結

1～3層出土遺物は、本来4層に包含されていた遺物が攪拌されて混入したものが多いようであり、1～3層本来の時期を示す遺物は少ない。4層出土の須恵器は器種が限定され、時期も古墳時代後期～奈良時代であり、不定型密集土壙群出土須恵器と共通することから、4層と土壙群の形成時期は非常に近いと考えられる。

(4)まとめ

螢池遺跡の基本層序は、上層の中世～近世の耕土層、下層のそれ以前の遺構が切り込む低位段丘構成層に大別される。前回の調査では、この間に、今回4層とした堆積物が部分的にしかみられなかったが、遺跡の北辺にあたる今回の調査では、4層が調査区全体に堆積している事が解った。

遺構は、麻田藩陣屋の地割りと同じ方向性をもつ鉄溝がはしる近世～近代水田面と、遺跡南側の沖積地同様、条里制地割りと同じ方向性をもつ鉄溝がはしる中世～近世水田面が検出された。耕土層である3層からは瓦器片が出土しており、この付近の耕地開発は13世紀中頃以降と考えられる。

4面で検出された不定型密集土壙群は、螢池遺跡北側の麻田藩陣屋跡（1・2）調査区においてもその下層で検出されることから、墓域は谷地形を中心としてさらに北東方向に広がるようである。土壙は円形や長方形など定形化したものはなく、不定型な椭円形が多い。大きさによる土壙の分類は可能であるが、階層差などを示すのではなく、被葬者の身体的な問題と考えられる。

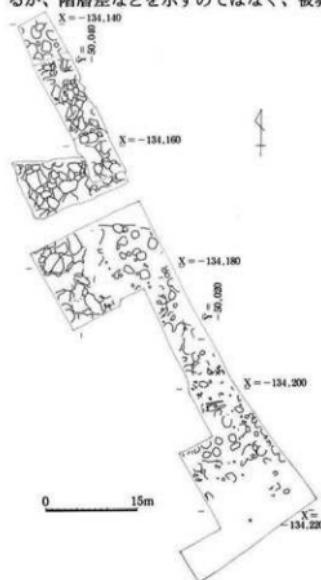


図115 不定期密集土壙群分布状況

遺物は、1～3層の耕土層からは耕作に直接関連する遺物は出土しなかった。その下の4面の不定型密集土壙群では、土壙底面で須恵器甕片や坏蓋が貼り付いた状態で出土したり、14Aトレチの土壙5埋土上面で土師器甕がうつ伏せに据えられた状態で出土した以外は、須恵器片、土師器片のみである。人骨、炭、灰が残存していないため、埋葬形式は土葬の可能性が高いと考えられる。

今後、螢池遺跡の墓域（不定型密集土壙群）に対応する集落域の特定など、螢池遺跡と周辺遺跡との関連を微地形の復元と合わせて整理し、各時代の景観復元を試みたい。

参考文献

- 少路窯跡遺跡調査団1982『桜井谷窯跡群2-17窯跡』
- 大阪府教育委員会1971『大阪府文化財調査報告書第30輯 陶邑』
- 勤大阪文化財センター1994『宮の前遺跡・螢池東遺跡・螢池遺跡1992・1993年度発掘調査報告書』

3. 蛍池遺跡（4）の調査の成果

（1）基本層序

トレンチの1/3以上の面積を占める、2面の落ち込み1と、トレンチのはとんどの面積を占める6面の流路1がお互い砂層で埋まりながら重複していたが、その間に一部、薄い層ながら基本層序の4・5層がはさまっていたため、分別できた。他の螢池遺跡の基本層序とは独立したものである。

層名、遺構名は、1層除去後を1面というように呼称した。

1層 5Y4/1（灰色）砂質土 細砂～シルト主体、粗砂あり、斑状酸化鉄あり。耕土と思われる、層厚10cm前後の層だが、搅乱が激しく、遺存度は低い。

2層 2Y5/1（灰色）砂質土 細砂～シルト主体、粗砂あり、小礫若干あり、斑状酸化鉄わずかにあり。層厚25～12cmほどで、耕土の可能性もある。搅乱と落ち込み1のため遺存する面積は少ない。

3層 2.5Y6/8（明黄褐色）粘質土 粘土～シルト主体、粗砂あり、酸化鉄多し。一見地山のような粘質土で、上面の3面は耕土の床面である。層厚30cm程度。

4層 5Y4/1（灰色）砂質土 細砂～シルト主体、中砂～粗砂若干あり、小礫わずかにあり。3層の下で層厚6～8cm、一部、6面の流路1の上を覆う。

5層 5Y4/1（灰色）粗砂～中礫、ラミナあり。層厚10cm弱。6面の上に25cmほど堆積し、一部6面流路1の上に張り出す、洪水堆積層らしき砂礫層から二次堆積した層で、4層の下に広がり、6面流路1の上も覆うが、砂礫層のため、流路内の堆積層と区別がつきにくい。

6層 2.5Y6/8（明黄褐色）粘土 酸化鉄の無い部分は10GY6/1（緑灰色）を呈す、酸化鉄・酸化マンガン粒あり。層厚20～40cm。下面が斜面を成すので、段丘崖からの二次堆積か、谷内の堆積と思われる。

6面では流路が形成されている。

7層 5G6/1（緑灰色）粘土 上部は大きな酸化マンガン粒多し、酸化鉄若干あり、酸化鉄ある部分は2.5Y5/6（黄褐色）を呈す。上面はわりと平坦である。下端は確認していない。谷内の堆積物か。

（2）遺構

1面 搅乱が激しいが、トレンチのはば中央を斜めに横切る、東へ落ちる段差がある。段差の下裾には平行して幅30cm、深さ10cmほどの溝があり、その溝から直角に、東へ伸びる溝が3本確認された。おそらく敵溝のものであろう。

2面 トレンチ東半の大部分にブロック土で埋まった落ち込みが検出された。落ち込み1とする。平面的には東に落ちる肩を検出したのみだが、トレンチ南東壁の側溝部分に肩部があったようで、復元すると、北東壁で幅5m程度で、急にせばまり溝状になりながら南へ屈曲し南東壁あたりで幅2mほどの溝として南に抜けていく遺構であったと思われる。深さ60cmほど。

埋土はほとんどがブロック土だが、そのブロック土は途中にラミナのある砂層をはさみ上下に大別できる。ブロック土上層は、埋土上面でも肩部が確認でき、ブロック土下層で南側溝状部全部と北側土坑状部の肩部付近まで埋めた時点で砂が流入し、その後ブロック土での埋め立てが続行されたものであろう。間の砂層には土壤化もなく、有機分も少ないので、あまり長い時間の中断は考えにくい。埋め立ての途中で一日雨が降ったぐらいであろうか。落ち込みの最深部もブロック土で、埋め立て以前の堆積層は確認されないが、掘ってすぐ埋めたのか、堆積物を凌濶してから埋めたのかは分からぬ。

ブロック土には大量の瓦片の他、石臼・瓦質火鉢などが含まれていた。

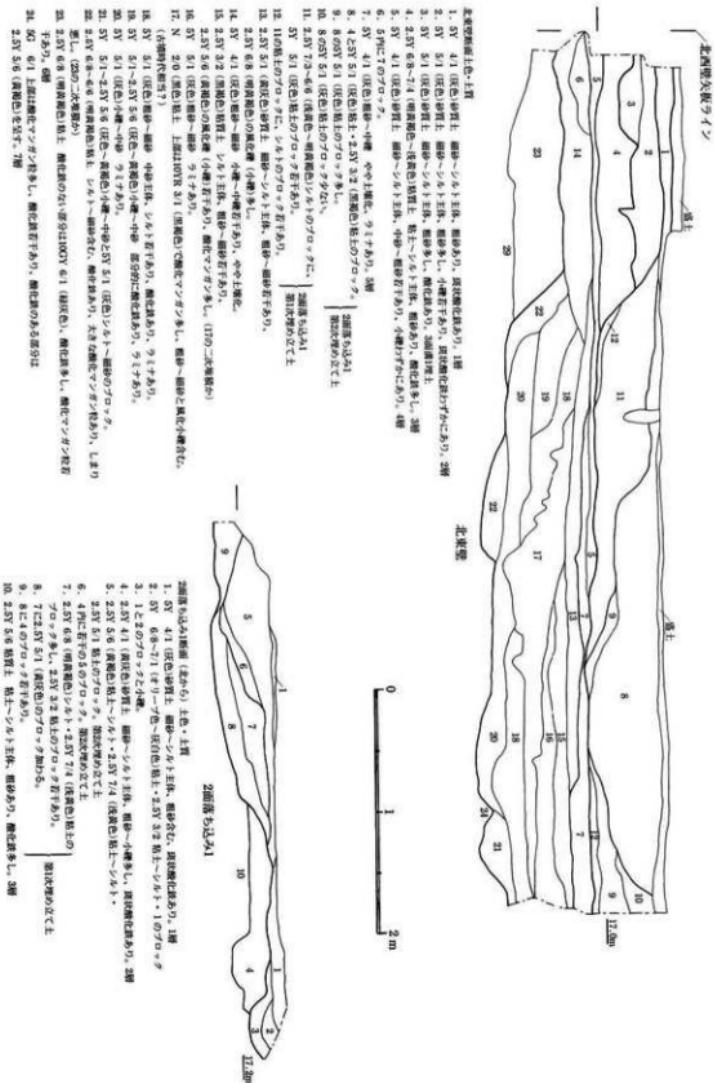


図116 12Aトレンチ断面図

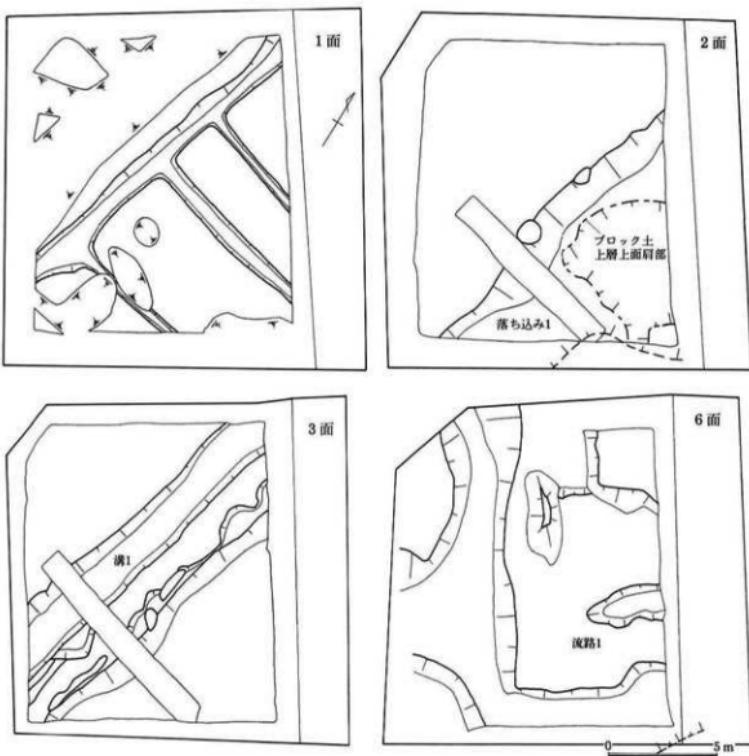


図117 12Aトレンチ1～3・6面平面

この落ち込みは、溜め池の堤防の裾にあり、溝が取りつく事から、溜め池の閘門などから水を受け、導水していく施設とも考えられるが、現在の閘門は堤防の反対端にあたる東側にあり、この部分に過去に閘門があってそこからの導水路があった痕跡は江戸時代以降では存在しない。

3面 2面の落ち込み1がこの面から存在していたかは定かでないが、その西側に、幅60～90cm、深さ15cmほどの溝がほぼ南北に走る。注目できるのはその溝と落ち込み1の間に鋤溝が見られる事で、幅70cmほどの間が耕作地であったとは考えにくく、2面の落ち込み1はこの時点ではなかったと考えた方が良かろう。溝からは遺物陶器碗片が出土しており、この面も江戸時代以降と考えられる。

4・5面 は遺構は存在せず、6面の流路の砂層が一部露出するもののその肩は見えない。

6面 砂層で埋没した流路1が検出される。本来の高さの6面が残っているのはトレント北隅付近のみで、西隅にもやや高い部分があるが、そこは流路内の砂層で埋没している。流れの主流はトレント北東壁から入り、やや蛇行しながら南角で南に抜けていくよう、南隅が最深部である。それとは別に北西に向かって分かれていく流れもあったようである。トレント北東壁のセクション断面で、流路の底部が南東へ上がりはじめているので、幅は6mぐらいか。深さは、6面と最深部の比高差が1.14mほど。

遺物がまったく出土していないので時期は不明だが、この流路は南門前池の開析谷からの一時期の本流と思われる所以、溜め池の築造より古い事は確実である。6面を覆う洪沢砂疊層もそれを裏付ける。ただ、北西へ伸びる分流が、方向から見て不自然である。この方向にいけばすぐに下位段丘崖に突き当たるはずだが、分流部分の底部のレベルや形状を見ても、流れが北西へ進むのはほぼ確実と思える。可能性としてはこれが元々人工的な溝で、流路の砂層堆積時の水流などで、やや肩部を浸食されたものではないかという事である。それで思い当たるのは道路一本を隔てた南西の螢池南地区で検出された、開析谷から伸びてくる溝群である。この分流が溝であるなら、この部分で開析谷からの本流である流路1から取水し、高さを保って給水可能範囲を広げるために、いったん下位段丘崖直下まで近づいた後、螢池南地区的溝群に導水していたと考えられないであろうか。そう仮定するならば、流路への取りつき角度から、トレンチよりやや南側の流路内にはしがらみが存在した可能性が高く、この6面の流路1は古墳時代後期のものと考える事もできる。

(3) 遺物

2面落ち込み1出土遺物 ここからは大量の瓦が出土したが、軒瓦ではなく、普通の平瓦・丸瓦のみであったので、その報告は省略する。一応燃し焼きのもののみで、電気窯によるものはなかった。

(図118-1)は瓦質の土器で、図上口縁とした部分は底部かも知れず、天地は定かではない。口縁の内部は突帯が巡り、外面には幅4mmほどの沈線が巡る。沈線内に径3mmほどの穿孔が1カ所残存し、それは内側の突帯の端部に抜ける。内面は回転ナデで、粘土接合痕を残す。外面はヘラケズリ後、ミガキでミガキの単位は見えない。形状から、口縁に何か布状のものを張り、それを口縁外面の沈線内に紐状のものをはめて留めたものと考えられる。この部分が底部で、網を張ったなら「ふるい」のようなものであろうか。

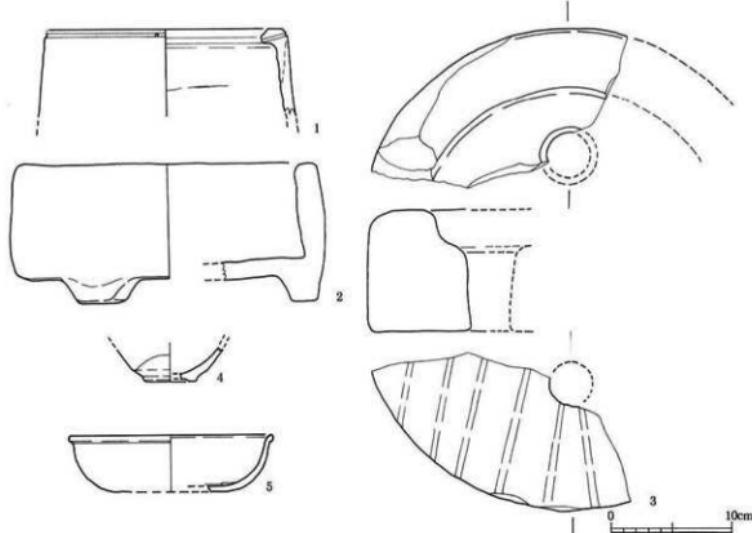


図118 12Aトレンチ出土遺物

（図118-2）は瓦質火鉢である。底部に厚い板状の脚を三つ付ける。内側面はヨコユビナデ後ヨコハケナデ、内底面は非常に荒れ、調整不明。外側面はやや荒れているがヨコナデ後、タテミガキ。外底面は不定方向のミガキが粗く入る。

（図118-3）は花崗岩製の石臼の破片である。径36cmほどのものか。上面は周縁部を幅5cmほど残して3cmほどくぼみ、そこから下面に向けて径4.7cmの穴が開けられている。下面には幅5mm程の溝が何本か刻まれているが、残存するもので5本は平行に並ぶが、1本は角度を変える。おそらく数本の平行する溝を1組として、何組かの溝が刻まれているものと思われる。

3面溝1出土遺物 遺物が2点出土している。

（図118-4）は施釉陶器碗片である。釉は内面から外面上部までかかり、2.5Y8/2（灰白色）に発色する。外面の釉の無い部分は回転ナデで、胎土は5YR5/6（明赤褐色）を呈する。

（図118-5）施釉陶器鉢片である。釉は残存部分では内外面に及ぶが内面底部で釉の無い部分があり、おそらく蛇の目釉剥ぎであろう。その部分は鉄錆を塗る。釉は鉄釉である。

（4）まとめ

狭い範囲の調査であるが、今回の調査は下位段丘開析谷の開口部であり、それを利用した溜め池の堤防の裾部という位置の状況を、わずかながらも明らかにしたと言える。

1～3面の状況を見れば、堤防の裾部は江戸時代から現代にいたるまで、耕作地として利用されていた事が分かる。2面の落ち込み1は性格が確定できないが、上下の1・3面が耕作地だった事から見れば、堤防の補修などの際に臨時に掘られたもので、恒久的な施設ではなかった可能性が高いように思える。また、3面が近世以降の時期であり、それより下は堆積層から見て堤防があったような状況はない。これより、現在の堤防裾部であるこの地点が、近世には耕作地として利用されていることから、近世には堤防が存在していたと考えられ、南門前池の築堤は近世頃ということができる。

6面の流路は遺物がなく、時期が特定できないのが難点であるが、ここでは螢池南地区の古墳時代後期の溝群と関係する流路の可能性がある事を指摘するにとどめる。

VII 蛍池南地区（1～3）

1. 調査の方法

今回、螢池南地区として調査対象になった地域は豊中市螢池中町1丁目から螢池南町3丁目に所在する。モノレールの計画路線上では、南門前池の南西裾部から螢池小学校の南東部までであり、すべて下位段丘下の沖積地上となる（図119）。

周知の遺跡の範囲外であるので、（1・2）は試掘調査として、1995年7月7日から同年12月27日まで、モノレールの橋脚9基分の部分を西からA～Iトレンチとして調査した。各々、およそ8×8mの広さである。

A～Iトレンチは矢板打設後調査し、平均調査深度は約2.5mである。J～Mトレンチは法面を残して掘削し、流路などを除いた平均調査深度は約70cmである。

その結果より、北西側4基分の周辺が大阪府教育委員会より調査の必要ありと判断され、（3）として、北東優先にJ～Mトレンチとして1996年7月29日から同年10月9日まで調査を実施した。ただし、Kトレンチの南東隅部に関しては、モノレール側道の下水道本管工事と重なったため、下水道本管圧入作業用の豊坑部分を、矢板打設後立会調査とし、遺物採集にとどめた。

立地を見ると、J・Kトレンチは下位段丘崖直下であり、段丘崖ではすぐ北東側に、現在南門前池となっている開析谷が開口している。北西側にはやや離れて現在麻田公園として埋め立てられた小規模な開析谷がある。調査区のはほとんどは段丘崖直下の緩斜面帯であり、特に今回の調査地周辺は他の箇所に比べてやや高い。

また、J・KトレンチとLトレンチの間にある道路は、段丘崖に最も接近した、条里制地割りの坪境であり、L・Mトレンチ間の道路も坪境である。

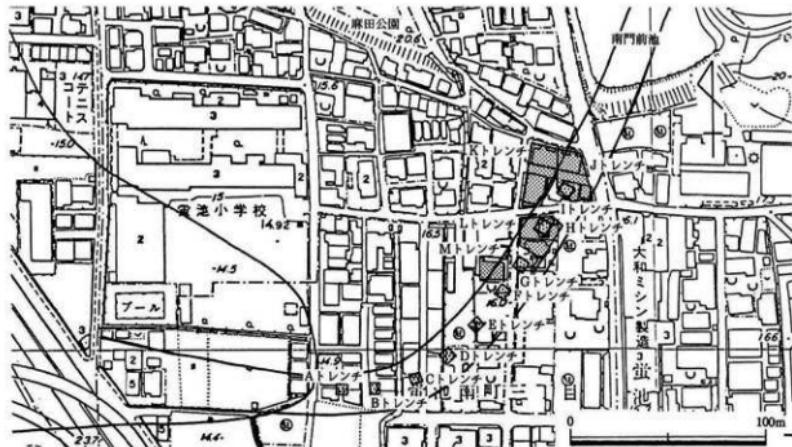


図119 トレンチの位置

2. 調査の成果

(1) 基本層序

A～Iトレンチの調査時点では、A～Eトレンチが、螢池西遺跡と層序が共通し、それに準じた基本層序を立てていた。

しかし、G・L・Mトレンチで東西に走る埋没流路以北は、固く締まり、礫を含んだ黄褐色系粘質土が立ち上がり、層序がまったく異なった。（図120）

つまり、埋没流路部分に埋没段丘崖があり、それ以南は落ち込んでから堆積が進んだ状況である。

A～Eトレンチでは、遺構・遺物が皆無で自然流路や木根痕などしか検出できなかった。

従って（3）の調査では新たに基本層序を立て直した。今回の報告ではその新しい基本層序で統一して記述し、A～Eトレンチは省略する。（図121・122・123）

1層 2.5Y5/4（黄褐色）砂質土、シルト～細砂主体、粗砂あり、酸化鉄あり。旧耕土。

2層 2.5Y5/3（黄褐色）砂質土、シルト主体、粗砂あり、小礫わずかにあり。旧耕土。

3層 基本的には黒褐色粘質土であるが、J・Kトレンチでは下に厚く砂層が堆積しているので、その影響を受け、粗砂の多い砂質土となる。Lトレンチ付近では安定し、上下2層に別れる。

3層上 10YR3/2～4/2（黒褐色～灰黃褐色）粘質土、粘土主体、シルト～細砂あり、粗砂若干あり、酸化マンガン非常に多し、酸化鉄あり。層厚10cm前後。

3層下 10YR3/2～2/2（黒褐色）上層とはほぼ同質だが、粗砂とマンガンがやや少ない。層厚10～20cm。

J・Kトレンチでは3層の下にトレンチのほとんどを占める幅の広い浸食痕があり、そこに砂層が堆積している。これは砂層で埋没した自然流路の重なり合いで、断面上ではその中で幾つかの土壤化面を確認できる。この砂層は旧石器時代後期から古墳時代後期の間に形成されたようである。

4層 2.5Y6/6（明黄褐色）粘質土、シルト～粘土主体、粗砂わずかにあり、酸化マンガン粒わずかにあり。層厚15～20cm。5層上部の二次堆積・土壤化により形成されたと思われる。遺物はなし。

5層 2.5Y6/8（明黄褐色）と2.5GY7/1（明オリーブ灰色）のまだら、粘質土、シルト～粘土主体、植物根痕多し、粗砂～細砂の降下あり、酸化鉄多し。下位段丘構成層上部の風化層に似る。遺物はなし。

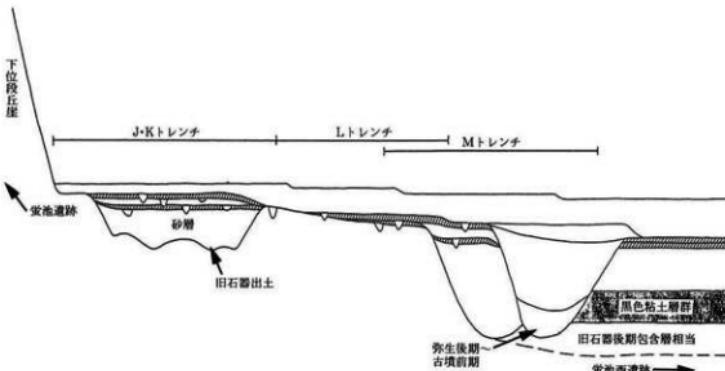


図120 基本層序模式図

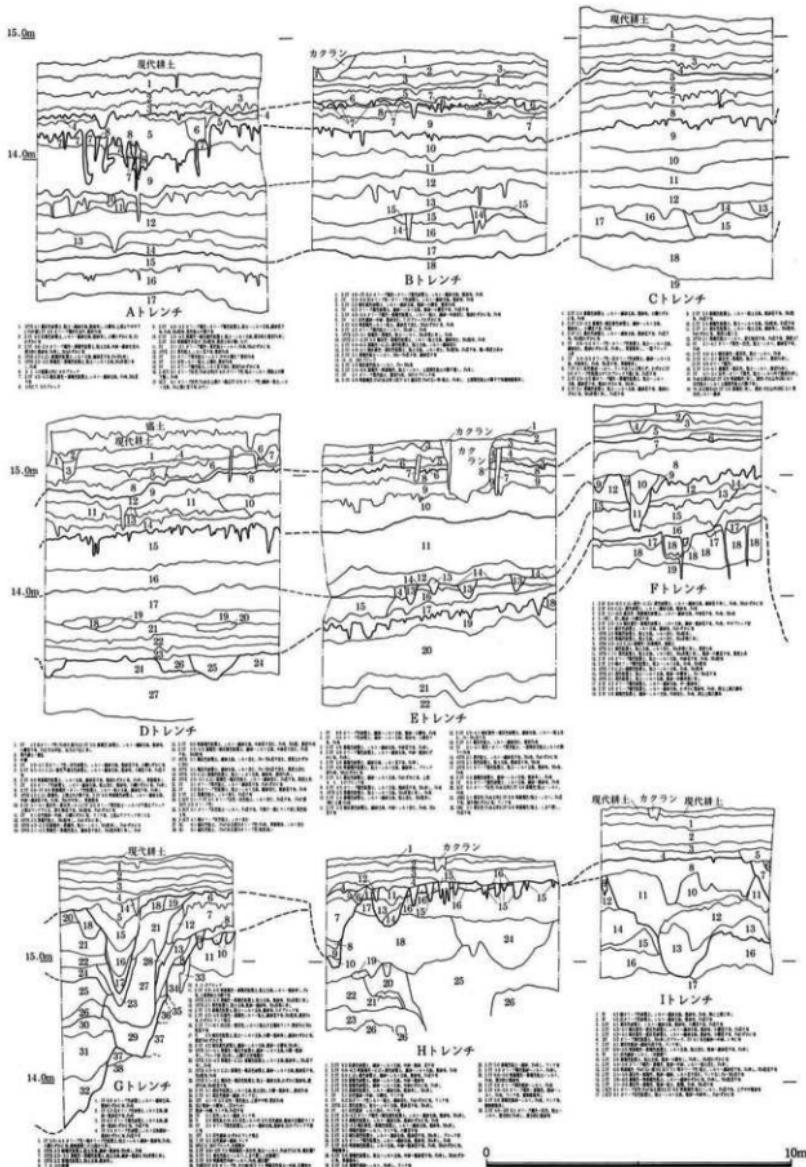


図121 A~Iトレンチ断面

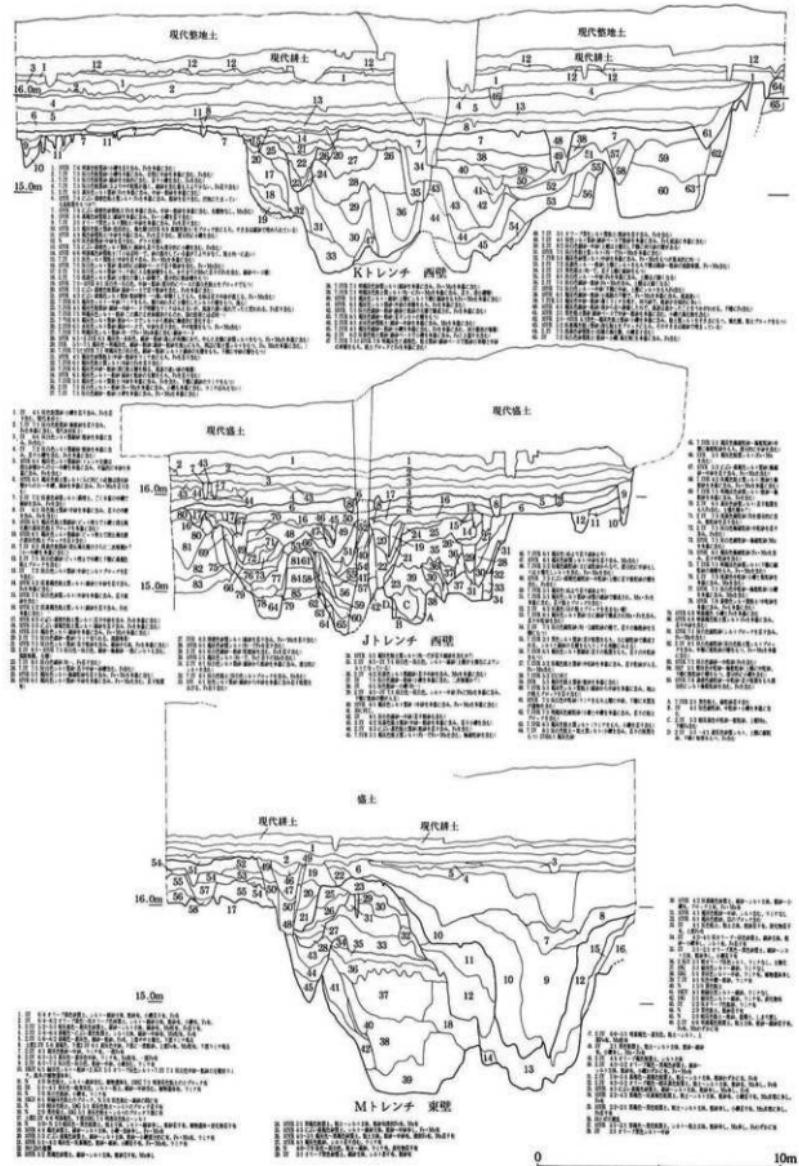


図122 K・J・Mトレーニング断面

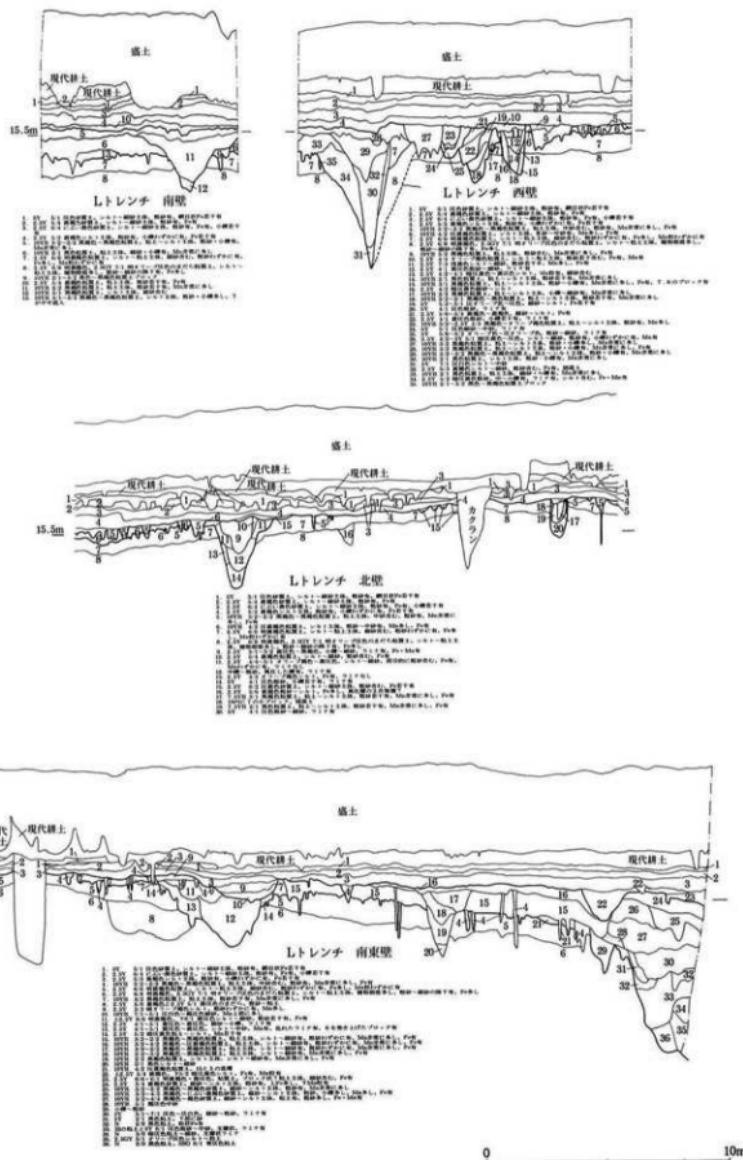


図123 Lトレンチ断面

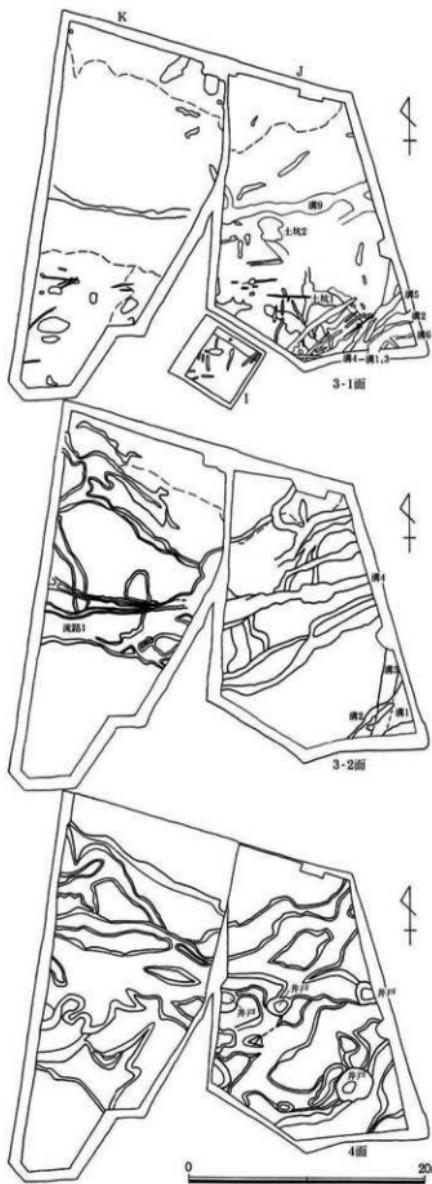


図124 I・J・Kトレンチ平面

(2) 遺構

I・J・Kトレンチ

この地区は4面に幅の広い浸食痕があり、そこに厚い砂層が堆積してから3層が形成されている。これは北東の下位段丘開析谷の開析作用で浸食痕が形成され、その後、数本の流路が、一時的な増水の度、浸食、埋没、を繰り返し、その後、上面に溝が掘削されるようになってからも、やや小規模ながら砂層の堆積が繰り返された結果と思われる。

つまり、谷の開口部における小規模な扇状地的堆積であり、谷からの流路の本流は調査区より東で埋没しているようである。

そのため、土壤化面が、砂層の上部に複数あり、大きく見ても3面あった。しかし、調査期間の制約もあったため、上の2面のみを3-1面、3-2面として調査した。

3-1面 (図124)

現状でも北が高く、南が低い緩傾斜面であるが、遺構の残存状況等を見ても、北部分の後世における削平が大きいと思われる。多分、ある時期に南側の条里制地割りを延長する地割りが調査区南半にまで及び、若干の削平を受け、最終的にはアパートの建設により北端まで大規模な削平が行われたと思える。

その結果、J・Kトレンチ北壁沿いとJトレンチ南東隅、Kトレンチ南側とIトレンチは3層が残存せず、4面が露出しているが、本来は3層が存在したであろう事は、遺構に3層系の埋土がある事からも推測できる。

この面の主な遺構は、溝と鋤溝である。

主な溝としては、Jトレンチ南東隅で、溝1～6が密集して切り合っているが、その中の溝1～3が北東から南西へ抜けており、幹線的な水路であった可能性が高い。またJ・Kトレンチのほぼ中央部を東西に抜けているLトレンチ溝9も幹線的なものであろう。

鋤溝は南半に集中し、東西南北の正方位を

向くものと、45°ほど傾くものがある。切り合いは明確でないが、どちらも主な溝や土坑を切る、傾いた方向性のもののはうが、いくつかの同一方向の溝を伴い、3層系の埋土を持ち、削平以前の自然地形に沿ったものと思われる、などの事から、古いと思われる。

おそらく、元々導水路しかなかった段丘崖直下の緩傾斜面に、自然地形に合わせた耕地が開発され、その後、削平を伴って、南側に迫る条里制地割りを延長した耕地区画が作られたものと思われる。

一番古い段階で言えば、溝1～3と溝9が、開析谷内から取水する導水路であろう。そして、溝1～3は緩傾斜面を横切ってすぐ南の沖積平野の平坦面へ、溝9は緩傾斜面の高さを利用してさらに西側へ導水していく水路であったと思われる。溝9の北側の削平のきつい部分には、途切れ途切れになった溝もあり、元々複数の同じような溝が繰り返し掘られた可能性もある。

溝1～3 溝1～6は複雑に切り合い、基盤層が砂層なので、掘削順序が把握しづらいが、全体で見れば、溝3→1→2の順に掘られたようで、溝4は溝3と併存、溝5・6は溝1と併存のようである。

溝3は幅50cm、深さ30cm、溝1は幅2.2m～1.6m、深さ25cm、溝2は幅40cm、深さ20cmほどである。土坑1・2 Jトレンチのものであるが、3層系の埋土で、下にラミナを持つ層がある。土坑1が溝4とつながる事から、溝3と併存するものと思われる。残存する深さは土坑1が60cm、土坑2が25cm、で井戸ではない。

その他の土坑 Kトレンチ南側で4面が直接露頭していた部分に散在し、3層系の埋土を持つ土坑は、深いものもあるが、遺物も一切なく、性格は不明である。

3-2面(図124)

この面でもJトレンチ南東端で溝1～3が切り合いながら北東から南西へ抜けていく、そして目立つのは砂層の上面で多くの溝が複雑に切り合いながら東北東から西へ抜けていく状況である。それらの溝の北側には、蛇行が強く、底部の凹凸も激しい、人為的な溝か疑問の残る溝も何本かかる。

この面では砂層の上面は、Jトレンチ東側では北側の肩からなだらかに続くものの、西に行くに従い凹地を成していく、つまり、開析谷に近い東側では堆積作用が卓越しているが、西側では比較的浸食作用が強い状況と考えられる。その地形に従い、重なり合う溝も、東側ではかなりばらつきがあるが、西ではほぼ同じコースに収斂し、一つの流路状の形となって埋没していた。

なお、下の砂層を掘削する途中で、トレントレンチ断面において、この面ともう一つ下の土壤化面から切り込む、井戸と思われる大型で深い土坑をいくつか確認した。溝が掘削される前に存在し、全てが溝と重複していたため、この面ではうまく検出できなかったものである。4面で砂層を完全に除去した後、その底部を平面的に検出しているので、便宜上4面の記述において述べる。

Jトレントレンチ溝1～3(図125) 切り合い関係から、古い順に並べると溝3→溝1→溝2の順になる。溝3は幅1.2m～1.6m、深さ25cmほどで、これがJトレントレンチの溝に続くものと思われる。断面から見ると、3回以上は掘りなおされているようだ。溝1はトレントレンチ東壁あたりでは幅3mほどもあるが、トレントレンチ南壁で南西に抜ける部分では溝3と完全に重複して、幅も同じになる。埋土の下半がラミナのあるシルト～細砂層なので、東側で幅広く広がるのは、洪水などで流入量が増加した時の浸食によるものではないかと推測される。深さ40cmほど。これもJトレントレンチの溝に続くようである。溝2は肩がはっきりしない部分があったが、断面でみると、ほぼ同じ位置で2本以上の溝が、微妙にずれながら切り合っているようである。断面から見ると、その一つ分の溝は幅40cm、深さ20cm前後である。

溝1からは土師器鍋が、溝2からは須恵器甕が出土している。(図137-7・9) 土師器鍋は溝1の

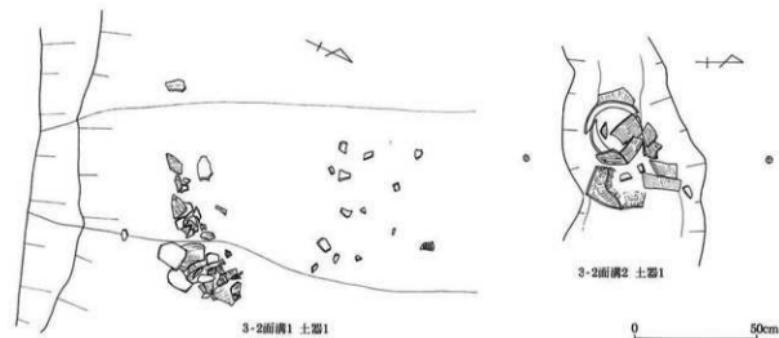


図125 Jトレンチ3-2面溝1・溝2遺物出土状況—

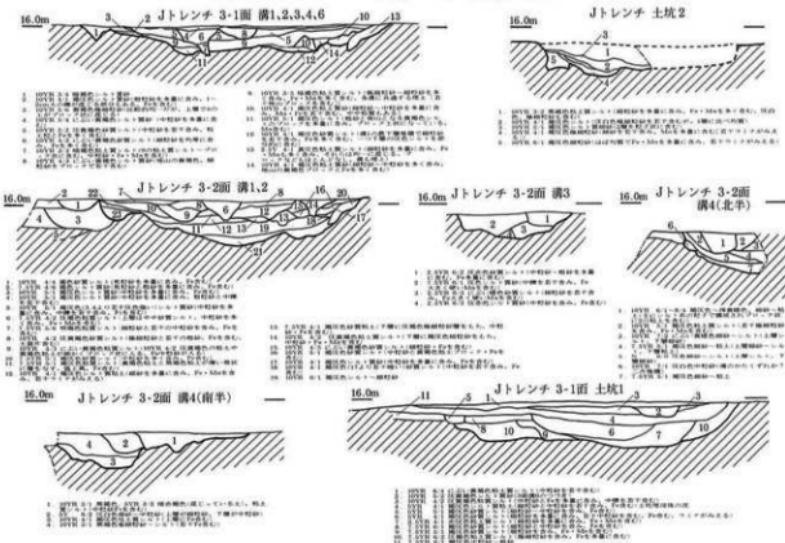


図126 J・Kトレンチ造構断面

南肩近くに破片が集中しており、少數が北側に散乱していた。須恵器甕は上半部のみが口縁を上にしてその場で破碎したような形で出土した。共に6世紀のもので、特に時期差はないようである。

Jトレント溝4 砂層の上面で重複する溝の中で一番新しい、幹線的な溝である。それ以前のものは大体、より高い北側で西に直進してきて、一旦南に蛇行した後、西に抜け行くものが多いのに対し、この溝はほぼ東北東から西南西へ直線的に抜けていく。幅はだいたい70cm～1mだが、Kトレントとの境では2m以上の幅に広がる。その部分の断面を見ると五つぐらいの溝が切り合ったような状況である。おそらく、Kトレント側で、自然地形を利用した幅広い溝になっていたのが、事あるたびに埋没と再掘削を繰り返した結果と思われる。東側の平均的深さは30cm弱である。特徴的なのは溝の途中に、長さ3m、幅1.5m～1.8m、深さ40cm程の土坑状の部分がある事である。これは、谷から取水した後、一旦流速を弱め、滯水状態にし、水温を上げるために工夫とも推測される。

Kトレント流路1 Lトレントの溝4も、それ以前の溝もすべてこの流路に収斂していく。元々は小扇状地の上部で、調査区北東側に砂を供給していった水流が、小扇状地末端部分を浸食しながら抜けていった痕跡だったと考えられる。それが次第に二次堆積で埋没していく過程で何度も溝が掘削されていったようだ。しかし、この部分で溝自体を低い所に通す事は導水していく距離を減らす事にもなるので、わざわざここに溝が収斂していく理由についても留意しておかなくてはならない。

断面では3本以上の溝が切り合った形になり、合わせて幅3m、深さ40cm以上にはなるようだ。

また、Kトレントの、この流路より北側の溝は、人為的か疑問なものもあり、性格不明である。

4面(図124)

浸食痕 砂層を全部掘りきると、浅谷状の地形の中に浸食の激しい流芯の痕が複雑にからむ状態が見られた。それらは主に北東から来て、蛇行し西へ抜けるものと、直進して南西に抜けるものに分かれる。おそらく、各々の浸食の起きた時の流速の違いに基づくものであろう。

北側の肩の4層以下の層は、南下がりの堆積であり、下位段丘崖からの崩落土と思われ、この浸食が下位段丘崖より後に形成された事を示すと考えられる。浸食痕底部からサヌカイト製翼状剝片が出土している。やや表面が風化しているが、おおむね離れた時期ではないと思える。

下位段丘が形成され、調査区北東隣の谷が開析されていくに従って、その谷の本流が谷からでた部分も浸食されていったと思われる。その時点で南東を流れる千里川の河岸段丘崖も、下位段丘より下に形成されていたかもしれない。多分、後述するG・L・Mトレントで検出された埋没段丘崖も形成されただろう。そして、日々の洪水などの流量増加時に調査区の中を水流が走り、浸食していったものと思われる。その後沖積平野側の堆積が進行することによって、開析谷の開口部付近では浸食より堆積が卓越するようになり、扇状地状に砂層が形成されていったものと推測できる。

井戸 浸食痕の底部で土坑状に検出されたが、先述したとおり、それらは3～2面かそれより下で砂層内に幾つかある土壤化面からの切り込みである。Jトレントで4基検出された。3基はトレント断面で確認できる(図122)。どれもが浸食痕の中でも深く浸食された流芯に位置し、その底部より深く堀り込まれている。平面形は3～2mの不整円形であり、底部は比較的整った円形に近い。深さは1.1～1.4mほどであり今でもかなりの湧水がある。おそらく、開析谷から直接取水、導水する水路が形成される以前に掘られたもので、今の所近くの沖積地側で住居址などは確認されていない事から、下位段丘崖直下の緩斜面帯で畑作などをための灌漑用の井戸と思われる。出土遺物がまったくないので時期は限定しづらいが古墳時代後期かそれ以前とは言える。

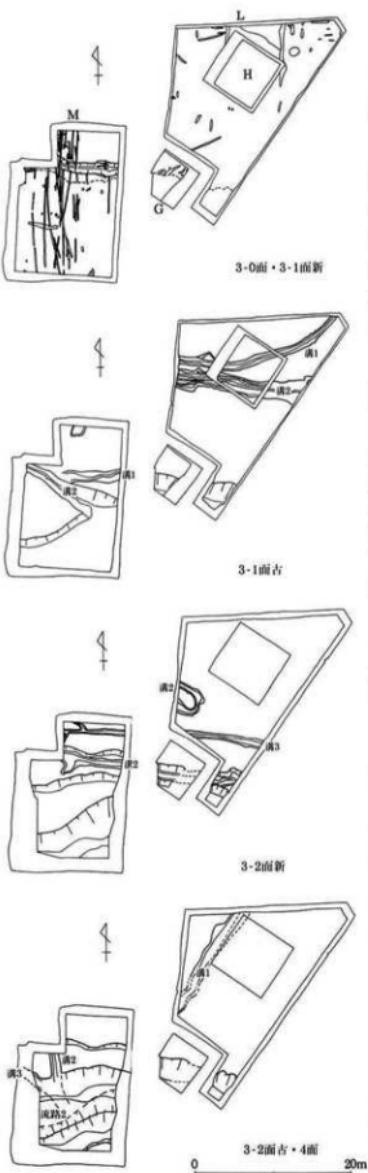


図127 G・H・L・Mトレンチ平面

G・H・L・Mトレンチ

この部分では、1・2層の下に、黒褐色粘質土の3-1・3-2層がある。Lトレンチの北側では3層が削平され、1・2層下に直接4面が出てくる。

また基本的に南側には、4面で形成されたほぼ東西に走る流路があり、それより南は流路の底とほぼ同じレベルに、螢池西遺跡で旧石器包含層の上を覆う11層につながると思われる黒泥層があり、北側の4層以下とは根本的に異なる。つまり、4面の古い時点で、ここに段丘崖が形成され、その下側の堆積が進んできた時に段丘崖沿いに流路が形成された状況である。

Mトレンチでは流路は新旧の切り合った2本が確認され、古い、北側の流路1はその埋没過程で途中に土壤化した平坦面を2面持ち、その上の面は3-1面と対応する。また、南側で新しい方の流路2も最終的に洪水面で埋没し、南側の肩と同じ高さになるが、3-1面の新しい段階のその時でも北側とは段差がある。そこを砂で埋め、北側の3-1面と完全に平坦にした面が存在したので、それを3-0面とした。

平面的な調査は3-1面と4面のみで行ったが、流路と溝がトレンチ断面にかかっていたので切り込み面の分類が可能となった。また、同じ面でも遺構同士の切り合いで新旧が分別できるものがあったので、ここでは3-0面・3-1面新・3-1面古・3-2面新・3-2面古・4面に分けて記述する。

また原則的には、この部分の面は北側のI・J・Kトレンチとは共通しない。隣接する部分でどちらも3層が削平され、消滅した部分のあるのと、北側の砂層の存在など、堆積状況にかなりの差があるからである。しかしあおまかには3-0面から3-1面が北側の3-1面に、3-1面から4面が北側の3-2面に対応する。

3-0面（図127）

この面では南側の流路も完全に埋められ、全体が平坦である。条里制地割りの施行に伴う整地の可能性が高いが、時期を示す遺物はない。遺構は鉄溝などの耕作痕とLトレンチの井戸である。井戸は上からの切り込みの可能性が高く、法量や形態を見ても古いとは思われない。上層はブロック土中心で下部は確認出来なかった。

特異な耕作具痕 鋤溝などの耕作具痕はほぼ東西南北の正方位を向くものがほとんどで、斜めに走るものも、この地区の中央を走る坪境の影響と考えられる。ただ、特異なもので、幅が5cm程、断面形は壁が垂直に立ち、底部が鋭い「V」字形になる溝がある。また、不思議な事に深さが50cmを越すものもある。これらの中には、約1.5mの幅で完全に平行する2本のセットがある事がある。この幅は荷車などの車輪幅とほぼ一致するという指摘があるが（江浦 洋1996「轍と開発－新家遺跡「土俵敷き遺構」の再検討」『大阪文化財研究』第10号側大阪府文化財調査研究センター）、それでは断面の底部の鋭さと、かなりの深さを持つ事が疑問として残る。また、条里制地割りとの関係から、道の存在は考えられず、耕作具痕である事は間違いないと思われるが、このような痕跡を残す農耕具の類例を知らない。

また、この面は水田の床面となっていたはずだが、流路を埋め立てた砂を何処から持ってきたのかと上面に5cmほどの粘質土があるものの水田床面が砂層であっても大丈夫だったのかという疑問もある。

3-1面新（図127）

Mトレーナーの流路を埋めた肩部のやや北側に東西に走る溝が掘削されている。3-0面時点で3-1面が見える部分なのでどちらの段階かは断言できないが、鋤溝や耕作具痕が溝の埋土上面を切っておりそれより古い。ほぼ東西と言っても、西端でやや北に曲がり始めるような形を示すが、坪境を越えたLトレーナーには続かない事から、条里制地割り施行後にその方向性に合わせて掘削された可能性が高い。幅1.2m、深さ約70cmで、逆台形の断面を持ち、ラミナやブロックのある埋土も見られない。

3-1面古（図127）

Lトレーナー溝1・2（図129） Lトレーナーでは、北東から来て、西に抜ける溝1と東西方向の溝2が、トレーナー西壁でかなり接近して、平行する。お互い何回か掘り直されているようだが、一番多く掘り直しが確認できる、トレーナー西壁の断面で見ると、溝2の方が溝1よりも前に存在し、4回の掘り直し、溝1は2~3回の掘り直しがあったようである。溝1が掘り直してもほぼ位置を保つに対し、溝2は次第に南に寄っていく傾向がある。溝1は最古の掘方で、北東側で幅80cm、深さ45cmほど、西側で幅1.2m、深さ50cmほど。溝2は東側で最終埋没時に洪水によるものと思われる浸食と砂層の堆積があり、肩も大きく崩れ、幅2m以上、深さ60cm以上になっているが、西側で見れば、大体、幅90cm、深さ40~30cmほどの溝が繰り返し掘られているようだ。この二つの溝は西側で合流すると思われるが、方向性から見ると、溝1は北のJトレーナー南東隅で北東から南西に抜ける溝の続きで、北東側開析谷の内部から取水したものと思われ、溝2は東側で、開析谷から出た所の谷からの本流から取水していた可能性が高い。

Mトレーナー溝1・2（図129） Mトレーナーでは、この時点で流路1は埋没し、北側から一段落ちた平坦面を成す。その流路1の元々の北肩部あたりを東西に走るのが溝1。流路1上の平坦面を北西から南東に走り、流路2に開口するのが溝2である。流路2はこの時点で下に砂層が形成され、やや浅くなっているものの、流れはあったようで、溝2から流入した黒泥土系のシルトがかなり堆積していた。

溝1は東側のG・Lトレーナーでは判然としないが、その部分では流路の肩部に、繰り返される浸食と堆積で平面形や切り込み面は判然としないが、幾つか溝が掘られていたようで、その一つに続いているのかもしれない。また、西端も北側の高所からの斜面堆積物により、形が判然とせず、溝2との切り合い関係も分からなかった。幅1.2mほど、深さ30cmほど。

溝2は幅1.2m、深さ50cmほどの、断面「V」字形に近い溝で、流路2に向けて大きく開く、今回の調査の中では、やや特異な方向性を持つ溝だが、流路2へに向けての排水溝と考えるしかない。

3-2面新（図127）

Mトレーナー溝2（図129） この時点ではMトレーナーの流路1の上面は3-1面古の段階より低く、さ

らに北から二段落ちで落ちる、二つの平坦面が存在したようである。その上側の平坦面の、北の高所からの落ち際に溝2がほぼ東西に走る。これは、G・Lトレンチで流路の北側肩部にある溝につながると考えられる。流路2の肩部近くを平行して走っていたのが、浸食される事により、形が不明確になったものか。その事から、G・Lトレンチの流路はMトレンチの流路2が蛇行して、流路1と重なっていると推測できる。溝2は幅1m、深さ50cmほど、その位置から、流路から取水した導水路と思われる。

Lトレンチ溝2・3（図129） 4面で検出したが、断面から3-2面切り込みでその新しい段階のものとできる溝である。溝2は径3.5mほどの不整円形に巡る、北側が浅く、南側が極端に深い溝のように検出されたが、トレンチ壁断面でみると、中央の4層系の土が、北側から南へ大きくずれ落ちているようにも考えられ、本来深い、井戸のような土坑で、北側の肩が何らかの理由で崩壊し、大きなブロックのまま、南側にずれ落ちたのかも知れない。しかし、崩落の危険性があり確認する事が出来なかった。

溝3は幅70cm、深さ40cmほどの溝で、ほぼ東西に走り、Mトレンチにも続く、そちらの西端で、北西と南西に二つの枝溝を出しているようである。枝のある事から見て、おそらく配水用の溝で、Mトレンチ溝2と同じか、それより上流側で取水しているものと思われる。

3-2面古（図127）

Mトレンチ溝2・3（図129） この時点では流路1の上の平坦面は3-2面新と変わらない状況と思われる。トレンチの北西側で、溝2は北北西から、溝3は北西から入ってくる。この時点の流路1の上の平坦面では、掘削中の観察からすると、この2本の溝はその上で合流してから流路2に開口していたようである。3-1面古の溝2と同じく排水用の溝と考えられる。溝2に関しては、トレンチ壁の断面でわずかに3-2面新の溝2との切り合い関係が確認でき、それより古い事は分かる。

Lトレンチ溝1（図129） 4面で検出したもので、トレンチの北西側で北東から南西へ抜ける。埋土はほとんどが砂層で、3層系の埋土がなく、断面から見ても、

3層形成以前の4面の遺構かもしれない。幅1.2～1.6m、深さ60cmほど。肩がかなり不整形なので、洪水時の溢流による浸食の可能性もある。

4面（図127）

Mトレンチの流路1・2の変遷が迫る面である。トレンチの中央で、段丘崖が形成されたあと、トレンチ東壁断面の南端下部にある黒泥土が堆積し、さらに南側ではその上に灰褐色系のシルトを中心とした堆積が進む。そして段丘崖が、段差程度に埋没した時点での流路1が形成される。それが半分ほどに埋没した時点で流路2が形成される。流路2は流路1より細かい蛇行をする事から、存続期間も比較的長かったようである。3-2面以降も流路1の上に堆積を繰り返し、流路2自体も底に最下粗砂層を残す。最終的には流路2も3-1面新の段階で洪水砂により埋没し、北側と60cmほどの段差となる。

流路1は無遺物であった。流路2は最下粗砂層に木の株や杭と共に弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む。Gト

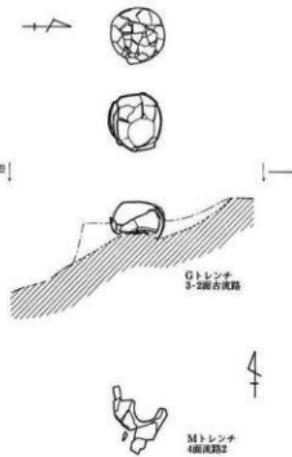


図128 G・H・L・Mトレンチ遺物出土状況

ンチで、流路の肩部、Mトレンチ3-2面古の溝3より下にあたる部分で出土した土師器（図138-9）もそれと同じ流路2の遺物と考えられる（図128）。

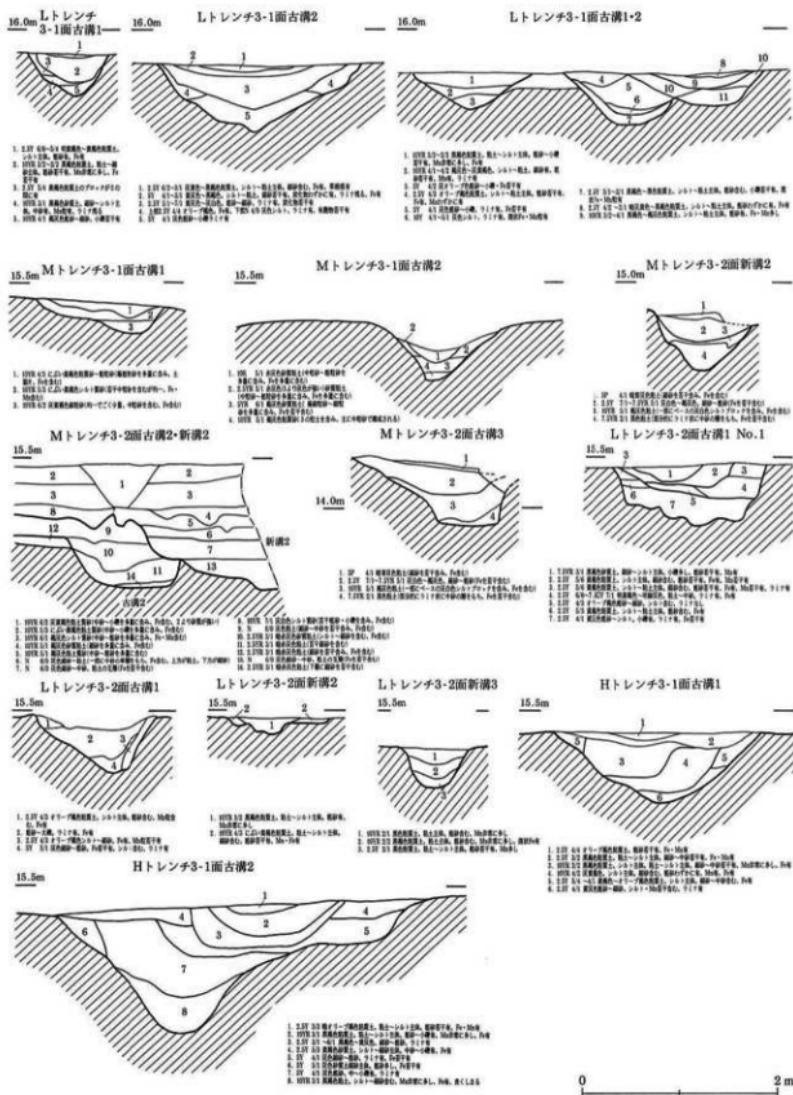


図129 H・L・Mトレンチ造構断面

(3) 遺物

螢池南地区からは古墳時代～中世まで、耕作土内からも含めると旧石器時代までの広い時代幅の遺物を確認しているが、遺構に伴う遺物は少なくてそのほとんどが包含層としてか若くは耕作土内からの遺物としての出土となっている。出土遺物の時期で最も多いのは古墳時代後期で総出土遺物量の大部分を占めている。周辺の遺跡の中で同時代の遺物と遺構を確認しているのは隣接する螢池遺跡と螢池西遺跡で、前者では墓域、後者からはしがらみ・溝などの生産域が推定できる遺物、遺構が検出されている。今後の当地域の調査の中でこれら遺跡群の面的な繋がりと関連性を遺物と遺構の両面から検討し、遺跡の全体像を解明していくのが課題と言える。

第1～3層（図130～133）

図130は1・2層出土遺物で、1はAトレンチ、2～12はJトレンチ出土である。1は復元口径22cmを測る弥生土器で、頸部は緩やかに湾曲し口縁端部は外面に凹線が一条巡る。2は須恵器壺で高台は比較的高く径7.5cmである。底部には回転糸切り痕が付くので中村編年V型式以降のものと考えられる。3は須恵器平瓶の口縁部。口径6.2cm、残存高3.2cmである。4は須恵器つまみ付き壺蓋で宝珠形の退化したつまみは頂上部が広く凹み中央は若干膨らむ形状を持つ。つまみ以外の部分は平らである。5は土師器皿で口径6.8cm、残存高1.2cmである。6は須恵器壺身でやや低く外側に丸く突出した高台を持つ。底径は10.8cm。7は須恵器胴部である。外面は格子目タタキで内面は太めの同心円文が残る。8は土師器瓶または鍋の把手部であり、平面は三角形で断面は緩やかに上へと内寄する。調整は全体にユビ压痕が残る。9は須恵器蓋で外面には口縁端部側から順にカキメ、両側を一条の凹線文で区画された斜状列点文が施されている。10は須恵器胴部片で調整は外面に平行タタキ後綱席文に類似した細かい平行タタキが残る。内面は細かい同心円文である。11は須恵器胴部片で外面調整は格子目状の压痕が、内面調整はナデが見られる。12は須恵器胴部片で10と同様の調整が施されるが、残るタタキの幅からすると10とは別個体と考えられる。

図131は1・2層出土のサヌカイト剥片である。1・3はEトレンチ、2・4がJトレンチ出土である。1は打面調整時の剥片で、打点が残るボジ面には他の打面調整剝離は無く、ネガ面には大きめの剝離痕が残っている。縦3.6cm、横1.8cm、厚さ0.5cmを測る。2はネガボジ両面に大きな剝離がある。またボジ面は広く階段状に割れている事から硬質の道具で強い打力により石核から剝がされたと考えられる。断面は三角形を呈し法量は縦2.7cm、横5.6cm、厚さ1.7cmである。3の剥片は縦3.1cm、横2.8cm、厚さ0.7cmで打面調

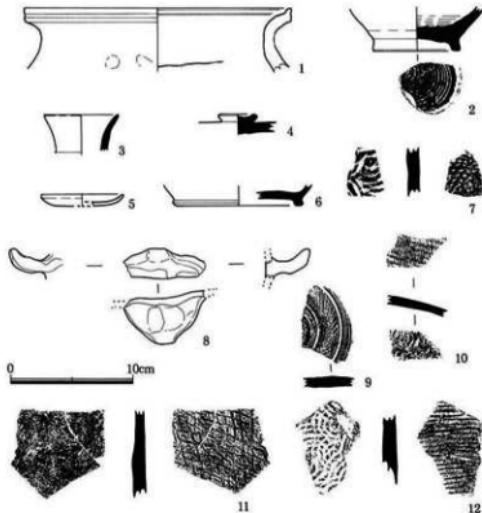


図130 1～2層出土遺物(1)

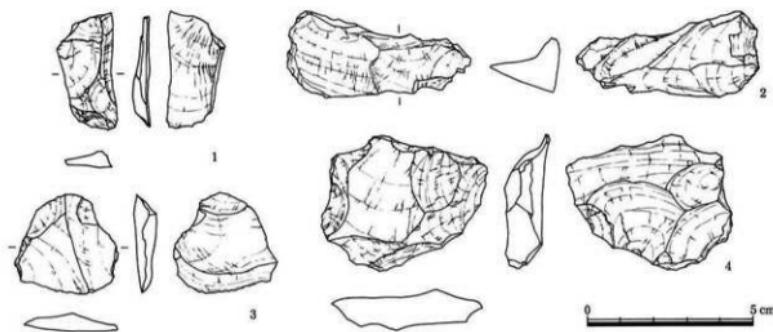


図131 1～2層出土遺物(2)

整は両側に入っている。4は石核または未製品と考えられ、強く割りとられたボジ面を消すように大まかに割りが入れられているが製品を製作する調整とは異なっている。ネガ面の割れは不定方向に入る事から打面調整時のものと考えられる。縦4.2cm、横5.2cm、厚さ1.2cmを測る。

図132は1～2層出土遺物で1～4はLトレンチ、5～9がMトレンチ出土である。また同一地域の2層内からは比較的多く遺物が出土し耕作土層の時期が推測できる遺物となっている。1は施釉陶器挽で、口縁部は緩やかに内湾した後端部が外反する。復元口径は17.6cmである。2は須恵器坏蓋で外面天井部と口縁部の間の稜線はほとんど消失するものの弱い凹線として残り口縁端部は外に大きく開く。天井部の回転ヘラケズリ痕は器高の上半分に縮小する。内面は回転ナデで天井部内面は不定方向ナデが入る。端部内面には沈線が巡る。3は瓦器挽である。口縁の内外面とも口縁に沿って粗くミガキが入るが、内面底部のミガキは残存部分が少なく格子状か円形状か特定できない。高台部は外側に開きながら明瞭に突出し、外面胴部下半にはユビ压痕が残る。4は須恵器で外面には凹線が3条巡り復元底径16.4cmである。5は瓦器挽である。外面調整は下半にユビ压痕が残り内面調整には細かいミガキが入り、口縁端部付近には沈線が巡る。復元口径14cmである。6は器種不明の須恵器で、内外面ともナデ。内面には「升」字のヘラ記号が線刻されている。7は須恵質の施釉底部片で底径は6.6cmを測る。8、9は瓦器挽。8は端部が屈曲する高台を持つ。復元底径は5.6cmである。底部内面にはミガキが施されているが残存片では不定方向としか確認できず全体像は不明である。9は外面にユビ压痕を残し内面にはミガキが入る。高台部は短く端部に面を持ち大きく外側に開いており、胴部の立ち上がりも緩い。3、5、8、9の瓦器挽は、高台部

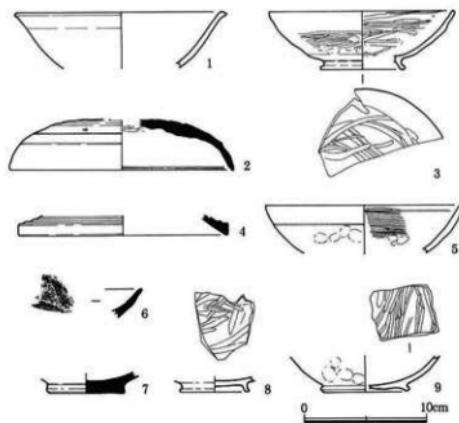


図132 1～2層出土遺物(3)

が低く腕部も浅く径が小さいことから13世紀中頃と考えられる。

図133は1～2層出土のサヌカイト剝片である。1はMトレンチ、2・3はLトレンチ出土である。1・2はネガ面の一部に細部調整が加えられている。1は縦3.3cm、横3.5cm、厚さ0.8cm、重量7.88gを測る。打面調整後石核より取られた剝片で、ボジ面より全体のはば半分にわたり周辺部に細部調整が施されている。2はネガ面からの強い打擊によって大きく階段状に剥離しているが、その一方の端部に両面から細かい調整を加えている。縦2.7cm、横5.1cm、厚さ1.2cm、重量14.06gである。3は剝片でネガボジ両面にも細部調整剝離や打面調整剝離は見られず、大きく厚みにむらがある剝裏面を見せる事から大まかな打面調整時に剥離したかけらと考えられる。縦2.4cm、横5.2cm、厚さ（最大）1.1cm、重量11.5gである。

図134中1～3は4面浸蝕痕出土のサヌカイト剝片である。すべてJトレンチ出土である。

1はネガ面には明瞭な打点とフィッシャーが見られる。縦4.9cm、横2.6cm、厚さ0.8cm、重量14.92gを測る。2は原礫面を残し、ネガ面に打面調整剝離を、やや厚く階段状の剝離面を残す。縦4.1cm、横3.45cm、厚さ1.1cm、重量14.04g。3も原礫面を残しており大まかな打面調整時の剝片と考えられるが、一部に細部調整らしき剝離も見られる。しかしながら自然の欠けの可能性もあり石器と特定する事はできない。縦3.4cm、横4.2cm、厚さ0.85cm、重量14.8gを測る。

1～3層出土のサヌカイト剝片はいずれも旧石器と考えられ、隣接する螢池西遺跡や螢池遺跡を含めて当調査地区付近は旧石器遺物の集合的分布地という事ができる。

3-1面出土遺物（図135）

3面には多くの遺構が残されているが、遺物の量は少なく破片で出土するものがほとんどである。中には上層からの耕作による混入と思われるものもあり、若干取り上げた遺物の時期に開きが見られる結果となっている。

図135の1、2、4、6～8はKトレンチ、3はMトレンチピット内、5はLトレンチ出土である。1は縁軸が残る土師器腕で、復元底径9.1cmを測る。外に開く小さく低い高台を持つ。2は須恵器壺蓋で肉厚のある丸みを帯びたつまみが付く。内面にはクロクロ方向とは異なる一定方向のナデが入る。3は手の字断面の土師器皿で復元口径9.4cm、器高1.3cmを測る。4は須恵器壺で底径は3.9cmで内面にはヘラなどの工具で付けられた線刻状の痕が残る。また外面底部には回転糸切り痕が見られる。5は須恵器壺蓋片で外面は回転ヘラケズリで調整されている。6は須恵器高壺片で壺部の残存する内面は比較的平坦

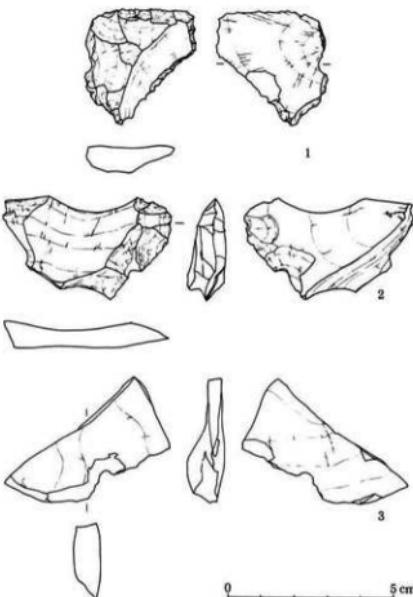


図133 1～2層出土遺物(4)

であり、大きく外反する脚中央部には凹線文が3条巡っている。7は須恵器壺頸部で口縁部外面には6条1単位の波状文が施され、内面には同心円文が残存している。8は須恵器壺身底部で、低く大きい高台を持ち、外面にはヘラなどの工具による線刻がされている。底径は9.8cmを測る。

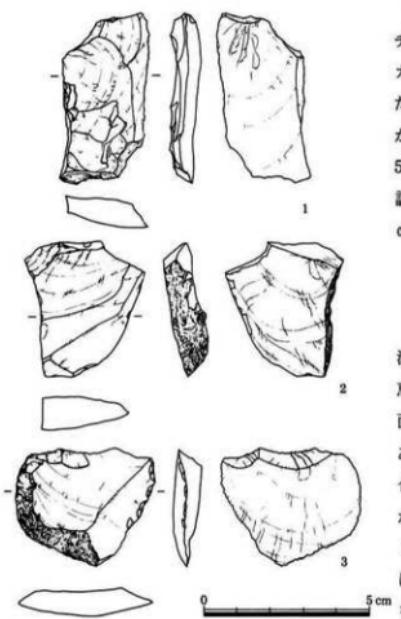


図134 Jトレントチ4面漫鉄窯出土遺物

9・10はサヌカイト剝片で、9はM、10はKトレント出土遺物である。9は背部に打瘤を明確に残し、ネガ面にはボジ面から入れられた細部調整剝離が残る。ただし鋭利さには乏しく実際に使用されていたかどうかは解らない。縦4.3cm、横2.5cm、厚さ0.45cm、重量5.33gを測る。10は一部に原礫面を、ネガ面には打面調整の剝離痕が残る。縦2.25cm、横2.1cm、厚さ0.75cm、重量1.66gである。

J・Kトレントチ3-1面溝1・2・3・4、
小溝群出土遺物(図136・137)

1～3、10は溝1、4～9は溝2、13は溝3、12は溝4、11はJ・Kトレントチ小溝群出土である。1は須恵器壺蓋で、他の須恵器片が溶着した破片である。内面には同心円文が残っている。2は須恵器高壺壺部である。ほとんど本体は残存していないが、脚部との接合部に方形の透かしが残り、その位置関係から三方透かしと考えられる。3は土師器瓶の把手部で全体にユビ压痕とハケが残る。平面形は方形を呈している。4は弥生土器(後期)壺口縁部で、大きく外反する外形を持ち口縁端部には1条の凹線が巡る。復元口径は16.6cmである。5は壺口縁部で復元口径16.4cmを測る。

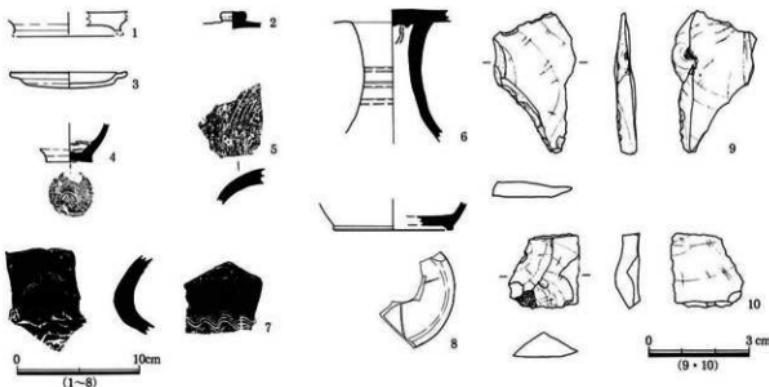


図135 3-1面出土遺物

口縁部は大きく内弯し端部は肥厚している。頸部内面には横方向のハケが残る。6は須恵器壺底部で内面胴部にはユビ押え痕を多く残しているが、外面調整は磨滅のため不明である。7は須恵器壺蓋で天井部と口縁部との境目には明瞭な沈線が巡り、器形は全体的に低く口径は大きい。口縁部は短く内弯し、端部には沈線が退化した面が内側に付く。天井部ケズリ時のロクロ方向は反時計回りである。口径15.4cm 器高3.9cm を測る。8は須恵器胴部片で、胴部でも下方若くは底部そのものと推測される。外面調整には不定方向の平行タタキがあり、内面にはわずかに同心円文がナデ消しにより円弧状に残存している。9は須恵器片で器種は不明である。調整も外面は不明だが内面にはヘラ状工具による線が交差した線刻がみられる。10は須恵器の壺蓋で非常に焼成が甘い個体である。口縁はハの字を開き、天井部と口縁部間の稜線は明瞭で凹線状の痕跡が周囲を巡っている。また天井部外面びはヘラ状工具による記号が一本刻まれている。ロクロ回転方向は不明である。11は須恵器壺身で、口縁部は短くやや内弯しつつ立ち上がり端部内面には弱い面が付く。風化が激しい上破片の残存率が悪いため誤差は大きい可能性はあるが、復元口径は15.5cm を測る。12は須恵器壺蓋である。外面の調整には中心からカキ目、凹線文、列点文、凹線文、カキ目と施されており、内面は回転ロクロナデで仕上げられる。1図の9と類似した破片資料である。13は須恵器高杯で、外面には細かめの波状文と縦に長い長方形の三方透かしが施され、残存する破片の下端には凹線が一条巡る。脚部の上半部と考えられる。

3-1面溝2からは石鏃も一点出土している（図137-1）。縦2.7cm 横1.0cm 厚さ0.45cm を団り、形状はネガボジ両面共に細部調整によりしのぎが付けられ、全体は水滴状で断面は菱形を呈している。磨滅が激しく、先端部は折れたように丸くなってしまっており実際に使用されたものと考えられる。

3-2面Gトレンチ溝1、Jトレンチ溝1・溝2出土遺物（図137）

3～6はGトレンチ溝1出土遺物である。3は須恵器口縁部である。器種や口径などは不明だが口縁は垂直ぎみに立ち上がり、端部付近で外反する。4は土師器高杯脚部で形状と同一層出土遺物などから古墳時代前期のものと考えられる。調整は磨滅のため不明である。5は土師器塵片であり、内面の調整



図136 3-1面Jトレンチ溝1・2・3・4・Kトレンチ小溝群出土遺物

は不明だが外面にはタタキ痕が残っている事から、弥生後期に相当する破片であると考えられる。6は弥生土器甕底部であり、やや突出した底部を持つ。復元底径4.5cm。

7・8はJトレンチ溝1出土遺物である。7は溝1の底面に張り付くように出土した土師器の鍋で、外面調整は縦方向のハケが上方から下方に細かく入り、内面調整は口縁部は横方向のハケで胴部はナデにより仕上げられている。形状は、口縁部が緩やかに外反するくの字状を呈し、胴部は最大径付近に把

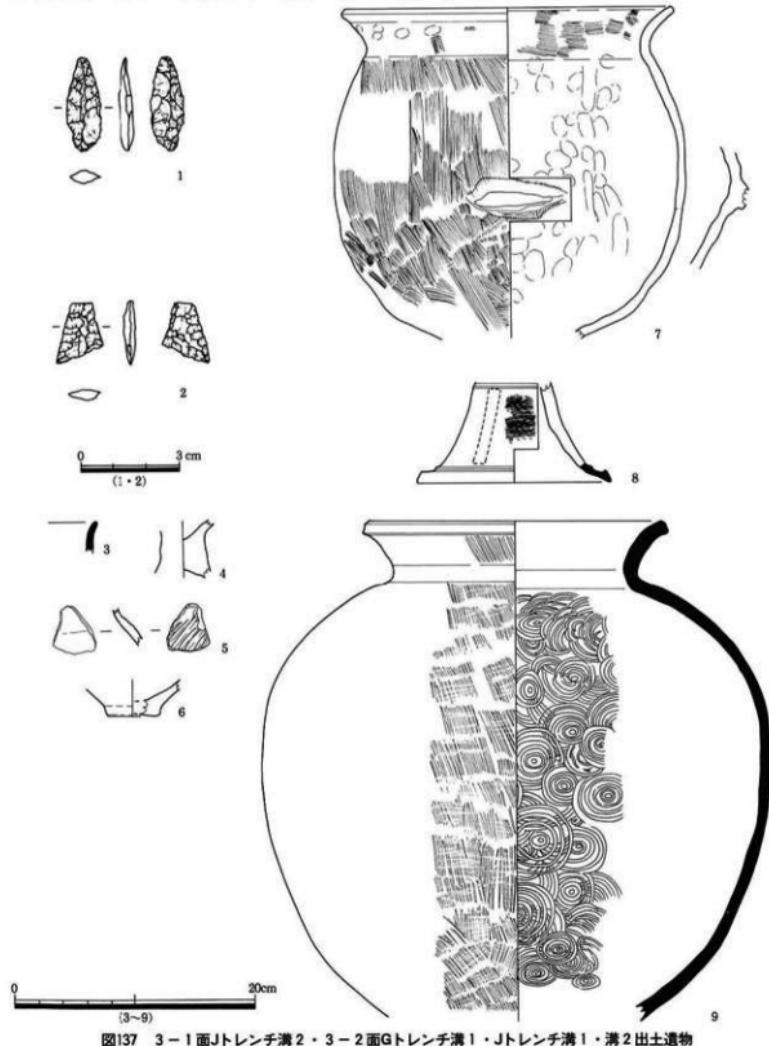


図137 3-1面Jトレンチ溝2・3-2面Gトレンチ溝1・Jトレンチ溝1・溝2出土遺物

手が2カ所付く球形である。底部は欠損しており不明である。復元口径27.2cm、残存器高27cmを測る。8は須恵器高坏脚部である。全体は緩く外反し、脚端部外面には平坦面が付く。また脚部と坏部の境目には凹線が、脚端部には凸帯が1条づつ巡る。内面調整は回転ロクロ痕が見られるのみだが、外面には横方向に入る細かい波状文が全体に施されている。透かしは長方形のものが三方向に入っている。復元口径は16.1cm、残存器高は8.15cmを数える。

2・9はJトレンチ溝2出土遺物である。9は須恵器壺で口径24.2cm、残存高41.3cm、最大径41.6cmを測る。形状は胴部がやや形の張る楕円形であり、口縁部は外に大きく外反し端部には沈線が巡る平坦面が付く。調整は、外面が縱方向に走る平行タタキで底部付近では若干その方向が乱れ不定方向になり、内面は同心円文が頸部から底部にかけて残っている。2はサヌカイト製石鑑である。先端部と返しの一方が出土時には欠損しており正確な大きさは不明となっている。残存する法量は縦1.8cm、横1.35cm、厚さ0.35cm、重量0.56gである。

G・Mトレンチ3-2面～4面流路2出土遺物（図138）

8～15が流路2肩部及び上層、1～7がMトレンチ3-2面流路2最下粗砂層出土遺物である。

1は古墳時代前期の古式土師器で布留の壺の口縁部片で、復元口径13.3cmと残存高4.9cmを測る。口縁は比較的平坦に端部までのび、端部は明確な折曲げ部を持っており布留式の壺の古い型式を残している。外面調整は口縁部は強いヨコナデで胴部はタテハケである。内面は口縁部が外面と同じく強いヨコナデで胴部は頸部付近を外してヘラケズリで調整されている。2は壺底部であり、外面の調整は磨滅のため不確実だが、その断面形状と共伴する遺物などから、古墳時代前期のV様式系の壺であると考えられる。底部径は4.6cmで残存高は3.1cmである。3は外面にタタキ痕が残る壺底部片で、復元底径は5.2cmである。底部の突出が少ないが胴部は比較的横方向に伸びていくため、2と同様に古墳時代前期のV様式系の壺であると考えられる。4は古式土師器壺の底部片で、布留壺の底部である。外面には2次焼成のため煤けて明瞭ではないがハケ目が残り、内面にはやや細かくユビ圧痕が残る。5は弥生土器壺胴部片で外面調整は上方から現存5本の凹線文、縦ハケ後横ミガキ痕、縦ハケ後横ミガキ後波状文が入っている。内面は頸部付近はヨコナデで胴部はユビ圧痕である。共伴遺物などから時期は弥生後期と考えられる。6は古式土師器の壺胴部片で、外面にはやや粗い縦方向のハケ目とその後に入る横方向のハケ目が残る。内面には向かって左方向に削るヘラケズリ痕が明瞭に残っている。布留壺の胴部と考えられる。7は未焼成の土製玉寸法は縦4.0cm、横2.6cm、幅2.3cmを測る。表面の残りは非常に悪く調整は一切残っていないため用途や製作方法は不明である。

8は壺口縁端部で頸部付近には刻み目が入った凸帯を持つ。口縁部は大きく外反し端部には凹線が1条巡っている。弥生後期か。9はGトレンチ3-2面古流路出土の古式土師器の壺で庄内壺である。口縁部は外反し端部は上方につまみ上げられている。また胴部は球形を呈し底部は丸底化している。調整は、外面が向かって右上がりの細かいタタキで底部付近は不定方向となっている。内面は基本的にはヘラケズリだが、胴部下半はナデとハケも残り、頸部付近も頸部が鋭角になるまでケズリが入るもの、若干タタキの痕跡も見る事ができる。復元口径は13.6cm、復元器高は22cmとなる。10は壺口縁部で復元口径は14.2cmを測る。口縁端部に1条凹線が巡り、頸部は短く垂直に立ち上がっている。弥生後期と考えられる。11も壺口縁部片で、全体的に大きく外反し口縁端部外面には面が付く。器形は不明である。12は土師器高坏脚部であり、調整は内外面ともハケが若干残るのみである。脚柱部がやや広がり脚端部に向けて一段明確に折れ曲がる形状である。布留式の高坏か。13は壺口縁部で、調整などは不明だが、

その形状から庄内甕口縁部と考えられる。14はMトレンチ4面流路2上層出土の古式土師器の小型丸底壺で口縁と一部の胴部が欠損している。外面の調整は上半部は横ハケだが、下半部は2次焼成の煤が付着しているため解らなくなっている。内面は上半部は横方向ケズリで下半部はユビ压痕で仕上げられている。また下半部には炭化物が付着している。15は古式土師器だが、口縁部は庄内甕、布留甕とも異なるやや外反するものの垂直に立ち上がる単純口縁である。胴部の外面調整は左上がりのハケが施され、内面は頸部を鋭利にする横方向のケズリで調整されている。復元口径は14.4cmで残存高は15.6cmである。

小結

螢池南地区からは主に段丘沿いの流路などから弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が出土した。また3-1、3-2面から検出されたそのほかの溝やピットなどの遺構からは、古墳時代後半の遺物が出土した。耕作土及び包含層に相当する1～2層からも遺物が少ないながらも出土し、特に瓦器や土師皿が見られる事から、遺跡の西側に展開する条里制との関係も考えられる。

当調査区では調査範囲に比較して遺物量は少ない。それは遺構の密度や性格とも関係しているかもしれないが、接合可能な資料もわずかで、同時期の遺物がまとめて検出できたのも3-2面の溝出土資料と流路2の資料だけであった。

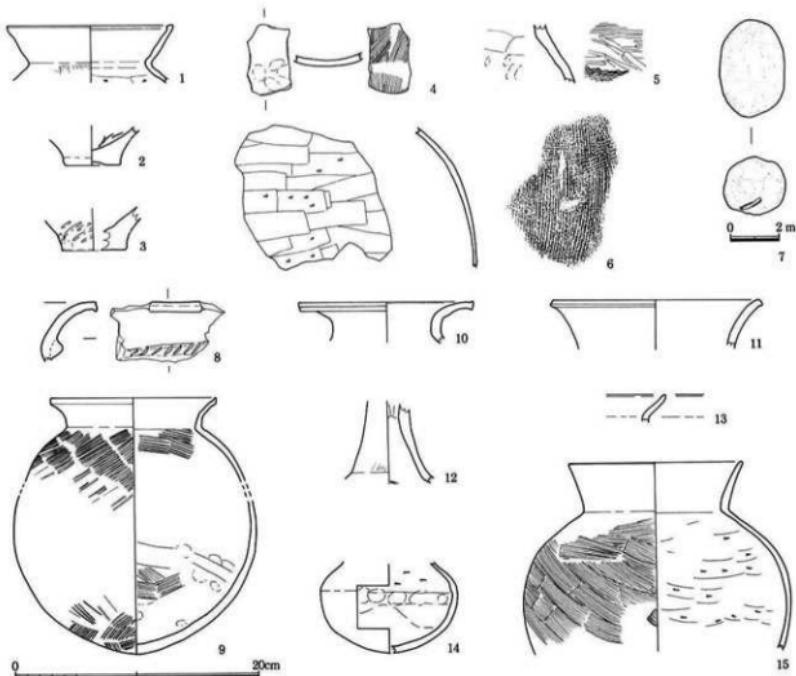


図138 G・Mトレンチ3-2面～4面流路2出土遺物

(4) まとめ

埋没段丘崖が形成されたのは層位的には螢池西遺跡の12層出土の石器より先行すると思われる。これらの石器は国府型ナイフを含み、瀬戸内技法による、石核・翼状剥片・チップがあり、後期旧石器時代後半のものである。すると地質学的な年代において、この埋没段丘崖は、間近に存在する下位段丘崖とほとんど変わらない時期に形成された事になる。おそらくは下位段丘崖形成後に引き続いて形成された河岸段丘崖と思われるが、それを形成したのが南東側の千里川によるものなのか、北東で下位段丘を開析した谷からの流れなのかは、より広域の層位的つながりが把握できなければ分からんだろう。

またJ・Kトレーンで4面に刻まれた浸食痕も、開析谷の形成、発達に軸を一つにしたもので、最下層から出土した石器から、これも後期旧石器時代後半頃と思われる。

すると、螢池西遺跡などの石器群は、高槻市で低位段丘堆積層である富田疊層中部で得られたC14年代の 26000 ± 800 年B.P.より確実に新しい事になる。

埋没段丘崖が、だいたい半分程埋まり、段丘崖沿いに流路が形成され、それが流路1→2と変化していく過程は、後期旧石器時代後半から、弥生時代後期の間に起こったと考えられる。流路2の最下粗砂層に含まれていた弥生時代後期～古墳時代前期の遺物がそれを示す。それとともに調査区北側の浸食痕の中にも砂層が堆積していったのであろう。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は確認されていないが、流路の肩部から完形に近い土器が出土しているので、近くに集落などが存在した可能性は高い。また、出土遺物がないため、時期は不明だが、北側の砂層の上面で、溝群に先行する井戸などが、この時期のものへの可能性もある。

その後、しばらく人の活動が途切れる時期があり、その間に3層系の地層が形成されるようだ。この有機物が多く、かつ、酸化マンガン粒が多く沈着する層は、自然の植生によって、有機物を多く含みながら通気性も良い腐食土が形成された後、そこに人為的な開発がなされ、酸化が進むと形成されやすい層と考えている。

古墳時代後期に入ると、多くの溝が次々と掘削されるようになる。特に北側の砂層上で多くの溝が切り合うのは、その部分が洪水の度に砂層の堆積する、小扇状地状の地形であったからと思われる。

溝の多くはその方向性から大別して、北東の開析谷の中から取水して導水したものと、谷から出た本流の部分から取水してきたと思われるものに分けられる。谷の中から取水してきたものは、さらに、下位段丘崖直下の緩斜面帯を利用して西進していくものと、すぐ南西の低地へ下っていくものとに分けられる。すぐ下るものは谷を出た所で取水して西進してきた溝と合流するものもある。

谷から出た本流から取水しているものも、その本流の可能性の高い流路2の肩部に沿って伸びるものと、それよりやや北側で西に向かうものとに分けられる。

溝の抜けていく方向は、配水していく地域の遠近で区別されていると思われるが、取水位置が同時期併存の溝でも2カ所考えられるのは何故か。谷から出た位置での取水は、小扇状地の末端近くで、浸食が卓越してくる部分に堰を作ったと推測されるが、その場合、ある一定程度の水量があり、堰により上げる水位がある程度ないと、広い地域に給水できない。それに対して、谷内で取水すれば、水の流れを利用して、分水路を谷斜面に設けるだけで、導水可能で、かつ、段丘崖直下の緩斜面にも給水が可能になる。おそらく小規模な開析谷で流量が不安定な場合、その2カ所の取水口は、谷から出た位置の取水施設で水位が低下し、取水不能となった時も、上の谷内から取水したものを分流して供給できるというメリットがあろう。

また、本調査地の例は小規模であり、また実際の取水位置を調査したわけでもないが、扇状地上部もしくはそこから少し谷に入った位置で取水する事により、扇状地上や丘陵の裾部、はては段丘上など、谷底部の氾濫原や沖積平野で堰を作っても導水できなかった部分に導水できるようになる水利形態は、奈良県桜井市纏向遺跡・奈良県御所市南郷遺跡・大阪府東大阪市西ノ辻遺跡などの例があるように古墳時代に入ってからとられるようになったものである。

まさにその方法による耕地の拡大が、弥生時代と古墳時代の差を生む、土地開発の画期となったのであり、その小規模な一例がここに示されていると考える。

この北東に隣接する谷からの取水による灌漑可能範囲は、別の流路や谷の部分を越さないと考えれば、調査地の北西側に、更に小規模な開析谷があるので北側の西端はその位置にある。また、南側の流路が北東の谷からの本流と考えると東端もおのずと限られてくる。しかし、南西側には沖積平野が大きく広がっていて、本調査区の流路と、螢池西遺跡同じ古墳時代後期の堰があった流路が、何処で合流していたかは不明だが、その流路間は、微高地をつないでいけば灌漑可能であったはずである。おそらく、ここでの溝群と螢池西遺跡の堰はある程度同時期併存で、その流路間の東半と西半を各々が灌漑していたのではないだろうか。

さて、流路が洪水砂で埋没した段階で、溝群も最終的に放棄されたようだが、なお流路部分から南と北では若干の段差が存在していたようである。それが埋め立てられ、完全に平坦化するのが、条里制地割りの施行時であると思われる。しかし、条里制地割りが貫徹されるのはI・J・KトレーナーとLトレーナーの間にある坪境以南で、それより北は若干削平されるものの、一時は自然地形に合わせた耕地区画が存在していたようで、その後、南側の条里制地割りを延長するような形で正方位に合わせた区画と削平が進んだようである。

条里制地割りに伴う遺構で特殊なのは、なんらかの耕作具痕と思われる幅5cmほどで、中には深さ50cmほどあるものもある、底部断面が鋭い「V」字形を成す溝である。これらの中には、いわゆる大八車の幅と共に通する、約1.5mの幅で平行するものもあり、理解に苦しむ。形は似ていても深さは10cm程度のものもあり、何種類か、形成原因の違うものもあるかもしれない。自然現象でも平行する直線的な溝が密集するようなひび割れの類例もあるようなので、結論は留保したい。

今回は調査範囲も限られ、遺構・遺物ともさほど多いものでもなかったが、自然地形の変遷と、それに対応していった開発行為の変遷を明らかにする事ができた。

VIII 蛍池西遺跡（2～4）

1. 調査の方法

螢池西遺跡は豊中市螢池西町1丁目から3丁目にかけて広がる遺跡で、刀根山丘陵の西裾に広がる低位段丘の南西崖下、猪名川水系の沖積平野に位置している。

今回の調査地点はいまだ周知の遺跡の範囲に含まれていないが、1993年度にモノレールの橋脚部分のみを試掘として調査し、その結果を受けて調査することになった。（図139）

深い部分に旧石器の包含層の存在が確認出来ていたため、調査は鋼矢板打設後に行った。

(2)は1994年6月から同年12月まで、1993年に（その1）で調査した、4基の橋脚部分の両脇、側道部分を調査した。螢池小学校の南側である。南北の側道部分を各々2分割し、着手順に南東部分を2Aトレンチ、北西部分を2Bトレンチ、北東部分を2Cトレンチ、南西部を2Dトレンチとした。

(3)は1995年8月から同年9月まで調査した。阪神高速11号池田線の東に隣接し、モノレールがそれをまたぐ、大きめの橋脚1基分である。3Aトレンチとした。この部分はビルの基礎の搅乱以外にモノレール建設事務所の要請により、橋脚のコンクリート基礎杭設置後に調査する事になり、6本分の円形の搅乱が並ぶ事となった。また、工事作業車両の進入のため、面積の1/3以上を覆鋼板で覆っての調査となった。

(4)は1996年5月から同年7月までで、(3)と(2)の間で、埋設管による搅乱のない部分のみ調査した。西側にビルの基礎の大きな搅乱があったが、その下に若干の遺構が残存していた。南北の側道とその間も含めた範囲である。

面と層の関係は、1層の上面が1面というように、層とその上面の数字を対応させた。遺構名の番号は各トレンチ、各面毎につけた。

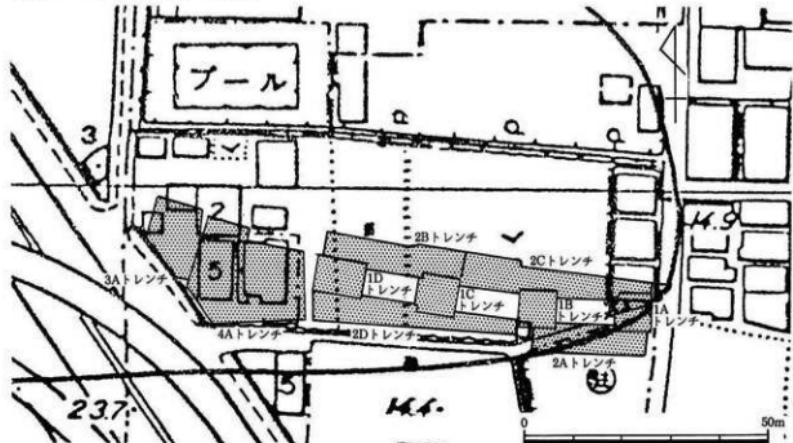


図139 蛍池西遺跡（2～4）トレンチの位置

2. 調査の成果

(1) 基本層序 (図140・141)

基本的には(1)の時点までたたか基本層序が有効であり、それに準じて記述する。

1層 2.5Y6/2(灰黄色) 砂質土 酸化マンガン粒若干あり、主体粒子シルト～細砂、粗砂含む。

2層 2.5Y6/1～5Y6/3(黄灰色～灰オリーブ) 砂質土 上部は酸化鉄が多い、1層に似る。

以上は1993年度の調査で、2層から昭和34年の十円玉が出土しているように現代の層である。

3層 2.5Y5/6～6/3(黄褐色～明黄褐色) 粘質土 主体粒子粘土～シルト、細砂～粗砂若干あり、4面の自然流路や溝の上を覆う部分ではブロック土層状を呈する部分もあり、4層の消える東部分では質の似た5層と接触して消える。上面はかなりフラットであり、現代の整地層の可能性が高い。

4層 2.5Y6/3～5Y6/2(にぶい黄～灰オリーブ色) 砂質土 主体粒子中砂～シルト、粗砂若干含む、部分的に酸化マンガン粒あり。西では厚く、東に向けて薄くなり、粒子の粒径も小さくなる。東側では途切れることもある。西側では下面を浸食して堆積した部分もあり、西の5～6面の自然流路が埋没していく過程の最終段階の洪水堆積層と思われる。かなり土壤化が進み、一部は耕土化した可能性もある。

上面の4面では古墳時代後期の遺構が見られる。

5層 2.5Y5/6～10YR3/3(黄褐～暗褐色) 粘質土 主体粒子粘土～シルト、細砂～粗砂あり、酸化マンガン粒あり。西側4Aトレンチでは、間に洪水砂をはさみ、上下2層に分かれ、やや砂質になる。弥生時代後期に、5～6面の西側の自然流路から供給され、形成されていったショートバーを核とした堆積層である。東側では黄褐色系粘質土として、安定した溢流堆積層の状況になる。

4Aトレンチでは上下の層を5層新・古としたが、その状況はむしろ、6面での洪水の繰り返しによる時期的変化と捉える事が出来る。つまり、東側の2A～2Dトレンチで、6面で検出した水田畦畔は4Aトレンチで6面から5層新の上面までの、洪水の度に変化していく溝や畦畔と対応しているようである。

6層 10YR3/4～5/1(暗褐～褐灰色) 粘質土 主体粒子粘土～シルト、粗砂若干あり、酸化マンガン粒非常に多し。酸化マンガン粒の形成が激しいので、層内での堆積状況や遺構の切り合いは不明である。2Dトレンチ西側で、土壤化した粗砂層となっているので、その部分をショートバーの中心とした破壊的洪水による層と思われる。その後、激しく土壤化が進み、一部は水田耕土となったようである。

この上面である6面から、弥生時代後期の溝と畦畔が形成されはじめる。

7層 2.5Y6/2(灰黄～) 砂質土 主体粒子中砂～シルト、酸化マンガン粒あり、酸化鉄若干あり。

8層 2.5Y6/4(にぶい黄色) 粘質土 主体粒子粘土、シルト～細砂含む、酸化マンガン粒あり。

両層とも無遺物で、有機分も少ない。粒子の並びは安定し、7面以外は土壤化面は見られない。西では両層で30cmほどの厚さだが、東では1mほどにもなる。一時に堆積した溢流堆積的な洪水堆積物か。

9層から11層までは、炭化した有機物を多く含む、黒泥土的な層の重なりで、黒色粘土層群とも言える。基本的には3層に分かれ、11層はさらに11-1層と11-2層に分割できる。

9層 5Y5/1～10Y5/1(黒～灰色) 粘質土 主体粒子粘土～シルト、細砂～中砂わずかにあり、酸化マンガン粒・斑状酸化鉄あり。堆積した黒泥土最上部の土壤化したものか。10層との間に薄い粘土～シルト層をはさむ部分もある。耕土である可能性もあると思われたが、遺構・遺物は皆無である。

10層 10Y3/1(オリーブ灰色) 粘土 シルトわずかに含む、炭化物あり、管状酸化鉄・酸化マンガン粒わずかにあり。あまり土壤化していない止水堆積層で、沼のような状況であったと思われる。

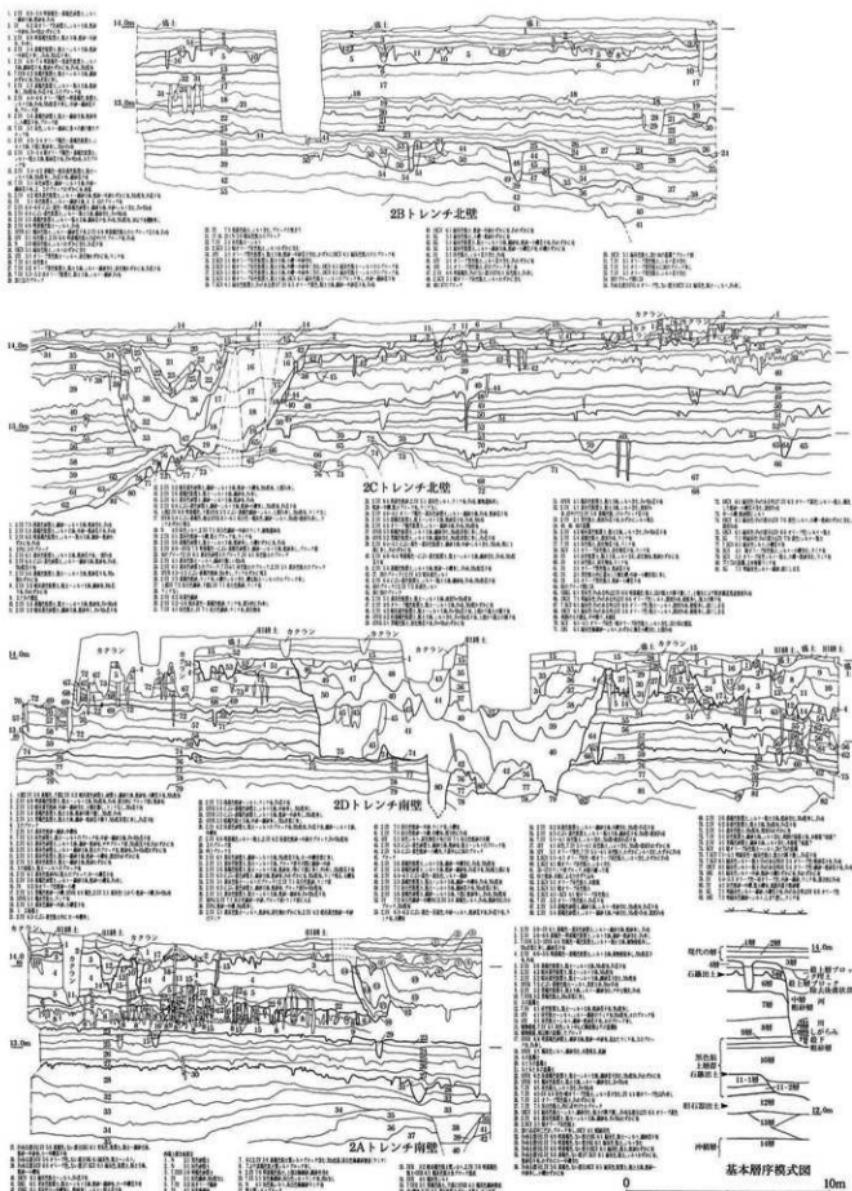


図140 2A～2Dトレンチ断面

- 11-1層 5Y4/1~2.5GY4/1(灰色) 粘質土 粘土主体、シルト～細砂含む。斑状酸化鉄若干あり。
粒状構造が見られるほど土壤化している。耕土の可能性も考えたが、遺構・遺物共皆無。
- 11-2層 7.5Y4/1~2.5GY4/1(灰色) 粘質土 粘土主体、シルト～細砂含む、炭化物わずかにあり、
下部に青灰色粘土の小ブロックあり。小ブロックは堆積時の流れによる下層の巻き込みか。
- 12層 5BG6/1~10BG6/1(青灰色) 粘土～シルト 上部は黒色粘土の降下が激しく、土壤化、酸化鉄分
も沈着。還元状態にある止水堆積だが、部分的に疊や旧石器を含み、上下2層に分かれる部分もある。
- 13層 単一の層ではなく、青灰色系の粘土～シルト・砂層・中疊～粗砂を多く含む粘土～シルト層など
が複雑に切り合う層群である。個々の堆積範囲も狭く、ラミナがよく見られる。上下とは若干不整合を
成すものと言える。後期旧石器時代後半頃の不整合か。
- 14層 基本的にはシルトも多く含む疊層である。かなりしまりは良い。沖積層の上部と考えられる。

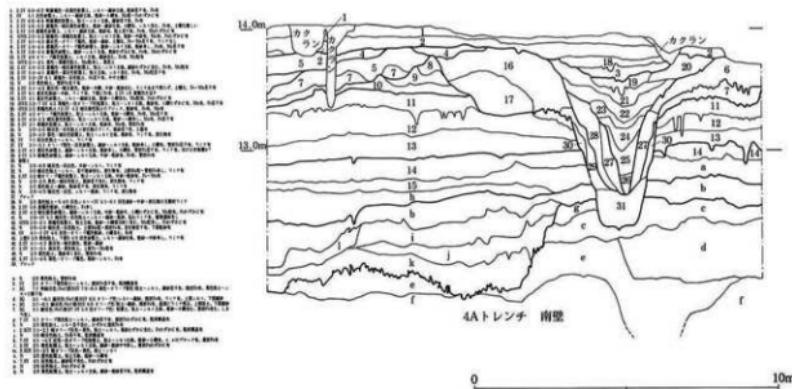
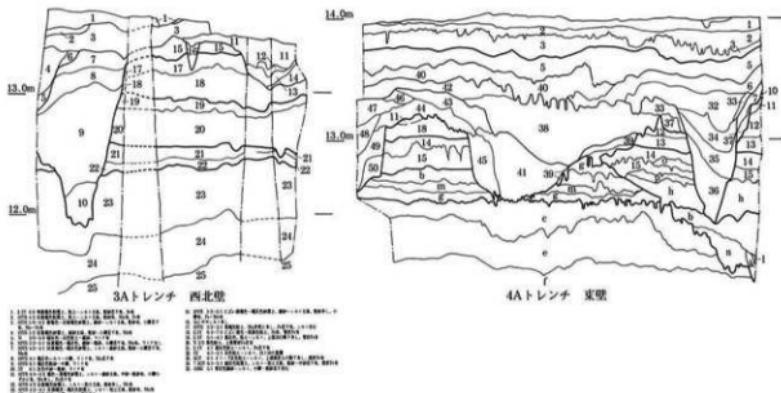


図141 3A・4Aトレンチ断面

(2) 遺構

3面（図142） この面は基本的に現代耕土である2層の床面となっている。（2）の調査時は、それでも3面に古い時期の遺構が存在する可能性もあるものとして調査した。その結果、3層自体が、東側で5層の上部を削平した土を敷いた、現代の整地土層の可能性が強まつたので、（3・4）では調査対象外とした。

基本的にある遺構は溝と鋤溝で、それらは現在の地割りに対応し、南北方向のものが多い。また、3・4層がなく、5面が重複して露出する2A・2Cトレーニチの東半では形成時期不明の段差・路路などが若干見られる。また、4面の自然流路1の上は、3層でもブロックが明瞭な土で埋められており、この面ですでにその平面形を確認できた（図143）。鋤溝はそのブロック土の上も走っている。

この面で疑問なのは、現代の整地土と思われる3層より前の段階では、条里制地割りが存在しているのにも関わらず、4面の自然流路の埋没跡が、凹地のままであったのかと言う事である。考えられるのは、床面に埋没路の砂層があって水が抜けすぎる部分を、若干掘り込んでから厚めに粘質土系の土を入れたのではないかという事である。

3面は、現代の整地土層上面で、現代の耕作痕を残すとは言え、それは遺存する条里制地割りに沿ったもので、また、整地のしかたに、

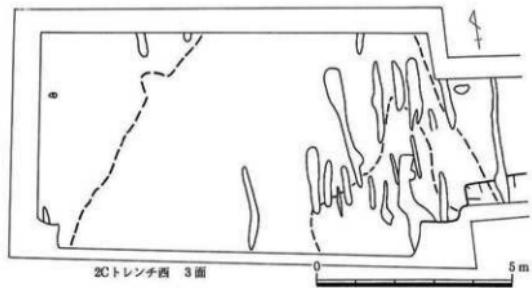


図143 2Cトレーニチ西平面・2Aトレーニチ3面遺構断面

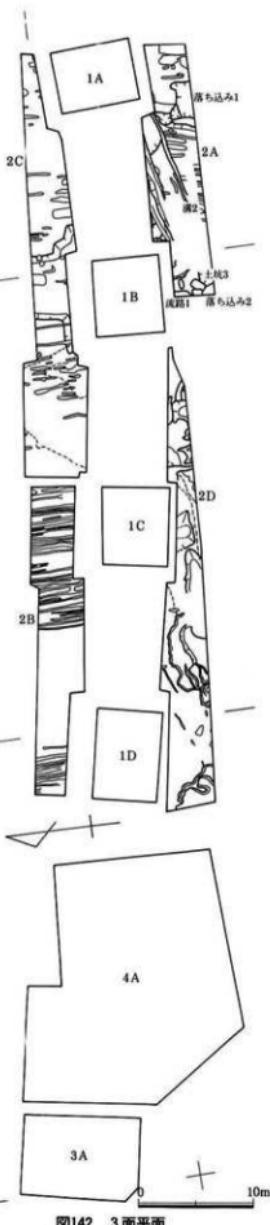


図142 3面平面

それ以前の地勢や微地形を反映していると言える。

4面（図144）面としてはやや凹凸が見られる。条里制地割りに關係するかと思われる、鋤溝などの耕作具痕もわずかに見られるが、それらは遺物を包含せず、時期は限定できない。

それらの中には、螢池南地区でも検出された、幅5cm程で、断面形の底部が鋭い「V」字形になる溝がある。4Aトレンチで比較的多めに検出され、中には2本が約1.5mの間隔で平行しているものもある。しかし、それらの溝は正方位からずれたものが多く、条理地割りと関係しているかは定かでない。

もう一つ、正方位にのる遺構に、4Aトレンチのほぼ中央で検出された、方形周溝状遺構がある。洪水砂である4層が一番盛り上がりっている頂点に立地し、溝の一部は浸食で失われているものの、南北にやや長い長方形に巡る。溝自体は幅50cm、深さ10cm前後、内側に遺構はなく、溝の一部は鋤溝に切られている。

この面で中心となる遺構は調査区のほぼ中央を北東から南西へ抜けていく流路と、その中の護岸や堰の杭列、そしてそれに付随する溝である。

自然流路（図146）2Cトレンチ西端に北東から入り、1Cトレンチに緩い蛇行を描く右岸肩部を見せながら2Dトレンチの中央近くを南西に抜けていく、その南壁付近ではやや南に蛇行していくようである。

2Cトレンチ部分では最上層に3層系のブロック土があり、それを除去すると幅2m前後、深さ50cm前後の溝状になった流路の最終形態が現れる。その溝状部以外の流路内堆積層の上面には鋤溝頗る数本みられるが、だいたい流路の方向に合っており、溝状部を切って存在しているので、溝状部が埋没して、3層系ブロック土が入る前に、流路上の緩い凹地にその自然地形に合わせた耕地区画が存在したようである。

このトレンチの中では流路の左岸にあたる南東側の肩に、溝1が直角に取りついているが、それは流路が溝状になったこの段階でも存続しているようで、流路内堆積物の上を切って溝状部に達している。流路の埋没に伴い掘削しなおされたものであろう。なお、この溝状部内の堆積層を「最上層ブロック土除去後溝状部」として遺物を分別した。

その下では右岸を中心に粗砂層が多く見られ、これが、流路の半分以上を一気に埋没させ、溝状の形にした洪水の堆積物と思われる。これを「中層粗砂層」とした。

2Cトレンチしがらみ（図145）レベル的にはそれと同じで、左岸を中心あるのが「中層しがらみ付近粘土＝シルト層」である。切り合いとしては粗砂層に切られる。この中に数本の杭と、流路方向に横たわった自然木を10m中心とした棒状の木が多数埋没していた。一応しがらみと名付けたが、流路内堆積層の上面に延長された溝1の肩部付近に多く、特に流路に取りつ

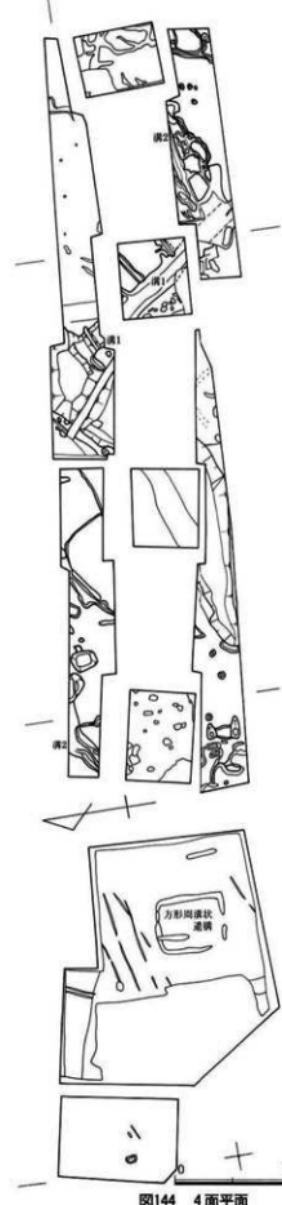


図144 4面平面

く部分の下流側に集中している事から、実際は流路がある程度埋没してきた時点で、流路内堆積層の上面に溝1を再掘削した時、その護岸として設置されたものと思われる。流路の一番外側の肩に近い一群はそれよりも古い護岸かもしれない。

流路の一番下には粗砂層があり、これを「最下粗砂層」とした。弥生時代中期～布留式期の土器を含み、流路の形成された時期の下限を示す。この層は層位的位置も遺物も、2Dトレンチまで共通して存在する。

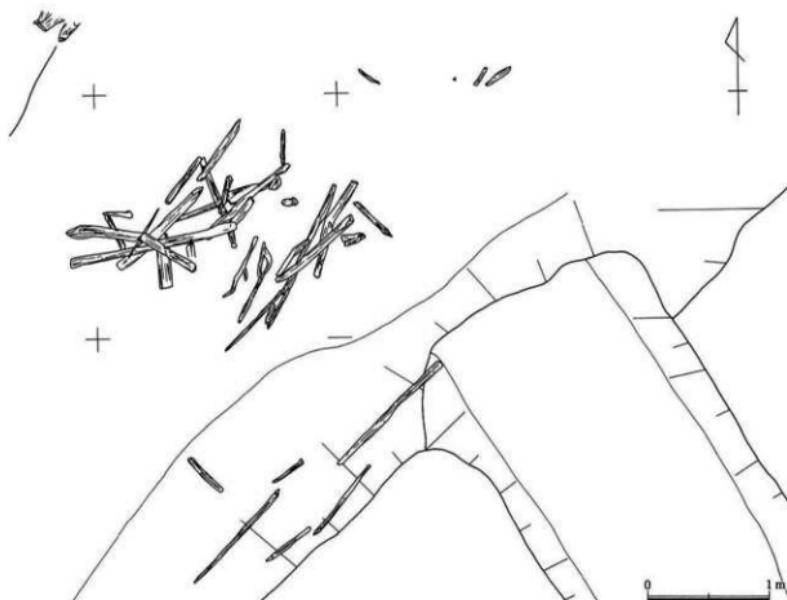


図145 2Cトレンチ流路しがらみ

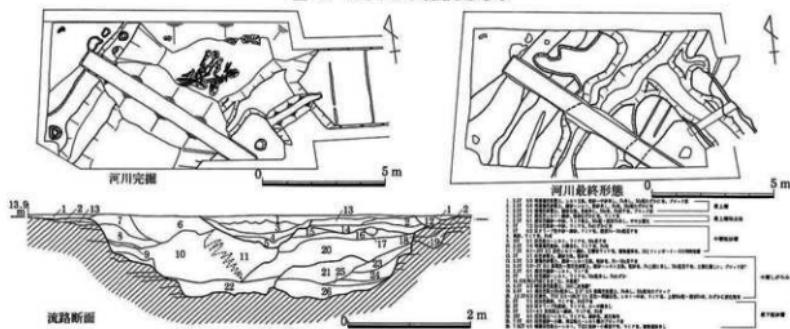


図146 2Cトレンチ流路平面・断面

2Cトレンチ溝1（図147）

流路に直角に取りついた溝である。後述する2Dトレンチで流路内にあったしがらみによってダムアップされた水を取水する溝と考えられる。そのまま直線的に1B・2Aトレンチを抜けて南東に伸びる。2Aトレンチでも搅乱に相当やられた部分に存在したが、溝1として、方向性と断面形は確認できた。幅2.2m、深さ70cmほどの断面逆台形の溝である。

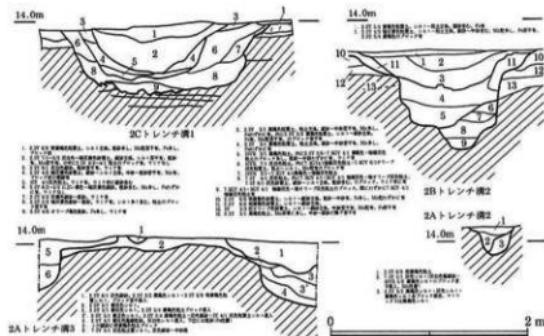


図147 4面溝断面

断面上で2回以上の掘りおしが想定できる。流路が溝状になった段階で掘り直された溝はやや規模を縮小し、幅1.4m、深さ45cm強で、溝状の流路最終形態よりわずかに浅い程度である。最終的にブロック混じりの土で埋められ、その上を3層系のブロック土が覆う。

2Bトレンチ溝2（図147） 2Bトレンチ西端で、北壁で東北東から入ってきて南壁で南北へ抜ける。4Aトレンチには出てこないので、その間で南に抜けていくと思われる。幅1.8m、深さ1mほど、断面から最低1回は掘り直されたと思われる。この溝の位置から、自然流路には右岸にも取水・導水する堰が存在した可能性が高い。おそらく調査区よりやや北側で、右岸が攻撃面になった蛇行部であろう。この溝もブロック土で埋められた後、3層系ブロック土が覆う。

なお、この2Bトレンチで東側にある段差類は段差の低い部分にあった砂質土を取り除いて検出したもので、その砂質土が4層で、その下に直接6層が見えていたので、本来5~6面の遺構であったようである。

2Aトレンチ溝2（図147） トレンチ北壁沿いにはば東西に走る溝である。搅乱された部分も多いが、幅40cm、深さ30cmほど。搅乱により、溝1との関係は不明だが、溝1に取りついていれば、溝1が堰からの導水路でありながら、この部分ですでに東側からの排水も受けている可能性が高い。つまり東側にも耕作地が存在する事になる。

2Dトレンチしがらみ（図148・149） この部分の自然流路は、流路の左岸にあたる南東側が攻撃面で、そちらを中心に流路の最下部まで浸食してから一気に堆積した、洪水による粗砂層により大部分が埋没している。その粗砂層は左岸側に径50cm以上の土礫を含む。その後もその上で小規模な流れが蛇行しながら続いている痕跡はあるものの、その洪水で実質の河川としての機能は終わったようである。右岸側にその粗砂層の下に、シルト～細砂を中心とした有機物の多い層が残っており、そこにしがらみの杭列が遺存していた。左岸に近い部分は杭の上部も遺存せず、流路の基底部の粘土層まで達した杭の先端部分のみ遺存しているような状況であるが、右岸側は横木やその間の植物遺体まで一部遺存していた。

杭は數本が流路基底部の粘土層まで達せず、しがらみ付近のシルト～細砂層の下にある粗砂層で止まっている。この事から、しがらみは最下粗砂層堆積後に作られ、シルト～細砂層はしがらみによる滯水により沈殿・堆積した層と考えられる。杭列は最下粗砂層上面の打設点を細かく見ると、3列に復元できる。一番下流側の列には径8cm以上の太めの杭が2本現存しており、こういった太めの杭が、下流側で

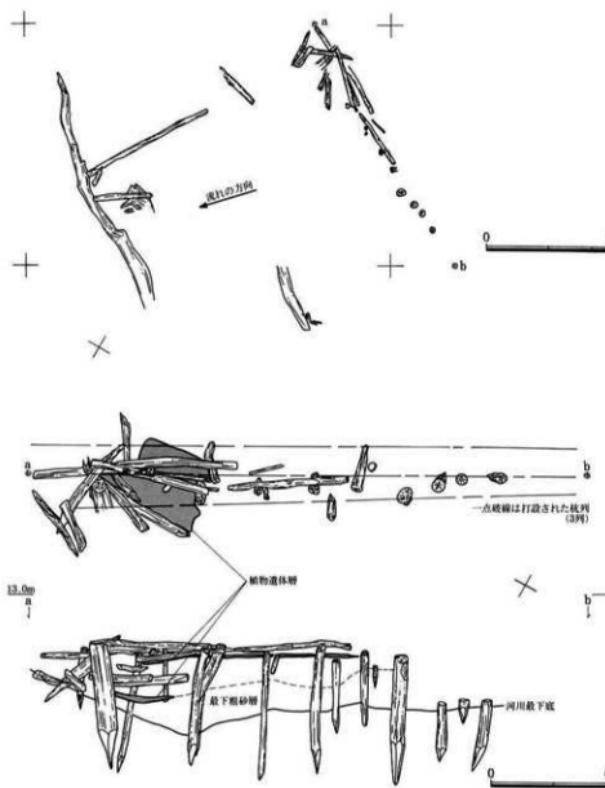


図148 2Dトレンチ4面自然流路1しがらみ平面・見通し

全体を支えたものと思われる。杭に絡んだ横木は大別すると上下二つの高さに分かれ、低い高さの横木は下流側から1列目と2列目の杭列の間にあり、高い横木は2列目と3列目の杭列の間にある。また、その各々の横木群の下に、一部ではあるが植物遺体が残存していた。その表面を観察すると幅3～5mm程度の茎状のものが平行して並ぶグループが、やや方向を変えながら数グループ認められた。編み目などはないおそらく、稻か葦のようなものを束ねたものを重ねていったものと思われる。

杭列の下流側はしがらみの上部と左岸側を破壊して堆積した粗砂

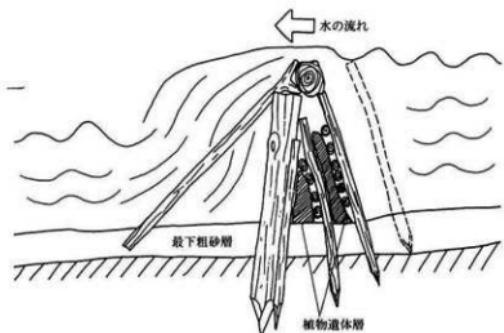


図149 2Dトレンチ4面自然流路1しがらみ復元模式図

層が最下粗砂層の上に直接堆積しているが、その下部から、杭列と平行する形で大きめの木が、それと杭列の間に、それらとは直角の位置関係で、大きめの木側で先端が二股に分かれた木が出土した。これらは、大きめの木がしがらみの上に乗り、それを下流側から二股部分で受けた木が支えていたのが洪水砂にあおられるように倒れこんだようにも見られる。使用されていた木はいずれも樹皮は遺存していないが丸木で、

杭の先端以外は特に加工痕はなかった。

洪水による破壊が著しいが、これらの状況からこのしがらみの作りかたが復元できる（図149）。先ず、全体の支えになる太めの杭を含んだ杭列を打ち、その上流側に草か稲の束を積み上げる。それを横木で押さえ、その横木を2列目の杭列で抑える。3列目も同じ事を繰り返す。しがらみは遺存のいい部分も上部は洪水で破壊され、杭の上端の本来の高さは分からず、上流側も洪水砂が迫っているので、4列目の杭列があったかどうかは分からぬ。最後は大きめの木を最上段に押さえのように乗せ、それを二股部分で受けようなつっかえ棒を下流側に設置したようである。

しがらみ設置以前に堆積したと考えられる最下粗砂層からは弥生時代中期～布留式期の土器片が出土し、しがらみが設置されたために滯水状態で沈殿堆積したと考えられるシルト～細砂層からは小片ながら須恵器も出土し、しがらみ設置の時期は5～6世紀に限定できる。堰として、2Cトレンチ溝1と同じ時期と考えれば、6世紀のものとして大過なかろう。

5面（図150）この面は基本的には、6面に存在する畦畔が頭を出して検出される面であるが、2Bトレンチで4面で検出された段差も、この面とも言えるし6面のものとも言える。さらに問題が複雑になるのは4Aトレンチでは5面にあたる層で溝や畦畔が検出されたが、この部分の5層は間に洪水砂をはさんで上下2層に分かれ、かつ、2A～Dトレンチのものより砂質であるだけでなく、4Aトレンチ東壁周辺から2Dトレンチ西端において、6面から4面にかけて、破堤的な洪水によるショートバーの浸食・堆積の通り道になっており、單一層がすべて断続しているため、厳密には同時期面を単純に確定できない。

そのため、ここでは、総合した調査結果から、4Aトレンチで5面として検出した面を6面の一連の変遷の最終段階の面とし、その時点まで2A～Dトレンチの6面の畦畔などの耕地区画が存続していたものと仮定し、自然流路の状況と4Aトレンチの状況のみ述べる事にする。自然流路 2Cトレンチから2Dトレンチに抜ける自然流路はこの面よりもやや前に形成されていたようであるが、ここではそれ以外に、4Aトレンチの北東に北東から入ってきて北壁沿いで蛇行し、3Aトレンチの中を北東から南西へ抜けていく流路が見られる。しかしその流路はこの面の時点ではその機能を停止し、後背湿地化しており、有機物の多い、シルト～細砂の堆積が進行していく。おそらく2C・Dの流路に流路変更したのである。本来深さ1.8mほどの流路もこの時点では深い部分でも80cmほどである。

4Aトレンチ溝1 4Aトレンチでは、4層系の粗砂層を除去すると、

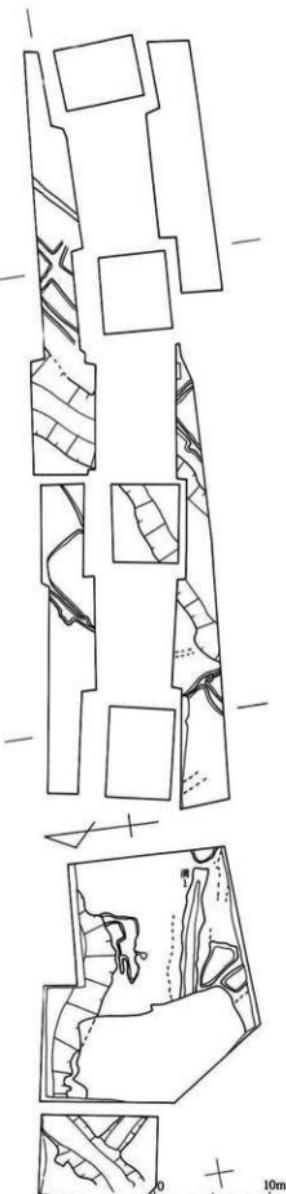


図150 5面平面

南北を中心に粗砂層の上面があたまを出すが、その上を東南東から西北西へ直線的に伸びている。これは後述する6面の溝1が段階毎にくりかえして掘り直されたものを踏襲したものであるが、すでに東端は途切れ、畦畔をはさんで水田区画と接している。幅は2m前後で、深さはこの時点では50cm前後になっていたと思われ、この面の調査時にこの溝のものとして検出してしまった土器群は、もう一つ前の段階で投棄されたものである事が、6面で完掘した時点の断面観察で確認された。この面でこの溝は、周辺に進出してきた水田区画から、後背湿地化した北西側の流路への排水を行っていたものと思われる。また、この溝の両脇には、検出時には砂層同士の切り合いで分からず、だいたい削平してしまったようだが、幅80～40cmの畦畔が付随していた可能性が高い。

水田区画 溝1の東側から南側にかけて、この面では畦畔がいくつか確認され、水田区画が存在していた事が知られる。それ以前にはこの周辺には水田区画は確認されていない。それは度重なる洪水の浸食・堆積のせいで消滅し、たまたま最終段階のものが残ったのか、この段階で後背湿地化した旧流路周辺まで耕地が拡大してきたのかは不明である。それらは自然地形にあわせたようで規則性はないが、多少は長方形を指向する区画だったようである。また、旧流路の南側肩部に、浅い不定型な落ち込みがあったが、これも何らかの耕作の痕跡の可能性もある。

6面（図151） 水利体系が作られ、耕地開発が成された面である。それらも洪水・流路変更といった自然条件により細かく変化していく。一畦畔・段差 2B～Dトレンチで見られる。基本は自然流路に沿って、長方形の水田区画が並んでいたようである。流路の肩からは少しあなれて畦畔が作られる。2Bトレンチで段差沿いに浅い溝が見られるので、水田区画内に小規模な水路が走っていた部分もあるようだが、2Cトレンチで畦畔の交差部分が微妙にズレているので、水田同士で水口を切って水をまわしていく形態もあったと考えられる。2Dトレンチの西側部分は不安定に砂層が堆積する部分で、自然地形の凹凸が激しかったのか、区画はやや不規則で畦畔の左右の段差も大きい。また、痕跡程度にしか残っていないものもある。サヌカイト製の小型の三角鐵が2点、遺構もなく、6面に付くような状況で出土している。

この2B～Dトレンチの水田区画が、細かく分かれる4Aトレンチの変遷段階どの時期からどの時期までに対応するのかは明確ではないが、西側の自然流路からのシートバーが一回は形成され、こちら側の流路も完全に形成された後である事は確かに思える。

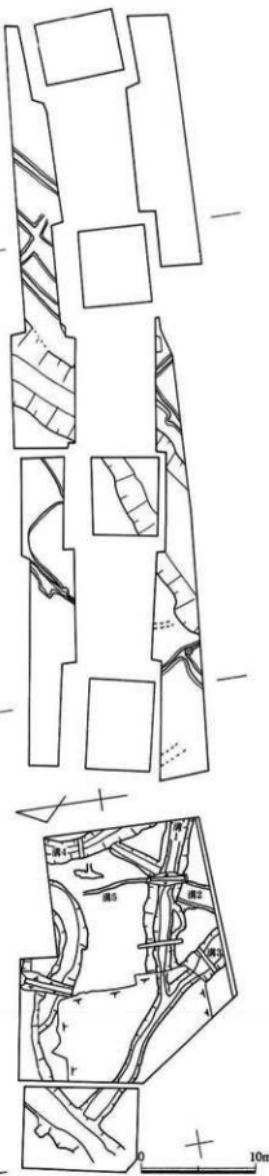


図151 6面平面

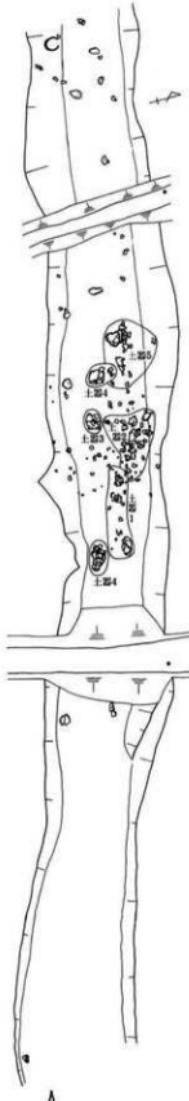


図152 4Aトレンチ溝1 遺物出土状況

4Aトレンチ溝1（図152） 最終的には5面の溝となる溝である。トレンチ東壁中央付近から西北西に直進し、溝3に合流する。当初は幅2.2m、深さ1.2mほどの溝であったようだ。溝2との切り合いは、溝2に切られる、古い肩部と、溝2の堆積物を切る新しい肩部が平面的に確認できたので、溝2を浸食の流芯として堆積したショートバーの粗砂層で一度埋没した後、再掘削された事が分かる。その時点ではほぼ同じ深さに再掘削されるので、肩部以外は古い方の溝の堆積物はあまり残らない。その後の堆積物は、平面的に見ると、東側の断面セクション付近の東西でやや異なっていた。そして断面で見ると、（図141・155）東西のセクションでは2回目の洪水で砂層が堆積した後、もう一回、再掘削された可能性が高いのに対し、トレンチ東壁での断面では砂層埋没後、再掘削の痕跡がない。これはトレンチ内で、溝3との合流点から、東側セクションの付近までしか再掘削されなかった事を示すものと思われる。その時点での溝の深さは70cmほどと、かなり浅くなる。その後、溝内に土器が大量に投棄される。土器が集中するのは東西のセクションの間で、それより東側では同じ高さ以外でも極端に土器が少ないので、この大量投棄以前に埋没してしまっている事を示唆すると思われる。それより西は溝の上半がビルの基礎で破壊されていて、本来土器が大量にあったかどうかは分からぬが、西側セクション付近からビルの搅乱に至るまでの間でやはりやや土器の密度が減っていくので、片方が途切れた形に再掘削された溝の、その端に、土器が集中的に投棄されたと考えられる。その後やや埋没が進行した後、5面に見られる深さ50cmほどの溝がまた再掘削され、それは東に接する水田区画まで、前段階よりやや長めに再掘削されたようである。

4Aトレンチ溝2 6面で溝状に検出されたが、立体的に解釈すると6面上に残る、最初の洪水の浸食度で、トレンチ南東半の大部分を覆ったショートバーの流芯の痕跡である。そのショートバーは北西側の流路の、トレンチ北壁からすぐ北東側に存在するであろう蛇行部の外側から破壊し、溝4を伝った後南西へ抜けたらしい。それにより溝1が一度埋没したのは先述した通りで、溝3も一部埋没した。

4Aトレンチ溝3（図153） トレンチ南壁から北西に伸び、3Aトレンチで流路に開口する溝である。幅2.6m、深さ1m強ほどの大きさである。溝1と同じく、最初の洪水で一部は埋まり、再掘削されるが、その後は継続していたようである。溝1との合流のしかたや、底のレベルの比較からも、この溝の方が幹線的なものである。細かい単位の流水堆積で半分ほどの深さまで埋没した時点で、おそらく溝1と同時期に土器が投棄される。そしてその後完全に埋没し、わずかな凹地状になった部分に水田区画が作られる。

ここでこの溝の最下流部である、3Aトレンチ溝1について述べる（図154）。

この部分は搅乱が激しかったために、流路と溝の正確な肩は検出できず、かつ、流路の断面用セクションを設定した位置の下に溝が存在したので、やや

不明確だが、幅1.8m以上、深さ30cm以上はあったようである。そして流路にほぼ直角に取りついている。その溝の中で、流路から少し遡る部分に2列の杭列が検出された。流路に近い側の杭列は溝の北東側肩部で流路から1.2m離れ、溝南西側肩では50cm離れるように溝内を斜めに横切る。もう一つの杭列はそれと約60cmの幅をおいて平行に走る。杭は溝の基底部には50～60cmほど打ちこまれているが、溝内での残存度は低く、溝の最下層内に止まる。材は、細いものは丸太、太めのものには丸太を半割り、もしくは四分割したものもある。

この溝は5面まで存続するが、
杭列は残存度から見て古い段階のものであろう。溝は排水用のものと思われるが、杭列は、場合により溝をせき止めそれより上の水位を保つ為の施設であろうか。

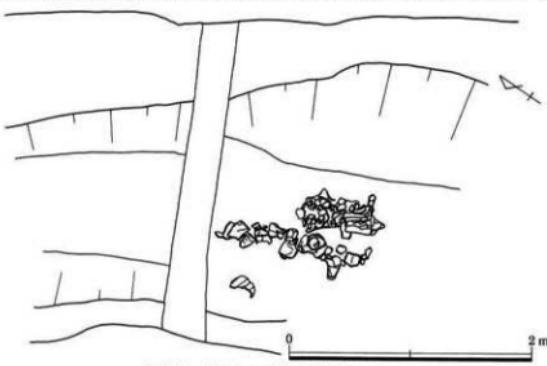


図153 4Aトレンチ溝3遺物出土状況

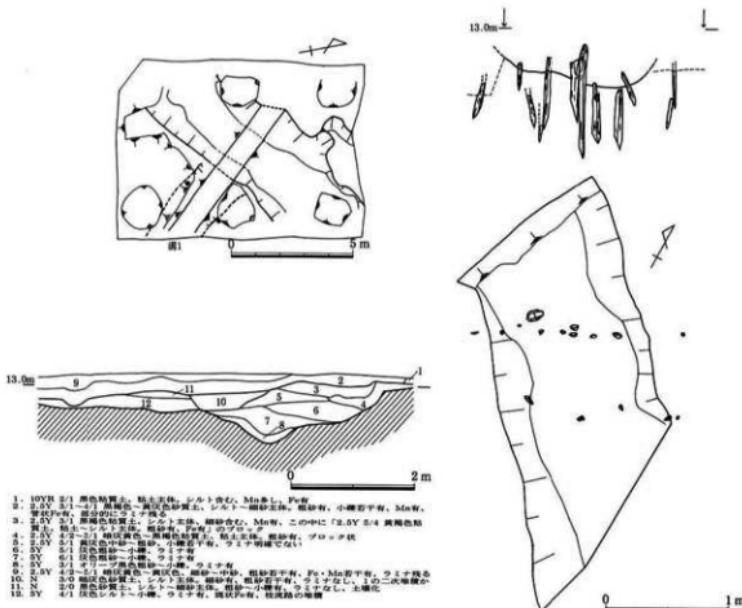


図154 3Aトレンチ溝1平面・流路断面

4Aトレンチ溝4 (図155) トレンチ北東隅に北東側から入ってきて、弧を描いて東壁中央あたりで南東へ抜ける溝である。洪水によるショートバーの通り道にあるので、肩の崩れなども激しいが、元々幅1.5m、深さ60cmほどの溝であったようだ。最初のショートバーの形成時にほぼ埋没し、放棄されているようだ。問題はその位置と形状である。方向性から見ると北西側の流路にトレンチより北東側の外で取りつくように見え、そうなると流路から取水し、導水する溝のように見える。しかし、南西側では溝1と接触するのは不可避免であり、取り付いているとすれば、溝1の流水方向と取り付き角度から、むしろ溝1からの分水路のような形になる。自然流路と溝1どちらとも併存していたと考えると、どうしても矛盾が出て、意味のない溝になってしまふ。ただし、トレンチ東壁断面から見ると(図141)、解釈のしかたによっては溝1の一番古い段階と同時期ともとれるが、むしろそれより先行する可能性が高い。そして、流路の一番古い肩と対応する。すなわち、溝1・3に代表される、流路に排水する水利体系がこの付近に形成される前に、トレンチより北東側で流路から取水し、導水する水利体系が成立していた可能性が高く、その幹線的な水路がこの溝4であった可能性が高いのである。

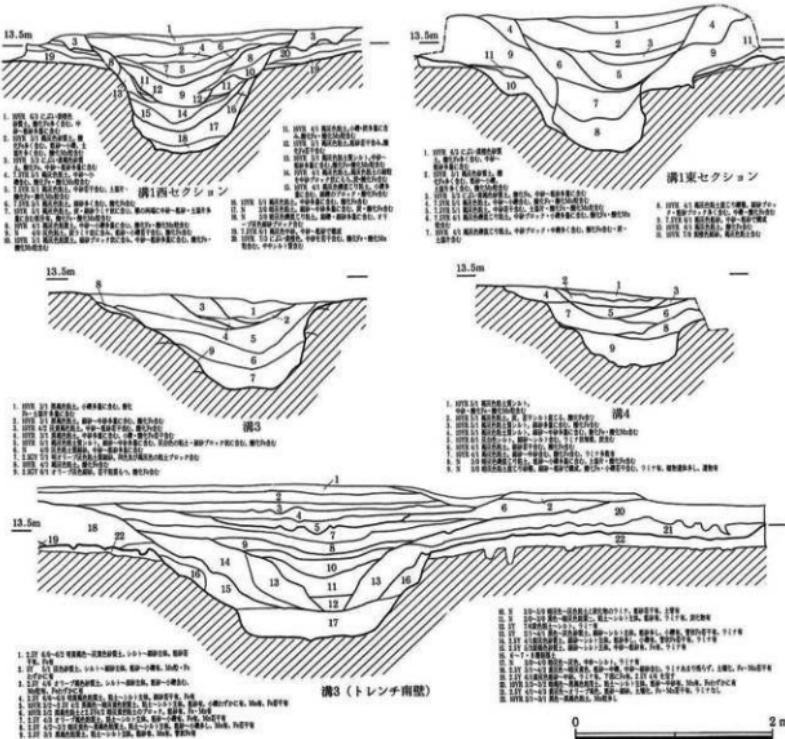


図155 4Aトレンチ溝1・溝2・溝3断面

4Aトレンチ溝5 トレンチの東側で、溝1と流路の間では南北に走る小規模な溝である。幅30cm、深さ10cmほど。南端は溝1に取り付き、北は流路への緩傾斜面で消えていく。溝1が掘削された段階ではこの部分は小規模な微高地状の地形を成すが、そのような部分に、なんらかの区画と排水を兼ねるような溝があるという事はこの部分に畑のような耕作地が存在した可能性を示すのではないだろうか。

4A・3Aトレンチ自然流路（図156） 4Aトレンチ北東隅へ北東側から来て、北壁沿いに蛇行し、3Aトレンチで北東から南西へ抜けていく流路である。本来の規模が明らかな部分はないが、おそらく、幅7m、深さ1.7mほどはあったものと思われる。4Aトレンチ北東隅の蛇行部から、4Aトレンチ東半から2Dトレンチ西側の範囲に、6面から5面に及ぶショートバーの浸食と堆積を繰り返している。

問題はこの流路と2C・Dトレンチの自然流路の関係である。そちらの流路も肩部の堆積状況から見れば6面すでに形成されていた可能性が高く、5面では確実に存在している。そして、位置的な関係から、こちらの流路と水源と同じくし、こちらの流路から流路変更していくものと考えられる。するとこちらの流路はどの段階まで、流路として機能し、その後どういう状況で埋没していったのか。6面の一番古い段階では溝4が取水していた可能性のあるように、流路として機能していたのは確実である。それは流路下部に細かい単位で、ラミナのある、砂層を中心とした層がある事からも分かる。

しかし、5面時点では、状況から見て、滞水状態の後背湿地化していた可能性が高い。それを流路断面の層に比定すると、（図156）なかほどにある、10YR4/1と有機分の多いシルト～粘土層が対応するものと考えられる。その後は二次堆積や4層系の砂質土で埋没しながら、4面の段階においてもやや凹地を成していたと思われる。4Aトレンチにおいて、溝1が掘削された後、5面までに、少なくとも2回のショートバーの形成が見られるが、その新しい方のショートバーの形成まで、この流路が機能していたと考えると、2C・Dトレンチの流路と一時併存していた可能性が高くなり、沖積平野に出た部分で、扇状地でもない状況ではやや疑問に思える。むしろ、流路変更した部分で破堤し、旧流路となっていた部分を走って再びこの付近で破堤するような洪水の状況を想定する事も可能であろう。

ただし、比較的早い段階で後背湿地化していたとしても、下流側に関しては、この流路が5面時点まで排水に利用されている事から、ある程度水の抜けていく先があったと思われる。おそらく猪名川水系の沖積平野でもこの付近は、猪名川本流や千里川のみでなく、丘陵の開析谷から流れ出た小規模な河川が多く流れ、それらの旧流路である小規模な後背湿地や自然堤防が錯綜しているような状況であったのであろう。

なお、4Aトレンチの北西隅近くのトレンチ北壁矢板際で、流路の基底部に4本の杭を検出した。ほぼ流路の流れに平行して並び、皆、径は5cm以下と細い。上部は遺存していない。並びからは、しがらみとは考えにくく、位置からは、護岸とも、細いので、橋脚とも考えられない。唯一の可能性は、溝4が流路から取水していた時のしがらみの一部で、流路南肩部に統くはずの杭列は、浸食されて消滅したという推測ぐらいである。

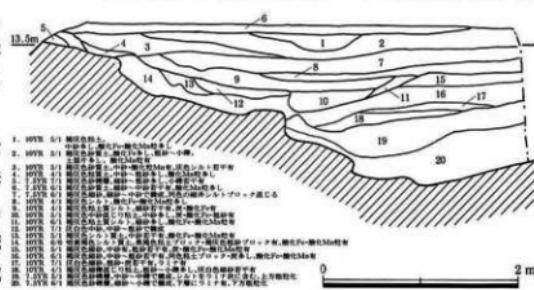
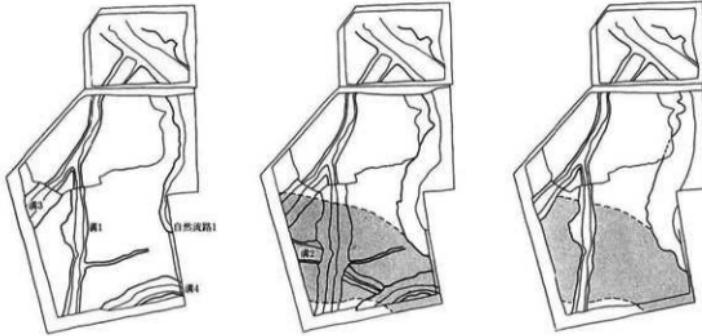


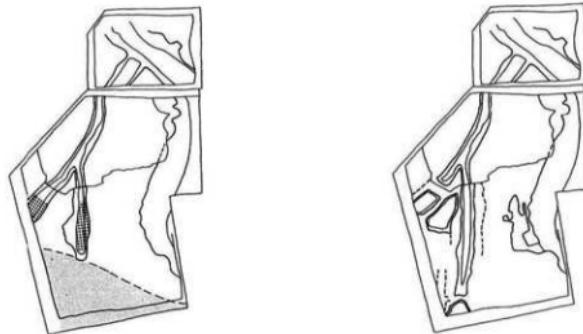
図156 4Aトレンチ自然流路断面



Stage1 自然流路に開口する溝3とそれに合流する溝1、流路から取水すると思われる溝4が現れる。

Stage2 溝4を通して流路から洪水が起こり、溝2を侵食し、砂を堆積させる。
（網掛け部分）

Stage3 溝4は放棄されるが、溝1・3は再開削される。早ければこの時点で流路は後背深埋化している。



Stage4 前回より小規模な洪水で河岸が堆積する。(網掛け部分)

Stage5 溝1の内側部分のみと溝3が再開削される。

Stage6 溝1・3内に開拓地が堆積し、半分ほど埋没した時点では暫時に土器が放置される。(ネット部分) この時点では流路は完全に後背深埋化している。

Stage7 溝が埋没した部分に水田区画が造成する。溝の一部は完全には埋没しないまま排水用の水路として使われていたか?

図157 4Aトレンチ弥生時代変遷図

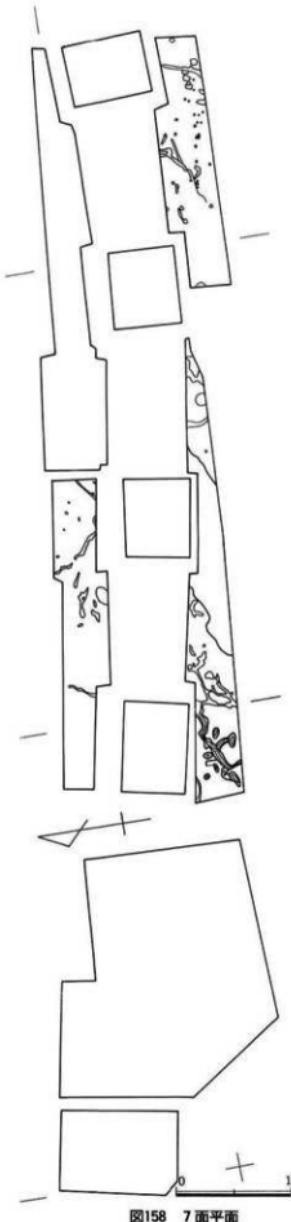


図158 7面平面

小結 ここで、6面から5面への変化を4Aトレンチを中心として段階毎にまとめておく（図157）。先ず、流路に溝4が取りついで取水する水利体系が存在していた。流路の中にしがらみが存在していた可能性もある。しかし、溝4は何らかの理由で放棄され、溝1・3を中心として流路に排水する水利体系が新たにできる。次に流路から溝1・3・4を埋没させる破堤的洪水が起こる。溝4は埋没したままになるが、溝1・3は同規模に再掘削される。2B～Dの水田区画は、2Dトレンチの西側部分で、ある程度砂が堆積した後に畦畔が作られている事から見ても、これ以降のものであろう。それからするとその水田区画の基準になっている2C・Dトレンチの流路はこの時点では成立し、4Aトレンチの流路は後背湿地化していくものと思われる。そこへ、また同じような洪水が襲う、その後は溝1は、おそらく溝3も、ショートバーの砂層の堆積部分は再掘削されず、途切れた溝になり、そこに土器が投棄される。溝自体の深さもかなり浅くなる。その後、その溝の形を若干整えるような補修が成され、溝1周辺にも水田が進出してくれる。西側の水田区画はあまり洪水の影響を受けていないようなので、この時点まであまり変化無く継続していた可能性が高い。最終的には、多分新しい流路から、4層の砂質土の元になる堆積物をもたらした洪水があり、一旦水利体系も水田も廃絶する。

これら一連の変化が、溝出土の土器から見れば、弥生時代後期の内に進行したと考えられる。

7面（図158） 遺構が存在しなかったので全体では平面図を作成しなかったが、調査区全体に、多寡はあるものの木根痕が検出される。それらの木を中心とした植物が、6層のもととなる腐食土層を形成していたと考えられる。6層では、耕作などで攪拌されて入り込んだと思われる弥生土器の小片がわずかにあるばかりで、7面に人為的な遺構は認められず木根痕からも遺物は出土しない。そして、6面では木根痕は一切検出されなかった。

これらの事から、調査地点では弥生時代後期に溝が掘られる以前は、6層ぐらいの厚みを持った腐食土層を形成するぐらいの期間、森林状態が継続していたと思われる。溝が掘られ、水田が開発されるに伴って、その森林が消滅したと考えられる。そして、水田などの耕作や、土壤化の進行、そして、森林の消滅によって酸化が進行し、酸化マンガン粒が形成されるに伴い、本来6面まで達していた木根痕が、6層中で破壊され、結果として7面でその痕跡を検出されるようになったのである。

つまり、本調査区内での水田の開発は、弥生時代後期において始まる可能性が高いと言える。

9～12面（図159・160） 基本的に無遺物・無遺構である。12面から9面までの変化を、推定復元して述べる。12面で検出されたのは自然流路・浸食痕・木根痕などである。これらの実際の切り込み面は11～2面のようで、11～1面では、流路・浸食痕の埋没がやや進行したような状況を示す。自然流路は2Cトレンチ北西隅から2Bトレンチを通り、2Dトレンチの北西隅をかすめ、4Aトレンチの南東隅で西南西に抜けていくものが1本見られる。その流路を中心に浸食痕などで、比較的凹凸のある地形が見られ、木根痕は比較的高い、調査区南東側に多く見られる。11層は土壤化の状態から、耕土の可能性もあると考えられたが、このような状況を見ると、12面から11面にかけては、自然の凹凸を見せ、浸食痕も多い面で、少なくともまとまった水田などが存在する可能性はほとんどないと言って良い。森林と流路を中心とした低湿地が混在するような環境で、森林で形成された腐食土が二次堆積して土壤化したのが11層と考えられる事ができる。

その上の10層は、9層から11層までの黒色粘土層群の中の中心的な層で、有機物も多いが、部分的にわずかにラミナも認められ、土壤化の度合いの少ない、止水堆積に近い水成層である。沼のような状況で堆積したと考えられるが、その分布範囲が広く、かつ層厚も厚いのが問題である。つまりこの周辺がかなり広い範囲で、かなり長い期間、沼状に滞水した環境にあったということで、これは単に局所的な傾向ではなく、気候などの広範囲の環境の変化に対応している可能性もある。下部の12層が後期旧石器後半の包含層であるので、それ以降の環境の変化として思い浮かぶのは縄文海進である。縄文海進の絶頂期には、この地点より約2.5kmほど南の穂積遺跡より北に海岸線が北上していたのが知られている。海進期には海岸線に砂丘などの砂堆地形が発達しやすく。その後背地に潟湖が形成される事もある。そのような潟湖の一部でなくとも、海進によりこの地点付近も猪名川水系の沖積平野でも河口に近い下流域になり、沖積平野の多くの部分が、排水不良の低湿な状況になった可能性がある。10層はそのような環境下において堆積した可能性があると考えておきたい。

10層以後は一部で薄いシルト層をはさみながら薄い黒色シルト～粘土の9層が堆積するのであるが、9層も土壤化の度合いとその層厚から耕土の可能性を考えた。しかし、その上下面は無遺構でわずかに木根痕が認められる程度であった。むしろ9層は10層を堆積させた沼状の環境が終息し、次第に乾燥化、地表化していく過程での二次堆積層のようである。

形としては黒色粘土層群として捉えられる9～11層だが、その各々で性質の違いが明らかになったと言える。

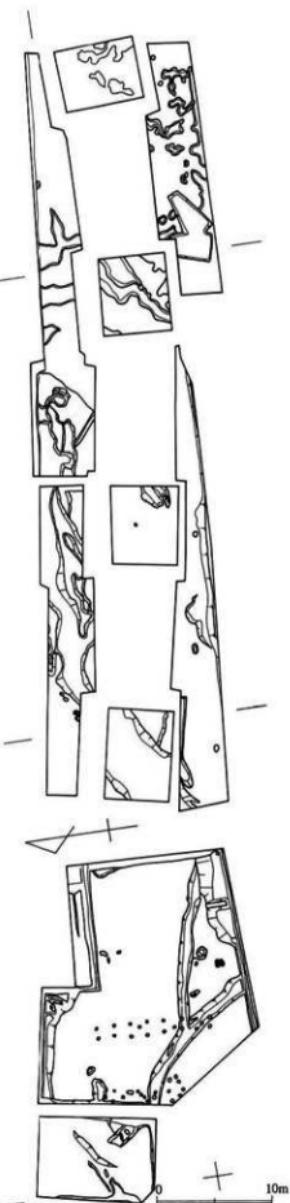


図159 12面平面

12層 T,P,+13m前後から下にある青灰色系の粘質土である。小礫から中礫を含む。(その1)の調査で、1Aトレンチから集中的に旧石器が出土したのを端緒として、調査を行った。地点によって多寡があるようだ、2A～Dトレンチではわずかが散在していたのみで、4Aトレンチで比較的集中して出土した。出土状況から、帰属する面や遺構ではなく、二次堆積的に12層に包含されたと思われたが、それを証明するため、4Aトレンチでは12層中の全自然礫と旧石器の出土位置とレベルを記録した(図160)。自然礫は13面に露出した礫も記録したが、石器は13面に付くものではなく、12層中で自然礫と共に、様々なレベルに散在していた。平面的には5cmほどの距離の石器が高さでは20cm以上違うものもあり、出土レベルと石器の大きさや重さが関係ない事から、帰属する面の存在や沈下などの可能性は否定できたと思う。

しかし、4Aトレンチの石器の集中は、国府型ナイフや方形に近い剝片に二次調整を施したものなどその他に翼状剝片・チップ・石核がそろい、二つに折れた剝片が、若干はなれた位置から出土し接合した事から、さほど遠くない場所から流れてきたと思われ、その場所は石器製作址の可能性が強い。

12層を除去した13面では4Aトレンチにおいて、土壌化が激しく、しまりも良い、礫を多く含んだ層を基盤とした舌状の微高地がトレンチ北壁から南へ伸びており、おそらくその微高地のトレンチよりやや北側から礫も石器も流れてきたのではないかと推測される。

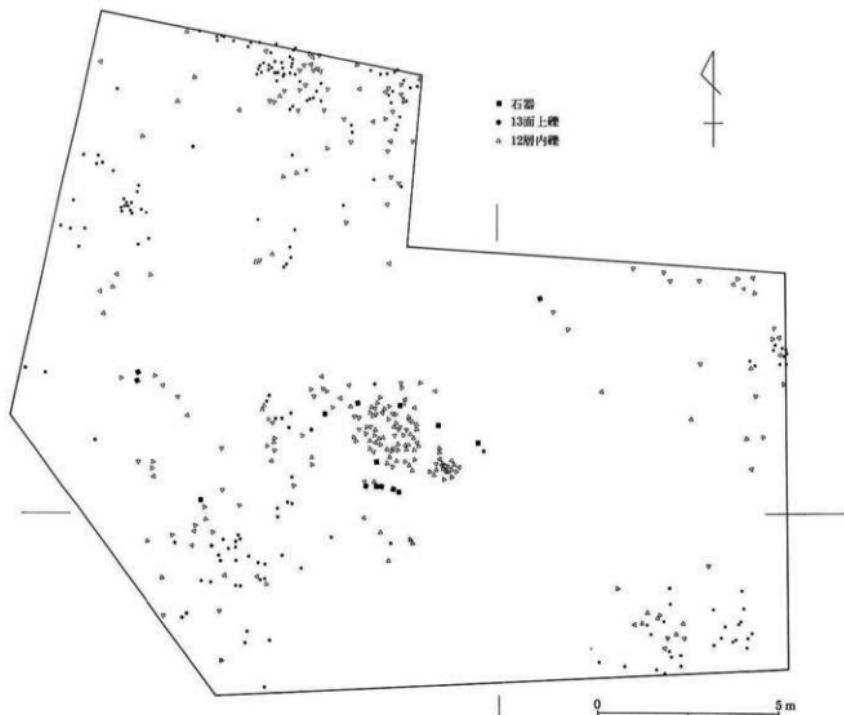


図160 4Aトレンチ12層内・13面上層石器・礫出土状況

(3) 遺物

2A~2Dトレンチ

(2) の調査では遺物が出土したのは主に1~3層と4面の河川であった。それらの中で図化可能であったものをここに述べる。他に6面や12層で石器が若干出土したが、それは(4)の石器類とまとめて報告する。

1~2層 2層から昭和34年の十円硬貨が出土しているので、年代は限定できるが、その他の若干の遺物をとりあげる。

(図161-1) は黄釉陶器碗片である。釉は2.5Y8/2(淡黄色)を呈し、外面では高台までは達しない。胎土は7.5Y7/1(灰白色)を呈する。高台にはヘラケズリがあり、見込みには3個の胎土目が遺存する。

(図161-2) は施釉陶器碗片である。腰折腕か筒碗の類と思われる。釉は10Y5/2(オリーブ灰色)を呈し、外面では屈曲部以下は一部釉だれが見られるのみである。胎土は2.5Y6/2(灰黄色)を呈する。見込みには沈線が一巡し、釉の上から胎土状の土が付着するが、胎土目のような形は成さない。高台にはヘラケズリに入るが、高台下面には5mm程度の粗い砂粒が多く付着し、その上からヘラケズリに入る。

(図161-3) は施釉陶器片で平底の鉢のようなものか。釉は5Y5/3(灰オリーブ色)を呈し、外面では底部のやや上で止まるが、釉だれは一部底部まで及ぶ。胎土は10YR7/3(にぶい黄橙色)を呈する。見込みには4個の胎土目があり、底部側面には4個の打ち欠きがある。底部には普通の糸切りでもヘラ切りでもない、回転状態での切りはなしの痕跡が残る。

(図161-4) は土師質の土鉢片である。網の下端に付けるものであろう。端部に横向きに穿孔した部分が残る。手づくねである。

(図161-5) は土師質の土鉢片である。内外面ともユビナデ・ユビオサエが見られ、手づくねで擦えた後、ヘラで切って口を開けたようである。

(図161-6) は煙管の火皿である。真鍮製か。3層 整地層と思われる層であるが、須恵器を中心とした土器の小片を若干包含する。

(図162-1) は須恵器坏身片である。高台内まで回転ナデが入る。胎土には長石多く、石英も若干ある他、黒色粒が目立ち、千里丘陵産の可能性高い。

(図162-2) は須恵器壺の肩部の破片である。内面は半スリケシ、外面に壊の口縁のような溶着が見られる。

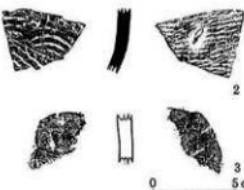
(図162-3) は埴輪片である。内面は横ハケ、外面は縦ハケが残る。胎土には長石・石英を若干含み、10YR7/6~7/4(明黄褐色~にぶい黄橙色)を呈す。

3層の須恵器は、近くの包含層を削平して整地した結果であろう。

図161 2A~2Dトレンチ1・2層出土遺物



しかし、1片のみとはいって、埴輪片が存在するのは注目できる。



2Aトレンチ4面溝1（図163） 河川から取水した溝の続きである。須恵器器台片が出土している。器台の身部下半の破片である。突帯の上下の波状文は上が左右対象、下が右寄りである。その他は内外面とも回転ナデ。胎土には石英をわずかに含む他、微細な黒色粒が見られる。突帯の形から見れば6世紀代のものか。ならば（1）の調査で同じ溝から出た土器とも時期が合う。

2Cトレンチ4面流路しがらみ下最下粗砂層（図164） 河川の護岸などと思われる杭などの下で、確実にそれより以前に堆積したと分かる最下粗砂層から出土した。

（図164-1）は弥生土器壺口縁片である。ほぼ水平近くまで開いた口縁端部が垂下するが、上方にも若干拡張している。垂下口縁外面には4条の凹線文が施され、その上から2本の粘土紐が1.2cmの間隔を持って縦方向に貼り付けられ、その粘土

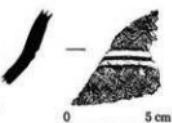
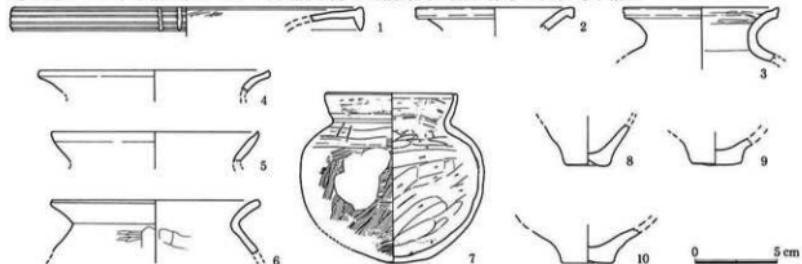
図163 2Aトレンチ
4面溝1出土遺物

図164 2Cトレンチ流路しがらみ下最下粗砂層出土遺物

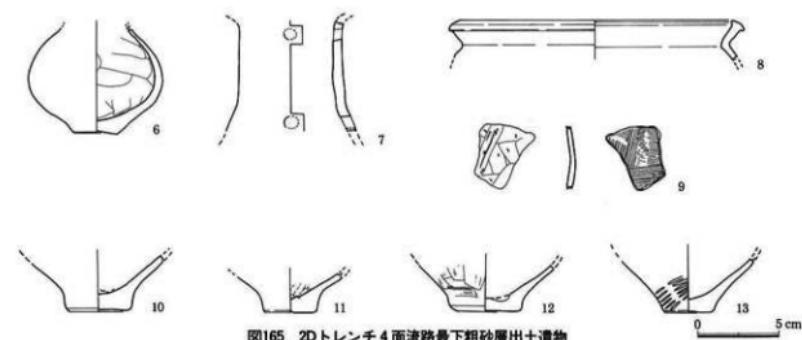
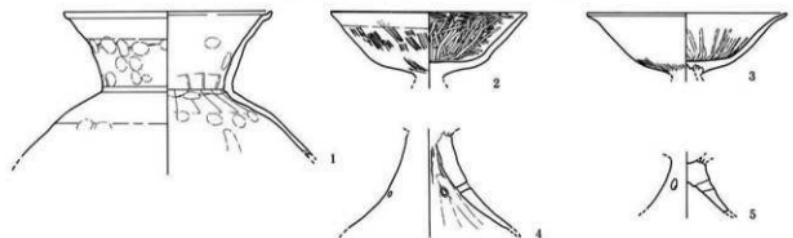


図165 2Dトレンチ4面流路最下粗砂層出土遺物

紐には刻み目が入る。口縁内縁には縦方向のミガキと、それらを切る、左下がりの横方向のミガキが認められる。IV様式の範疇か。

(図164-2)は弥生土器小型の広口壺の口縁片である。内外面ともヨコナデが認められる。

(図164-3)も弥生土器の小型広口壺の口縁片である。内面は頸部に粘土の離ぎ目が残り、肩部から口縁下半にかけてヨコナデ、口縁上半には横方向のミガキが見られるが、口縁端部内面にはそのミガキを消すヨコナデが一条に入る。口縁端部は凹面を成し、上下にやや拡張するが、下方はやや磨滅する。そこから頸部までにはヨコナデが残り、肩部は磨滅し、調整不明。2・3ともV様式か。

(図164-4)は甕口縁片で、磨滅が激しいが、外反し、口縁端部をつまみ上げる事から、庄内式の甕と思われる。胎土は長石と石英を含み、在地系のものである。

(図164-5)は弥生土器甕口縁片と思われる。口縁端部内面は強いユビナデが入るため、凹面を成す。

(図164-6)は弥生土器甕口縁片である。外面肩部は横方向で右が左を切るタタキが見られる。そのタタキを切る縦方向のナデが1条見られるがイレギュラーなものであろう。口縁は内外面ともヨコナデのようだが、頸部下半の内面にわずかにヘラケズリの痕跡が残り、口縁端部に面を持つ事からも庄内式併行期にまで下るものかも知れない。5・6共に森田編年のVI様式の範疇か。

(図164-7)は土師器甕である。外面は体部は右に傾いたタテハケが基本で、肩部のみヨコハケがありそれを軽いヨコナデで消す。その後2条の縦方向の短いヘラ沈線が入る。ヘラ記号か。頸部はヨコナデが上下のヨコハケを切る。口縁部は左が右を切るヨコハケ後、回転ナデがそれを軽く消す。内面は体部は左が右を、上が下を切る右上がりのケズリが基本だが、底面はケズリを切ってユビナデで仕上げる。頸部内面は横方向の長いケズリがあり、そこから頸部にかけてはユビオサエと縱横両方向のハケが一部残るが、それらを左から右の短い単位のケズリが消す。口縁内面は左を右が切る断続的なヨコハケが入った後、下半ヨコナデ、上半回転ナデの2条のナデでそれを消す。

外面には煤が付着し、底部あたりは使用のためかやや磨滅する。体部に一部、二次的な被火によるものらしき、はぜたような器表の剥離がある。内底面は炭化物が焦げつき、一部炭化米が付着している。

(図164-8)は弥生土器の甕底部と思われる。器表は磨滅、底面中央に凹部あり。

(図164-9)も弥生土器甕底部と思われる。器表は磨滅し、左右がやや歪むが、外面はタタキがあつた痕跡がある。底部はやや凸面気味。

(図164-10)は弥生土器壺底部と思われる。器表は磨滅。底部中央にわずかながら凹面がある。

2C・2Dトレンチ4面自然流路最下粗砂層(図165) しがらみの下以外でも河川の最下層として粗砂層が2Cトレンチから2Dトレンチにかけて普遍的にある。上部の洪水堆積の粗砂層に切られる部分もあるが、上部の粗砂層は基本的に無遺物で、かつ、しがらみ検出時にそのほとんどを除去したので、ここにあげる遺物もほぼ間違いなく、しがらみに先行する、最下粗砂層のものである。

(図165-1)は土師器壺と思われる。口縁端部は外反した後、上方につまみ上げられる。口縁外面はそこからやや下までヨコナデのみ、その下に一条の粘土接合痕が残り、ユビオサエがそこに横に並ぶ他、下側にも散在する。ユビオサエ後ヨコナデ。頸部には一条、強いミガキが入る。肩部はヨコナデだが、やや下にナデ前のユビオサエが残存する。肩部以下の体部はやや磨滅するが、ナデか。

内面は口縁は指押さえ後ヨコナデ。頸部の上下は各1条、断続的に右から左へヘラでナデする。下のヘラナデの部分には粘土接合痕と、ユビオサエが残存する。その下に一列、ユビオサエが並び、それ以下は縦方向のユビナデが一条残る。胎土は石英・長石を若干含むにぶい黄褐色。

（図165－2）は土師器高坏身部である。内面は横ハケ後、縦ミガキ。ハケは左から右に動き、やや右下がり、基本的に上が下を切る。ミガキは屈曲部に横方向のものを入れてから縦が入る。縦方向のミガキには特に規則性はない。外面はタテハケ後、ヨコナデ。ハケはやや左に傾き、基本的に左が右を切る。ナデは口縁部と屈曲部が特に強く入り、ハケを良く消す。黒斑あり。

（図165－3）も土師器高坏身部である。内面は口縁部はヨコナデが入り、それ以下には縦ミガキが認められる。外面は基本的にヨコナデだが、屈曲部以下はそれに切られたタテハケがそのまま残る。タテハケは左が右を切る。脚部は中空である。長石・石英をわずかに含む。

（図165－4）は高坏脚部片だが、弥生土器か。内面上半にはシボリ痕が残り、下半はユビナデである。透かし穴はユビナデ後に入り、5方向透かしである。外面は磨滅して調整不明。石英・長石を多く含む他、赤色粒がわずかに見られる。

（図165－5）も高坏脚部である。磨滅のため調整不明。

（図165－6）は弥生土器壺胴部片である。小型の直口壺か。内面の調整は、底部は縦方向のケズリ後ナデか、砂粒の動きは見られない。それより上はヨコユビナデ。外面は磨滅のため不明。

（図165－7）は弥生土器器台片である。後期のものか。調整は磨滅のため不明。透かし穴は上下がほぼ同軸に並ぶ。胎土に長石・石英の他、チャート・雲母を多く含む。

（図165－8）は弥生土器壺口縁片である。IV様式の範疇か。上下に拡張された口縁端部の面はやや凸面を成す。磨滅のため調整は判然としないが、内面頸部以下はケズリか。胎土は石英・長石を含む。

（図165－9）は土師器甕片である。外面にハケ、内面はケズリ。布留式のものか。

（図165－10）は弥生土器壺底部である。磨滅しているが、内面底部に棒状工具によるオサエの痕のみ残存する。胎土に長石・石英はわずかに入る。

（図165－11）も弥生土器壺底部である。内面底部の棒状工具によるナデのみ残る。底部外面中央に小さな凹部あり。長石・石英若干あり。

（図165－12）は弥生土器甕底部である。外面にハケ、ほとんどが縦方向だが、底部近くに一つだけ横方向の短いハケが入る。内面は調整不明。

（図165－13）は弥生土器甕底部である。外面に左下がりのヨコタキ。底面には凹部あり。

以上、4面2C・2Dトレンチの河川最下粗砂層には、弥生時代中期から古墳時代布留式期の遺物までが含まれる。これらはその上層のしがらみや4面の溝などが6世紀代のものと考えられる事とは矛盾しない。また、この河川の形成が弥生時代後期にあたる6面に遡る可能性がある事とも矛盾しない。ただ、弥生中期と古墳時代前期に関しては、今回の調査では当該期の遺構が存在しない。土器はローリングを受けたものが多いが、中には煤や炭化米が付着したままの布留式甕もある事から、この河川の上流のさほど遠くない位置に、その時期の遺構が存在する可能性は高いと言えよう。

4Aトレンチ

豊中市内の沖積低地には穂積遺跡や服部遺跡などを初めとして弥生時代の遺跡が多数存在しているが、その沖積地の北辺部に所在する螢池西遺跡でも弥生時代の遺構遺物が確認されている。また螢池西遺跡付近は早くから旧石器が出土する遺跡としても知られており、前回の螢池西遺跡（1）においては旧石器を包含する層を調査しサヌカイト、チャート、綠色片岩の剝片を検出している。

4Aトレンチの調査では1～4面までは遺物も少なかったものの、5～6面で検出された弥生時代後期の溝からまとまって土器が出土したほか、12層中より旧石器片を多数検出する事ができた。また螢池

西遺跡で多く見られる古墳時代中期～後期の遺物も4Aトレンチでは少なく、同一遺跡の範囲内でも各時代の遺物の出土する地区としない地区があり時代ごとの遺跡の広がりが微妙に異なっている事が推測される。

1～5層（図166） 古墳～現代の主に耕作に関連する土層での各時代の遺物が共存している。1は染付の皿で底部径は11.9cmを測る。2は施釉陶器片で花瓶の口縁であり、白色の釉を施す。3、6は同じく施釉陶器の鉢でありそれぞれ復元口径13.8cm、20.7cmである。6は内面に太い縦ハケを残す。4は弥生後期の甕底部片で底面にV字形の線刻が入る。5は土師質の小型羽釜であるが復元径はたがの部分で12.4cmと小さいので別の器種の可能性も考えられる。7、11は土師質の炮烙で7は口縁部が垂直に立ち上がり端部は丸みを帯び、11は断面が隅丸三角形の口縁で屈曲部外面に沈線が一条巡る。それぞれ復元口径は21.6cm、26.4cmである。8～13は須恵器である。その内の8、9、10は壺蓋で、8は口縁部は短くやや外傾し外面の天井部と口縁部を界する稜線は若干段が付く程度である。復元口径13.3cmで残存高4.7cmである。9は明瞭な稜線が残り口縁端部は沈線は巡らないものの段が付いている。復元口径11.75cm、残存高3.75cmである。10は復元口径16cmで口縁端部外面に沈線が巡る。12は短頸壺で頸部はごく短く胴部最大径はやや上よりもなる。また端部には内傾する面が付く。13は壺身で口縁端部に沈線が巡りやや厚くなっているが、内傾し受部は丸みを帯び厚くなっている。復元口径8.8cmを測る。これら須恵器の時期は中村編年II～II段階に相当するが、10のみV段階に属する。

4面方形周溝状遺構（図167） 須恵器で復元口径は16.6cmで残存高は3.2cmである。口縁端部は丸く内側に面を持つ。器種は不明であるが壺蓋の可能性が高いと考えられる。

5面（図168） 石鏃片である。大きさは縦1.35cm、横1.4cm、厚さ0.23cmを測る。ネガ面には打面調整の剥離痕が残り刃部の細部調整は両面から行われている。石鏃の後端は折れて消失しているがおそらく三角形に復元できると思われる。

6面溝1・3 弥生時代の遺物はほとんど6面検出の溝1と溝3から出土している。溝1の遺物は上下

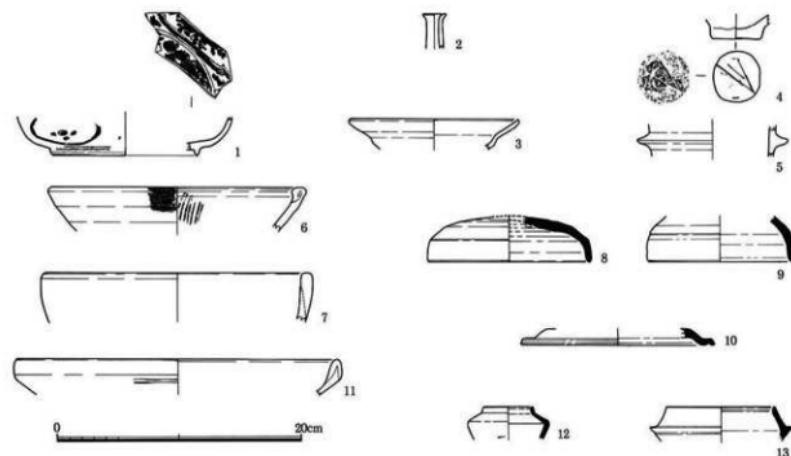


図166 4Aトレンチ1～5層出土遺物

2回に分け、取り上げたが、ほとんどが溝再掘削後の一括で良いようである。溝3の遺物は同一層から一括して出土している。時期は弥生時代後期のみだが、遺構ごとの細かな時期差は出土遺物から抽出する事はできなかった。また出土した土器の残存状態は悪く、そのほとんどの器壁が取り上げ時に剥離してしまうような状況だった。ただし器面の調整自体の状態は良いので器種構成などを判りやすくするために極力図化可能な遺物は図化に努めた。

6面溝1（図169） 1、3～5、13は壺で2、6、9、10、12、14は甕、7、11は高坏である。1は口径19cmで残存高10.6cmで外面はハケ目が、内面はユビ押え痕が残るがその他の調整は器壁が剥離しており不明である。

口縁部から頸部にかけて緩やかに外反し、口縁端部外側には明瞭な面が付く。3は外面調整は不明だが内面にはわずかにハケ目が残り、1と同じく口縁端部外面に面が付く。4は頸部の屈曲は強く外傾し、外面にハケ目が残る。5は口縁部が短くL字に外傾し口縁端部下方に数点の列点文が刻まれる他は内外面とも調整は不明である。復元口径は28cmである。2は甕口縁部だが端部は剥離しており形状は解らなくなっている。6は底部で内面に蜘蛛の巣状のハケ目が残り若干上げ底になっており結果底部の厚みは薄く仕上がっている。10はタタキ甕の底部で外面に右上がりのタタキ痕がわずかに残っている。内面調整もハケ工具の当て始めの痕跡のみ観察できただけである。12は内面ユビ押え痕が見られただけで外面調整は不明である。復元底径4.5cmで残存高3.6cmである。14は甕口縁部だが端部は消失している。7は高坏脚部である。脚端部が残存していないため全体の形状は解らないが、端部付近はきつつく短く外反し脚内の空洞は広いタイプで4点穿孔している。8は坏の脚接合部で外面調整のハケが残り接合部は円盤充填されている。11は椀形高坏の坏部で端部外面には面が作られ、外面調整はヨコミガキで内面はナデである。復元口径は16.4cmである。13は完形近く復元可能だった溝1の中では唯一の土器で、口径11.9cm、底径5.2cmを測る。口縁部は頸部から、くの字に外反し端部には凹線が2条巡る。胴部調整は外面が縦ミガキで頸部付近のみ若干横ミガキがあり、内面は底部から順に胴部肩まで左斜めに長い単位でハケ上げられ、それより上方はナデとユビ押えで仕上げられている。

溝1の土器群は壺が最も多く次いで甕が多いが、高坏などの他の器種は少なく壺においても長頸壺などは無いというように器種構成に偏りが見られる。出土量もさほど多くなく溝全体からの出土でもなく、検出した溝の範囲のほぼ中央でまとまって出土している事もあり単なる廃棄ではなく必然的に特定器種を廃棄している可能性も考えなければならない。

15は溝1が再掘削される以前の堆積層内から出土した、底部が穿孔されている鉢がある。残存する外面上部には少しケズリの跡が残り内面には横ハケが見られる。穿孔は外側から施されている。他の溝1出土遺物との時期差は同じ弥生時代後期という以外この土器だけでは特定できないが、共伴する事がありえる器種であることから、15は溝1が変遷していく過程内での時間差はそれほど無い事が遺物の方からも確認できる資料である。

6面溝3（図170） 1、2、4、5、7までが壺、3、6、8～14までが甕である。1は広口壺で器壁の剥離もほとんど無く調整も明瞭に残る。外面は縦方向のミガキで上下方向に連続して磨いており、内面はナデで頸部にユビ押え痕が残る。口縁部は緩やかに外反し頸部内面は外形のくの字形と異なり一旦面を作る二段階の屈曲部となっている。口径は14.3cm 残存最大径は20cmである。2は底部で外面は縦ミガキで内面は中心部は斜め左上がりのハケ、その他は横方向のハケが入る。底径は4.95cm、残存高は

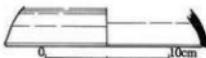


図167 4Aトレーンチ
4面方形周溝出土遺物

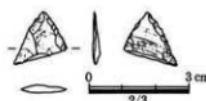


図168 4Aトレーンチ
5面出土遺物

5.9cmである。2は1の底部になる可能性があるが、胴部最大径付近の破片がないため正確には不明である。4は長頸壺の頸部で破片類からみて完形品であったと思われるが、剥離と細片化が激しく一部の復元ができたにとどまっている。器壁は外面のわずかな部分と口縁端部のみが残存しており縦方向の一単位が細かいハケ調整がされている。内面は接合時のユビ押え痕が若干残る。5は底部片だが調整は磨滅、剥離が激しく不明で、復元底径は3.8cmを測る。7は残存高23.7cmと溝3土器群の中では大型のもので剥離が激しく正確さは欠けるが、大きさに対し器壁は薄い。外面調整は口縁端部付近に横ミガキがあり、胴部には左斜めハケが残るが基本単位はまったく解らない。内面も胴部に横方向ケズリ若くは強めのハケが見られるものの長頸部の内面は不明である。口縁は垂直ではなく若干外反する。3のタタキ甕口縁部は端部に面を持ち全体は外反し、内面はケズリで仕上げている。6は外面のタタキ痕跡以外調

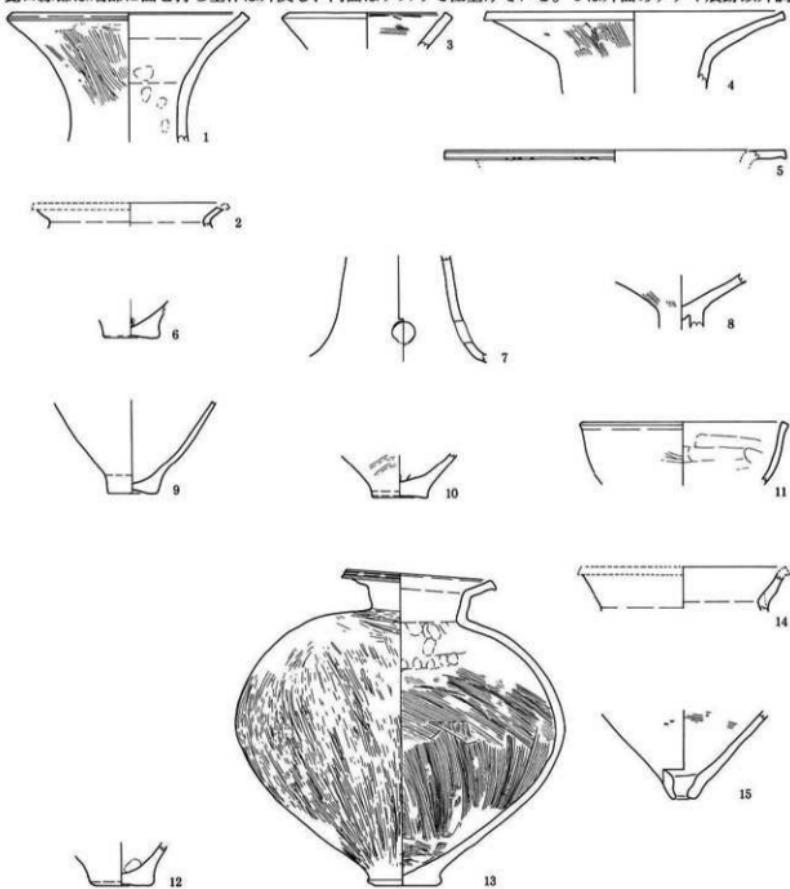


図169 4Aトレンチ6面溝1出土遺物

0 10cm

整は不明でなおかつ口縁端部も欠損している。口縁自体は他の溝3出土の個体に比べて厚い。8も内外面ともに剥離が激しい。口縁部は外反しており端部も面が付くように丸みを帯びる。9は口縁部が短く胴部はやや丸くなる。底部は平底で径3.3cmを測る。復元口径は16cmである。10の底部は内面をケズリ調整している。11は内外面ともにハケ目が残る平底の壺底部である。12は口縁が手の字状に屈曲し端部外面には丸みのある面が付く。また外面はタタキだが内面の胴上半は左下向きのケズリが入る。13は胴部よりやや突出した平底部を持つ壺片である。14は内面がケズリ調整されるタタキ壺の底部である。

溝3の土器の特徴は溝1と同様に特定器種が一括で出土する点である。器種は壺と甕に限られその中でも壺は長頸壺が目立ち、甕は平底状を呈する個体のみが出土している。一ヵ所に集中した出土状況と合わせて、特殊な廃棄状況の想定が可能と考えられる。

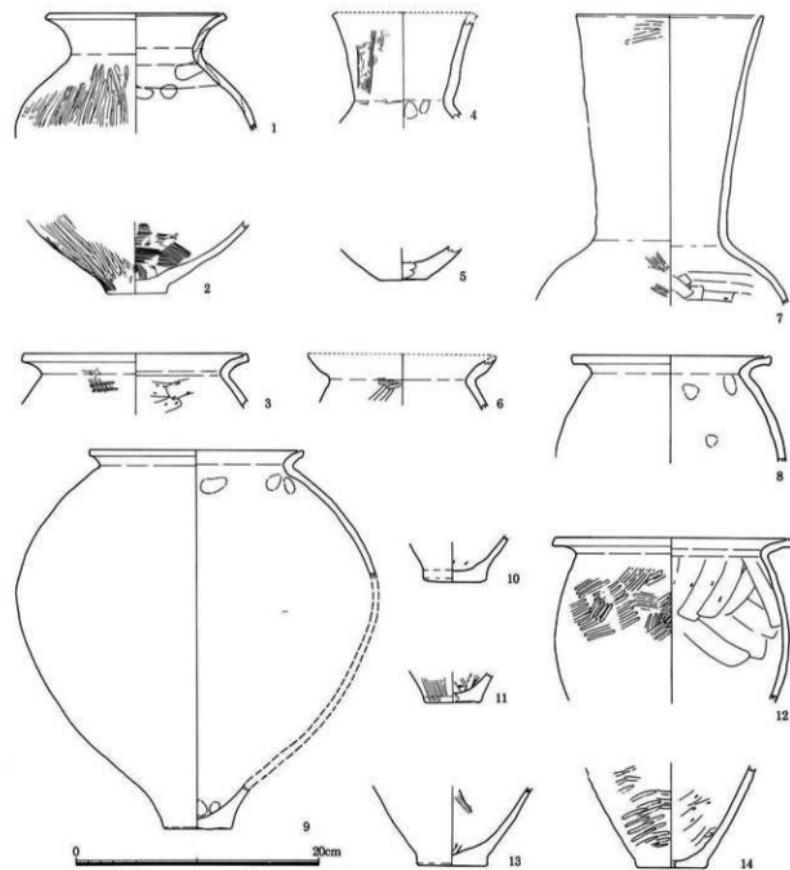


図170 4Aトレンチ6面溝3出土遺物

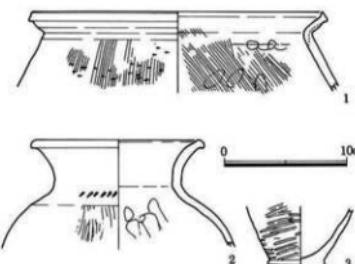


図171 4Aトレンチ 6面溝4出土遺物

6面溝4 (図171) 1は甕である。口縁端部は摘み上げるように立ち上がり外面には退化した凹線が巡り、外面は横方向のヘラケズリの後に縦方向のハケ、内面は比較的単位の大きい左上がりのハケで調整される。復元口径は23.8cmである。2は広口壺で口縁端部は外反し先端部もさらにやや外反する上、丸く仕上げられる。口径は13.4cmである。外面調整は縦ミガキが、頸部には列点文が施され、内面調整はナデである。3はタタキ甕で底径は4.6cm、残存高は5cmを図り、胴部の立ち上がりはきつく、底部内面にはケズリ痕が見られる。

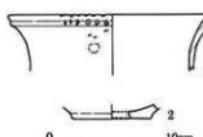


図172 4Aトレンチ
6面自然流路出土遺物

6面自然流路 (図172) 最下層出土遺物である。1は縄文時代晩期深鉢の口縁部で、やや粗い胎土で口縁端部の外面には上下にキザミ目が入れられている。外面にはケズリ調整の痕跡が見られる。復元口径は11.4cmを測る。2は底部片だが残存する破片が少なく全体の器形は不明である。

6面からは一括性の高い弥生後期の土器が出土したが、前記のとおり比較的まとまった土器の量があるものの器種構成には偏りが見られ通常の生活構造などに見られる土器廃棄の状態とは異なる意味合いを持つ可能性が考えられる。出土土器の細かな時期の位置付けやとしては後期でも中頃に比定されるものの、一部タタキ甕の全体的な形態や広口壺、長頸壺の口縁部形状、溝4の1の広口の甕など古い型式の要素を残す点が見られ、今回の螢池西遺跡(4)の一つの特徴を示すと考えられる。ただしそのほかの器種の出土量が乏しい事もあり十分に統計的に確認した特徴とは言い難い事などから今後の資料増加と分析が待たれるところである。

12層出土遺物 (図173～175) 螢池西遺跡を中心とする周辺の耕作土などから旧石器が出土することは以前から知られていたが、これまでの発掘調査の中で単純包含層として遺物が確認されたのは平成5年(1993)のモノレール関連調査の螢池西(1)が最初である。今回の調査もそれを踏襲し、弥生時代後期遺構面調査後從来の調査で確認している第12層まで掘削し遺物を検出した。

旧石器時代後期に相当する12層にともなう遺物は合計19点出土しており、そのうち6点が製品と確認された。なお石材は凝灰岩だが、すべてが近畿の後期旧石器に通常見られる二上山産サヌカイトではなく1点だけ産地の異なる剥片が確認されている。石材は低地部出土にもかかわらず、白っぽく風化が進んでいる。

図173-1は典型的な国府型ナイフ形石器で全長7.45cm、幅2.6cm、厚さ0.95cm、重量15.24gを測る。打面調整後の翼状剥片を取り出す時の打瘤がボジ面に残り、背面調整はボジ面から2回加えられ、1回目は刃先から根元へ大きく剝離し、2回目は逆方向に細かく入れられている。また刃部にも細かく細部調整が刃先方向になされ、その結果先端は鋭利に成型しているが若干磨滅しているような丸みを持っている。2はナイフ形石器で先端部は出土時には折れて消失していた。全長は5.35cmで幅2.05cm、厚さ0.75cm、重量8.612gである。背面調整はネガボジ両面から行い、ほとんど2回目のボジ面からの調整段階で消されているが先端部付近に若干剝離痕が残っている。刃部には細部調整はなく、断面形が台形を呈するほど角度があるため鋭利さには欠けている。3は2と同じく先端が欠損しているナイフ形石器

で全長5.9cm、幅2cm、厚さ0.75cmで重量は9.372gである。背面調整は両面から施されているが、ほとんどポジ面からの剥離痕により1回目の痕跡は消えている。なお剥離は刃部方向に順に行われている。4は細部調整が見られる石材で、台形石器の可能性があるため製品に分類した。細部調整はポジ面から入れられておりナイフ形石器と共にしているが、一部に原礫面を残しネガ面に大きな打面調整時の剥離を残している事から、翼状剥片などの失敗作やチップからの転用石器と考えられる。全長3.3cm、幅2.7cm、厚さ0.6cm、重量は5.692gを測る。5は小型のナイフ形石器であるが、小型品のためか1、2、3の様に決まった製作手順を踏んでおらずやや形は整ってはいない。背面の調整はポジ面からのみ行き剥離痕自体も大きめである。また刃部の下方にも同様の剥離調整が施されている上、意図的な調整かどうかは解らないが刃部のネガ面からポジ面に向かって4回の細部調整剥離の痕跡が見られるのがこの個体の特徴と言える。全長5cm、幅1.75cm、厚さ0.7cm、重量5.628gである。6も小型のナイフ形石器で、全長3.05cm、幅1.4cmで厚さ0.6cm、重量3.336gと今回出土したナイフ形石器の中でも最も小型品となる。ポジ面には素材剥片を取り出した時の打瘤が残り背面調整はネガポジ両面から入れられている。刃部には細部調整を加えた痕跡は無いが、先端部は磨滅したように丸くなっている。しかし断面から見ても銳利さは見られず、実用に耐えうる製品であったかどうかは疑問である。刃部の角度、鋭さによって使い分けがなされている可能性もある。

図174・175は打面調整に際し剥離した剥片、チップである。全体量が製品の数に対してかなり少ないが、土層や共伴する礫などから純粋な生活面での生産の場ではなく二次堆積の面であったがそれを説明している。

図174-1は原礫面を多く残す剥片で、その割れ方が一回の打撃で一つの面だけの割れにとどまっていない事から翼状剥片を取るための大まかな打面調整時のものと考えられる。重量は17.064gである。

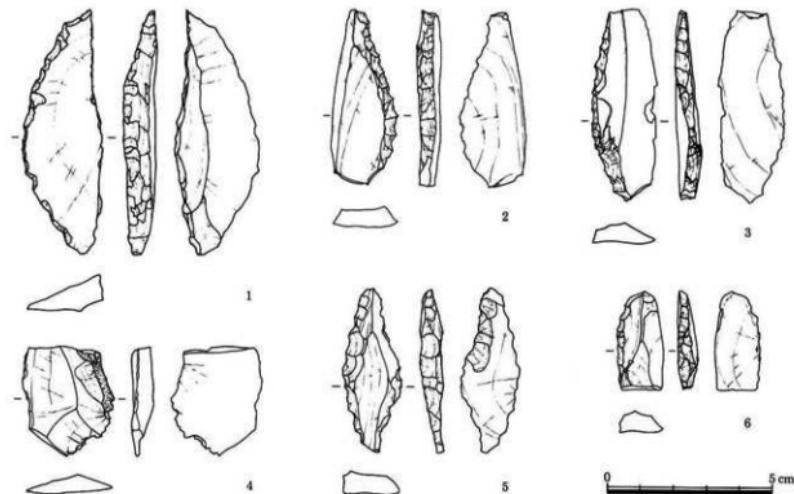


図173 4Aトレンチ12層出土遺物(1)

2は各割れ面の打点がばらばらで細かく、剥片自体も大きく立体的な事から板状剥片の石核と考えられる。重量は28.3gを測る。3はこの剥片が石核から剥がれた時の打点が入っているのが原礫面であり比較的薄く取られているので、翼状剥片を石核で形作る打面調整時の剥片と推測できる。重量は6.548gである。4は3と同じような剥片で生成要因も同じと考えられる。ネガ面には前段階の剥片を取り出した時の打面調整が残る。13.06gを測る。5は大型の石材だが、強い力で割られているため面の数は少なく凹凸の多い剥離面を持つので石核ではなく打面調整時の剥片と考えられる。重量は24.096gである。6は剥片であるがその形状から翼状剥片の失敗品の可能性が高い。おそらく石核から外す際に力が強くボジ面が波打ち鋭利な刃先ができなかつたと見られる。重量18.856gである。

図175-1は大型であり原礫面を多く残すので、原礫から板状剥片を作る時に出た剥片と推測される。重量も今回出土サヌカイト中最も重く118.7gを測る。2は今回唯一の接合資料である。細かな打面調整もなく、原礫面を残す事から板状剥片を作り出す時か、翼状剥片を成型する時の大まかな打面調整時に剥離した剥片に思われる。重量は両剥片で23.968gである。3と4は共に大型の剥片で原礫面を大き

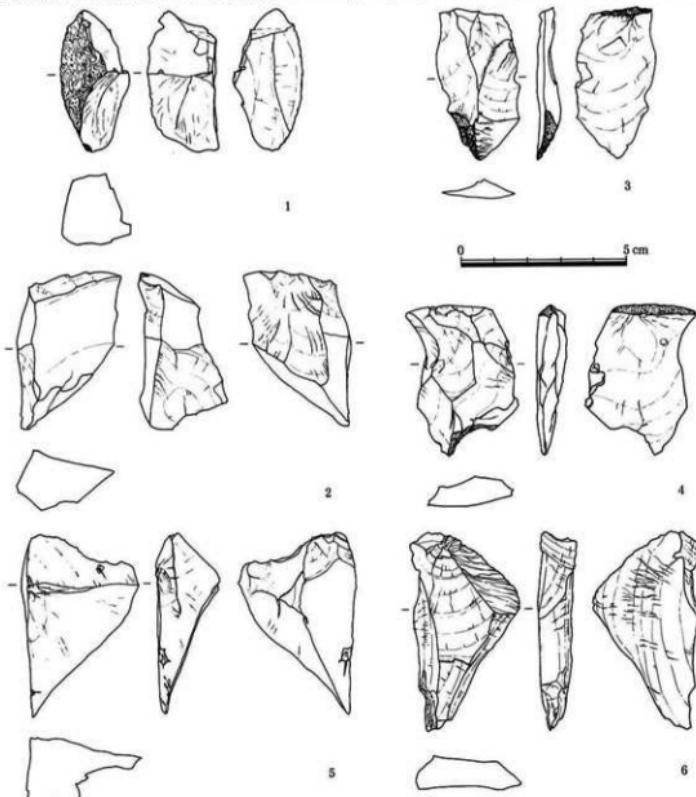


図174 4Aトレンチ12層出土遺物(2)

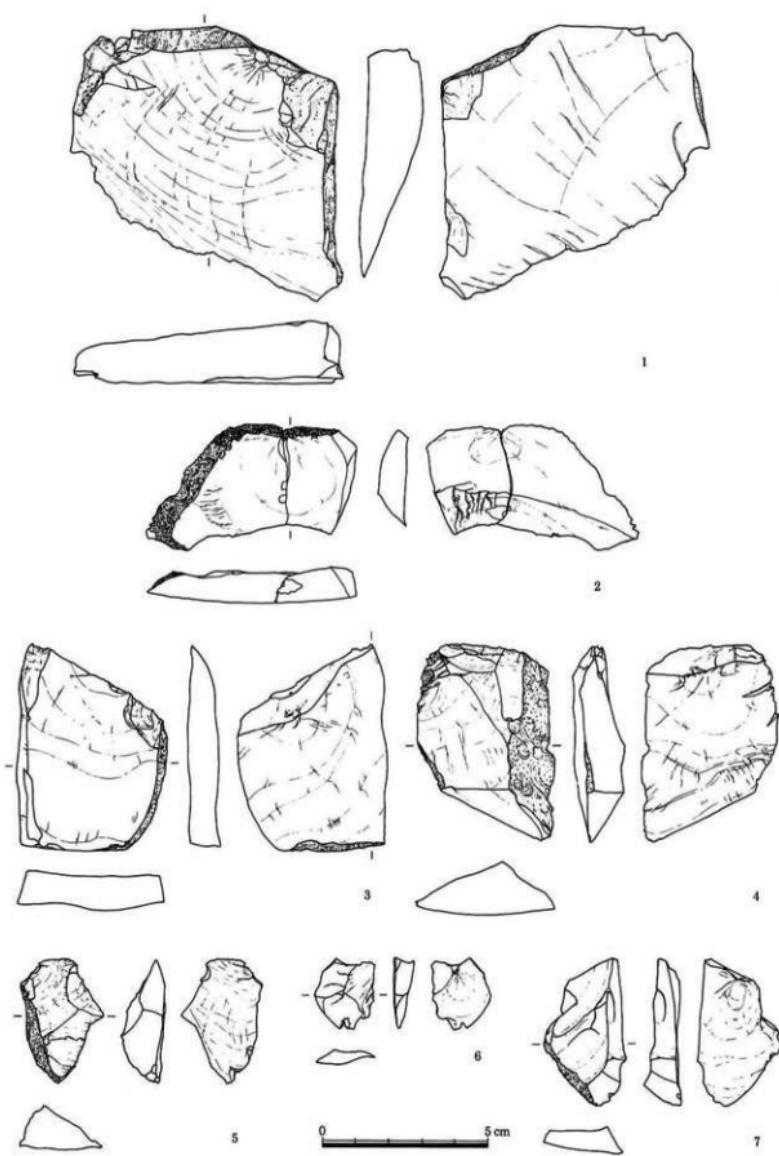


図175 4Aトレンチ12層出土遺物(3)

く残している。ネガ面もポジ面も大きく単純な割れなので、2と同じく板状剝片を作り出す時か、翼状剝片を作り出すときの大まかな調整時の剝片と考えられる。重量はそれぞれ41.448 gと36.048 gである。5、6、7はネガ面に細かな打面調整が入りポジ面には剝片が剝がれる際の痕跡のみ、大きさも小さく原礫面も残すので翼状剝片の成型時に板状剝片から剝がれたチップと考えられる。重量は8.572 g、1.532 g、9.176 gである。

今回の調査では弥生時代後期の溝4条と自然流路から一括の土器群を検出、また前回の調査で旧石器が伴った土層から6点の石器と13点の剝片を検出する事ができた。

弥生時代後期の遺物はこれまでの調査でも確認されているが、まとまって遺物が出土したのは珍しく、出土の状況やその器種構成などに偏りが見られ、遺構の性格が何らかの特殊性を持つ事が推測される資料であるのが解った。時期は後期中頃に比定できるが各土器の持つ要素には古い形式の部分もある。

旧石器時代遺物に関しては螢池西遺跡で面的に多くの石器類を確認したのは初めてで、まだあまり解明されていない北摂地域の旧石器時代遺跡の重要な資料の一つになると考えられる。

参考文献

少路窓跡遺跡調査団1982『桜井谷窓跡群2-17窓跡』

大阪府教育委員会1971『大阪文化財調査報告書第30輯 陶邑』

助大阪文化財センター1994『宮の前遺跡・螢池東遺跡・螢池遺跡・螢池西遺跡1992・1993年度発掘調査報告書』

3.まとめ

螢池西遺跡の調査を時代順にまとめてみたい。

後期旧石器時代後半には、出土した石器の組成と出土状況から見て、調査区近辺に石器製作址が存在した可能性が高い。その存在した面はおそらく13面で、旧石器包含層としての12層はその上で二次堆積したものであろう。

ただし、13層は様々な層が切り合った層群で、12層とは若干の不整合があり、時期的には下位段丘崖が形成された時期と接近しているので、その頃の周囲の地形や環境は不明確な点が多い。

しかし、これまでの螢池西遺跡や周囲の遺跡での旧石器が、新しいものと混在した包含層で確認されていた状況に比べ、後期旧石器単純の包含層が確認できた意義は大きいだろう。

その後12面から11面にかけて、小規模な流路を中心とした低湿地と森林が混在しているような環境になる。そして、その次に止水堆積した黒泥土である10層が堆積する。

この層は沼状の溜水状況で堆積したと思われ、螢池南地区から本調査地点まで、少なくとも東西500m以上の範囲に広がり、層厚から見てもかなり長期にかけて堆積したものと推測される。

その背景として、縄文海進により、猪名川水系の沖積平野のかなりの部分が、排水不良で低湿地化、沼状化する状況があったのではないかと推測される。

その状況も9層前後でいったん乾燥化した後、洪水の溢流堆積層と思われる7・8層が堆積する。そして7面では6層の元となるような腐食土を形成する森林が成立したものと思われる。

その森林を切り開いて耕地化する動きが弥生時代後期に始まる。段丘の開拓谷から沖積平野へ流れ出た小さな流路から取水し、またそこへ排水する水利体系が成立したと考えられる。

しかし、それは繰り返される洪水との戦いであった。洪水で埋まった溝を掘りなおし、被害によっては水利形態そのものを次第に変化させていったと言える。

その途中で機能の低下した溝に大量に投棄された土器群は何を意味するのであろうか。

土器の組成としては長頸壺や広口壺などの壺類が全体の5割近くを占め、あとは大体、甕4割、高杯1割といどである。普通の集落の土器組成と比較すると壺の割合がかなり高いものと思われる。なんらかの祭祀的な状況なのだろうか？

また、この水利体系を維持し、土器を投棄した集団の居住する集落はどこであったのだろうか。

螢池西遺跡でも、豊中市教育委員会の調査で、大量の土器が出土した地点もあり、北東で近い南刀根山遺跡でも後期の土器が出土しているが、住居址など、集落の存在を直接示すものは未発見である。

当該期の集落が確認されている周辺の遺跡としては宮の前遺跡と新免遺跡があるが、近い方の新免遺跡でも500m以上離れている。いずれにしろ、集落からある程度離れた地点までまとまった量の土器を持ってきて投棄しているとは言えよう。

水利体系によって給水されていた水田は小区画水田で、地形に合わせて作られていた。しかし、平坦な部分や、傾斜が均一な部分では、長方形が整然とならんだ区画を指向していたようである。また、平坦な部分では一つの区画の面積も増えるようである。

また、その水田の面でサスカイト製石鐵が2点出土しているのも注目できる。いずれも小型の三角鐵なので、狩猟用のものであろう。水田の広がるような場所で、狩猟が行われたのであろうか。

その後しばらくは人間の活動の痕跡は見当たらなくなる。洪水による堆積物も少ないが、後世の浸食や削平がどの程度かは分からぬ。

流路や包含層の遺物に4～5世紀の遺物がわずかながら見られるので、周辺でまったく人影が絶えたわけではないようだが、調査区内では6世紀になって、堰と溝が作られ、再び新しい水利体系が作られる。

弥生後期は流路が古いものから新しいものへ移動していく、不安定な時期であったといえるが、古墳時代後期の水利体系はそれ以降あまり変化なく存続した新しい方の流路に作られた。

堰のしがらみは残りの良いものではなかったが、それでもその構造と作り方が明確になったのは貴重な成果と言える。小規模な流路に作られる堰のこの時代の好例となろう。

この古墳時代後期の水利体系は、流路が序々に埋没していく過程でも維持され続けたが、しがらみを破壊し、一気に流路を埋没させるような洪水により終焉を迎える。その後この系統の流路がどこに流路変更したのかは明らかではない。

その後、この付近には、現代の土地区画に良好に残存する条里制地割りが施行されるが、その施行時期を示す遺構・遺物は一切残存していない。しかし、旧流路の痕跡などの凹地が、現代の整地土で最終的に埋められている事は、条里制地割りの施行以後も、その区画内にはある程度の凹凸が存在していた事を示すものと思われる。

IX 自然科学的調査の成果

1. 萤池南地区他出土土器胎土分析

(株)第四紀地質研究所 井上 嶽

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は表1胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JD-X-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu, Filter : Ni, Voltage : 40kV, Current : 30mA, ステップ角度 : 0.02°, 計数時間 : 0.5秒。

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧 : 15KV、分析法 : スプリント法、分析倍率 : 200倍、分析有効時間 : 100秒、分析指定元素 : 10元素で行った。

2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は表1胎土性状表に示す通りである。

表1右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバライド(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb三角ダイアグラム

図176-1に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont、Mica、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトはMont/Mont+Mica+Hb*100でパーセントとして求め、同様にMica、Hbも計

算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の1～4はMont、Mica、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は図176-1に示すとおりである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb菱形ダイヤグラム

図176-2に示すように菱形ダイヤグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Chの2成分が含まれない、c) Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。

Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch*100と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイヤグラム内にある1～7はMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は図176-2に示すとおりである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト(Mullite)は、磁気、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライド(Cristobalite)はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライドより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

- 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- 焼成ランクII：ムライトとクリストバライドが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- 焼成ランクIII：ガラスのなかにクリストバライドが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライドなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになる。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$, $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$, $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3 分析結果

3-1 X線回折試験結果

3-1-1 タイプ分類

表1 胎土性状表には既分析の螢池東、螢池、桜井谷、緑ヶ丘、陶邑の各遺跡と共に螢池南遺跡の土器を記載してある。タイプ分類はこれらの遺跡の土器で新たにおこない、表3 タイプ分類一覧表を作成した。

表3には今回の分析分20点についてタイプ分類を記載してある。土器胎土はA～Jの10タイプに分類された。そのうちBタイプは今回の分析分には認められなかった。

Aタイプ：Mont、Mica、Hbの3成分を含む。

Cタイプ：Mica、Hb、Chの3成分を含み、Montの1成分に欠ける。

Dタイプ：Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。

Eタイプ：Mica、Hbの2成分を含み、Mont、Chの2成分に欠ける。組成的にはDタイプと同じであるが、検出強度が異なる為に、タイプが異なる。

Fタイプ：Mica、Chの2成分を含み、Mont、Hbの2成分に欠ける。

Gタイプ：Micaの1成分を含み、Mont、Hb、Chの3成分に欠ける。

Hタイプ：Mont、Micaの2成分を含み、Hb、Chの2成分に欠ける。

Iタイプ：Montの1成分を含み、Mica、Hb、Chの3成分に欠ける。

Jタイプ：Mont、Mica、Hb、Chの4成分に欠ける。

須恵器は高温で焼成されたために鉱物は分解してガラスに変質している。そのため4成分は検出されない。

弥生土器と土師器は12個あり、タイプは8タイプに分類され、分散する。弥生の甕のAタイプは2個あり、螢池南-5は在地、12は河内？とされているがともにAタイプで類似性が高い。

3-2 石英（Q t）-斜長石（P ℓ）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

ここでは図177は須恵器、土師器、弥生土器を記載したもの、図178は弥生土器と土師器、図179は須恵器を記載したもので3図に分けて記載した。図178には久宝寺南遺跡出土のI式土器の在地と生駒西麓系の土器をあわせて記載し、関連性を検討した。

3-2-1 弥生土器と土師器について

図178-1 Q t - P ℓ 図に示すように I～V の5グループと“その他”に分類される。

I グループ：生駒西麓系の土器が集中する。

II グループ：生駒西麓系の土器が集中し、弥生：河内系の螢池南-3が共存する。螢池南-5と19はこのグループに混在するがともにH b（角閃石）の強度が低く、生駒西麓系とは異なる土器である。

III グループ：土師器が集中する。

IV グループ：I 式の土器が集中し、螢池南-6 の土師器が混在する。

V グループ：螢池南遺跡の弥生土器の在地と河内系の土器が共存する。

“その他”：螢池南-11は弥生の土器で、河内系であるが、幾分異質である。

以上の結果から明らかな様に、生駒西麓系の土器、I 式の土器、土師器、弥生土器は明瞭に分かれる。弥生土器は在地と河内系が共存し、類似性が高い。

3-2-2 須恵器について

須恵器は図179-1 Q t - P ℓ 図に示すように螢池、螢池東、桜井谷、緑ヶ丘、陶邑の各遺跡から出土した須恵器と共に記載してある。

図179-1 に示すように、土器は I ~ III の 3 グループと “その他” に分類された。

I グループ：桜井谷、緑ヶ丘、陶邑の須恵器が集中し、螢池東と螢池南の土器が共存する。とくに螢池南の大型特殊土器は陶邑の土器と近接関係にある。

II グループ：螢池東の土器が集中し、桜井谷と螢池：奈良の土器、螢池南の陶邑？の土器が混在する。

III グループ：螢池東、螢池、桜井谷の土器が混在する。

“その他”：緑ヶ丘の幾分生焼けの須恵器と土師器が斜長石（P ℓ）の強度が高い領域に分布する。

4 化学分析結果

表2 化学分析表に示すように、螢池南遺跡の土器（弥生、土師器、須恵器）と共に既分析の螢池東、螢池、桜井谷、緑ヶ丘、陶邑の各遺跡の土器の分析値が記載してある。

弥生土器と土師器は図178-2 SiO_2 - Al_2O_3 図、図178-3 Fe_2O_3 - MgO 図、図178-4 K_2O - CaO 図に I 式土器の在地、生駒西麓系の土器と共に記載してある。須恵器は図179-2 SiO_2 - Al_2O_3 図、図179-3 Fe_2O_3 - MgO 図、図179-4 K_2O - CaO 図に螢池東、螢池、桜井谷、緑ヶ丘、陶邑の各遺跡の土器とともに記載してある。

4-1 弥生土器と土師器について

4-1-1 SiO_2 - Al_2O_3 の相関について

図178-2 SiO_2 - Al_2O_3 図に示すように生駒西麓系の土器は SiO_2 の低い領域に I と II の 2 グループに分れて分布する。螢池南-3 は I グループに属し、明らかに生駒西麓系の土器である。I 式：在地の土器は III グループに集中し、明瞭に分れる。螢池南遺跡の弥生土器は III グループに在地、IV グループに河内系の土器が分布する。土師器は II グループに集中し、生駒西麓系の土器と共存する。螢池南-5 は弥生：在地の土器であるが II グループに属し、異質である。

4-1-2 Fe_2O_3 - MgO の相関について

図178-3 Fe_2O_3 - MgO 図に示すように、 MgO の値が高い領域に生駒西麓系の土器が集中し、I グループを形成する。螢池南-3 も MgO の値が高い領域にあり、生駒西麓系の土器である。

II グループには螢池南の弥生：在地と河内の土器と I 式：在地の土器が集中し、土師器-18と19が混在する。III グループには土師器が集中する。

4-1-3 K_2O - CaO の相関について

図178-4 K_2O - CaO 図に示すように、生駒西麓系の土器は K_2O の値が低く、 CaO の値が高い領域に I ~ III の 3 グループを形成し、螢池南-3 もこの領域に入る。I 式：在地は IV グループに集中し、弥生：在地の14、土師器18と19が混在する。V グループには弥生：河内と在地の土器が集中する。

4-1-4 小結

弥生土器と土師器についていえば、弥生土器の在地の13、弥生土器の河内の11と12は成分的に類似性が高く、I式：在地の土器とは明らかに異なる。

弥生土器の在地の14、土師器の18、19の3個はI式：在地の領域に入り、関連性が伺われる。

弥生土器の河内のうち3は角閃石の強度が高く、明らかに生駒西麓系である。

4-2 須恵器について

4-2-1 $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ の相関について

図179-2 $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 図に示すように須恵器は SiO_2 の値が低い領域に I グループを形成し、螢池東、螢池、緑ヶ丘と共に螢池南の土器が集中し、陶邑の土器と共存する。 SiO_2 の値が高い領域には桜井谷の土器が集中し、螢池南の在地、螢池東、螢池の土器が混在する。螢池南-9の陶邑とされるものは明らかに SiO_2 の値が低く、ここで分析した陶邑の土器とは明らかに異質である。

陶邑の土器と同じグループを形成するものには螢池南-1の陶邑の土器と大型特殊土器の7と8である。

4-2-2 $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$ の相関について

図179-3 $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{MgO}$ 図に示すように、I グループには緑ヶ丘の土器が集中する。II グループには桜井谷の土器が集中する。緑ヶ丘と桜井谷の土器では Fe_2O_3 の値は同じであるが、 MgO の値は緑ヶ丘の方が桜井谷の土器より高く、その差は明瞭である。

Fe_2O_3 の値が高い領域には螢池東、螢池、螢池南の土器が集中し、III グループを形成し、明らかに桜井谷、緑ヶ丘の土器とは異なるグループを形成する。

陶邑の土器はII グループで桜井谷の土器と同じグループにあり、螢池南-1の陶邑の土器と大型特殊土器の7と8である。

4-2-3 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ の相関について

図179-4 $\text{K}_2\text{O}-\text{CaO}$ 図に示すように、 K_2O の値が低い領域に陶邑の土器が集中し、I グループを形成し、螢池南の大型特殊土器の7と8は共存する。

K_2O 値が高い領域には緑ヶ丘の土器が集中し、III グループを形成する。このIとIIの中間には螢池東、螢池、螢池南の土器が集中し、桜井谷の土器と共存する。螢池南-9の陶邑の土器は K_2O の値が低く、異質である。

4-2-4 小結

桜井谷の須恵器は SiO_2 が 67% 以上と高く、 Fe_2O_3 は 4 ~ 7%、 K_2O は 2 ~ 3% の領域にある。 MgO の値が 0.5% 以下と低いのが特徴である。

緑ヶ丘の須恵器は SiO_2 が 62 ~ 67%、 Fe_2O_3 は 4 ~ 7%、 K_2O が 3% 以上と高い。緑ヶ丘の須恵器は MgO が 0.5% 以上と高く、 K_2O が 3% 以上と高いのが特徴である。

螢池東、螢池、螢池南の須恵器は SiO_2 が 62 ~ 67%、 Fe_2O_3 は 6% 以上と高く、 K_2O は 2.5 ~ 3.5% の領域にある。螢池東、螢池、螢池南の須恵器の特徴は Fe_2O_3 の値が他と比べて高いことである。

陶邑の須恵器は SiO_2 が 64 ~ 67%、 Fe_2O_3 は 5 ~ 7%、 K_2O が 2.6% 以下と低い。陶邑の須恵器の特徴は K_2O が 2.6% 以下と低いと言うことである。

陶邑の土器と類似する組成を示すものは螢池南-1と大型特殊土器の7と8の3個である。

5 まとめ

- 1) 土器胎土はA～Jの10タイプに分類され、弥生土器と土師器12個に対して8タイプに分け、分散傾向にある。螢池南-3は角閃石の強度が高く、生駒西麓系の土器である。他の生駒西麓系と想定されるものは角閃石の強度が低く、該当しない。
- 2) 螢池南遺跡出土の弥生土器と土師器は螢池南-3が生駒西麓系の土器。土師器の18と19、弥生：在地の14はI式：在地の土器と類似性が高い。弥生：河内の11と12、在地の13は類似性が高く、また、I式：在地とは異なる。
- 3) 螢池東、螢池、螢池南の須恵器と桜井谷、緑ヶ丘の須恵器は各々が異なる成分をしており、異なる胎土で製作されている。螢池系の須恵器、桜井谷系の須恵器、緑ヶ丘系の須恵器と各々製作系統が異なるものであろう。
- 4) 螢池南遺跡から出土した陶邑系と想定される土器のうち、螢池南-1と大型特殊土器の7と8は陶邑の土器として分析しているものと成分的に類似性が高く、陶邑産と判断された。螢池南-9も陶邑産と想定されたものであるがここで分析している陶邑産の土器とは明らかに異質である。
- 5) 須恵器の中に認められる黒点と土師器の中に認められる赤褐色の粒子の成分を分析したところ、須恵器の黒点の Fe_2O_3 は15が6.16%、16が17.67%、17が21.55%と余り高くない。土師器の赤褐色粒子は18が52.92%、19が28.95%、20が66.93%と須恵器と比較して値が高い。鉄の含有量からすると須恵器の黒点と土師器の赤褐色粒子とは異質である。

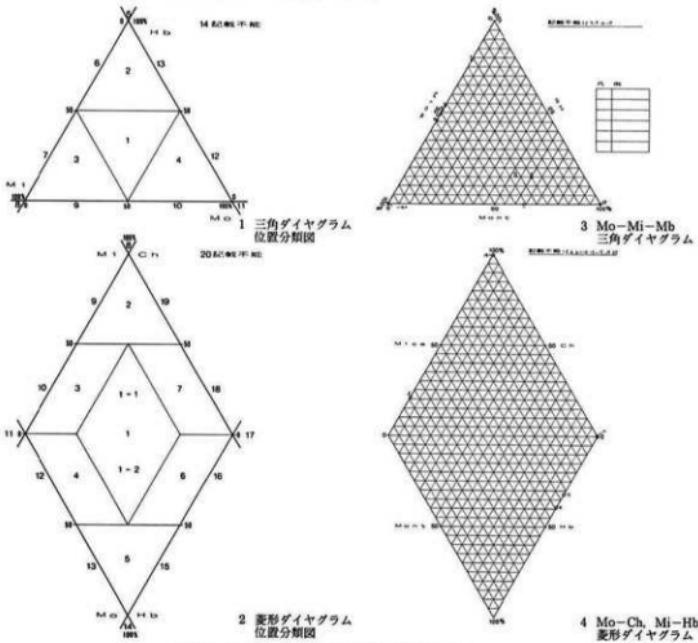


図176 三角・菱形ダイヤグラム位置分類図

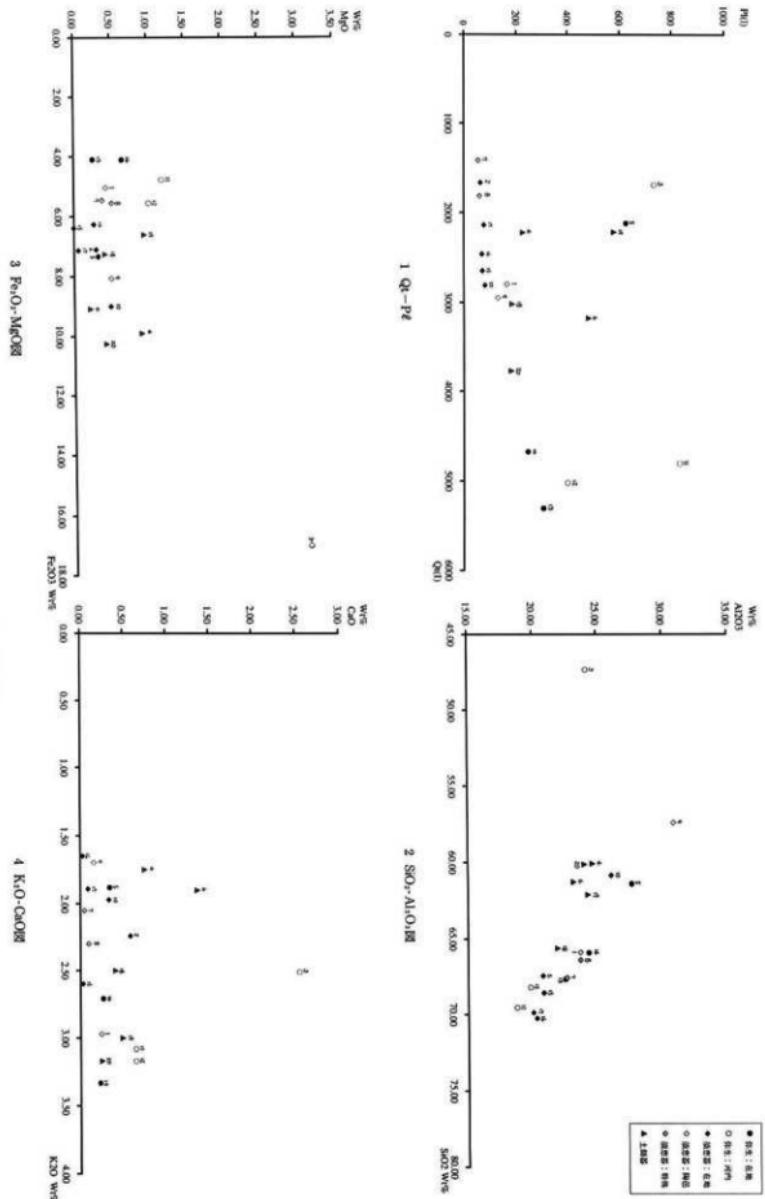


图177 化学分析相图(图1)

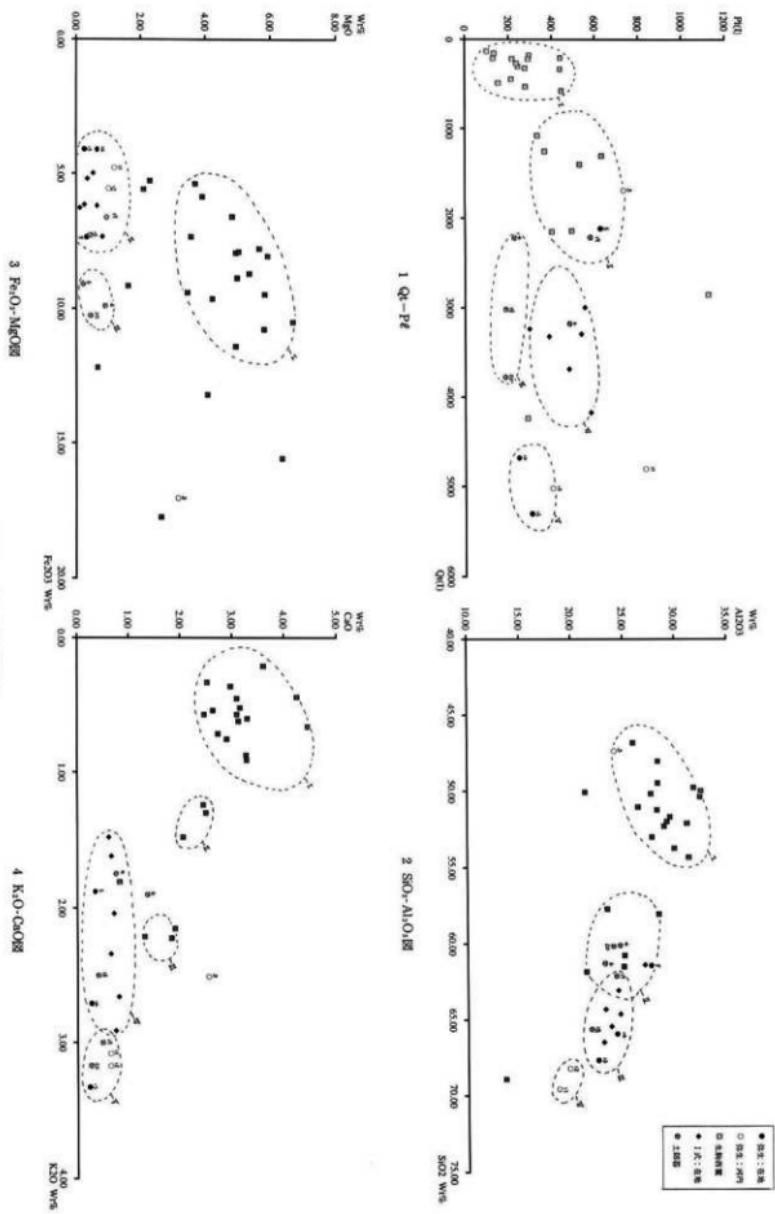
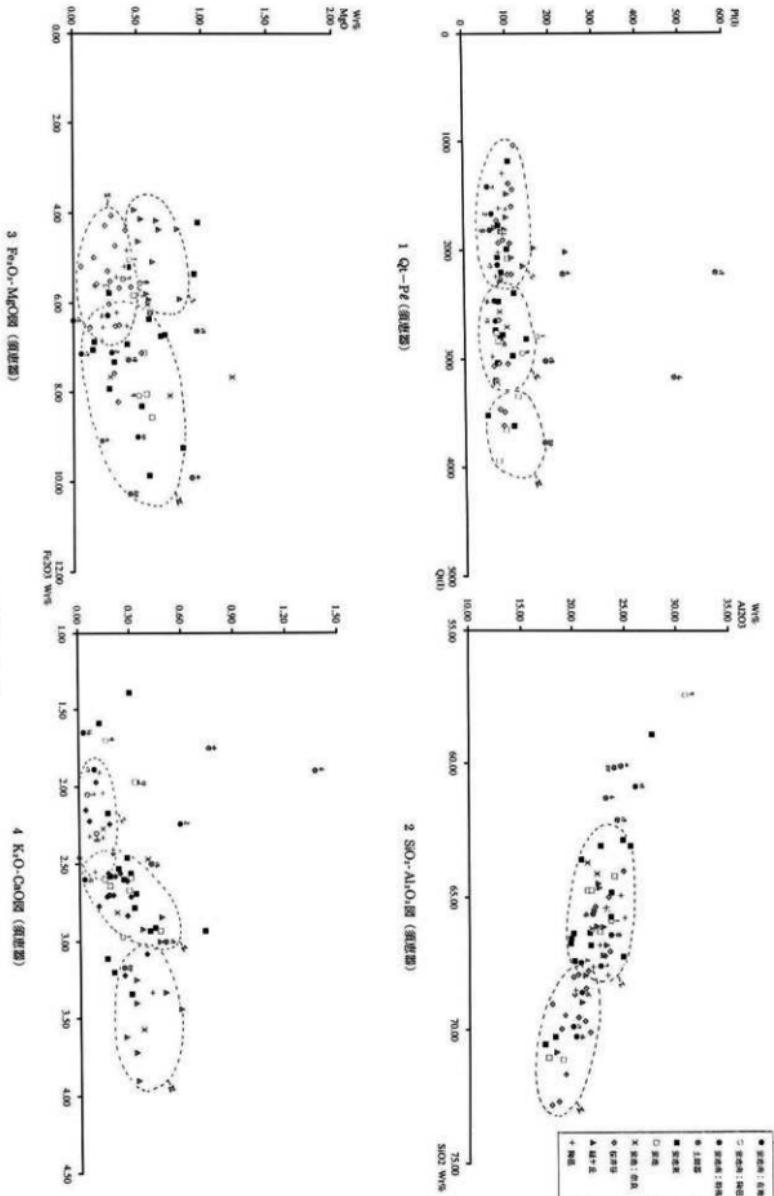


図178 化学分析相関図(2)

1179 化学分析相图(1)



2. 宮の前遺跡（3）花粉分析及び珪藻分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

千里丘陵南西部の箕面川左岸の低位段丘上には、宮ノ前遺跡、螢池遺跡、麻田藩陣屋跡、螢池東遺跡など多数の遺跡が立地している。各遺跡では、発掘調査と並行して、古環境や遺構の性格に関する情報を得ることを目的とした自然科学分析調査が実施されている。宮の前遺跡では、これまでに（2）調査区において弥生時代の古環境復元を目的とした調査が実施されている多くの情報は得られていない。そこで、今回（3）調査区において同様の目的で分析調査を行う。

（3）調査区では、奈良・平安時代の性格不明の土坑群と溝、中世・近世の遺物などが検出されている。今回の調査では、奈良・平安時代～中世における調査区内の堆積環境および周辺植生の復元と、奈良・平安時代の土坑の堆積過程の検討を目的として、珪藻・花粉分析を実施する。

1. 試料

試料は、調査区内の堆積層が良好に観察される南壁の2カ所の地点（東より第1・2地点）と、西壁に断面がみられる、奈良・平安時代の土坑覆土断面（第3地点）より採取した。南壁の層相と土坑覆土の層相の概要と試料について以下に述べる。

（1）南壁（第1・2地点：図180）

調査区の地形は、概ね北東から南西方向に傾斜しているが、第1地点と第2地点間の標高差はほとんどない。南壁の堆積層は上位よりI・II・III・IV層に区分されている。

I層は暗灰色シルトからなる近世の耕土である。II層・III層は主に灰褐色のシルトからなるが、堆積後に形成された酸化鉄やマンガンの沈着状況より、それぞれII 1層・II 2層、III 1・III 2層に細区分されている。II 1層は灰褐色シルトからなり緑色粘土塊が混じる。II 2層は灰褐色砂混じりシルトからなり、酸化鉄・マンガンが点状に沈着する。III 1層は灰褐色砂混じりシルトからなり、酸化鉄・マンガンの沈着は認められない。また、酸化鉄・マンガンの沈着は第1地点側で顕著となる。IV層は暗灰～灰褐色シルトからなる。

これら堆積層のうち、II・III層が中世（13～14世紀）の遺物包含層、IV層上部が奈良・平安時代の遺物包含層に相当する。なお、分析は、第1・2地点ともII 1層からIV層上部から採取した各々5試料（試料番号③～⑦）と6試料（試料番号③～⑧）について実施する。

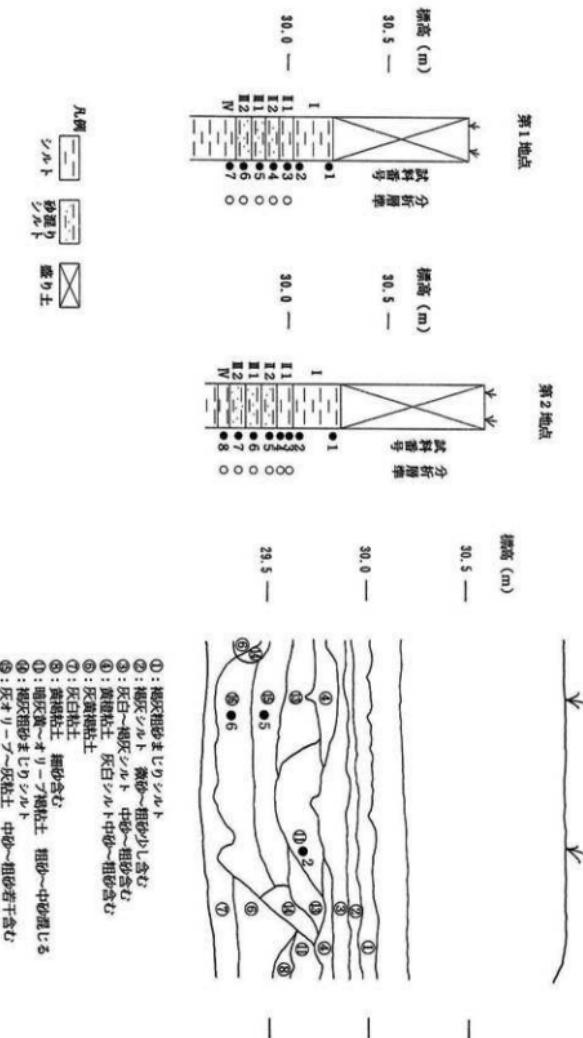
（2）土坑覆土（第3地点：図180）

本土坑は、上記した調査時のIV層上面に構築されている。土坑覆土は3層に区分され、下位より暗灰色砂混じりシルト、灰褐色シルト、暗灰色シルトからなる。覆土の上位をIII 2層が覆う。分析は覆土各層より採取した6点の試料から選択した3点（試料番号②・⑤・⑥）である。

2. 分析方法

（1）珪藻分析

試料を湿重で約7g秤量し、過酸化水素水（H₂O₂）、塩酸（HCl）の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入する。



- ①: 極めて粘土まじりシルト
- ②: 粘土シルト、微砂～粗砂少しある
- ③: 灰白色シルト 中砂～粗砂含む
- ④: 灰白色粘土
- ⑤: 黄褐色粘土
- ⑥: 灰白色粘土
- ⑦: 灰白色シルト、細砂含む
- ⑧: 明灰褐色～オーリーブ緑色粘土、粗砂～中砂混じる
- ⑨: 極めて粘土まじりシルト
- ⑩: 灰色泥炭～アーバー灰粘土、中心～粗砂若干含む
- ⑪: 黒～深灰色シルト、ラミナ有り

第1・2地点の層序および試料採取箇所

図180 試料採取箇所

第3地点の土坑断面図と試料採取箇所

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に同定・計数する。

種の同定は、K. Krammer and H. Lange-Bertalot (1986・1988・1991ab)などを用いる。また、産出した珪藻遺骸が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。

(2) 花粉分析

試料約10 gについて、水酸化カリウム処理、簡別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリル処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作して出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位分布図して示す。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子から不明花粉を除く数を基数として、百分率で算出する。

3. 結果

(1) 硅藻化石

結果を表4に示す。第1・2地点とも珪藻化石の産出は極めて少なく、無化石の試料がほとんどである。また、第3地点においても17個体以下と極めて少ない。また、各地点から産出する珪藻化石は、溶解したり破片状を呈するのが大部分である。

(2) 花粉化石

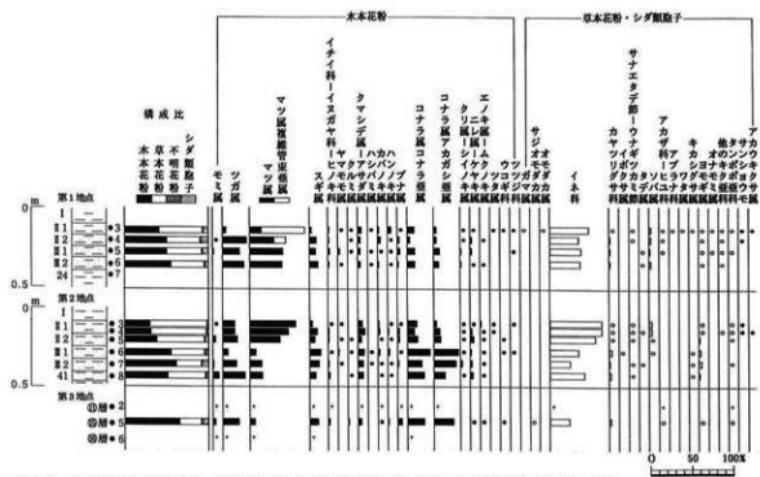
結果を表5・図181に示す。花粉化石は、第1地点の試料番号7（IV層）と第3地点の試料番号6・2（⑩・⑪層）以外の試料から多産する。ただし、花粉化石の保存状態はあまり良くなく、外膜が溶解しているものが多い。以下、各地点別に花粉化石群集の消長を述べる。

a) 第1地点

花粉化石群集はII 2層とII 1層の間の層準で変化する。III 2～II 2層では、木本花粉ではマツ属（マツ属複雑管束亞属を含む）が高率に出現し、次いでツガ属が多産する。このほか、スギ属、コナラ亞属、アカガシ亞属などを伴う。草本花粉ではイネ科が高率に出現し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、栽培種の

Species Name	Ecology				第1地点				第2地点				第3地点					
	H.R.	pH	C.O.		3	4	5	6	7	3	4	5	6	7	8	2	5	6
<i>Diatomaceae granulata</i> (Ehr.) Sienknech	I	Oph-Iod	I	al-II	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Diatomaceae flexuosa</i> (Breb.) Kuetzing	I	Oph-Iod	I	ac-II	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Diatomaceae spicata</i> V. Smith ex Gregory	I	Oph-Iod	I	ac-II	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Desmidales</i> spp.	I	Oph-Iod	I	ac-II	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Fragilaria constricta</i> Gr. var. <i>varia</i> (Ehr.) Hasselt	I	Oph-Iod	I	ac-II	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Fragilaria virgata</i> Ralfs	I	Oph-Iod	I	ac-II	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Gymnodinium peruvianum</i> Kutzinz	I	Oph-Iod	I	al-II	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>HEC</i> <i>Moridion circulatum</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs) IV. Neurek	I	Oph-Iod	I	al-II	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Meridion</i> sp.	I	Oph-Iod	I	al-II	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Reidites apiculus</i> (Ehr.) Krammer	I	Oph-Iod	I	ind	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>C-APThidium borealis</i> Ehrenberg	I	Oph-Iod	I	ind	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
<i>Planularia</i> spp.	I	Oph-Iod	I	unk	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	-
<i>WICCIWicchia abbreviata</i> (Ag.) Lange-Bertalot	I	Oph-Iod	I	al-II	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
Marine Water Species					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Water Species					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Brackish Water Species					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fresh Water Species					1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	17
Total Number of Diatoms					1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	17

表4 各地点の珪藻分析結果



出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子から不明花粉を除く数を基準として百分率で算出である。●○は出現率1%未満、+は花粉化石の保存が悪い試料において出現した種類を示す。

図181 各地点の主要花粉化石の層位分布

4. 考察

(1) 堆積環境

奈良・平安時代の遺構面が検出されているIV層上位と、中世の遺物包含層であるIII~II層からは珪藻化石がほとんど産出しなかったため、堆積環境を推定することは困難である。花粉化石が比較的良好に産出することから、堆積後に何らかの風化作用の影響により珪藻化石が分解消失したことが推定される。

III~II層は、発掘調査時の所見によれば、沼のような状況下で堆積した水成堆積物と考えられている。上記したように珪藻化石から堆積環境は推定できないが、花粉化石群集にはガマ属・イボクサ属などの抽水植物やサンショウモ・アカウキクサ属などといった富栄養な水域に多い浮水植物のシダ類胞子の球状体が認められた。このことはIII~II層が水成堆積であることを示唆するが、産出数が少なく、かつ保存状態が悪いことから集水域より流入した異地性の化石である可能性もある。このように、今回の結果からはIII~II層の堆積環境を特定することはできない。今後は本地域における本堆積層の分布状況を調査し、微地形解析の結果とあわせて成因について検討する必要がある。

ところで、第1地点と第2地点のIII~II層の層序区分は、現地観察時の層序区分と花粉化石群集に基づく生層序学的見地からの対比とでは矛盾が生じている。すなわち、花粉化石群集からみた場合、第2地点のII2・II1層が1地点のIII2~II1層に比較され、第2地点のIII2・III1層に対比される層が1地点では見あたらない。この原因としては、1) 対比されるべき層が後削平を受けるなどして残存していないこと、2) 花粉化石群集が局地的な植生の影響を強く受けているなど、が考えられるが特定はできない。今後の課題として残される。近接地点での現地調査がさらに必要であろう。いずれにしても、下記するように「沼状堆積物」の堆積期に周辺植生が変化している。

(2) 周辺植生

遺跡周辺の森林植生は、沼状堆積物とされるIII層~II層の時期にカシ類・ナラ類が卓越する植生からマツ属が卓越する植生へと変化したことが推定される。その時代は、出土遺物に基づけば中世となる。

このような傾向は、本遺跡近辺の遺跡で得られている花粉分析結果でも認められることから、本地域における普遍的な傾向として捉えられる。また、大阪平野で行われてきた花粉分析結果（古谷、1979 前田、1984など）にみられる傾向とも調和的である。このような植生変化の原因としては、人間の植生干渉の影響により二次林としてのアカマツ林が分布域を広げたことが考えられる。ただし、奈良・平安時代の層準でもマツ属花粉が目立った産状を示していることから、既に人間の植生干渉の影響が及んでいた可能性がある。本地域における森林植生については、奈良・平安時代以前の植生に関する情報の蓄積や他の植物化石の情報の蓄積を待って総合的に検討する必要がある。

また、花粉化石群集には栽培種のソバ属・ワタ属が認められた。このうちソバ属は、本遺跡（2）調査区や本遺跡近辺の遺跡の花粉分析結果でも同時期の堆積物から検出されている。本地域において普遍的に出現する栽培種の一様として捉えられ、当時の人の活動を考える上で重要である。また、上記したようにマツ属の増加が人間の植生干渉に起因する可能性があるとする見解と調和的である。もう一つの栽培種であるワタ属は、第1地点のII 1層から産出した。近畿地方では16世紀終わりの天正年間にワタ栽培が広く行われるようになったとされる（足田、1976）。II 1層の時代は中世とされるが、I 層が近世の耕作土であることから、ワタ属花粉は上位層からの落ち込みである可能性が強い。時代については問題が残るが、本地域においても栽培種のワタ属が存在したことは確実であり、本地域における近世以降の生産活動を考える上で重要である。

（3）土坑の古環境

土坑は、IV層上面に構築されており、覆土の上位を沼状堆積物が覆うことから、奈良・平安時代以前に埋没したことになる。覆土の堆積環境は、下位の⑥層から水生珪藻がわずかに産出したが、いずれの層準も珪藻化石が少なかったため推定することは困難である。

一方、覆土中部の⑯層の花粉化石群集は、第2地点のIV層～III 1層と類似しており、当時の古植生を反映している可能性が考えられる。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理42, p.73-88.
- 足田岬一（1976）ワタ。週間朝日百科 世界の植物 通巻34号, p.816-819.
- 古谷正和（1979）大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷。第四紀研究, 18, 3, p.121-141.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 Diatom, 6, p.23-45.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b) Bacillariophyceae, Suesswasser flora von Mitteleuropa 2 (1-4). 876p., 585p., 576p., 437p., Gustav Fischer Verlag.
- 前田保夫（1984）花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷。日本植生誌 近畿。宮脇 昭編, p.87-99. 至文堂。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）宮の前遺跡他採取土壤の花粉分析及び珪藻分析報告。財団法人 大阪文化財センター p. 1 - 2.
- 渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視（1988）珪藻群集による有機汚濁指数（DALpo）の止水域への適用。水質汚濁研究11, no.12, p.765-773.

3. 麻田藩陣屋跡（1）花粉分析及び珪藻分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

麻田藩陣屋跡（大阪府豊中市螢池中町所在）は、青木氏を藩主とする1万石余りの小大名家の居住地で、大阪夏の陣以降庵藤置県まで14代250年間、螢池の地に構えられた。陣屋の外形は、南北に長軸を持つ南北250m、東西190mの健形を呈しており、北と南にそれぞれ門がある。そして、北辺、東辺、南辺にはコの字型の外堀が巡らされている。本遺跡は、北東から南西に伸びる刀根山丘陵の麓に位置することから北側が高く、西側と南側は低く低地帯となっている。1Aトレンチ・2Aトレンチ・3Aトレンチの発掘調査の結果、近代～奈良・平安時代以前の計6面の遺構面が検出された。これらの面からは、鈍溝、溝（溝の底には動物の足跡）、土坑群、瓦器、青磁器、須恵器、土師器などの遺構や遺物が検出されている。今回の自然科学調査は、東辺の外堀に接する1Aトレンチで検出された自然堆積層が対象である。遺跡周辺の古植生と堆積環境の変遷を把握することを目的として、花粉分析と珪藻分析を実施する。

1. 試料

分析試料は以下の3カ所の土層断面で、層位毎に計16点の土壤が採取された（表6）。

断面1では、下位より、黄色粘土の地山類似層（⑮層）、シルトからなる奈良・平安時代の土坑最上層（⑭層）、シルトを主とする奈良・平安時代の沼状堆積物（⑬層～⑪層）、灰黄褐色シルトからなる中世の耕作土、褐灰～灰色シルトからなる近世（江戸時代）耕作土の順に堆積する。また、⑤層～⑪層を削って麻田藩陣屋跡外堀のシルトからなる溝13埋土（④層～②層）が堆積する。ここでは、各堆積層から層位試料として11試料（試料番号1～11）が採取された。

断面2では、砾を含む粗粒砂～細粒砂からなる3層、2層、砂礫混じり明黄褐色粘土からなる1層が堆積する。ここでは、層位試料として3試料（試料番号12～14）が採取された。

深掘部北東壁面では、4面直上のⅢ層と3面直上のⅡ3層から2試料（試料番号16・15）が採取された。

珪藻・花粉分析は、これらの全16試料について実施する。

2. 分析方法

（1）珪藻分析

試料を湿重で7～10g秤量し、過酸化水素水 (H_2O_2)、塩酸 (HCl) の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入する。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（珪藻化石の少ない試料はこの限りではない）。

種の同定は、K. Krammer and H. Lange-Bertalot (1986・1988・1991ab)などを用いる。

（2）花粉分析

試料約10～20gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花

試料番号	採取地点他	層位番号	時代	岩質*
1	断面1 南壁・耕土	⑤	江戸	オリーブ褐色砂質シルト
2	“ “ 耕土	⑧	“	“
3	“ “ 耕土	⑩	中世	黄褐色砂質シルト
4	“ “ 沼状堆積物	⑪	奈良・平安	“
5	“ “ 沼状堆積物	⑫	“	“
6	“ “ 沼状堆積物	⑬	“	黄褐色砂混りシルト
7	“ “ 土坑最上部	⑭	“	黄褐色砂質シルト
8	“ “ 地山類似	⑮	—	“
9	“ “ 麻田藩外堀	⑯	江戸	オリーブ褐色砂質シルト
10	“ “ 麻田藩外堀	⑰	“	“
11	“ “ 麻田藩外堀	⑱	“	“
12	断面2 西壁・地山	1	—	黄褐色砂質シルト
13	“ “ 地山	2	—	灰黄色砂質シルト
14	“ “ 地山	3	—	灰黄色シルト質砂
15	深掘部北東壁	III	中世	オリーブ褐色砂質シルト
16	“	II 3	“	黄褐色砂質シルト

* 岩質は、当社にて試料を観察した結果である。

表6 分析試料表

粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数する。

結果は、花粉化石の検出量の多い試料については花粉化石組成図を作成し、少ないものは同定・計数結果の一覧表のみ作成する。花粉化石組成図は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は總花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

3. 結果

(1) 硅藻化石の産状

硅藻分析結果を表7に示す。

断面1・2とも硅藻化石の産出は少ない。また、産出する硅藻化石は、保存状態も悪く溶解したり細かく破損したものが大部分である。とくに、試料番号4・5・7・8・12~16の9試料は無化石である。僅かながらも硅藻化石が産出した②層~④層(試料番号9~11)は、沼沢湿地付着生種群(安藤, 1990)の一種とされる*Gomphonema gracile*、陸生硅藻のA群(伊藤・堀内, 1991)の*Navicula mutica*、種不明の*Cymbellasp.*、*Naviculasp.*、*Pinnulariasp.*などである。これらの分類群は、硅藻殻が厚いものが大半で、風化に対する耐性が強いものである。

(2) 花粉化石の産状

花粉分析結果を表8・図182に示す。

試料番号1~4、6~8は、花粉化石の保存状態が悪く、わずかに針葉樹の花粉やシダ類胞子がみられる程度である。

試料番号5は、花粉化石の保存状態はあまり良好でなく、壊れている花粉粒も多いが、他の試料に比

Species Name	Ecology			江戸				中世				奈良・平安				沿岸地帶				土佐				山陰			
	H.R.	ph	C.R.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	9	10	11	12	13	14	15	16
<i>Elachistus lacustris</i> (Borb.) Jeannou	Dbh-ind	al-ii	r-ph																								
# <i>Eurybia subspicata</i> (L.) ex Benth.	Dbh-ind	al-ii	r-ph																								
<i>Cochlearia subspicata</i> Griseb.	Dbh-ind	al-ii	r-ph																								
<i>Crithmum spp.</i>	Dbh-ind	unk	unk																								
<i>Compsoneurus gracilis</i> Ehrenberg	Dbh-ind	al-ii	r-ph																								
<i>Geum urbanum</i> Linné	Dbh-ind	al-ii	ind																								
<i>Glyceria spp.</i>	Dbh-ind	unk	unk																								
<i>Grossularia spp.</i>	Dbh-ind	unk	unk																								
# <i>Alnus incana</i> Willd. var. <i>hirta</i> Kuntze	Dbh-ind	ind	ind																								
<i>Artemisia populea</i> Kuntze	Dbh-ind	al-ii	ind																								
<i>Artemisia spp.</i>	Dbh-ind	unk	unk																								
<i>Aster spp.</i>	Dbh-ind	unk	unk																								
<i>Potentilla fruticosa</i> Linné	Dbh-ind	ac-ii	r-ph																								
<i>Potentilla spp.</i>	Dbh-ind	unk	unk																								
<i>Potentilla stolonifera</i> (Grun.) C. Lew.	Dbh-ind	unk	unk																								
<i>Polygonum spp.</i>	Dbh-ind	unk	unk																								
<i>Polygonum sibiricum</i> (Ehr.) N. Miller	Dbh-ind	unk	unk																								
<i>Stellaria spp.</i>	Dbh-ind	unk	unk																								
<i>Stephanotis spp.</i>	Dbh-ind	unk	unk																								
Total Number of Distinct																											
Native Water Species																											
Native to British Water Species																											
Fresh Water Species																											

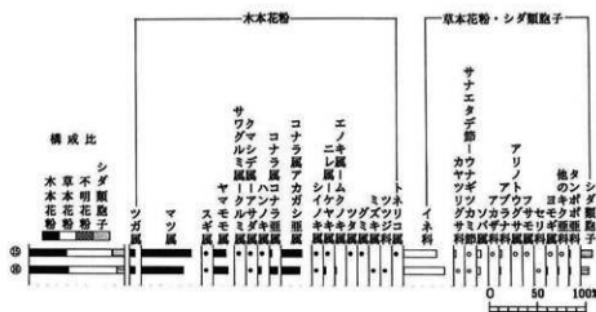
判別

H.R.: 地盤湿度に対する適応性
ph: 水素イオン濃度に対する適応性C.R.: 水素イオン濃度に対する適応性
al-ii: 好適生長地
al-iii: 好適・不定生長地
ind: 不定生長地r-ph: 好適水生植物
r-ind: 不好適水生植物r-hi: 真適水生植物
unk: 水生不適地環境指標植物
〔-〕: 中～下流生息する種
〔0〕: 流域周辺に著生する種
〔+〕: 沿岸湖沼に著生する種
〔++〕: 沿岸湖沼に優占する種
〔-〕: 陸生種
〔-A〕: 藤、蘆、葦等、1981

表7 種類分析結果

種類(Taxa)	試料番号	江戸		中世		奈良・平安					江戸		地山			中世	
		耕土	耕土	耕土	耕土	沼状地植物	土坑	地山	麻田瀬外堀	地山	地山	地山	地山	地山	地山	地山	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16		
木本花粉																	
モミ属	-	-	-	3	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
ツガ属	-	-	3	18	27	3	1	-	-	-	-	-	-	7	11		
マツ属	8	-	10	10	13	2	3	2	-	-	-	2	-	66	89		
コウヤマキ属	-	-	-	-	17	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
スギモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1		
ヤマモ属	-	-	1	12	33	2	2	-	1	-	-	-	-	17	30		
サワグルミ属—クルミ属	-	-	1	1	25	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2		
タマシキ属—サダグサ属	-	-	1	1	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
カバノキ属	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	1	6		
ハンノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ブナ属	1	-	-	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
コナラ属—コナラ属	2	-	-	1	4	1	-	-	-	-	-	-	-	3	16		
コナラ属—カガシ属	-	-	1	8	80	-	2	1	-	-	-	-	-	27	40		
シバモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1		
ニレ属—ヤケモ属	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3		
エノキ属—ムクノキ属	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ヤドリギ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
カラマツ属—サンショウウ属	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
シラカビ属	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ツタ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-		
ツバキ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-		
グリモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-		
ミズキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-		
ツツジ科	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イボタモ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-		
草本花粉																	
イネ科	30	-	5	7	85	-	-	1	-	-	-	-	-	109	206		
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	5	1		
サニンチゲ科—ウナギツカキ科	-	-	4	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	14	16		
ソバ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-		
アカモ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ナデシコ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
アブラナ科	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	7	6		
フサモ属	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-		
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ヨモギ属	2	-	-	1	9	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1		
ホウキモ属	2	-	2	-	12	-	-	-	-	-	-	-	-	3	5		
タングボ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	7		
不明花粉	4	-	-	3	15	1	-	1	-	-	1	-	-	-	4	-	
シダ類胞子	44	4	31	41	95	119	42	25	2	4	11	-	1	-	38	38	
合計																	
木本花粉	16	0	16	57	228	8	8	6	1	0	0	0	0	0	129	206	
木本花粉	35	0	11	9	114	1	0	0	1	0	0	0	0	0	149	249	
木本花粉	4	0	0	3	15	1	0	1	0	0	1	0	0	0	4	0	
不規則花粉	44	4	31	41	95	119	42	25	2	4	11	0	1	0	38	38	
不規則花粉	99	4	58	110	452	129	50	32	4	4	12	0	3	0	320	493	

表8 花粉分析結果



出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の試料において出現した種類を示す。

図182 花粉化石組成

較すると個体数も種類数も多い。コナラ属アカガシ亜属が優占し、ヤマモモ属、クマシデ属ーアサダ属を伴う。針葉樹ではツガ属、コウヤマキ属の出現がみられる。草本花粉では、イネ科が高率で、キク亜科、ヨモギ属などが出現する。

試料番号9～14は、花粉化石・シダ類胞子化石ともほとんど検出されない。特に試料番号12～14は、花粉化石以外の有機物の含有量も非常に少ない。

試料番号15、16は、花粉化石の保存状態が他の試料より良く、個体数も種類数も多い。マツ属に次いでコナラ属アカガシ亜属、ヤマモモ属が高率に出現し、コナラ属コナラ亜属、ツガ属などもみられる。草本花粉ではイネ科の出現率が高く、ソバ属も比較的高い割合で出現するのが特徴である。

4. 考察

(1) 堆積環境

珪藻化石の産出が少なく、産出する化石は珪藻殻の厚い種類が選択的に残存した可能性がある。よって、得られた化石そのものが異地性の可能性もあり、堆積環境を検討することは困難である。奈良・平安時代の沼状堆積物の堆積環境については、珪藻化石からの解析ができないが、花粉分析結果をみると、沼地を示唆する水生・湿生植物が少ないとから、沼地のような水域環境での堆積は想定しにくい。

(2) 古植生

遺跡周辺の植生について、地点別・時代別に述べる。

断面1の地山層（試料番号8）、土坑最上層（試料番号7）、中世・近世の耕土層（試料番号3～1）からは、植生に関する情報が得られなかった。また、断面2の試料番号14～12に於いても、有機物の含有量自体が非常に少ない砂を主とする低位段丘面堆積物（地山層）であり、植生に関する情報は得られなかった。

奈良・平安時代の沼状堆積物（試料番号6～4）の結果からは、コナラ属アカガシ亜属を中心とした暖温帶性広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の植生が考えられる。

12～13世紀の灰色シルト層（試料番号16）と13～14世紀の黒色粘土層（試料番号15）では、試料番号5で優占していた照葉樹林要素に代わって、マツ属の出現率が50%前後にまで高くなる。

一般に、マツ属の増加は人間活動の影響による森林の2次林化として知られている。関西地方でのマツ属の増加は約2000年前以降に始まり（前田, 1984）、さらに、マツ属の花粉化石が50%以上に増加しマツ林が急増する時期は、約1000～500年前（波田, 1987）とされている。今回、マツ属の急増は、奈良・平安時代の沼状堆積物の堆積から灰色シルトが堆積するまでの間の時期に相当する。また、周辺の遺跡での花粉分析結果でも、同様の時期にマツ属が急増するという結果が得られており、この変化は地域的な傾向とほぼ調和的である。

また、中世のこれらの試料からは、イネ科とソバ属花粉も高率に出現すること、上面に鋤溝が観察されることから、稲作やソバなどの畑作が遺跡やその周辺で行われていた可能性が高いと考えられる。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, p.73-88.
- 波田善夫（1987）花粉分析からみたマツ林の歴史。「松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究—松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の擾乱とその動態について」資料集, 財団法人日本自然保護協会, p.41-49.

- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, p. 131-809, 16, p. 1-155, 274-394.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6, p.23-45.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1986 · 1988 · 1991ab) Bacillariophyceae, Suesswasser flora von Mitteleuropa. 2 (1 · 2 · 3 · 4):p. 1-876, p. 1-585, p. 1-576, p. 1-437. Gustav Fischer Verlag Stuttgart New York.
- Lowe, R. L. (1974) Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. p. 1-334. In Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 前田保夫 (1984) 花粉分析学の研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷. 日本植生誌. 近畿, 宮脇昭編, p.87-99. 至文堂.
- 渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視 (1988) 硅藻群集による有機汚濁指數(DAlpo)の止水域への適用. 水質汚濁研究, 11, no.12, p.765-773.

X まとめ

1992年から1996年にかけて、大阪モノレール螢池東線・西線建設に伴う調査を行ってきたわけであるが、今回の報告を持って、その大部分の調査が終了する事となる。

6 遺跡にわたり、調査順序も錯綜し、旧石器時代から近世・近代までの様々な成果が見られ、報告書も2冊に分かれたため、若干全体像が見えにくいきらいがある。

しかし、長さ2kmに近く、低位段丘上から沖積平野にかけての調査区は、螢池周辺のこの地域の全体的な歴史変遷を追えるものであったとは言えるだろう。

そこで、ここでは、時代順に、主な成果と時代の概観をまとめて述べていきたい。

1. 旧石器時代

下位段丘上では、宮の前遺跡で深掘りをかけた部分などから、下位段丘構成層の上部での風化礫層などが確認され、さらにその上に、若干不整合を成して、礫を多く含む層や、黄褐色粘質土の層が広範囲に広がっているのが確認された。

これは下位段丘平坦面上での二次堆積層と見られ、そのような層が存在している事から旧石器時代の遺構が存在している可能性を指摘できるが、今回は確認する事ができなかった。

遺物も螢池遺跡の古墳時代後期～奈良時代の密集不定型土坑群の埋土中から国府型ナイフ型石器と剝片が11点出土しているのみで、これらは本来、それらの土坑が掘り込まれた黄褐色粘質土層内に包含されていたものと思われる。

旧石器時代に関する顕著な成果が見られたのは、螢池西遺跡と螢池南地区であろう。

特に、螢池西遺跡では、国府型ナイフと、それを瀬戸内技法で製作する過程での石核・チップ・剝片などが、ある程度まとめて出土する、単純包含層が確認され、本来、それらが散乱していた石器製作址が近くに存在する事と、その製作址がのる遺構面となる面も推定できた。

問題は、その面以下の層と以上の層が、沖積平野において不整合を成す点である。

螢池南地区の調査成果から、後期旧石器時代後半においては、下位段丘崖は既に形成され、それよりさらに下に、千里川の河岸段丘になると思われる段丘崖も形成されていた。螢池西遺跡の下部の層は、上面は浸食を受け、凹凸の激しい面であったようで、砂層を中心とした、切り合いの多いものである。また、ボウリング調査では、そのやや下で、N値が60ほどの固い層の存在が確認されている。

おそらく、これらの後期旧石器時代後半の石器群がのっている面は沖積下部砂層の上面と思われ、上の不整合は、大阪湾岸では梅田粘土層に代表される、沖積中部泥層との不整合かと思われる。

そうすると、年代的には、下位段丘構成層の高槻市の富田礫層のB.P.26000±800年よりはるかに新しく。沖積層下底で、Ma13より下とされる東大阪市でのB.P.19800±300年のデータを上限とし、それに近い時期と思われ、大阪駅付近での、Ma13より上のB.P.9360±190年のデータを下限とする時期に位置付けられるものと考えられる。

景観的には、現在の沖積平野の部分はまだほとんど堆積が進んでおらず、東には猪名川本流が南へ向かって深い渓谷を刻み、その底には扇状地などが平野を形成しつつあっただろう。南にはその渓谷へ向かって、千里川も谷を形成し、その扇状地も見られたかも知れない。石器製作址は、おそらくそれらの

渓谷へ下位段丘平坦面からやや下ったゆるやかな尾根の上に位置していたと考えられる。どの程度海が入りこんでいたかは微妙なところだが、あるいはこの地点から南に、遠く海を望める状態であったかも知れない。

2. 縄文時代

縄文時代の遺物はまったく出土していないが、螢池西遺跡から螢池南地区にかけての沖積平野での調査から、縄文海進に伴う環境の変化と考えられる知見が得られた。

その部分では、後期旧石器時代より後に、先ず、ゆるやかに凹凸のある地形に森林が形成され、腐食土が堆積する。おそらくは沖積層がかなり堆積し、浸食が卓越する状況から、堆積が卓越する状況へ変化してきたのであろう。しかし、この時点では螢池南地区で確認された河岸段丘と考えられる段丘崖はまだ埋没していない。

次にその段丘崖から螢池西遺跡の調査区の西端までより広い地域で、止水堆積で、有機分を多く含む黒泥土系の層が厚く堆積する。これはかなり長い期間に沼状の環境で堆積したものと思われ、その、沼状の環境が、縄文海進により形成された可能性が高いと考えられる。

最盛期には2kmほど南の鶴積遺跡より北に海岸線が上がり、おそらくその海岸線には砂丘が発達し、その内陸側に渦が形成されるような状況になったと思われる。

そうなると、現在では沖積平野でもやや高い上流側である螢池西遺跡周辺も、かなり低湿な状態になったと思われる。その証拠がこの厚い黒泥土系の水成堆積層であると考えられるのである。

それもやがては、いったん乾いて地表化し、その後、洪水の溢流堆積と思われる、有機分の少ないシルト～細砂中心の層、2～3層で急速に埋まり、螢池南地区的段丘崖も半分以上埋没する。これは、海進が終わり、低湿な状況から乾燥していった時、千里川上流域で浸食が卓越する状況になり、そこから沖積平野への出口である螢池西遺跡周辺に土砂が供給されたものと思われる。無遺物層なので時期の特定は困難だが、縄文時代中期頃以降の事であろうか。

3. 弥生時代

弥生時代前期に関する遺構・遺物は皆無であった。

中期では宮の前遺跡でIV様式の土器が出土した土坑が2基検出され、過去に大阪中央環状線で確認されている同時期の集落の周辺的な状況であると思われる。その集落は住居跡と方形周溝墓や木棺墓が混在しているような状況であるが、大体中心に居住域があり、周辺に墓域があるような構成である。

しかし、そうであるなら、居住域の範囲は径150mほどの集落になるはずだが、今回の調査区の南端に近い、やや西の地点での豊中市教育委員会の調査でも住居跡が検出されており、遺跡内に複数の居住域が展開しているようである。土坑の検出された地点はむしろ、その南側の住居跡に近い位置にある。

他に中期に遡る可能性のあるものとしては宮の前遺跡の木根痕にからむ土器群と、螢池遺跡の不定型土坑があるが、それは後期のものが中心であるようなので後述する。

弥生時代後期になると、宮の前遺跡の木根痕にからむ土器群が見られる。先の中期の集落の南東縁辺部にあたり、後期の時点でも木の生えた疎林のような状況であったようだ。土器は全て甕で、大体一個体ずつが、木根痕の中にやや落ち込むような状況で出土している。木の根元に甕を置くような状況を考えてはいるが、それが、結果としてこのような出土状況になるか否かは確信が持てない。

また、それらの土器は全て、ほとんど土に帰りかけていたため、周囲の土ごととりあげざるをえず、表面観察ができず、器形も土圧で変形したままなので、判然としない。わずかに検出の際、外面にハケ目のあるものを確認したので、中期のものもあるのかもしれないが、後期にもハケ目はかなり残る事と全体の器形からすれば後期としたほうが良いように思える。

しかし、そうすると中期の集落が廃絶した後にあるのか、中期の集落が後期まで存続していく、その周辺の状況として捉えて良いのかが問題となる。

螢池遺跡においては、主に古墳時代後期から奈良時代の土壙墓と考えられる密集不定型土坑群のなかで、弥生時代中期～後期の土器を含むものがあり、それが土坑底に張りつくように出土している事から弥生時代の土坑も存在している可能性が考えられる。しかし、このような土坑群が、現在の所では弥生時代後期が最古と思われる事から若干疑問が残るのは一冊目の報告書で報告したとおりである。

低位段丘上においては、弥生時代後期は、宮の前遺跡の集落がなくなる事もあり、あまり判然としなくなるが、千里川をはさんだ南の段丘上には、この地域では珍しく、中期から後期にかけて存続する新免遺跡の集落があるのは注目できる。

沖積平野では、螢池西遺跡において、水田と、その水利体系としての溝群が検出された。

それは、溝の走りかたから、段丘を開析した小河川が沖積平野に完全に出た所で取水し、排水もそのような河川にしていたものと思われる。水田は小区画で、地形に合わせながら、比較的平坦な部分では長方形を指向するものである。

しかし、この部分では洪水が度々起こり、その度毎に、水利体系も復旧、変更していった過程がうかがえる。そして、後期の内に小河川の根本的な流路変更があってその水利体系も一旦廃絶するようである。おそらく洪水の起こりやすい不安定な状況があったのであろう。

螢池西遺跡においては、小河川が、後に古墳時代後期の堰が作られるところに流路変更した時点で、その最下層に後期の土器が認められる。またそのすぐ北西で、豊中市教育委員会の調査によって下層が弥生時代後期の土器、上層が布留式の土師器を多量に含む大溝が検出されている。

螢池南地区では、当時、1m以下の段差となっていた埋没段丘崖沿いに2本の自然流路が切り合って存在していたが、新しい方の流路の最下層にも後期の土器が含まれる。その北の下位段丘崖直下では、現在南門前池となっている開析谷の出口で、小扇状地図の堆積がすでに始まっていたものと思われる。

景観としては、千里川が沖積平野に出てくる右岸にあたるこの部分では、下位段丘を開析した谷から小規模な河川が、多数流れ出ており、それらが度々洪水を起こすような不安定な状況で、それらによる比較的小さな、自然堤防と後背湿地が散在していたものと思われる。

そのような部分を果敢に水田開発していったさまが見て取れるが、それは多分に場当たり的で、かつ小規模なものであったため洪水の被害を受けるたび変更を迫られたのかも知れない。

豊中市教育委員会の螢池西遺跡の調査で確認された大きな溝が、それらを整理、統合し、古墳時代まで存続した水利体系の一端である可能性は高いと思われる。

螢池西遺跡では、廃棄せざるをえなくなった溝に大量の土器が投棄されていた。近辺では本遺跡の対岸となる千里川左岸の新免遺跡など、段丘上の集落から運んできたものの可能性が高いが、千里川右岸の本遺跡周辺に未確認の集落が存在する可能性も捨てきれない。器種構成をみると壺の割合が高く、水田の水利に関する祭祀の例とも考えられる。

なお、水田面からサヌカイト製の小型の石鎌が2個出土しており興味深い。

4. 古墳時代

段丘上では、古墳時代前期の遺構・遺物は希薄であるが、螢池東遺跡で、1棟のみ、出土遺物から前段のものとしか考えられない竪穴式住居が検出されており、集落が存在した可能性がある。

沖積平野側では螢池西遺跡で弥生時代に流路変更した小河川と大溝は存続している。

また、螢池南地区の埋没段丘崖沿いの流路も、最下層に弥生時代後期の土器と共に、庄内式から布留式の土師器片を含むだけでなく、その肩部斜面から庄内式の甕が2個体出土しており、近辺に集落が存在していた事を示唆していると思われる。

にわかに、この地域が活況を呈するのは、古墳時代中期に螢池東遺跡で大型倉庫群が形成されてからである。今回の調査では3棟を確認したが、その後1996年度の豊中市教育委員会の周辺地での調査により、それらと軸を同じくする建物が2棟確認されており、復元すると最大12棟の倉庫群が想定される。須恵器のTK208型式の時期には廃絶するこれらの倉庫は、おそらく大阪市難波宮下層遺跡や和歌山市鳴滝遺跡の大型倉庫群とはほぼ時を同じくして、古墳時代中期前半でも早い時期に建てられたものと考えられる。これら3遺跡の大型倉庫群は建てられた時期が近いだけでなく、

- ・建物が方向を合わせ、列を成して建てられる。
- ・丘陵上に立地する。
- ・近くに比較的小さな谷が存在する。
- ・一時期だけのもので建て直しがない。

などの共通点があるが、

- ・螢池東遺跡のものは、他が極めて規格性の高い、同規模・同構造の建物を建てているのに対して、規模・構造ともばらつきがあるという特色があり、
- ・難波宮下層遺跡のものは他が地形に合わせた方向性を持つのに対して、正方位をとり、かつ圧倒的に棟数が多いという特色があり、
- ・鳴滝遺跡のものは、他が非常に見通し良く、海の見える丘陵上に立地するのに対し、海や河川の本流から隠れるような枝谷の中にあり、他の2例が入母屋であるのに対し切り妻であるという特色がある。

螢池東遺跡の倉庫群の直接の造営主体は南の丘陵上に分布する桜塚古墳群の被葬者層と考えられる。年代的には大塚古墳が合うだろうか。集落も拠点的なものとして、本町遺跡が挙げられる。

この倉庫群がそれから千里川をへだてた北側の低位段丘上にのっているのは、中期に入り、周辺で桜塚古墳群のみが連続と存続する事、後に千里川の上流の桜井谷に須恵器の窯址群が成立し、重要な生産域となる事と無関係ではないと思える。

想像をたくましくすれば、朝鮮半島の情勢に伴う、大和政権主体の軍事行動に際し、桜塚古墳群の被葬者層がその直接支配する地域を広げ、その地域に、軍事行動の物資集積のための臨時の拠点を造営したのではないかと考えられる。そう考えれば、倉庫群の跡地に突然集落が成立し、やがて桜井谷で須恵器生産が開始されるのも、その一連の脈絡の中で理解できるのかも知れない。

螢池東遺跡で倉庫群に後続して成立する古墳時代中期の集落はTK216～TK208併行期と考えられているが、最大の特色は作り付け竈を持つ住居址が多い事である。竈が一般化した集落としてはかなり古いものと言え、そこに渡来系集団の影を見る事もできる。

しかし、韓式系土器などの渡来系遺物はほとんどないと言ってよく、それがやや疑問な点である。ただ、周辺の沖積平野の遺跡では韓式系土器が出土している例があり、沖積平野の開発に渡来系集団が係わった可能性も指摘されている。やはり、炊事という根本的な生活様式に関わる面での竈という新要素の出現は、過少な評価では済まない面があると思える。

また、焼失住居が多く見られ、焼失後の土器廃棄の見られる住居址も存在する事と、この集落の存続時期の短さを考えると、計画的な集落の放棄の可能性も考えられ、この集落が新しく来た集団の一時的なものであった感もある。

宮の前遺跡では、螢池東遺跡の集落が消滅する頃に、他の調査で、古墳や木棺墓の存在が確認されており、墓域があったようである。桜塚古墳群に併行する、この時期に、小円墳ながらこちらの低位段丘上に古墳が存在するのは示唆的な出来事と言えよう。

古墳時代後期に入ると、螢池東遺跡には新たに集落が成立し、その南の螢池遺跡では、土壇墓群である密集不定型土坑群が形成され始める。これは居住域と墓域としてセットで捉えられるものであろう。

螢池東遺跡の集落は6世紀代のものとしては一般的な、竈を持った住居址が多く、調査区内では棟数が少ないものの、そこから南西に広がっていたものと思われる。同時期の集落は宮の前遺跡の大坂中央環状線部分の調査でも確認され、両遺跡の間で、若干低い部分をはさみ、低位段丘平坦面でも高い位置に集落が点在していた形になる。宮の前遺跡では当該期の墓域は発見されていないが、螢池東遺跡と螢池遺跡のような関係で存在していた事が予想されよう。

螢池遺跡の密集不定型土壇墓群は、螢池東遺跡の集落と同時に形成されはじめる。

立地的には低位段丘面のやや低い所にあるため、形成過程で堆積が進行し、密集している事と重なって、検出を困難なものにしている。

土坑には、径1m前後の隅丸方形に近いものと、長径2m弱ぐらいの長楕円形、長径3~5mの大型、の3種がある。長径2m弱の長楕円形は一般的な仲伸葬の土壇墓と考えられるが、残る二つのタイプは、骨が残らず、脂肪酸分析により墓としている以上、どのような埋葬がされていたかは問題として残る。

遺物としては、後世の削平により、完形品の一部が破壊された可能性の高いものもあるが、一部大きめの須恵器の破片のみがあるものは、遺体の枕に転用された可能性が高いと思われる。

個体出土品としては1992年度の調査での須恵器の壺蓋3個体、身9個体、土師器の小型壺2個体が集中して埋納されていたものと、1995年度の調査での土師器甕が一個体、完形、正置の状態であり、さらに一個体が埋土上で破碎状態で出土した土坑が注目できる。两者とも葬送儀礼の一端を示すと共に、同じような土壇墓でも埋納品に若干の差がある事から、不定型土壇墓の被葬者層にも若干の階層差があった事を示唆するものと思われる。

土壇墓群は奈良時代頃まで維持して形成され続けるが、その範囲は北は麻田藩陣屋跡の北端近くまで達し、調査区の西側を中心として、この低位段丘の南端部分に広がっていたと思われる。

古墳時代後期の沖積平野側を見ると、螢池西遺跡で、弥生時代後期のうちに流路変更した小河川に堰が作られ、再び水利体系が形成され、耕地化が成された事が分かる。この堰のしがらみは、残りは良くなかったが、その作り方が良く分かるものであった。また堰の取水路から見ると、この堰は河川の埋没が進行してもそのまま維持され、最終的に河川自体が廃絶する洪水まで存続したようである。細かい存続期間は限定できないが、弥生時代後期に比べ、この地域がやや安定した状況になってきたようだ。

注目できるのは同じ時期のものとして、螢池南地区で、低位段丘開析谷の出口の小扇状地地形周辺に

多くの溝が掘られている事である。それらに先行する井戸群も存在するが、時期的には定かでない。

これらの溝群は延長すると開析谷の中へ入っていくものと、そこから沖積平野に出た所の流路に突き当たるはずのものの二つに分けられ、その2種の溝群はおそらく最低1本ずつは併存していたようである。つまり、谷内から直接取水する溝と、沖積平野に出たところで取水する溝が同時に存在したということである。谷内からの取水は流路の水量がある程度減少しても取水可能で、かつ高い位置に水をまわしていくものと思われる。

また溝群の逆の方向を見れば、南の平坦地へ直接伸びるものと、西の段丘崖直下の緩斜面帯に伸びるもののが見られる。緩斜面帯に伸びれば、その部分の灌漑が可能であるだけでなく、さらに遠い位置まで給水できたであろう。

つまり、この螢池南地区の溝群は、単に溝が検出されただけではあるが、螢池西遺跡の堰とあわせて見ると、弥生時代後期の螢池西遺跡の水利体系より、かなり進歩したものであり、より給水範囲の広い水利体系が成立していたと言える。

古墳時代の最後に、土器の胎土分析について触れておきたい。

前回の報告書段階では、陶邑の須恵器や千里丘陵の桜井谷古窯址群、縁が丘古窯址群の須恵器も合わせて分析したが、明確に分別する事ができなかった。今回、再度、新しい資料を加え分析した結果、初めて、陶邑産の須恵器と千里丘陵産の須恵器を分別する事ができただけでなく、千里丘陵内でも、桜井谷・縁が丘・螢池周辺が各々グループ別に分かれた。これは、2種の成分の相関を見る一つのグラフでは判明せず、 SiO_2 - Al_2O_3 相関図と Fe_2O_3 - MgO 相関図の二つを合わせてみる事によって可能となったものである。今後、分析結果の解析にあたり有効といえよう。

千里丘陵産の須恵器は胎土に特徴的な黒色粒を含み、視覚による観察でも特定できるが、その中でも神戸層群の露頭に近い縁が丘と、中位段丘で大阪層群の露頭に近い桜井谷、低位段丘の螢池周辺が分かれたのは意義深い、特に、螢池周辺の須恵器が桜井谷と同一水系で、遠くもないにも関わらず、陶邑産の搬入品を除いた全ての資料が、異なるグループに分かれる事は、螢池周辺の、おそらく低位段丘崖あたりに、窯があり、須恵器の生産が行われていた事を示唆するものと思われる。

なお、千里丘陵産須恵器に特徴的に見られる黒色粒についても分析を行った結果、これは鉄分を中心とした各種鉱物の複合体であるとの結論がでた。但し、当初、これは、土師器や弥生土器に見られる赤色粒と同じものであろうと考えていたが、在地の土師器、弥生土器の赤色粒のほうが Fe_2O_3 の含有率がかなり高く、鉄分から見ればやや異質との結果が出た。

また、螢池遺跡から、かなり大型の須恵器壊身の破片が出土しているが、これは陶邑産との結果が出了た。今後の資料の蓄積が必要ではあるが、6世紀代にまれに見られる特殊な土器の生産地が明らかになったと言える。

土師器、弥生土器に関しては、外来のものは螢池南地区的埋没流路出土の弥生土器裏片が生駒西麓産だった以外は、河内の低地産のものが多いようであった。また、土器の胎土の色から河内産と考えたものの中にも在地系のもの多かった。

在地系では宮の前遺跡の弥生土器と、螢池東遺跡・螢池南地区的古墳時代後期の土師器とでは違うグループを成し、土器用の土をとる位置の違いを感じさせる。

資料として分析にかけた螢池周辺の土器は、点数が少なく、選び方も分析目的のためやや恣意的ではあるが、これらの分析から明らかになったことを以下に列挙する。

- ・弥生時代後期から古墳時代後期にかけての弥生土器、土師器に関しては、一定量河内地域からの搬入があるが、生駒西麓産は少ない。
- ・在地の弥生土器と土師器は土の採取地点が異なる可能性が高い。
- ・螢池西遺跡や螢池南地区で水利体系を成立させた、螢池東遺跡の古墳時代後期の集落の集団は、同じ千里川水系の、遠くない上流に位置する桜井谷古窯址群からの須恵器の供給は受けず、千里丘陵の範囲で独自の須恵器供給源を持っており、それは近くの低位段丘崖に存在した可能性もある。
- 千里川をはさんだ南側の丘陵上に立地している新免遺跡では、焼け歪みや溶着のある須恵器が多量に出土する土坑が検出されており、須恵器の集荷・出荷を行う集落と考えられているが、そこの須恵器も桜井谷のもののみなのか、螢池周辺の須恵器と同グループに入るものがあるのか今後の課題となろう。
- ・少量ながら陶邑産の須恵器は受容していた。
- ・古墳時代後期のかなり大型の須恵器蓋坏という特殊な土器（盒？）は陶邑産である可能性が高い。

5. 飛鳥時代

螢池東遺跡では、本調査区の西に隣接した部分で、豊中市教育委員会が飛鳥時代の堅穴式住居址の4棟重複しているのを検出している。つまり、住居址がその程度重複する期間、集落が存在した可能性が高いと言える。本調査区内では、その近くで6世紀後半と6世紀末～7世紀初めの土坑が二つと7世紀後半の掘立柱建物があり、これらもその集落と関係する可能性が高い。

土坑は土壙墓の可能性もあり、建物は、近辺の奈良時代以降と考えられる建物が、総柱でも長方形プランなのに対し、これだけは2間×2間の正方形プランの総柱である。

実態は不分明ながら、古墳時代後期の集落から継続し、奈良時代の集落に連続する可能性もある。それなら、螢池遺跡の土壙墓群が継続するのも納得がいく。しかし、土壙墓群には飛鳥時代に確定できる遺構が発見されていないのが若干疑問ではある。

宮の前遺跡では、この調査以前は飛鳥時代の遺構は未発見であったが、今回、木棺直葬墓を含む土壙墓群が検出された。これらは、螢池東遺跡に近い、宮の前遺跡南端付近と言えども、地形的に宮の前遺跡の範疇で捉えられるべきであろう。その場合、ここを墓域とする同時代の未発見の集落が存在しているものと思える。また、木棺直葬墓は、木棺内にまとまった土器が納められ、被葬者は集落の中で一定の地位を持った人と思われる。

6. 奈良時代

宮の前遺跡では奈良時代の集落が確認されている。掘立柱建物で、正方位にのるものとのらないものがあるようである。今回の調査で1棟だけ確認されている掘立柱建物も、時期不明ながら、その集落に属するものかも知れない。

螢池東遺跡でも、奈良時代の集落が確認された。しかし、時期を限定できる遺物が少なく、建物の重複が多いわりには集落の存続時期は定かではない。

この集落の建物群は3グループに分けられ、その各々で建て替えが行われたようである。1グループで同時期併存の建物は平地式住居2～3棟に総柱の建物1棟ぐらいだろうか。各グループ間には空閑地が存在する。建物の方位は正方位にのるものとそうでないものがあるが、その前後関係は不明である。正方位にのらないものは段丘上の微地形に左右されると見たほうが良さそうである。

螢池遺跡では引き続き密集不定型土墳墓群の形成が続くが、わずかな遺物から見ると、それも奈良時代前半、平城I式の段階で終息するようである。

その後、その土墳墓群を切って、正方位にのる掘立柱建物が2棟建てられるが、柱穴の形、規模が螢池東遺跡のものと似ており、同時期かと推測される。同一集落内に属するものかも知れない。

そう考えると、螢池東遺跡から螢池遺跡にかけて成立した奈良時代集落は、奈良時代初めには遡らない可能性がある。柱穴の抜き取り痕に埋納されたと思われる同時期性の強い遺物はわずかだが、それから見れば、少なくとも建物の一部は奈良時代後半（平城IV～V式）のものであり、奈良時代前半の土墳墓群や、飛鳥時代の集落とは若干間を置いている可能性が高い。

遺構の配置から見ると、古墳時代後期の集落と飛鳥時代の集落は、位置的には同じで、螢池東遺跡の調査区の南西側を中心として、堅穴式住居が比較的密集した集落を形成し、古墳時代後期前半から奈良時代の初めまで存続し、螢池遺跡を墓域としていたと思われる。

それが廃絶し、若干の間（平城II～III式？）を置いて、奈良時代後半に、全て掘立柱建物で、数棟の建物のグループが間をおいて散在するような集落が螢池東遺跡から螢池遺跡にかけて成立したものと考えられる。その集落の範囲は集落の構造のためかなり広いものと思われる。

この新しい集落は、それまでの集落と比べても、集落内に一定の屋敷地と数棟の建物という私有不動産を持つという意味で、全く異なる社会構成が成立しているといつても過言ではなかろう。

この集落の建物で正方位にのったものがある事と、麻田藩陣屋跡や螢池遺跡で中世以前の鋤溝・溝で正方位にのるものがある事は、下位段丘上に、現存はしていないが、条里制地割りが施行された可能性を示すものと考えているが、この周辺の条里制地割りの文献上の上限が天平勝宝8年（756年）である事とこの集落の推測される成立時期ははからずも一致する。

奈良時代後半のこの集落の成立は、条里制地割りの施行と密接な関係があるのでないだろうか。

7. 平安時代～中世

螢池東遺跡の掘立柱建物の中には、明らかに他の建物より柱穴が小さく、埋土も若干異なるものがあり、それが、奈良時代後半の集落とは別の、平安時代ぐらいの建物の可能性もあるのではないかと考えているが、確定はできない。

他に平安時代から中世の顯著な遺構はなく、実態は明らかでない。ただし、他の調査で、宮の前遺跡や螢池西遺跡で当該期の井戸や建物が検出されており、集落が存在していたのは確かと思われる。

おそらく、中世の集落は、大部分が、近世から現代の集落と重複しているのではないだろうか。

宮の前遺跡、麻田藩陣屋跡、螢池遺跡では、一部に、耕土と思われる、中世単純の遺物包含層が存在し、その段階では、低位段丘上は地形に合わせた耕地区画が存在していた事が明らかになった。

また、麻田藩陣屋跡周辺の陣屋の方向性と合う耕地区画は、陣屋に先行し、それによって近世の陣屋の方向性も定められていた事も確認できた。

8. 江戸時代

江戸時代に関する成果は麻田藩陣屋跡の調査に集中する。

この陣屋は、麻田の集落を取り込み、外堀は一帯の水利体系の中に取り込まれているなど、あまり無理のない計画で作られているが、今まででは、絵図面などでその範囲が推定されるに止まっていた。

今回初めて、陣屋の遺構として、外堀などが確認された意義は大きい。

外堀内でも、屋敷地の境界を推定する材料も得られ、屋敷の建物自体は確認出来なかったものの、屋敷地内での井戸や土坑、そして耕作の痕跡らしきものも確認できた。また外堀の造営や維持・管理に関する資料も得る事ができた。

また、18世紀を中心とした江戸時代後期の陶磁器類をはじめ、土器・土製品がまとまって出土し、その時期の近畿圏小藩の武士階級の生活を垣間見ると、良い資料が得られたと言える。

しかし、遺構自体が、外堀が現在の水路と重複しているように、現代まで存続していたものも多く、搅乱との分別が難しいうえ、遺物の面でも明治以降との分別が難しかったのは今後の課題となろう。

遺物に関して見ると、調理具として、焙烙と行平鍋が非常に多い事、灯明皿として柿釉土師皿が主に使われている事、化粧具としての紅猪口が目立つ事などが注目される。

そして、19世紀代の遺構からも18世紀代の遺物がかなりの量出土し、生産から廃棄まで、かなり長期間を経るものが多い状況を見ると当時の人々の物に対する丁寧さを感じる。

9. 現代

直接、調査の対象とはしなかったが、ぜひともここで触れておきたい事がある。

螢池東遺跡から麻田藩陣屋跡、螢池遺跡にかけて、調査していると、住宅造成以降の盛土の中に1層炭や焼土の多量に混じった層がある。第2次世界大戦時の爆撃による火災の痕である。

調査区でも多く見つかった植木鉢を埋めた穴は、当時から住んでいる人に聞くと、その際に貴重品を埋めたものであるという事であった。防空壕も、素振りのものからコンクリート製のものまで見つかった。また、焼夷弾の部品と思われる、焼けただれた、円錐形や円筒形の金属片は、江戸時代や古墳時代の地層にまで突き刺さっており、しばしば我々を困惑させた。

飛行場に近かったこの周辺の爆撃による被害は、特に激しいものであったらしい。

10. 最後に

今回のモノレール関連の調査では、螢池周辺の、低位段丘上から沖積平野にかけて、旧石器から江戸時代にいたる調査が、一貫して行われた事自体が大きな意味を持つものと思われる。

特に螢池東遺跡の古墳時代中期の大型倉庫群の発見は、考古学的ニュースとしても大きなものであつたばかりでなく、その提起する問題は、当時の東アジアの政治的状況にまで拡大していく要素をもっていると言える。

しかし、それに比すほどの問題を投げかけたものとして、集落の変遷も見落とす事は出来ない。

古墳時代中期の集落は大型倉庫群の跡地に成立した事を見ても、そういう国際的な政治状況の中でこの地にやって来た人々のものかも知れず、その移住のプロセスの好例となるかも知れない。

また古墳時代後期から奈良時代初期まで、変遷しながら存続すると思われる集落は、その墓域と、生産の場である沖積平野の水利体系もセットで確認出来、広い意味での社会状況としての集落を総合的に把握できるものである。

最も注目できるのは、その後の奈良時代後半の集落であり、以前の集落とは構造的に全く変化したものであり、またその成立時期が、文献上の周辺の条理制の施行の上限と期を一にする点が大きな可能性をはらんでいる。

つまり、条里制という土地区画の新しい施行が、集落という社会構造の変化まで伴うものであった可能性が高いということである。

このように、発掘調査時点では比較的、地味な成果であったものが、歴史を考えるうえで大きな意味を持つ例が今回の調査では多かったようと思える。

それはもちろん、旧石器の遺物や、弥生時代の水利体系の変遷、麻田藩陣屋跡の成果などでも同じである。つまり、人々がどの様に生活していたか、その暮らしがどのように変化していったかを解明する事が最も大切である、という事を改めて教えてもらったような気がしている。

参考文献

- 株式会社クボタ 1991 『アーバンクボタ・MARCH 1991』
井関弘太郎 1983 『沖積平野』 東京大学出版
町田洋・新井房夫・森脇広 1986 『考古学シリーズ8 地層の知識』 東京美術
大久保雅弘・藤田至則 1996 『地学ハンドブック第6版』 築地書店
池田市史編纂委員会 1967 『池田市史資料編①原始・古代・中世』
豊中市史編纂委員会 1961 『豊中市史第一巻』
宮之前遺跡調査会 1970 『宮之前遺跡発掘調査概要』
豊中市教育委員会 1992 『豊中市埋蔵文化財年報Vol. 1』
豊中市教育委員会 1992~1996 『とよなか文化財ブックレットNo. 1~5』
大阪府教育委員会 1993~1995 『大阪誕生第1~2冊』
豊中市市長公室自治振興室 1989 『グラフとよなかNo.25』
大阪府教育委員会 1992 『麻田藩陣屋跡他発掘調査概要・I』
豊中市教育委員会 1993~1996 『文化財ニュース豊中No.18~23』
津田秀夫 1990 『図説 大阪府の歴史』 河合書房新社

	宮の前遺跡	螢池東遺跡	麻田藩陣屋跡	螢池遺跡	螢池南地区	螢池西遺跡	自然科学的分析
旧石器				(古墳時代後期～奈良時代の土坑埋土よりナイフ形石器出土)	二次堆積層より旧石器出土	(二次堆積層より旧石器出土) 旧石器単純包含層	
縄文							
弥生前期							
弥生中期	(木の根痕、溝状土坑、土坑)						
弥生後期	不定形な土坑・溝状遺構の密集→木の根痕。後期型が完形で出土。					水田 (自然流路)	
古墳前期							
古墳中期	(大形掘立柱建物 竪穴住居) 谷						→(住居床面上 壤植物珪酸体・ 花粉分析－ネザサ節・イネ属) →(脂肪酸分析。 高等動物脂肪。 土壤腐か) 須恵器、土師器 胎土分析
古墳後期	(掘立柱建物 竪穴住居 土坑)			(密集土坑。 土器が集中するP41は墓域 端を示す指標か。)	溝	溝、しがらみ (溝。灌漑施設。 水田の存在を推定)	
奈良時代	(土塙墓)	(土坑墓?) 溝 ↓	密集土坑。土塙 墓の可能性が大き い。	▼ 密集土坑 (掘立柱建物、 溝)			→(脂肪酸分析 高等動物脂肪由 来)
平安時代			正方位にのった 溝。条里制地割 りが存在した可 能性あり。				(花粉分析－マツ属・ソバ属)
中世	(水田)		水田	(水田)		(水田)	
近世	(水田)	おなり道の可能 性をもつ盛土	陣屋の外堀。 外堀外側は水田、 内側は屋敷地裏 庭(畠)。	(水田)	水田	(水田)	花粉分析－ソバ属・ワタ属
				※()は前編において報告した調査成果			

表9 各遺跡の調査成果

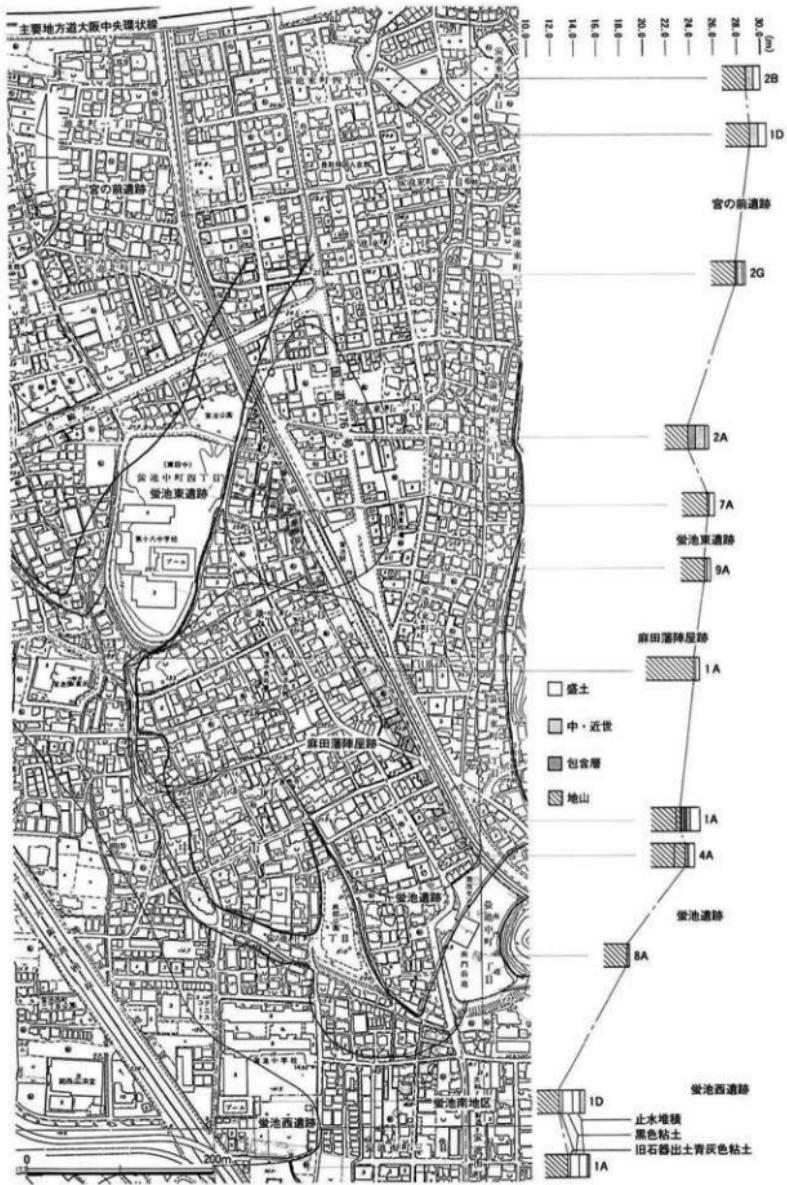


図183 調査全体図